

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第375集

本 庄 市

川 越 田 遺 跡 II

女堀川河川改修事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 1

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 川越田遺跡（第3次）・今井川越田遺跡（合成）



1 川越田遺跡（第4次）空中写真



1 第 100 号住居跡出土遺物 (古墳時代前期)



2 第 51 号住居跡出土遺物 (古墳時代前期)



1 第25号住居跡出土遺物（古墳時代後期前半）



2 第30号住居跡出土遺物（古墳時代後期前半）



1 第 67 号住居跡出土遺物（古墳時代後期後半）



2 第 43 号住居跡出土遺物（古墳時代後期後半）

かわごえだ 川越田遺跡の紹介

川越田遺跡は、女堀川流域おんなぼりがわの自然堤防上に立地する、古墳時代前期（約 1,700 年前）から古墳時代後期（約 1,500 ～ 1,300 年前）にかけて営まれた大規模なムラの跡です。

今回の調査では、100 軒を越す竪穴住居跡が発見されました。前期の住居跡は 10 軒程度で、住居跡の重なり合いはほとんどありませんでした。住居跡は全体に小規模で、炉で煮炊きをしていました。壺つぼや甕かめなどの調理具のほか、碗わんや高坏たかつき、鉢はちなどの食器が使われていました。

後期になると住居跡の数が爆発的に増え、住居跡が複雑に重なり合った状態で見つかっています。住居跡の壁際に設置されたカマドで煮炊きをしていました。とくに焼けた住居跡からは、カマドにかけられたままの土器や壁にもたせかけた土器が、当時の状態で出土しました。

序

埼玉県は、誰もが豊かさを実感できる郷土を実現するため、「安全で安心して生活できる県土づくり」を基本理念に、危機や災害に備えた体制の整備に取り組んでいます。なかでも、近年はこれまでの想定を大きく超える集中豪雨が発生していることから、河川の未改修区間、特に都市部で大きな浸水被害に備え、河川改修や下水道雨水幹線、土砂災害防止施設などの整備を推進しています。

この観点から本庄市街を流れる女堀川についても、大雨による流域の浸水被害の軽減を図るため、関越自動車道より上流の区間における河道の拡幅や護岸工事等が計画されました。

今回の事業地内には、これまでの発掘調査によって古墳時代の大規模な集落跡である川越田遺跡が存在することが知られており、その取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、当事業団が実施致しました。

調査の結果、古墳時代前期～古墳時代後期（1700～1300年前）の竪穴住居跡が幾重にも重なった状態で見つかりました。前期の住居跡は小規模なものが多く、台付甕や甕などの調理具を用いて、炉で煮炊きをしていたことがわかりました。後期の住居跡は複雑に重なり合い、住居の建て替えが頻繁に行われていたようです。また、カマドの周囲からは、おびただしい数の調理具や食器などが出土し、当時の人々の暮らしぶりをうかがうことができます。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、ならびに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部河川砂防課、本庄県土整備事務所、本庄市教育委員会ならびに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成23年 2 月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 野 龍 宏

例言

1. 本書は、本庄市児玉町大字高関に所在する川越田遺跡第3次、第4次調査の発掘調査報告書である。

なお、川越田遺跡第1次調査は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施し、下記の報告書を刊行している。

事業団報告書 第46集

『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』

2. 遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

川越田遺跡第3次（KWGED3次）

児玉郡児玉町大字高関141-2他

平成17年12月16日付け 教生文第2-87号

川越田遺跡第4次（KWGED4次）

本庄市児玉町大字高関141-2他

平成18年5月1日付け 教生文第2-9号

3. 発掘調査は、女堀川河川改修工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。

4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成17・18年度）

「広域河川改修工事（埋蔵文化財発掘調査委託）」（平成17年度）

「総合流域防災工事（埋蔵文化財発掘調査委託）」（平成18年度）

整理報告書作成事業（平成20～22年度）

「総合流域防災（河川）工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）委託）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

第3次調査は、平成17年11月21日から平成18年3月24日まで、田中広明、清水慎也が担当した。第4次調査は、平成18年4月10日から平成18年6月30日まで、田中広明、加藤隆則が担当した。

整理報告書作成事業は、平成20年6月2日から平成21年3月24日まで澤口和正が、平成21年7月1日から平成22年3月24日まで宮井英一が、平成22年9月14日から平成23年2月28日まで大谷 徹が担当して実施し、平成23年2月に事業団報告書第375集として印刷・刊行した。

6. 基準点測量及び空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。

7. 口絵用の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行った。整理報告書作成における出土遺物の写真撮影は大谷が行い、福田 聖の協力を得た。

9. 出土品の整理・図版作成は宮井、大谷、澤口が行い、鈴木孝之・福田の協力を得た。

10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、V-2を福田、その他を大谷が行い、宮井、田中、大和田 瞳の協力を得た。

11. 本書の編集は大谷が行った。

12. 本書にかかる諸資料は、平成23年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査や本書の作成にあたり、本庄市教育委員会ははじめ、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

K-8グリッド北西杭の座標は、X=24370.000m、Y=-60580.000m（北緯36°13′03″9057、東経139°09′34″2882）で、杭上の標高は70.023mである。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全域をカバーする方眼を設定した。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、南方向にアルファベット（A・B・C…）、東方向に数字（1・2・3…）を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した主な遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ … 竪穴住居跡 SD … 溝跡
SK … 土壇 P … ピット・柱穴
5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記す。

全測図 1/400
遺構図 1/60・1/30
遺物実測図・拓本 1/4・1/3
土製品・金属製品・石製品 1/3・1/2・1/1
6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
7. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・遺物の計測値はcm、重さはgを単位とする。
 - ・土器計測値の（ ）は復元推定値を示す。
 - ・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石 E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質 K：黒色粒子 L：その他
 - ・遺物観察表に記した色調は、すべて農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』によった。
8. 本書に掲載した地図類は、国土地理院発行1/25,000地形図、および本庄市都市計画図1/2,500を編集・使用したものである。
9. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目次

巻頭図版

川越田遺跡の紹介

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	5. ピット	249
1. 発掘調査に至る経過	1	6. グリッド出土遺物	271
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	7. その他の遺物	293
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	V 調査のまとめ	295
II 遺跡の立地と環境	4	1. 調査の成果	295
1. 地理的環境	4	2. 古墳時代前期の土器様相	296
2. 歴史的環境	5	3. 古墳時代中・後期の土器様相	298
III 遺跡の概要	13	4. 集落構成と変遷	302
IV 遺構と遺物	20	5. 今後の課題	307
1. 竪穴住居跡	20		
2. 溝跡	223		
3. 河川跡	240		
4. 土壌	244		

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第 1 図	埼玉県 の 地 形	4	第 36 図	第 15 号 住 居 跡 出 土 遺 物	39
第 2 図	周 辺 の 地 形	5	第 37 図	第 16 号 住 居 跡	39
第 3 図	周 辺 の 主 要 遺 跡	6	第 38 図	第 16 号 住 居 跡 出 土 遺 物	40
第 4 図	川 越 田 遺 跡 と 周 辺 の 遺 跡	12	第 39 図	第 17・27 号 住 居 跡	41
第 5 図	基 本 層 序	13	第 40 図	第 18・19 号 住 居 跡	42
第 6 図	川 越 田 遺 跡 周 辺 地 形 図	14	第 41 図	第 18 号 住 居 跡 出 土 遺 物	42
第 7 図	川 越 田 遺 跡 調 査 区 位 置 図	15	第 42 図	第 21 号 住 居 跡 出 土 遺 物	43
第 8 図	川 越 田 遺 跡 グ リ ッ ド 網 図	17	第 43 図	第 21・23 号 住 居 跡	43
第 9 図	川 越 田 遺 跡 全 測 図 (1)	18	第 44 図	第 24 号 住 居 跡	44
第 10 図	川 越 田 遺 跡 全 測 図 (2)	19	第 45 図	第 24 号 住 居 跡 出 土 遺 物	44
第 11 図	第 1 号 住 居 跡 ・ 出 土 遺 物	20	第 46 図	第 25 号 住 居 跡 ・ カ マ ド	46
第 12 図	第 2 号 住 居 跡	21	第 47 図	第 25 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (1)	47
第 13 図	第 2 号 住 居 跡 出 土 遺 物	21	第 48 図	第 25 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (2)	48
第 14 図	第 3・4 号 住 居 跡	22	第 49 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (1)	49
第 15 図	第 3 号 住 居 跡 出 土 遺 物	22	第 50 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (2)	50
第 16 図	第 4 号 住 居 跡 出 土 遺 物	23	第 51 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (3)	51
第 17 図	第 5 号 住 居 跡	24	第 52 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (4)	52
第 18 図	第 5 号 住 居 跡 出 土 遺 物	24	第 53 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (5)	53
第 19 図	第 6 号 住 居 跡	25	第 54 図	第 25 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (6)	54
第 20 図	第 6 号 住 居 跡 出 土 遺 物	25	第 55 図	第 26 号 住 居 跡 ・ 出 土 遺 物	56
第 21 図	第 7 号 住 居 跡	26	第 56 図	第 28・110 号 住 居 跡 ・ 遺 物 出 土 状 況	58
第 22 図	第 7 号 住 居 跡 出 土 遺 物	27	第 57 図	第 28 号 住 居 跡 出 土 遺 物	59
第 23 図	第 8・13 号 住 居 跡	28	第 58 図	第 29 号 住 居 跡 ・ 出 土 遺 物	60
第 24 図	第 8 号 住 居 跡 出 土 遺 物	28	第 59 図	第 30・34・37 号 住 居 跡	61
第 25 図	第 9 号 住 居 跡	29	第 60 図	第 30 号 住 居 跡 カ マ ド	62
第 26 図	第 9 号 住 居 跡 出 土 遺 物	30	第 61 図	第 30 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (1)	63
第 27 図	第 10 号 住 居 跡	31	第 62 図	第 30 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (2)	64
第 28 図	第 10 号 住 居 跡 出 土 遺 物	31	第 63 図	第 31 号 住 居 跡 出 土 遺 物	66
第 29 図	第 11 号 住 居 跡	32	第 64 図	第 31・36 号 住 居 跡	66
第 30 図	第 11 号 住 居 跡 出 土 遺 物	33	第 65 図	第 32 号 住 居 跡 ・ 遺 物 出 土 状 況	67
第 31 図	第 12 号 住 居 跡	34	第 66 図	第 32 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (1)	68
第 32 図	第 12 号 住 居 跡 出 土 遺 物	34	第 67 図	第 32 号 住 居 跡 出 土 遺 物 (2)	69
第 33 図	第 14 号 住 居 跡	36	第 68 図	第 33 号 住 居 跡	70
第 34 図	第 14 号 住 居 跡 出 土 遺 物	37	第 69 図	第 33 号 住 居 跡 出 土 遺 物	70
第 35 図	第 15・20 号 住 居 跡	38	第 70 図	第 35 号 住 居 跡	71

第71回	第35号住居跡出土遺物	72	第108回	第51号住居跡・遺物出土狀況(1)	108
第72回	第38号住居跡	73	第109回	第51号住居跡遺物出土狀況(2)	109
第73回	第38号住居跡出土遺物	73	第110回	第51号住居跡遺物出土狀況(3)	110
第74回	第39号住居跡	74	第111回	第51号住居跡遺物出土狀況(4)	111
第75回	第39号住居跡出土遺物	75	第112回	第51号住居跡出土遺物(1)	112
第76回	第40号住居跡	76	第113回	第51号住居跡出土遺物(2)	113
第77回	第40号住居跡出土遺物	76	第114回	第51号住居跡出土遺物(3)	114
第78回	第41号住居跡	77	第115回	第51号住居跡出土遺物(4)	115
第79回	第41号住居跡遺物出土狀況	77	第116回	第51号住居跡出土遺物(5)	116
第80回	第41号住居跡出土遺物(1)	78	第117回	第51号住居跡出土遺物(6)	117
第81回	第41号住居跡出土遺物(2)	79	第118回	第51号住居跡出土遺物(7)	118
第82回	第42号住居跡	81	第119回	第51号住居跡出土遺物(8)	119
第83回	第42号住居跡出土遺物(1)	82	第120回	第51号住居跡出土遺物(9)	120
第84回	第42号住居跡出土遺物(2)	83	第121回	第51号住居跡出土遺物(10)	121
第85回	第43号住居跡	84	第122回	第51号住居跡出土遺物(11)	122
第86回	第43号住居跡出土遺物(1)	85	第123回	第51号住居跡出土遺物(12)	123
第87回	第43号住居跡出土遺物(2)	86	第124回	第52号住居跡	128
第88回	第43号住居跡出土遺物(3)	87	第125回	第53号住居跡	129
第89回	第44号住居跡	90	第126回	第52・53号住居跡出土遺物	129
第90回	第44号住居跡出土遺物	90	第127回	第54号住居跡	129
第91回	第45号住居跡	91	第128回	第54号住居跡出土遺物	130
第92回	第45号住居跡出土遺物	91	第129回	第55号住居跡	131
第93回	第46号住居跡	92	第130回	第55号住居跡出土遺物	131
第94回	第46号住居跡出土遺物(1)	93	第131回	第56号住居跡	132
第95回	第46号住居跡出土遺物(2)	94	第132回	第56号住居跡出土遺物	133
第96回	第47号住居跡	95	第133回	第57号住居跡	134
第97回	第47号住居跡出土遺物(1)	96	第134回	第57号住居跡出土遺物	134
第98回	第47号住居跡出土遺物(2)	97	第135回	第58・109号住居跡	136
第99回	第47号住居跡出土遺物(3)	98	第136回	第58号住居跡出土遺物(1)	137
第100回	第47号住居跡出土遺物(4)	99	第137回	第58号住居跡出土遺物(2)	138
第101回	第47号住居跡出土遺物(5)	100	第138回	第59号住居跡	140
第102回	第48号住居跡	104	第139回	第59号住居跡出土遺物(1)	141
第103回	第48号住居跡出土遺物	104	第140回	第59号住居跡出土遺物(2)	142
第104回	第49号住居跡	105	第141回	第59号住居跡出土遺物(3)	143
第105回	第49号住居跡出土遺物	105	第142回	第60号住居跡	145
第106回	第50号住居跡	106	第143回	第60号住居跡出土遺物	145
第107回	第50号住居跡出土遺物	106	第144回	第61・68号住居跡	146

第145回	第61号住居跡出土遺物	147	第182回	第83号住居跡出土遺物(1)	181
第146回	第62号住居跡	148	第183回	第83号住居跡出土遺物(2)	182
第147回	第62号住居跡出土遺物	149	第184回	第84号住居跡・出土遺物	183
第148回	第64号住居跡	150	第185回	第85号住居跡	184
第149回	第64号住居跡出土遺物	151	第186回	第85号住居跡出土遺物	184
第150回	第65・75号住居跡	152	第187回	第87号住居跡	185
第151回	第65号住居跡出土遺物(1)	153	第188回	第87号住居跡出土遺物	186
第152回	第65号住居跡出土遺物(2)	154	第189回	第88号住居跡	187
第153回	第66号住居跡	155	第190回	第88号住居跡出土遺物(1)	188
第154回	第66号住居跡出土遺物	155	第191回	第88号住居跡出土遺物(2)	189
第155回	第67号住居跡	156	第192回	第89号住居跡	191
第156回	第67号住居跡遺物出土状況(1)	157	第193回	第89号住居跡出土遺物	192
第157回	第67号住居跡遺物出土状況(2)	158	第194回	第90号住居跡	193
第158回	第67号住居跡出土遺物(1)	159	第195回	第91号住居跡	194
第159回	第67号住居跡出土遺物(2)	160	第196回	第91号住居跡出土遺物	194
第160回	第67号住居跡出土遺物(3)	161	第197回	第94号住居跡	195
第161回	第69号住居跡	163	第198回	第94号住居跡出土遺物	195
第162回	第69号住居跡出土遺物	164	第199回	第95号住居跡	196
第163回	第70号住居跡	166	第200回	第95号住居跡出土遺物	197
第164回	第70号住居跡出土遺物	167	第201回	第96号住居跡	198
第165回	第71号住居跡	168	第202回	第96号住居跡出土遺物	199
第166回	第71号住居跡出土遺物	169	第203回	第97号住居跡	201
第167回	第72号住居跡	169	第204回	第97号住居跡遺物出土状況	202
第168回	第73号住居跡	170	第205回	第97号住居跡出土遺物(1)	203
第169回	第73号住居跡出土遺物	170	第206回	第97号住居跡出土遺物(2)	204
第170回	第76号住居跡	171	第207回	第97号住居跡出土遺物(3)	205
第171回	第76号住居跡出土遺物	172	第208回	第99号住居跡	207
第172回	第77・106号住居跡	173	第209回	第100号住居跡・遺物出土状況	208
第173回	第78号住居跡	174	第210回	第100号住居跡出土遺物(1)	209
第174回	第78号住居跡出土遺物	175	第211回	第100号住居跡出土遺物(2)	210
第175回	第79・80号住居跡	176	第212回	第100号住居跡出土遺物(3)	211
第176回	第79号住居跡出土遺物	177	第213回	第101号住居跡	214
第177回	第80号住居跡出土遺物	177	第214回	第101号住居跡出土遺物	215
第178回	第81号住居跡	177	第215回	第102号住居跡・出土遺物	216
第179回	第82号住居跡	178	第216回	第103号住居跡	217
第180回	第82号住居跡出土遺物	179	第217回	第104号住居跡・遺物出土状況	217
第181回	第83号住居跡	180	第218回	第104号住居跡出土遺物	218

第219図	第105号住居跡・遺物出土状況	219	第247図	ピット (8)	258
第220図	第105号住居跡出土遺物	220	第248図	ピット (9)	259
第221図	第107号住居跡	221	第249図	ピット (10)	260
第222図	第108号住居跡	222	第250図	ピット (11)	261
第223図	溝跡全体図	224	第251図	ピット (12)	262
第224図	第1号溝跡	225	第252図	ピット (13)	263
第225図	第1号溝跡出土遺物 (1)	226	第253図	ピット (14)	264
第226図	第1号溝跡出土遺物 (2)	227	第254図	ピット (15)	265
第227図	第2～15・27・28号溝跡	231	第255図	ピット (16)	266
第228図	第16～26・43・44号溝跡	233	第256図	ピット出土遺物	270
第229図	第29～42・50・51・56号溝跡	235	第257図	グリッド出土遺物 (1)	273
第230図	第45・46・48・52号溝跡	237	第258図	グリッド出土遺物 (2)	275
第231図	第53・54・58～60号溝跡	239	第259図	グリッド出土遺物 (3)	277
第232図	第55・57・61号溝跡	240	第260図	グリッド出土遺物 (4)	279
第233図	溝跡出土遺物	241	第261図	グリッド出土遺物 (5)	280
第234図	河川跡	242	第262図	グリッド出土遺物 (6)	281
第235図	河川跡出土遺物	243	第263図	グリッド出土遺物 (7)	283
第236図	土壙全体図	245	第264図	グリッド出土遺物 (8)	285
第237図	土壙	246	第265図	グリッド出土遺物 (9)	286
第238図	土壙出土遺物	247	第266図	その他の遺物	293
第239図	ピット全体図	250	第267図	条里型地割復元図	295
第240図	ピット (1)	251	第268図	古墳時代前期の土器	297
第241図	ピット (2)	252	第269図	古墳時代中・後期の土器 (1)	299
第242図	ピット (3)	253	第270図	古墳時代後期の土器 (2)	301
第243図	ピット (4)	254	第271図	川越田遺跡集落変遷図 (1)	302
第244図	ピット (5)	255	第272図	川越田遺跡集落変遷図 (2)	303
第245図	ピット (6)	256	第273図	古墳時代後期住居跡集成図	305
第246図	ピット (7)	257			

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	20	第7表	第7号住居跡出土遺物観察表	27
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	22	第8表	第8号住居跡出土遺物観察表	29
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	22	第9表	第9号住居跡出土遺物観察表	30
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表	23	第10表	第10号住居跡出土遺物観察表	31
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表	24	第11表	第11号住居跡出土遺物観察表	33
第6表	第6号住居跡出土遺物観察表	25	第12表	第12号住居跡出土遺物観察表	35

第13表	第14号住居跡出土遺物觀察表……………	38	第50表	第61号住居跡出土遺物觀察表……………	147
第14表	第15号住居跡出土遺物觀察表……………	39	第51表	第62号住居跡出土遺物觀察表……………	150
第15表	第16号住居跡出土遺物觀察表……………	40	第52表	第64号住居跡出土遺物觀察表……………	151
第16表	第18号住居跡出土遺物觀察表……………	42	第53表	第65号住居跡出土遺物觀察表……………	154
第17表	第21号住居跡出土遺物觀察表……………	44	第54表	第66号住居跡出土遺物觀察表……………	155
第18表	第24号住居跡出土遺物觀察表……………	44	第55表	第67号住居跡出土遺物觀察表……………	161
第19表	第25号住居跡出土遺物觀察表……………	55	第56表	第69号住居跡出土遺物觀察表……………	165
第20表	第26号住居跡出土遺物觀察表……………	57	第57表	第70号住居跡出土遺物觀察表……………	167
第21表	第28号住居跡出土遺物觀察表……………	60	第58表	第71号住居跡出土遺物觀察表……………	169
第22表	第29号住居跡出土遺物觀察表……………	60	第59表	第73号住居跡出土遺物觀察表……………	170
第23表	第30号住居跡出土遺物觀察表……………	65	第60表	第76号住居跡出土遺物觀察表……………	172
第24表	第31号住居跡出土遺物觀察表……………	66	第61表	第78号住居跡出土遺物觀察表……………	176
第25表	第32号住居跡出土遺物觀察表……………	69	第62表	第79号住居跡出土遺物觀察表……………	177
第26表	第33号住居跡出土遺物觀察表……………	71	第63表	第80号住居跡出土遺物觀察表……………	177
第27表	第35号住居跡出土遺物觀察表……………	72	第64表	第82号住居跡出土遺物觀察表……………	179
第28表	第38号住居跡出土遺物觀察表……………	73	第65表	第83号住居跡出土遺物觀察表……………	182
第29表	第39号住居跡出土遺物觀察表……………	75	第66表	第84号住居跡出土遺物觀察表……………	183
第30表	第40号住居跡出土遺物觀察表……………	76	第67表	第85号住居跡出土遺物觀察表……………	184
第31表	第41号住居跡出土遺物觀察表……………	79	第68表	第87号住居跡出土遺物觀察表……………	186
第32表	第42号住居跡出土遺物觀察表……………	83	第69表	第88号住居跡出土遺物觀察表……………	189
第33表	第43号住居跡出土遺物觀察表……………	88	第70表	第89号住居跡出土遺物觀察表……………	192
第34表	第44号住居跡出土遺物觀察表……………	90	第71表	第91号住居跡出土遺物觀察表……………	194
第35表	第45号住居跡出土遺物觀察表……………	91	第72表	第94号住居跡出土遺物觀察表……………	195
第36表	第46号住居跡出土遺物觀察表……………	94	第73表	第95号住居跡出土遺物觀察表……………	197
第37表	第47号住居跡出土遺物觀察表……………	101	第74表	第96号住居跡出土遺物觀察表……………	199
第38表	第48号住居跡出土遺物觀察表……………	104	第75表	第97号住居跡出土遺物觀察表……………	206
第39表	第49号住居跡出土遺物觀察表……………	105	第76表	第100号住居跡出土遺物觀察表……………	212
第40表	第50号住居跡出土遺物觀察表……………	107	第77表	第101号住居跡出土遺物觀察表……………	215
第41表	第51号住居跡出土遺物觀察表……………	123	第78表	第102号住居跡出土遺物觀察表……………	216
第42表	第52・53号住居跡出土遺物觀察表……………	129	第79表	第104号住居跡出土遺物觀察表……………	218
第43表	第54号住居跡出土遺物觀察表……………	130	第80表	第105号住居跡出土遺物觀察表……………	220
第44表	第55号住居跡出土遺物觀察表……………	131	第81表	第1号溝跡出土遺物觀察表……………	228
第45表	第56号住居跡出土遺物觀察表……………	133	第82表	溝跡出土遺物觀察表……………	241
第46表	第57号住居跡出土遺物觀察表……………	135	第83表	土壙出土遺物觀察表……………	248
第47表	第58号住居跡出土遺物觀察表……………	138	第84表	ピット一覽表(1)……………	252
第48表	第59号住居跡出土遺物觀察表……………	143	第85表	ピット一覽表(2)……………	257
第49表	第60号住居跡出土遺物觀察表……………	145	第86表	ピット一覽表(3)……………	260

第87表	ピット一覧表 (4)	……………262	第92表	ピット出土遺物観察表	……………271
第88表	ピット一覧表 (5)	……………265	第93表	グリッド出土遺物重複遺構一覧表	…272
第89表	ピット一覧表 (6)	……………267	第94表	グリッド出土遺物観察表	……………287
第90表	ピット一覧表 (7)	……………268	第95表	その他の遺物観察表	……………294
第91表	ピット一覧表 (8)	……………269			

写真図版目次

巻頭図版 1	1	川越田遺跡 (第3次)・今井川越田遺跡 (合成)	7	第8号住居跡カマド	
巻頭図版 2	1	川越田遺跡 (第4次) 空中写真	8	第9号住居跡	
巻頭図版 3	1	第100号住居跡出土遺物	図版 6	1	第9号住居跡カマド
	2	第51号住居跡出土遺物	2	第9号住居跡遺物出土状況	
巻頭図版 4	1	第25号住居跡出土遺物	3	第10号住居跡	
	2	第30号住居跡出土遺物	4	第10号住居跡カマド	
巻頭図版 5	1	第67号住居跡出土遺物	5	第11号住居跡	
	2	第43号住居跡出土遺物	6	第12号住居跡	
図版 1	1	川越田遺跡遠景 (1)	7	第12号住居跡カマド	
	2	川越田遺跡遠景 (2)	8	第12号住居跡カマド土層断面	
図版 2	1	川越田遺跡 (第3次) 空中写真 (1)	図版 7	1	第14号住居跡
	2	川越田遺跡 (第3次) 空中写真 (2)	2	第14号住居跡カマド (1)	
図版 3	1	川越田遺跡 (第4次) 空中写真 (1)	3	第14号住居跡カマド (2)	
	2	川越田遺跡 (第4次) 空中写真 (2)	4	第14号住居跡貯蔵穴	
図版 4	1	古代、中・近世遺構確認面全景 (1)	5	第15・16号住居跡	
	2	古代、中・近世遺構確認面全景 (2)	6	第18・19・21・23号住居跡	
	3	古墳時代遺構確認面全景 (1)	7	第18号住居跡	
	4	古墳時代遺構確認面全景 (2)	8	第21号住居跡遺物出土状況	
	5	調査区北半部全景 (1)	図版 8	1	第25号住居跡
	6	調査区北半部全景 (2)	2	第25号住居跡遺物出土状況 (1)	
	7	調査区北半部全景 (3)	3	第25号住居跡遺物出土状況 (2)	
	8	調査区南半部全景	4	第25号住居跡遺物出土状況 (3)	
図版 5	1	第4号住居跡	5	第25号住居跡カマド遺物出土状況 (1)	
	2	第6号住居跡	6	第25号住居跡カマド遺物出土状況 (2)	
	3	第7号住居跡	7	第25号住居跡カマド (1)	
	4	第7号住居跡カマド	8	第25号住居跡カマド (2)	
	5	第7号住居跡紡錘車出土状況	図版 9	1	第25号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (1)
	6	第8号住居跡	2	第25号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (2)	
			3	第25号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (3)	

	4	第25号住居跡遺物出土状況 (1)	図版14	1	第46号住居跡カマド遺物出土状況 (1)
	5	第25号住居跡遺物出土状況 (2)		2	第46号住居跡カマド遺物出土状況 (2)
	6	第25号住居跡遺物出土状況 (3)		3	第46号住居跡カマド遺物出土状況 (3)
	7	第25号住居跡遺物出土状況 (4)		4	第47号住居跡
	8	第25号住居跡遺物出土状況 (5)		5	第49号住居跡
図版10	1	第28号住居跡		6	第50号住居跡
	2	第28号住居跡カマド		7	第51号住居跡
	3	第28号住居跡貯蔵穴		8	第51号住居跡遺物出土状況 (1)
	4	第29号住居跡	図版15	1	第51号住居跡遺物出土状況 (2)
	5	第30号住居跡		2	第51号住居跡遺物出土状況 (3)
	6	第30号住居跡カマド遺物出土状況		3	第51号住居跡遺物出土状況 (4)
	7	第30号住居跡遺物出土状況 (1)		4	第51号住居跡遺物出土状況 (5)
	8	第30号住居跡遺物出土状況 (2)		5	第51号住居跡遺物出土状況 (6)
図版11	1	第32号住居跡		6	第54号住居跡カマド
	2	第32号住居跡カマド遺物出土状況(1)		7	第55号住居跡
	3	第32号住居跡カマド遺物出土状況 (2)		8	第56号住居跡
	4	第32号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (1)	図版16	1	第56号住居跡カマド
	5	第32号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (2)		2	第57号住居跡
	6	第32号住居跡遺物出土状況		3	第57号住居跡カマド
	7	第35号住居跡		4	第58号住居跡
	8	第38号住居跡		5	第58号住居跡カマド (1)
図版12	1	第38号住居跡遺物出土状況 (1)		6	第58号住居跡カマド (2)
	2	第38号住居跡遺物出土状況 (2)		7	第58号住居跡カマド (3)
	3	第38号住居跡遺物出土状況 (3)		8	第58号住居跡カマド (4)
	4	第39号住居跡	図版17	1	第58号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (1)
	5	第41号住居跡遺物出土状況		2	第58号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (2)
	6	第42号住居跡		3	第58号住居跡遺物出土状況
	7	第42号住居跡カマド (1)		4	第60号住居跡
	8	第42号住居跡カマド (2)		5	第61号住居跡
図版13	1	第42号住居跡貯蔵穴		6	第61号住居跡カマド
	2	第42号住居跡遺物出土状況		7	第62号住居跡
	3	第43号住居跡		8	第64号住居跡
	4	第43号住居跡カマド (1)	図版18	1	第65号住居跡
	5	第43号住居跡カマド (2)		2	第65号住居跡カマド遺物出土状況 (1)
	6	第43号住居跡カマド (3)		3	第65号住居跡カマド遺物出土状況 (2)
	7	第43号住居跡遺物出土状況		4	第67号住居跡
	8	第46号住居跡		5	第67号住居跡遺物出土状況

	6	第67号住居跡カマド遺物出土状況 (1)	3	第3号溝跡
	7	第67号住居跡カマド遺物出土状況 (2)	4	第7号溝跡
	8	第67号住居跡カマド遺物出土状況 (3)	5	第8・27・28号溝跡
図版19	1	第67号住居跡カマド	6	第10～14号溝跡
	2	第67号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (1)	7	第10号溝跡
	3	第67号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (2)	8	第14号溝跡
	4	第67号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (3)	図版24	1 第29～42号溝跡
	5	第69号住居跡	2	第45号溝跡
	6	第69号住居跡カマド	3	第48号溝跡
	7	第70号住居跡	4	第1号土壇
	8	第70号住居跡遺物出土状況	5	第3号土壇
図版20	1	第71号住居跡	6	第3号土壇遺物出土状況
	2	第73号住居跡カマド	7	第5号土壇
	3	第76号住居跡	8	第6号土壇
	4	第76号住居跡カマド	図版25	1 第6号住居跡 (第20図1)
	5	第78号住居跡	2	第6号住居跡 (第20図2)
	6	第82号住居跡	3	第6号住居跡 (第20図3)
	7	第83号住居跡	4	第6号住居跡 (第20図4)
	8	第85・94号住居跡	5	第6号住居跡 (第20図5)
図版21	1	第88・105号住居跡	6	第7号住居跡 (第22図1)
	2	第88号住居跡カマド	7	第7号住居跡 (第22図2)
	3	第89号住居跡	8	第7号住居跡 (第22図3)
	4	第89号住居跡遺物出土状況 (1)	9	第9号住居跡 (第26図10)
	5	第89号住居跡遺物出土状況 (2)	図版26	1 第9号住居跡 (第26図11)
	6	第95号住居跡	2	第10号住居跡 (第28図1)
	7	第95号住居跡カマド	3	第10号住居跡 (第28図2)
	8	第96号住居跡	4	第11号住居跡 (第30図1)
図版22	1	第96号住居跡カマド (1)	5	第11号住居跡 (第30図2)
	2	第96号住居跡カマド (2)	6	第11号住居跡 (第30図3)
	3	第100号住居跡	7	第11号住居跡 (第30図5)
	4	第100号住居跡遺物出土状況 (1)	8	第12号住居跡 (第32図7)
	5	第100号住居跡遺物出土状況 (2)	図版27	1 第14号住居跡 (第34図3)
	6	第104号住居跡	2	第14号住居跡 (第34図6)
	7	第104号住居跡カマド	3	第14号住居跡 (第34図7)
	8	第105号住居跡	4	第14号住居跡 (第34図9)
図版23	1	第1号溝跡	5	第14号住居跡 (第34図11)
	2	第2号溝跡	6	第15号住居跡 (第36図3)

	7	第18号住居跡 (第41图 1)			
图版28	1	第24号住居跡 (第45图 1)		图版32	1 第25号住居跡 (第50图44)
	2	第25号住居跡 (第49图 1)			2 第25号住居跡 (第50图45)
	3	第25号住居跡 (第49图 2)			3 第25号住居跡 (第51图46)
	4	第25号住居跡 (第49图 3)			4 第25号住居跡 (第51图47)
	5	第25号住居跡 (第49图 4)		图版33	1 第25号住居跡 (第51图48)
	6	第25号住居跡 (第49图 5)			2 第25号住居跡 (第51图49)
	7	第25号住居跡 (第49图 6)			3 第25号住居跡 (第51图50)
	8	第25号住居跡 (第49图 7)			4 第25号住居跡 (第52图55)
	9	第25号住居跡 (第49图 8)		图版34	1 第25号住居跡 (第51图51)
	10	第25号住居跡 (第49图 9)			2 第25号住居跡 (第52图53)
图版29	1	第25号住居跡 (第49图10)			3 第25号住居跡 (第52图54)
	2	第25号住居跡 (第49图11)			4 第25号住居跡 (第53图57)
	3	第25号住居跡 (第49图12)			5 第25号住居跡 (第53图58)
	4	第25号住居跡 (第49图13)			6 第26号住居跡 (第55图 1)
	5	第25号住居跡 (第49图14)		图版35	1 第28号住居跡 (第57图 1)
	6	第25号住居跡 (第49图15)			2 第28号住居跡 (第57图 2)
	7	第25号住居跡 (第49图16)			3 第28号住居跡 (第57图 3)
	8	第25号住居跡 (第49图17)			4 第28号住居跡 (第57图 4)
	9	第25号住居跡 (第49图19)			5 第28号住居跡 (第57图 5)
	10	第25号住居跡 (第49图20)			6 第28号住居跡 (第57图 6)
图版30	1	第25号住居跡 (第50图21)			7 第28号住居跡 (第57图 7)
	2	第25号住居跡 (第50图22)		图版36	1 第28号住居跡 (第57图 9)
	3	第25号住居跡 (第50图23)			2 第28号住居跡 (第57图10)
	4	第25号住居跡 (第50图24)			3 第28号住居跡 (第57图11)
	5	第25号住居跡 (第50图26)			4 第30号住居跡 (第61图 1)
	6	第25号住居跡 (第50图27)			5 第30号住居跡 (第61图 2)
	7	第25号住居跡 (第50图28)			6 第30号住居跡 (第61图 3)
	8	第25号住居跡 (第50图29)		图版37	1 第30号住居跡 (第61图 4)
	9	第25号住居跡 (第50图30)			2 第30号住居跡 (第61图 7)
	10	第25号住居跡 (第50图33)			3 第30号住居跡 (第61图 8)
图版31	1	第25号住居跡 (第50图34)			4 第30号住居跡 (第61图23)
	2	第25号住居跡 (第50图35)			5 第30号住居跡 (第61图24)
	3	第25号住居跡 (第50图36)			6 第30号住居跡 (第61图26)
	4	第25号住居跡 (第50图37)			7 第30号住居跡 (第61图27)
	5	第25号住居跡 (第50图40)			8 第30号住居跡 (第61图28)
	6	第25号住居跡 (第50图43)		图版38	1 第30号住居跡 (第62图43)
					2 第30号住居跡 (第62图46)

- | | | | | | |
|------|---|------------------|------|----|------------------|
| | 3 | 第31号住居跡 (第63图1) | | 4 | 第42号住居跡 (第83图10) |
| | 4 | 第32号住居跡 (第66图1) | | 5 | 第42号住居跡 (第83图6) |
| | 5 | 第32号住居跡 (第66图3) | | 6 | 第42号住居跡 (第83图12) |
| | 6 | 第32号住居跡 (第66图4) | | 7 | 第42号住居跡 (第83图15) |
| | 7 | 第32号住居跡 (第66图5) | 图版44 | 1 | 第43号住居跡 (第86图1) |
| 图版39 | 1 | 第32号住居跡 (第66图6) | | 2 | 第43号住居跡 (第86图2) |
| | 2 | 第32号住居跡 (第66图10) | | 3 | 第43号住居跡 (第86图3) |
| | 3 | 第32号住居跡 (第66图11) | | 4 | 第43号住居跡 (第86图4) |
| | 4 | 第32号住居跡 (第66图12) | | 5 | 第43号住居跡 (第86图5) |
| | 5 | 第32号住居跡 (第66图13) | | 6 | 第43号住居跡 (第86图6) |
| 图版40 | 1 | 第32号住居跡 (第66图14) | | 7 | 第43号住居跡 (第86图7) |
| | 2 | 第32号住居跡 (第67图15) | | 8 | 第43号住居跡 (第86图9) |
| | 3 | 第32号住居跡 (第67图16) | | 9 | 第43号住居跡 (第86图11) |
| | 4 | 第33号住居跡 (第69图1) | | 10 | 第43号住居跡 (第86图12) |
| | 5 | 第33号住居跡 (第69图3) | 图版45 | 1 | 第43号住居跡 (第86图13) |
| | 6 | 第38号住居跡 (第73图3) | | 2 | 第43号住居跡 (第86图16) |
| | 7 | 第38号住居跡 (第73图4) | | 3 | 第43号住居跡 (第86图17) |
| 图版41 | 1 | 第39号住居跡 (第75图1) | | 4 | 第43号住居跡 (第86图18) |
| | 2 | 第39号住居跡 (第75图4) | | 5 | 第43号住居跡 (第86图22) |
| | 3 | 第39号住居跡 (第75图5) | | 6 | 第43号住居跡 (第86图27) |
| | 4 | 第39号住居跡 (第75图6) | | 7 | 第43号住居跡 (第86图28) |
| | 5 | 第40号住居跡 (第77图1) | | 8 | 第43号住居跡 (第86图29) |
| | 6 | 第40号住居跡 (第77图2) | | 9 | 第43号住居跡 (第86图35) |
| | 7 | 第41号住居跡 (第80图1) | 图版46 | 1 | 第43号住居跡 (第86图32) |
| | 8 | 第41号住居跡 (第80图2) | | 2 | 第43号住居跡 (第87图46) |
| 图版42 | 1 | 第41号住居跡 (第80图3) | | 3 | 第43号住居跡 (第87图57) |
| | 2 | 第41号住居跡 (第80图5) | | 4 | 第43号住居跡 (第87图53) |
| | 3 | 第41号住居跡 (第80图7) | | 5 | 第43号住居跡 (第87图58) |
| | 4 | 第41号住居跡 (第80图9) | | 6 | 第43号住居跡 (第88图68) |
| | 5 | 第41号住居跡 (第80图12) | | 7 | 第43号住居跡 (第88图69) |
| | 6 | 第41号住居跡 (第80图13) | | 8 | 第43号住居跡 (第88图72) |
| | 7 | 第41号住居跡 (第80图26) | 图版47 | 1 | 第46号住居跡 (第94图1) |
| | 8 | 第41号住居跡 (第80图28) | | 2 | 第46号住居跡 (第94图2) |
| | 9 | 第42号住居跡 (第83图1) | | 3 | 第46号住居跡 (第94图5) |
| 图版43 | 1 | 第42号住居跡 (第83图2) | | 4 | 第46号住居跡 (第94图5) |
| | 2 | 第42号住居跡 (第83图4) | | 5 | 第46号住居跡 (第94图6) |
| | 3 | 第42号住居跡 (第83图8) | | 6 | 第46号住居跡 (第94图7) |

- | | | | | | |
|------|----|--------------------|------|---|--------------------|
| | 7 | 第46号住居跡 (第94図8) | | 5 | 第51号住居跡 (第112図15) |
| | 8 | 第46号住居跡 (第94図11) | | 6 | 第51号住居跡 (第112図17) |
| 図版48 | 1 | 第46号住居跡 (第94図13) | | 7 | 第51号住居跡 (第112図18) |
| | 2 | 第46号住居跡 (第94図14) | | 8 | 第51号住居跡 (第112図19) |
| | 3 | 第46号住居跡 (第95図18) | 図版53 | 1 | 第51号住居跡 (第112図23) |
| | 4 | 第47号住居跡 (第97図1) | | 2 | 第51号住居跡 (第113図44) |
| | 5 | 第47号住居跡 (第97図2) | | 3 | 第51号住居跡 (第113図45) |
| | 6 | 第47号住居跡 (第97図3) | | 4 | 第51号住居跡 (第113図46) |
| 図版49 | 1 | 第47号住居跡 (第97図4) | | 5 | 第51号住居跡 (第113図49) |
| | 2 | 第47号住居跡 (第97図17) | | 6 | 第51号住居跡 (第113図50) |
| | 3 | 第47号住居跡 (第97図22) | 図版54 | 1 | 第51号住居跡 (第113図51) |
| | 4 | 第47号住居跡 (第97図24) | | 2 | 第51号住居跡 (第113図55) |
| | 5 | 第47号住居跡 (第97図26) | | 3 | 第51号住居跡 (第113図56) |
| | 6 | 第47号住居跡 (第97図28) | | 4 | 第51号住居跡 (第114図66) |
| | 7 | 第47号住居跡 (第97図32) | | 5 | 第51号住居跡 (第114図67) |
| | 8 | 第47号住居跡 (第97図33) | | 6 | 第51号住居跡 (第114図69) |
| | 9 | 第47号住居跡 (第97図38) | 図版55 | 1 | 第51号住居跡 (第114図70) |
| | 10 | 第47号住居跡 (第98図39) | | 2 | 第51号住居跡 (第114図70) |
| 図版50 | 1 | 第47号住居跡 (第98図45) | | 3 | 第51号住居跡 (第114図71) |
| | 2 | 第47号住居跡 (第98図48) | | 4 | 第51号住居跡 (第114図71) |
| | 3 | 第47号住居跡 (第98図62) | | 5 | 第51号住居跡 (第115図95) |
| | 4 | 第47号住居跡 (第98図64) | | 6 | 第51号住居跡 (第115図102) |
| | 5 | 第47号住居跡 (第98図65) | | 7 | 第51号住居跡 (第117図124) |
| | 6 | 第47号住居跡 (第99図84) | | 8 | 第51号住居跡 (第117図125) |
| | 7 | 第47号住居跡 (第100図94) | 図版56 | 1 | 第51号住居跡 (第118図152) |
| 図版51 | 1 | 第47号住居跡 (第101図119) | | 2 | 第51号住居跡 (第119図170) |
| | 2 | 第47号住居跡 (第101図128) | | 3 | 第51号住居跡 (第119図173) |
| | 3 | 第47号住居跡 (第101図128) | | 4 | 第51号住居跡 (第119図174) |
| | 4 | 第47号住居跡 (第101図129) | | 5 | 第51号住居跡 (第119図177) |
| | 5 | 第49号住居跡 (第105図1) | | 6 | 第51号住居跡 (第120図184) |
| | 6 | 第50号住居跡 (第107図1) | 図版57 | 1 | 第51号住居跡 (第120図185) |
| | 7 | 第50号住居跡 (第107図2) | | 2 | 第51号住居跡 (第120図186) |
| | 8 | 第51号住居跡 (第112図2) | | 3 | 第51号住居跡 (第120図187) |
| 図版52 | 1 | 第51号住居跡 (第112図4) | | 4 | 第51号住居跡 (第120図189) |
| | 2 | 第51号住居跡 (第112図8) | | 5 | 第51号住居跡 (第120図190) |
| | 3 | 第51号住居跡 (第112図11) | | 6 | 第51号住居跡 (第121図191) |
| | 4 | 第51号住居跡 (第112図12) | 図版58 | 1 | 第51号住居跡 (第121図195) |

- | | | | | | |
|------|---|--------------------|------|---|-------------------|
| | 2 | 第51号住居跡 (第121图196) | 图版63 | 1 | 第59号住居跡 (第140图39) |
| | 3 | 第51号住居跡 (第121图198) | | 2 | 第59号住居跡 (第140图42) |
| | 4 | 第51号住居跡 (第121图199) | | 3 | 第60号住居跡 (第143图7) |
| | 5 | 第51号住居跡 (第121图200) | | 4 | 第62号住居跡 (第147图1) |
| | 6 | 第51号住居跡 (第121图201) | | 5 | 第62号住居跡 (第147图12) |
| 图版59 | 1 | 第51号住居跡 (第122图202) | | 6 | 第62号住居跡 (第147图13) |
| | 2 | 第51号住居跡 (第122图203) | | 7 | 第62号住居跡 (第147图23) |
| | 3 | 第51号住居跡 (第122图204) | 图版64 | 1 | 第62号住居跡 (第147图16) |
| | 4 | 第51号住居跡 (第122图205) | | 2 | 第62号住居跡 (第147图17) |
| | 5 | 第51号住居跡 (第122图207) | | 3 | 第64号住居跡 (第149图13) |
| | 6 | 第51号住居跡 (第122图208) | | 4 | 第64号住居跡 (第149图7) |
| 图版60 | 1 | 第54号住居跡 (第128图2) | | 5 | 第64号住居跡 (第149图7) |
| | 2 | 第54号住居跡 (第128图7) | | 6 | 第65号住居跡 (第151图1) |
| | 3 | 第56号住居跡 (第132图1) | | 7 | 第65号住居跡 (第151图2) |
| | 4 | 第56号住居跡 (第132图2) | 图版65 | 1 | 第65号住居跡 (第151图3) |
| | 5 | 第56号住居跡 (第132图6) | | 2 | 第65号住居跡 (第151图7) |
| | 6 | 第57号住居跡 (第134图1) | | 3 | 第65号住居跡 (第151图15) |
| | 7 | 第58号住居跡 (第136图1) | | 4 | 第65号住居跡 (第151图8) |
| | 8 | 第58号住居跡 (第136图2) | | 5 | 第66号住居跡 (第154图1) |
| | 9 | 第58号住居跡 (第136图4) | | 6 | 第67号住居跡 (第158图1) |
| 图版61 | 1 | 第58号住居跡 (第136图5) | | 7 | 第67号住居跡 (第158图1) |
| | 2 | 第58号住居跡 (第136图6) | 图版66 | 1 | 第67号住居跡 (第158图2) |
| | 3 | 第58号住居跡 (第136图8) | | 2 | 第67号住居跡 (第158图2) |
| | 4 | 第58号住居跡 (第136图10) | | 3 | 第67号住居跡 (第158图3) |
| | 5 | 第58号住居跡 (第136图12) | | 4 | 第67号住居跡 (第158图4) |
| | 6 | 第58号住居跡 (第136图13) | | 5 | 第67号住居跡 (第158图5) |
| | 7 | 第58号住居跡 (第136图21) | | 6 | 第67号住居跡 (第158图6) |
| | 8 | 第58号住居跡 (第136图27) | | 7 | 第67号住居跡 (第158图7) |
| | 9 | 第58号住居跡 (第137图39) | | 8 | 第67号住居跡 (第158图8) |
| 图版62 | 1 | 第58号住居跡 (第137图40) | | 9 | 第67号住居跡 (第158图9) |
| | 2 | 第59号住居跡 (第139图2) | 图版67 | 1 | 第67号住居跡 (第158图10) |
| | 3 | 第59号住居跡 (第139图4) | | 2 | 第67号住居跡 (第158图11) |
| | 4 | 第59号住居跡 (第139图15) | | 3 | 第67号住居跡 (第158图14) |
| | 5 | 第59号住居跡 (第139图18) | | 4 | 第67号住居跡 (第158图15) |
| | 6 | 第59号住居跡 (第139图29) | | 5 | 第67号住居跡 (第158图17) |
| | 7 | 第59号住居跡 (第139图32) | | 6 | 第67号住居跡 (第158图18) |
| | 8 | 第59号住居跡 (第139图34) | | 7 | 第67号住居跡 (第158图19) |

- | | | | | | |
|------|----|-------------------|------|---|-------------------|
| | 8 | 第67号住居跡 (第158图20) | | 2 | 第76号住居跡 (第171图8) |
| | 9 | 第67号住居跡 (第158图21) | | 3 | 第78号住居跡 (第174图9) |
| 图版68 | 1 | 第67号住居跡 (第158图22) | | 4 | 第78号住居跡 (第174图18) |
| | 2 | 第67号住居跡 (第158图24) | | 5 | 第78号住居跡 (第174图19) |
| | 3 | 第67号住居跡 (第158图26) | | 6 | 第82号住居跡 (第180图1) |
| | 4 | 第67号住居跡 (第158图27) | | 7 | 第82号住居跡 (第180图3) |
| | 5 | 第67号住居跡 (第159图30) | | 8 | 第82号住居跡 (第180图16) |
| | 6 | 第67号住居跡 (第159图31) | 图版74 | 1 | 第83号住居跡 (第182图1) |
| | 7 | 第67号住居跡 (第159图32) | | 2 | 第83号住居跡 (第182图29) |
| 图版69 | 1 | 第67号住居跡 (第159图34) | | 3 | 第83号住居跡 (第182图30) |
| | 2 | 第67号住居跡 (第159图37) | | 4 | 第85号住居跡 (第186图2) |
| | 3 | 第67号住居跡 (第159图39) | | 5 | 第87号住居跡 (第188图7) |
| | 4 | 第67号住居跡 (第159图38) | | 6 | 第87号住居跡 (第188图11) |
| | 5 | 第67号住居跡 (第159图42) | | 7 | 第88号住居跡 (第190图3) |
| 图版70 | 1 | 第67号住居跡 (第159图43) | 图版75 | 1 | 第88号住居跡 (第190图5) |
| | 2 | 第67号住居跡 (第159图44) | | 2 | 第88号住居跡 (第190图6) |
| | 3 | 第67号住居跡 (第159图40) | | 3 | 第88号住居跡 (第190图14) |
| | 4 | 第67号住居跡 (第160图47) | | 4 | 第88号住居跡 (第190图15) |
| | 5 | 第67号住居跡 (第160图48) | | 5 | 第88号住居跡 (第190图20) |
| 图版71 | 1 | 第69号住居跡 (第162图1) | | 6 | 第88号住居跡 (第190图21) |
| | 2 | 第69号住居跡 (第162图4) | 图版76 | 1 | 第88号住居跡 (第191图26) |
| | 3 | 第69号住居跡 (第162图5) | | 2 | 第88号住居跡 (第191图28) |
| | 4 | 第69号住居跡 (第162图7) | | 3 | 第88号住居跡 (第191图29) |
| | 5 | 第69号住居跡 (第162图9) | | 4 | 第89号住居跡 (第193图5) |
| | 6 | 第69号住居跡 (第162图10) | | 5 | 第89号住居跡 (第193图8) |
| | 7 | 第69号住居跡 (第162图13) | | 6 | 第89号住居跡 (第193图9) |
| | 8 | 第70号住居跡 (第164图1) | | 7 | 第89号住居跡 (第193图13) |
| | 9 | 第70号住居跡 (第164图2) | 图版77 | 1 | 第89号住居跡 (第193图17) |
| | 10 | 第70号住居跡 (第164图3) | | 2 | 第91号住居跡 (第196图2) |
| 图版72 | 1 | 第70号住居跡 (第164图4) | | 3 | 第91号住居跡 (第196图4) |
| | 2 | 第70号住居跡 (第164图6) | | 4 | 第96号住居跡 (第202图3) |
| | 3 | 第70号住居跡 (第164图7) | | 5 | 第96号住居跡 (第202图2) |
| | 4 | 第70号住居跡 (第164图12) | | 6 | 第96号住居跡 (第202图2) |
| | 5 | 第71号住居跡 (第166图9) | | 7 | 第96号住居跡 (第202图7) |
| | 6 | 第76号住居跡 (第171图1) | | 8 | 第96号住居跡 (第202图7) |
| | 7 | 第76号住居跡 (第171图2) | 图版78 | 1 | 第97号住居跡 (第205图9) |
| 图版73 | 1 | 第76号住居跡 (第171图7) | | 2 | 第97号住居跡 (第205图10) |

- | | | | | | |
|------|---|--------------------|------|----|---------------------|
| | 3 | 第97号住居跡 (第205図15) | | 5 | 第48号溝跡 (第233図11) |
| | 4 | 第97号住居跡 (第205図17) | | 6 | 第3号土壇 (第238図6) |
| | 5 | 第97号住居跡 (第205図19) | 図版85 | 1 | C-16グリッド (第257図1) |
| | 6 | 第97号住居跡 (第205図20) | | 2 | D-16グリッド (第257図5) |
| | 7 | 第97号住居跡 (第206図35) | | 3 | F-13グリッド (第257図25) |
| 図版79 | 1 | 第97号住居跡 (第206図43) | | 4 | G-11グリッド (第258図39) |
| | 2 | 第97号住居跡 (第206図44) | | 5 | G-12グリッド (第259図62) |
| | 3 | 第97号住居跡 (第207図48) | | 6 | G-12グリッド (第259図66) |
| | 4 | 第97号住居跡 (第207図53) | | 7 | G-12グリッド (第259図75) |
| 図版80 | 1 | 第100号住居跡 (第210図6) | | 8 | G-12グリッド (第259図82) |
| | 2 | 第100号住居跡 (第210図18) | 図版86 | 1 | H-10グリッド (第259図87) |
| | 3 | 第100号住居跡 (第210図19) | | 2 | H-10グリッド (第260図92) |
| | 4 | 第100号住居跡 (第210図19) | | 3 | H-10グリッド (第260図96) |
| | 5 | 第100号住居跡 (第211図21) | | 4 | H-11グリッド (第261図126) |
| 図版81 | 1 | 第100号住居跡 (第211図34) | | 5 | I-9グリッド (第262図142) |
| | 2 | 第100号住居跡 (第211図35) | | 6 | I-9グリッド (第262図147) |
| | 3 | 第100号住居跡 (第211図36) | | 7 | I-9グリッド (第262図152) |
| | 4 | 第100号住居跡 (第212図47) | 図版87 | 1 | I-9グリッド (第262図154) |
| | 5 | 第102号住居跡 (第215図1) | | 2 | I-9グリッド (第262図155) |
| | 6 | 第102号住居跡 (第215図2) | | 3 | I-9グリッド (第262図155) |
| | 7 | 第104号住居跡 (第218図1) | | 4 | J-8グリッド (第263図180) |
| 図版82 | 1 | 第104号住居跡 (第218図2) | | 5 | J-8グリッド (第263図181) |
| | 2 | 第104号住居跡 (第218図6) | | 6 | L-6グリッド (第264図213) |
| | 3 | 第104号住居跡 (第218図9) | | 7 | L-6グリッド (第264図213) |
| | 4 | 第104号住居跡 (第218図4) | | 8 | L-7グリッド (第264図214) |
| | 5 | 第104号住居跡 (第218図4) | | 9 | 表採 (第266図13) |
| | 6 | 第105号住居跡 (第220図1) | 図版88 | 1 | 第50号住居跡 (第107図7) |
| | 7 | 第105号住居跡 (第220図5) | | 2 | 第55号住居跡 (第130図5) |
| 図版83 | 1 | 第105号住居跡 (第220図8) | | 3 | 第56号住居跡 (第132図12) |
| | 2 | 第105号住居跡 (第220図11) | | 4 | 第59号住居跡 (第141図52) |
| | 3 | 第105号住居跡 (第220図9) | | 5 | 第61号住居跡 (第145図16) |
| | 4 | 第1号溝跡 (第225図12) | | 6 | 第66号住居跡 (第154図5) |
| | 5 | 第1号溝跡 (第226図42) | | 7 | 第67号住居跡 (第160図50) |
| 図版84 | 1 | 第1号溝跡 (第226図43) | | 8 | 第67号住居跡 (第160図51) |
| | 2 | 第48号溝跡 (第233図7) | | 9 | 第78号住居跡 (第174図24) |
| | 3 | 第48号溝跡 (第233図8) | | 10 | 第82号住居跡 (第180図22) |
| | 4 | 第48号溝跡 (第233図9) | | 11 | 第95号住居跡 (第200図25) |

- | | | | | | |
|------|----|---------------------|------|----|----------------------|
| | 12 | 第97号住居跡 (第207図55) | | 9 | 第78号住居跡 (第174図23) |
| | 13 | H-10グリッド (第261図122) | 図版92 | 1 | 第83号住居跡 (第183図32) |
| | 14 | M-5グリッド (第264図221) | | 2 | 第83号住居跡 (第183図33) |
| | 15 | 表採 (第266図16) | | 3 | 第10号土壌 (第238図13) |
| | 16 | 表採 (第266図17) | | 4 | F-12グリッド (第257図21) |
| 図版89 | 1 | 第25号住居跡 (第53図59) | | 5 | H-10グリッド (第261図121) |
| | 2 | F-12グリッド (第257図22) | | 6 | H-11グリッド (第261図131) |
| | 3 | 第7号住居跡 (第22図5) | | 7 | P-2グリッド (第265図244) |
| | 4 | 第16号住居跡 (第38図9) | | 8 | 表採 (第266図14) |
| | 5 | 第47号住居跡 (第100図99) | | 9 | 表採 (第266図15) |
| | 6 | 第49号住居跡 (第105図3) | 図版93 | 1 | 第8号住居跡 (第24図3~5) |
| | 7 | 第50号住居跡 (第107図8) | | 2 | 第61号住居跡 (第145図11~14) |
| | 8 | 第76号住居跡 (第171図21) | | 3 | 第62号住居跡 (第147図24・25) |
| | 9 | 第88号住居跡 (第191図35) | | 4 | 第29号住居跡 (第58図1) |
| 図版90 | 1 | 第25号住居跡 (第53図60) | | 5 | 第39号住居跡 (第75図9) |
| | 2 | 第25号住居跡 (第53図61) | | 6 | 第58号住居跡 (第137図43) |
| | 3 | 第25号住居跡 (第54図62) | | 7 | 第60号住居跡 (第143図11) |
| 図版91 | 1 | 第2号住居跡 (第13図2) | | 8 | 第16号住居跡 (第38図10) |
| | 2 | 第42号住居跡 (第84図23) | | 9 | 第88号住居跡 (第191図34) |
| | 3 | 第47号住居跡 (第100図100) | | 10 | F-13グリッド (第258図30) |
| | 4 | 第49号住居跡 (第105図4) | | 11 | H-11グリッド (第261図132) |
| | 5 | 第59号住居跡 (第141図51) | | 12 | J-8グリッド (第263図189) |
| | 6 | 第65号住居跡 (第151図17) | | 13 | J-8グリッド (第263図190) |
| | 7 | 第65号住居跡 (第152図18) | | 14 | M-5グリッド (第264図219) |
| | 8 | 第67号住居跡 (第160図49) | | 15 | M-5グリッド (第264図220) |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、近年の想定を超える集中豪雨による河川未改修区間や都市部での水害・土砂災害等を軽減し、安全安心に暮らせる県土を実現するため、河川改修や下水道雨水幹線、土砂災害防止施設などの整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本報告書に係る女堀川河川改修は、降雨時でも雨水を安全に流下させ水害防止を図るため、河道拡幅、護岸等が計画されたものである。

当該事業のうち本報告書に係る事業箇所での工事に先立ち、埼玉県本庄県土整備事務所長より、平成17年1月25日付け本整第1132号で埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて文化財保護課長（当時）あての照会があった。文化財保護課（当時）は平成17年1月27日～28日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成17年3月17日付け教文第1801号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称(No.)	種別	時代	所在地	員数
川越田遺跡 (No.54-275)	集落跡	古墳 時代	児玉町大字高 関地内	1

2 法手続

工事予定地内には上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第57条の3（平成17年4月1日以降は、文化財保護法第94条）の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱い

発掘調査が必要な範囲については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

また、一部範囲については、試掘による確認調査が必要となりますので、用地取得後に確認調査の実施について当課と別途協議してください。

埼玉県本庄県土整備事務所河川砂防課と文化財保護課（当時）・児玉町教育委員会（当時）は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

その後、発掘調査実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、埼玉県本庄県土整備事務所・文化財保護課（当時）の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第94第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県本庄県土整備事務所長から提出され、同条4項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、文化財保護法第92条1項の規定による発掘調査届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成17年12月16日付け教生文第4-755号

発掘調査届に対する指示通知：

平成17年12月16日付け教生文第2-87号

（生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

川越田遺跡の発掘調査は女堀川の河川改修事業に伴うもので、4,000m²を対象とし、第3次調査(平成17年度)・第4次調査(平成18年度)の2回に分けて実施した。

第3次調査は、平成17年11月21日から平成18年3月24日まで実施し、調査面積は2,286m²、第4次調査は、平成18年4月10日から6月30日まで実施し、調査面積は1,714m²である。

平成17年11月下旬より重機による表土除去及び危険防止の囲柵の敷設等の作業を開始し、引続いて発掘事務所の設置を行った。また、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。

重機による表土の除去の後、人力による遺構確認作業を行ったところ、古墳時代後期を主体とした竪穴住居跡・溝跡・土壌など多数の遺構を検出したため、直ちに精査を開始し、順次土層断面図・遺構平面図の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

平成18年度は4月10日より作業を開始した。前年度に引き続き、古墳時代後期の遺構の調査を行った後、5月初旬より下層の古墳時代前期の集落について確認作業及び精査を実施した。遺構は後期ほど密ではないが調査区全域から竪穴住居跡と溝跡が検出され、同様に図面・写真類による記録作業を行った。

遺構・遺物の調査を完了した後、6月30日に器材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、すべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書作成事業は、平成20年6月2日から平成21年3月24日、平成21年7月1日から平成22年3月24日、平成22年9月14日から平成23年2月28日まで、3年次をかけて22箇月間実施した。

出土遺物の整理作業は、まず水洗・注記作業を行い、その後、遺構単位に接合作業及び欠損箇所を石膏で補てんする復元作業を実施した。また、接合・復元作業が完了したもものから、順次実測用遺物や拓本用遺物を抽出した。実測作業は、平成20年8月より開始した。完形に近い遺物については、機械実測機で素図を作成して行った。破片遺物については、断面実測と拓本作業を行った。完成した実測図・断面図のトレース作業は10月から開始し、トレースを終了したもものから、遺構ごとに遺物図版の版組作業を行った。

遺構図面の整理作業は、遺物の作業に並行して行った。始めに各種図面を分類・整理した上で、それぞれの実測図の整合性をとって第二原図を作成した。遺構図面のトレース作業はパソコン上で行い、平成20年8月後半より開始した。第二原図をスキャナーで取り込み、専用ソフトを用いてトレース図を作成した。遺構図版の作製は平成21年10月より開始し、トレースした遺構図と土層説明等の入力データを組み合わせて版下を作成した。また、遺構・遺物を計測して観察表を作成した。

写真図版の編集は、平成22年10月から開始した。遺構写真は発掘調査時に撮影したものを使用し、遺物写真はスタジオで撮影した。報告書掲載用に選別した写真は画像処理ソフトでトリミング等を行い、パソコン上で割り付け・写植等を行って写真図版を完成させた。

平成22年11月から、完成した図版・表及び本文の割付作業と原稿執筆を開始し、12月下旬に印刷業者を決定して入稿した。また、遺物・図面類・写真等の記録類は分類・整理し、報告書との対照が可能な状態で収納作業を行った。

印刷原稿の校正は3回を行い、平成23年2月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼管理部長	保永清光	調査部長	今泉泰之
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員(調査第二担当)	劔持和夫
主 席	高橋義和	統括調査員	田中広明
		調 査 員	清水慎也

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	調査第二課長	細田 勝
総務課長	高橋義和	主 査	田中広明
		主 事	加藤隆則

平成20年度（報告書作成）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間孝志	整理第一課長	宮井英一
総務課長	松盛 孝	主 事	澤口和正

平成21年度（報告書作成）

理事長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	磯崎 一
総務部副部長	昼間孝志	整理第一課長	宮井英一
総務課長	田中雅人		

平成22年度（報告書作成）

理事長	藤野龍宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	昼間孝志
総務部副部長	金子直行	調査監兼整理第一課長	劔持和夫
総務課長	田中雅人	主 査	大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

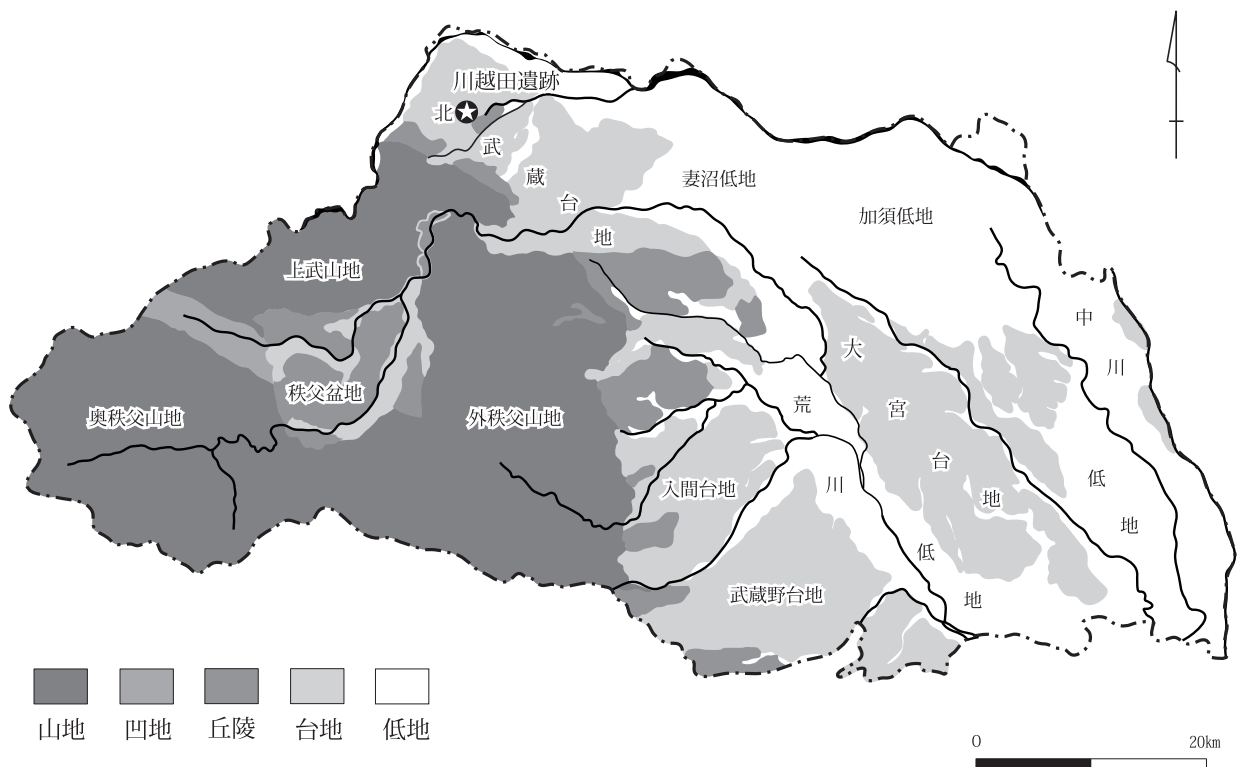
川越田遺跡は埼玉県北西部の本庄市児玉町大字高関に所在する、古墳時代前期から後期にかけて営まれた大規模な集落跡である。女堀川中流域の標高69mの自然堤防上に立地し、埼玉県を南北に縦断する関越自動車道本庄・児玉インターチェンジの南西方約400mに位置している。

本遺跡の所在する本庄市は、2006（平成18）年1月10日に児玉町と合併し、新たな本庄市として生まれ変わった。埼玉県の北の玄関とも呼ばれ、県北部の中心都市として躍進している。なお、本遺跡は旧児玉町の北部にあたる。

本庄市周辺の地形（第1・2図）は、北は利根川によって群馬県と境を接し、西は児玉丘陵を介して上武山地（秩父山地外縁）に連なる。本庄市域の大半が乗る台地は本庄台地と呼ばれ、神流川によって形成された洪積扇状地性地形（神流川扇

状地）を示す。本庄台地は神川町池田付近が扇頂部にあたり標高約110m、北西方向に緩やかに傾斜し、本庄市諏訪町で標高約50mとなり、扇端部は本庄段丘崖を形作り、妻沼低地に移行する。

本庄台地の南方には独立丘陵（残丘）として生野山丘陵・大久保山（浅見山）丘陵があり、やや南東に離れる山崎山丘陵とともに「大和三山」にも喩えられる。生野山丘陵・大久保山丘陵の南側には小山川（身馴川）が東流し、西側から北側にかけては、川越田遺跡の所在する女堀川が本庄市街地の南端部をかすめるように流れる。さらに、山崎山丘陵の西側には志戸川、東側には藤治川が北流し、これらの河川は本庄市と深谷市（旧岡部町）の境界にあたる深谷市（旧岡部町）大字岡付近で合流して小山川となり、さらに下流の深谷市大字高島付近で利根川本流に合流する。

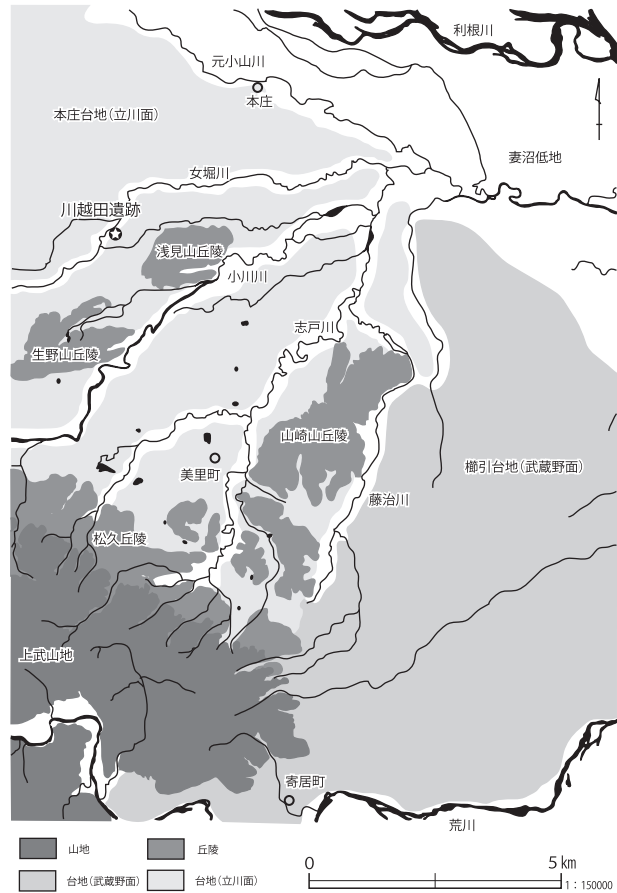


第1図 埼玉県の地形

妻沼低地は利根川や小山川の乱流によって形成された沖積低地で、南は本庄台地と櫛挽台地に画され、北は利根川に及んでいる。概ね利根川をはじめとする河川の流向に沿うように自然堤防と後背湿地が発達している。

本遺跡周辺の地形は、先述した神流川によって形成された神流川扇状地の扇中央部東端に位置し、南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜している。神流川扇状地の東端は、南側の上武山地と児玉丘陵の境にあたる八王子-高崎構造線の断層崖付近に源を発する女堀川や金鑽川が流れており、これらの開析による比較的広い沖積低地が河川の両側に開け、数多くの遺跡が分布している。

沖積低地の西側には児玉丘陵下から広がる低台地の本庄台地が、東側には児玉丘陵から河川の開析作用によって分断された生野山・鷲山・大久保山の残丘が列点状に連なっている。この沖積低地は、中央を流れる女堀川を中心にして、西側を本庄台地に、東側を残丘列によって画されるように帯状に展開している。



第2図 周辺の地形

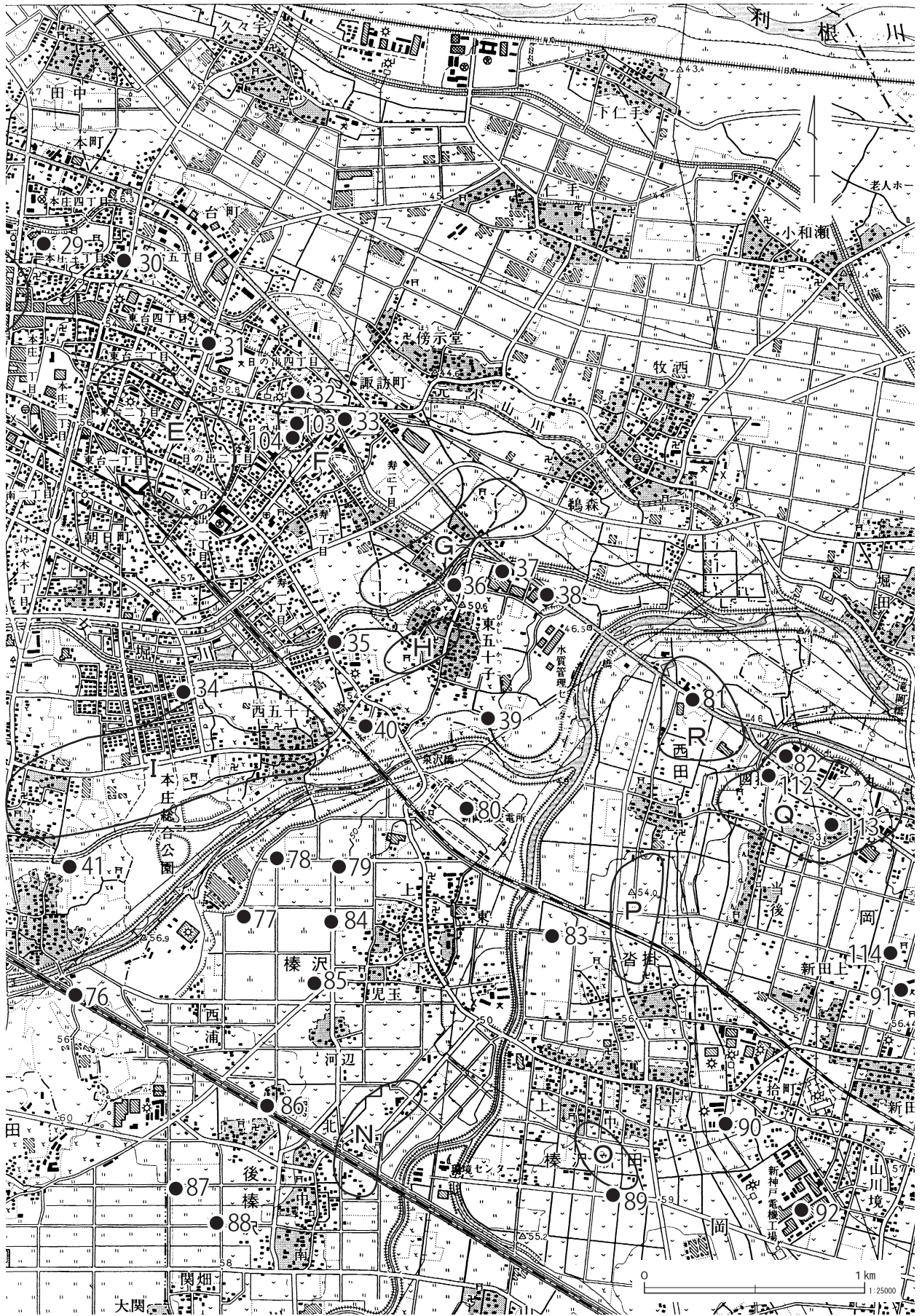
2. 歴史的環境

ここでは川越田遺跡に関連する周辺の主要遺跡について、本庄市域を中心に概略を述べることにしたい(第3・4図)。

旧石器時代の遺跡は、埼玉県北部地域においては、大里ローム層の堆積が確認されている区域に散見されるが、現状では表面採集や古墳時代の竪穴住居跡等の調査中に偶然、旧石器時代の石器が発見されるような場合が多く、まだまだ旧石器時代の石器の発見例は少ない。唯一、旧石器時代の本格的な調査例として近隣に位置する大久保山丘陵上の浅見山I遺跡で武蔵野台地のIV層上部、「砂川期」に相当する黒曜石製石器集中部1箇所が調査されている。本庄台地上でも上里町寄りの石神境遺跡、市域東端部付近の西五十子田端屋敷遺跡の黒曜石製ナイフ形石器、社具路遺跡で頁岩製ナ

イフ形石器、小山川右岸の古川端遺跡で細石刃・彫器・剝片、市街地北西端部の三杓山古墳周辺で尖頭器・舟底形石器、市街地西南部の柏1丁目で尖頭器等が発見されているにすぎない。

縄文時代草創期～早期の遺跡の分布は市内では大久保山丘陵周辺に限られる。宥勝寺北裏遺跡では爪形文・多縄文・撚糸文・押型文・沈線文・条痕文の各時期、大久保山A遺跡では爪形文・撚糸文・押型文・沈線文の各時期の土器が出土している。また草創期特有の石器である有舌尖頭器は大久保山A遺跡や女堀川左岸の笠ヶ谷戸遺跡、西方の児玉工業団地内の将監塚・古井戸遺跡で出土している。周辺では深谷市北坂遺跡から隆線文系土器が、藤治川流域に位置する西谷・水久保遺跡から爪形文系・多縄文系土器が出土している。



周辺の主要遺跡

1	川越田遺跡	28	笠ヶ谷戸遺跡	55	藤塚遺跡	82	四十坂遺跡	108	元富古墳
2	今井川越田遺跡	29	本庄城址遺跡	56	柿島遺跡	83	新井遺跡	109	前山2号墳
3	梅沢遺跡	30	天神林遺跡	57	左口遺跡	84	西浦北遺跡	110	前山1号墳
4	東牧西分遺跡	31	薬師堂遺跡	58	中畑遺跡	85	宮西遺跡	111	東谷古墳
5	後張遺跡	32	御堂坂遺跡	59	雷電下遺跡	86	東光寺裏遺跡	112	四十塚古墳
6	下野堂遺跡	33	諏訪新田遺跡	60	飯玉東遺跡	87	石蒔遺跡	113	寅稻荷古墳
7	小島本伝遺跡	34	西五十子田端遺跡	61	山根遺跡	88	地神祇遺跡	114	御手長山古墳
8	元屋敷遺跡	35	西五十子大塚遺跡	62	大久保山遺跡	89	地福院遺跡		一古墳群一
9	窪前遺跡	36	東五十子大塚遺跡	63	宍勝寺北裏遺跡	90	下道南遺跡	A	本郷古墳群
10	愛宕遺跡	37	赤坂埴輪窯跡	64	東谷遺跡	91	熊野遺跡	B	生野山古墳群
11	本郷東遺跡	38	東五十子遺跡	65	向田遺跡	92	西龍ヶ谷戸遺跡	C	旭・小島古墳群
12	八幡太神南遺跡	39	東五十子田端遺跡	66	村後遺跡		一古墳一	D	北原古墳群
13	熊野太神南遺跡	40	西五十子台遺跡	67	十二町遺跡	93	銚子塚古墳	E	塚合古墳群
14	今井遺跡群	41	東本庄遺跡	68	後田遺跡	94	金鑽神社古墳	F	御堂坂古墳群
15	久城前遺跡	42	久下東遺跡	69	砂田遺跡	95	鷲山古墳	G	鶴森古墳群
16	今井諏訪遺跡	43	七色塚遺跡	70	共和小学校校庭遺跡	96	八幡山古墳	H	東五十子古墳群
17	西富田新田遺跡	44	元富遺跡	71	蛭川坊田遺跡	97	三奈山古墳	I	西五十子古墳群
18	弥籐次遺跡	45	下田遺跡	72	南街道遺跡	98	前の山古墳	J	東富田古墳群
19	夏目西遺跡	46	観音塚遺跡	73	吉田林割山遺跡	99	蚕影山古墳	K	前山古墳群
20	西富田遺跡	47	四方田遺跡	74	向田A・B遺跡	100	小島御手長山古墳	L	浅見山古墳群
21	二本松遺跡	48	九反田遺跡	75	宮ヶ谷戸遺跡	101	山の神古墳	M	塚本山古墳群
22	薬師遺跡	49	西富田前田遺跡	76	古川端遺跡	102	下野堂二子塚古墳	N	後榛沢古墳群
23	夏目遺跡	50	地神遺跡	77	大寄B遺跡	103	御堂坂1号墳	O	中南古墳群
24	薬師元屋舗遺跡	51	塔頭遺跡	78	大寄遺跡	104	御堂坂2号墳	P	水窪古墳群
25	社具路遺跡	52	将監塚・古井戸遺跡	79	稲荷前遺跡	105	公卿塚古墳	Q	四十塚古墳群
26	西富田本郷遺跡	53	将監塚東遺跡	80	六反田遺跡	106	元富東古墳	R	西田古墳群
27	雌濠遺跡	54	堀向遺跡	81	原ヶ谷戸遺跡	107	熊野十二社古墳		

縄文時代前期の遺跡も大久保山丘陵を中心に分布する。大久保山A遺跡では黒浜式・諸磯b式土器、宍勝寺北裏遺跡、大久保山遺跡B2道路地区で黒浜式土器が出土している。大久保山丘陵の東側、栗崎地区の西谷遺跡でも黒浜式土器が、市街地北西部の御手長山古墳周辺でも黒浜式・諸磯式土器の出土が知られる。隣接する深谷市宮西遺跡では県北部では類例の少ない関山式期の集落跡が調査されている。また深谷市四十坂遺跡では黒浜式期、東光寺裏遺跡では諸磯b式期の集落跡が調査されている。

中期になると丘陵下の台地や沖積地内の微高地にも本格的な集落が形成されるようになる。特に児玉工業団地造成事業に伴い調査された将監塚・古井戸遺跡は勝坂～加曾利EIV式に継続する大規模な環状集落を二つ形成していたことが判明した。将監塚遺跡では住居跡114軒、土壙711基等、古井戸遺跡では住居跡154軒、土壙953基等が調査された。また、この遺跡の南方に所在する平塚遺跡、中下田遺跡、新宮遺跡においても加曾利E期の集落の存在が確認されている。西富田地区では四方田条里遺跡の範囲に所在する西富田前田遺跡

から加曾利EIII式土器を出土する住居跡1軒、土壙1基が検出されている。また大久保山丘陵西側微高地上の飯玉東遺跡にも加曾利E式土器を出土する土壙1基が検出されており、雷電下遺跡からも加曾利EIII式～EIV式土器が少量出土している。大久保山遺跡B2道路地区にも縄文時代中期の土器が少量出土する地点がある。その他に市域北端の段丘崖付近の東五十子城跡遺跡、女堀川右岸微高地上の公卿塚古墳、大久保山A遺跡などからも縄文時代中期後半の土器が採集されている。また、深谷市域では水窪遺跡から勝坂式期～加曾利E I式期、菅原遺跡から加曾利EIII式期の環状集落が調査されている。

縄文時代後・晩期の遺跡は中期に比べ極端に減少する。生野山丘陵西側の低台地に立地する女池遺跡では称名寺II式～堀ノ内II式の敷石住居を含む住居跡5軒、土壙16基が調査されている。古川端遺跡では堀之内II式・安行III a式を中心に後・晩期の土器が出土し、女堀川左岸の雌濠遺跡でも加曾利BII式土器が採集されている。宍勝寺北裏遺跡、大久保山A遺跡、公卿塚古墳からも称名寺式～堀之内II式の土器が出土し、市域北端段丘崖

付近の諏訪新田遺跡、東五十子城跡遺跡にも後・晩期の土器が出土している。また深谷市原ヶ谷戸遺跡では安行Ⅲa式期の土器群を中心とする遺物包含層が調査されている。

弥生時代の遺跡の分布もあまり多くない。児玉郡域周辺ではほとんどが丘陵上に立地し、沖積地の微高地や台地縁辺部における遺跡の分布は散見される程度である。大久保山丘陵内の宥勝寺北裏遺跡、大久保山A遺跡では弥生時代中期～後期の土器が採集され、大久保山遺跡ⅢB地区・ⅣA地区には後期～終末期の住居跡がそれぞれ2軒と4軒調査されている。また市街地北西端の下野堂遺跡からは中期の土器が採集されているほか、夏目遺跡では中期の土壌から石鍬と筒形土器や甕形土器が出土した。隣接する美里町如来堂C遺跡や深谷市四十坂遺跡からは東海地方の水神平式の影響をもつ土器群や縄文時代晩期最終末の大洞A'式系の土器群が検出され、弥生時代前期末に遡る資料が出土している。また四十坂遺跡では中期前半、岩櫃山式段階の再葬墓が検出されている。

古墳時代に入ると市域では女堀川周辺の自然堤防・微高地上や、大久保山丘陵周囲の微高地上に大規模な集落が形成されるようになる。西富田地区周辺では社具路遺跡、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジ付近では川越田・後張遺跡、大久保山丘陵北側の下田・七色塚・久下東遺跡、同じく丘陵西側の雷電下遺跡など枚挙にいとまがない。これらの遺跡群からは、畿内系の小型精製土器群・叩き甕、山陰系の鼓形器台、東海系のパレス壺・S字状口縁台付甕、北陸西部系の有段口縁甕、北陸東部系の千種甕等の外来系土器を伴う住居跡や方形周溝墓などの遺構が数多く検出されており、遠距離間交流の結節点として注目される。

さらに中期から後期にかけては、大集落が西富田地区周辺で展開するようになり、二本松・夏目・社具路・今井諏訪・西富田・西富田新田・西富田本郷・薬師・薬師元屋舗（南大通り線内）・雌濠・

笠ヶ谷戸等の数多くの遺跡が集落形成のピークを迎えるようになる。また、この時期に住居内にカマドが取り入れられるようになる。県下全域を見ても初現期のカマド検出例がこの地域に集中している点は注目に値する。その背景に畿内地域からの渡来人の移動を想定する見解もある。

この時期に集落形成が活況を呈してくるのは、北の市街地北端の段丘崖付近（東五十子城跡・諏訪新田・薬師堂・小島本伝・御堂坂の諸遺跡）や南の大久保山丘陵の東側微高地（東谷遺跡）、南東の小山川両岸付近（古川端遺跡）、西の今井地区の女堀川流域の微高地（今井川越田・地神・塔頭遺跡）でも同様である。これらの集落遺跡は概ね7世紀半ばを前後する時期に廃絶していくものが多く、薬師元屋舗遺跡、夏目遺跡、下田遺跡、七色塚遺跡、古川端遺跡等の長期間継続型集落のような少数の例外を除いて、集落の占地を大幅に変更するような社会的変動があったことが指摘されている。おそらく、低地内の条里制施工のために計画的な集落移動を伴う地域社会の再編が行われたことを物語っているであろう。

6世紀後半あるいは7世紀代以降に集落形成が始まる遺跡は、本庄市域にはさほど多くはないが、市街地北西部の石神境遺跡、西富田地区の薬師遺跡、大久保山丘陵の大久保山遺跡、今井地区から児玉工業団地にかけての区域の立野南遺跡、八幡太神南遺跡、熊野太神南遺跡、今井遺跡群G地点や、将監塚・古井戸遺跡等の遺跡は、薬師遺跡の6世紀中頃を除くと、7世紀中頃から後半にかけて集落を形成し始め、律令期集落として成立する。将監塚・古井戸遺跡では9世紀初頭前後の時期と考えられる官衙的な掘立柱建物跡群を伴う区域が確認されており、「計画村落」的な位置づけが可能であろう。市街地周辺では奈良・平安時代の集落跡の調査は進展していないが、薬師元屋舗遺跡から出土した石製紡錘車に「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」と刻字されており、この地域が

児玉郡草田郷に含まれていたことが有力視されている。

深谷市西部の榛沢地区周辺には古墳時代から律令期の集落が多数存在している。代表的な古墳時代の遺跡としては、原ヶ谷戸遺跡、水窪遺跡、大寄B遺跡、石蒔A遺跡、地神祇遺跡などが挙げられる。これらの集落の多くは古墳時代を中心に形成され、その後は廃絶するが、六反田遺跡、大寄遺跡、宮西遺跡などは古墳時代前期以降、小断絶期を挟みつつも古墳時代中・後期、奈良・平安時代まで集落が継続する長期間継続型集落である。

律令期にはJR岡部駅周辺の岡地区に大規模な集落が形成される。熊野遺跡をはじめ、内出遺跡、白山遺跡、上宿遺跡、中宿遺跡などが調査されている。その一角には複弁八葉軒丸瓦を出土し、8世紀第2四半期に創建されたと推定される岡廃寺跡も存在する。熊野遺跡では大規模な掘立柱建物跡群や畿内産土師器、中宿遺跡からは整然と並んだ倉庫群（正倉院）が発見されており、古代榛沢郡の郡家と正倉院、寺跡がセットとなり存在していたことが明らかにされている。

ところで、本庄市域は数多くの古墳が確認されており、市街地北西部から上里町域にかけて分布する旭・小島古墳群、大久保山丘陵南斜面の塚本山古墳群等は、古墳の分布密度がかなり高い群集墳として著名である。川越田遺跡周辺の塚本山古墳群は総数200基を越す大規模な群集墳で、模様積横穴式石室を埋葬施設にもつ後・終末期古墳が主体である。また、近年の本庄市教育委員会の調査によって旭・小島古墳群や市域東端部の東五十子古墳群、西五十子古墳群などの初期群集墳の具相が明らかにされつつある。この他にも鶴森古墳群、塚合古墳群、北原古墳群、御堂坂古墳群、東富田古墳群、浅見山古墳群等々が所在する。

前期古墳に位置づけられるものは多くないが、川越田遺跡の南約1kmの大久保山丘陵の最西端部にあたる鷺山残丘の頂部に全長60mの前方後方

墳である鷺山古墳が知られる。周溝の一部が調査され、口縁部に円形の透孔をもつ二重口縁壺や手焙形土器等が出土している。

この時期には弥生時代以来の方形周溝墓が盛んに造られており、児玉郡域のほとんどの地域では古墳の築造よりも方形周溝墓の築造の方が一般的である。本庄市域地周辺では、旭・小島古墳群の一角をなす下野堂遺跡において、方形周溝墓、円形周溝墓、方墳、円墳等が検出されている。このうち10号墓からは碧玉製石釧が出土しており、注目される。近隣に位置する一辺25mの方墳、万年寺つつじ山古墳からは刀子、鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。また、大久保山丘陵南縁に展開する塚本山古墳群では、4世紀代に属する方形周溝墓が前方後方形を含めて9基確認されている。その他にも今井地区の諏訪遺跡や大久保山丘陵上の浅見山I遺跡、宥勝寺北裏遺跡、大久保山丘陵北側の飯玉東遺跡や大久保山丘陵北東側低地部の北堀新田前遺跡等で前方後方形を含む方形周溝墓が調査されている。さらに、深谷市榛沢地区の石蒔B遺跡では前方後方形を含む方形周溝墓12基、原ヶ谷戸遺跡では方形周溝墓5基、円形周溝墓1基、四十塚遺跡では方形周溝墓5基、円形周溝墓1基がそれぞれ調査されている。

児玉地域における最古の前方後円墳としては前期末の4世紀後半に大久保山丘陵東部の前山古墳群の北堀前山1号墳（全長70m）が築造され、それに後続して粘土槨を主体部とする方墳の北堀前山2号墳が5世紀初頭に築造される。また、女堀川左岸の微高地の東富田古墳群に属する公卿塚古墳は最近の調査で径約60m、造出の長さ約5mの造出し付き円墳であることが明らかにされた。滑石製模造品や格子叩き目の円筒埴輪片を数多く出土し、5世紀半頃の時期が想定されている。同じ格子叩き目埴輪をもつ本庄市金鑽神社古墳（円墳：68m）、生野山將軍塚古墳（円墳：60m）などの大型円墳が相次いで築造されており、中期後半

から後期にかけての集落の広範な出現を理解する上で重要視される。

本庄市街地の古墳にも旭・小島古墳群内の三空山古墳(円墳：69m)、万年寺八幡山古墳(円墳：約40m)のような横穴式石室導入以前の大型円墳がある。これらは時期決定の材料がやや不足しているが、5世紀代の築造が想定される。また、下野堂二子塚古墳は全長55mの前方後円墳と想定されているが、墳丘が現存せず、築造時期の詳細については不明である。

周辺の深谷市域では四十塚古墳が注目される。横矧板鋌留短甲や鈴付楕円形鏡板付轡などの馬具を伴い5世紀後葉～末葉の築造と考えられる。また、美里町では長坂聖天塚古墳(直径60m)と川輪聖天塚古墳(直径40m)が、志戸川流域における首長墓(円墳)である。前者からは方格規矩鏡、獸首鏡、後者からは壺形埴輪等が出土し、5世紀前半代の築造と考えられる。その後、首長墓は野焼き焼成のB種ヨコハケ円筒埴輪(Ⅲ期)をもつ円墳の志渡川古墳へと継続する。

6世紀以降は市域各所で古墳築造が相次ぐ。旭・小島古墳群内では前の山古墳や御手長山古墳が当該期に位置づけられる。御手長山古墳は直径約50mの大型円墳で、角閃石安山岩削石を用いた胴張横穴式石室を埋葬施設とする。6世紀後半から7世紀前半を中心に榛名山の噴火による角閃石安山岩を使用した横穴式石室が本庄台地扇端部の旭・小島古墳群や塚合古墳群を中心に分布しており、結晶片岩河原石を主体とする模様積石室とは対照的な分布域を形成している。

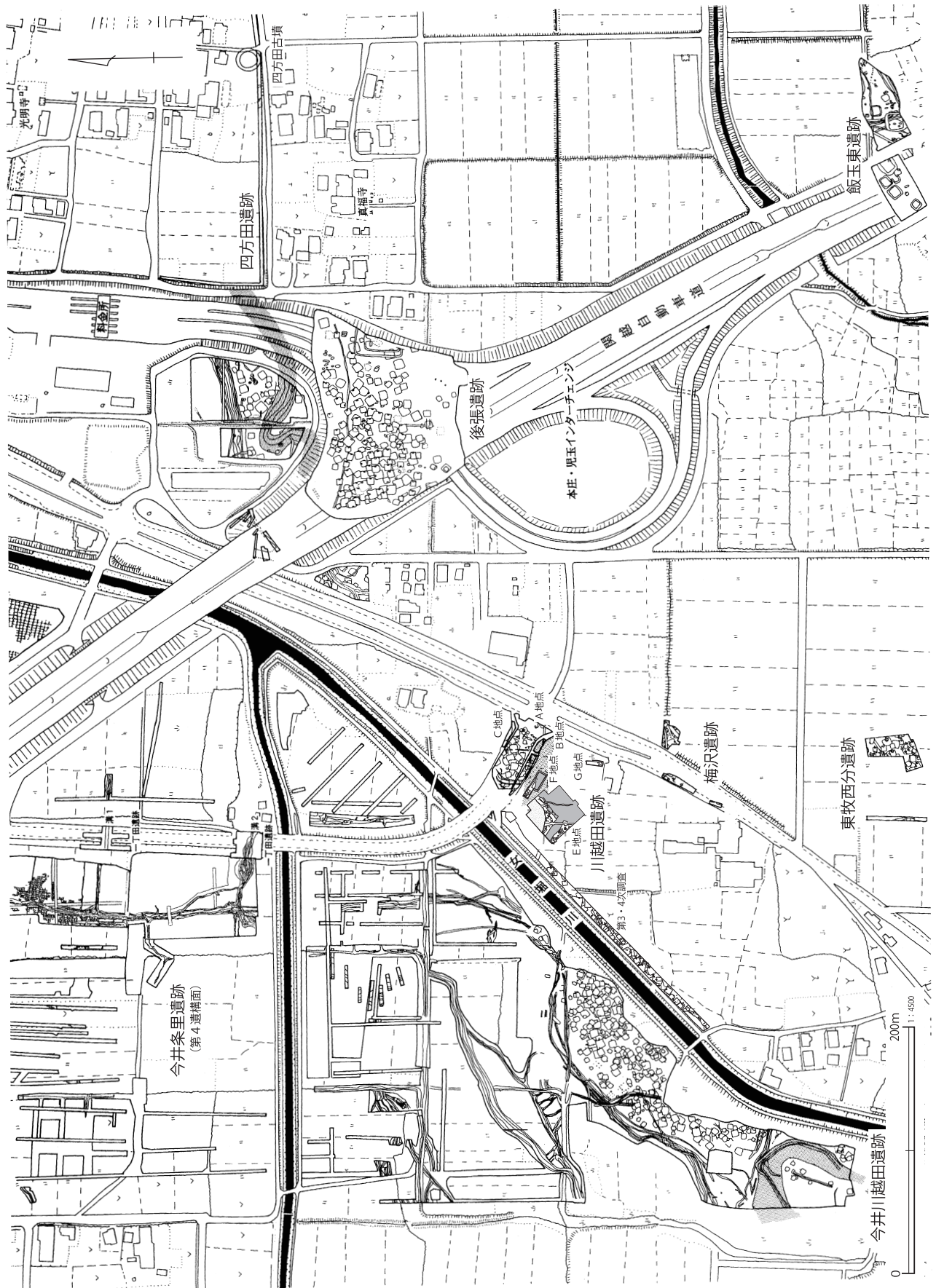
深谷市榛沢地区では、四十塚古墳以降の有力墳として、6世紀後半の全長51mの前方後円墳である寅稻荷塚古墳が築造される。その後、小規模前方後円墳のお手長山古墳(全長49.5m)、内出八幡山古墳(円墳：33m)、愛宕山古墳(方墳：37m)が6世紀後半から7世紀にかけて継続的に築造されている。

古代後期の9世紀後半以降は丘陵・台地上に占地していた拠点集落が縮小・解体し、周辺の沖積地に小規模集落を数多く派生するようになる。将監塚・古井戸遺跡も10世紀前半でほぼ終息し、中下田遺跡、塚畠遺跡、柿島遺跡、左口遺跡などの小規模集落を派生する。大久保山丘陵付近でも丘陵下の微高地に占地する雷電下遺跡、根田遺跡などに集落の主体が移行する。一方で大久保山遺跡や深谷市大寄遺跡、宮西遺跡、美里町向田遺跡などでは10世紀後半以降の内黒埴や羽釜を伴う集落が展開することが知られており、中世への胎動を示す資料として注目される。

最近の発掘調査において、古墳時代から奈良・平安時代の水田遺構や溝跡が、今井条里遺跡、児玉条里遺跡、将監塚・古井戸遺跡、八幡太神南遺跡、熊野太神南遺跡、往来北遺跡、真下境東遺跡、堀向遺跡、下田遺跡、諏訪遺跡等で検出されており、古代の水利と農業経営を考える重要な手掛かりを提供している。

中世の本庄市は武蔵七党の一つ、児玉党の本貫地であり、活躍する舞台となる。児玉党は多数の氏族に分かれたことが知られている。将監塚・古井戸遺跡は児玉党真下氏関連、今井遺跡群B地点及び北郭遺跡は今井氏館跡の一部、また真鏡寺後遺跡は児玉党塩屋氏に関連する館跡、西富田本郷遺跡は児玉党本宗家「庄氏」に関わる富田氏の館との説がある。中世寺院や墳墓としては、大久保山遺跡、東谷中世墳墓群、上里町大光寺裏遺跡、美里町広木上宿遺跡などがある。

戦国期の城跡としては東五十子遺跡が調査されている。15世紀後半、古河公方と関東管領上杉氏との間で繰り返された3度の攻防戦、五十子陣に関わる遺跡である。溝跡、方形竪穴、土壇などが多数発見され、大半が15世紀代の所産で、五十子陣の年代に合致する。小山川を隔てて対岸に位置する深谷市六反田遺跡からも同時期の遺物が出土しており、有機的な関連が窺われる。



第4図 川越田遺跡と周辺の遺跡（恋河内2005の第5図をもとに作成）

III 遺跡の概要

川越田遺跡は、女堀川中流域の自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落である。JR高崎線本庄駅の南西約3km、JR八高線児玉駅の北東約3.5kmに位置する。今回の調査は女堀川河川改修工事に伴い平成17・18年にかけて実施した。女堀川に架かる井呑坊橋から躍進橋の間の右岸堤防沿いの長さ約240m、幅約7mの狭長な調査区である。発掘調査の結果、二面の遺構面が確認された。上層は古代から中・近世の遺構確認面、下層は古墳時代の遺構確認面である。

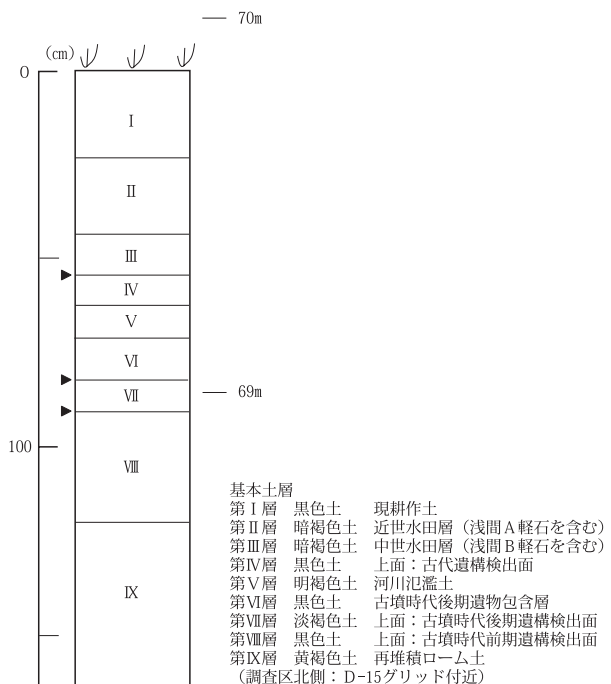
上層遺構確認面からは、古代から中・近世の溝跡46条、河川跡1条が検出された(第9図)。溝跡は条里型地割の坪線と同じ方向を採るものや、畝跡と推定される小規模な溝跡がある。河川跡は近世以降における旧女堀川の流路跡である。

下層遺構確認面では、調査区のほぼ全域に古墳時代前期から後期の住居跡が密集し、住居跡103軒、溝跡13条、土壇11基、ピット547基が検出された(第10図)。調査区の南西端から北側まで住居の切れ目がほとんどなく、地山の見えない状態であった。こうした遺構の密集度の高さは、女堀川中流域の自然堤防上に立地する古墳時代集落の一般的な在り方を示している。

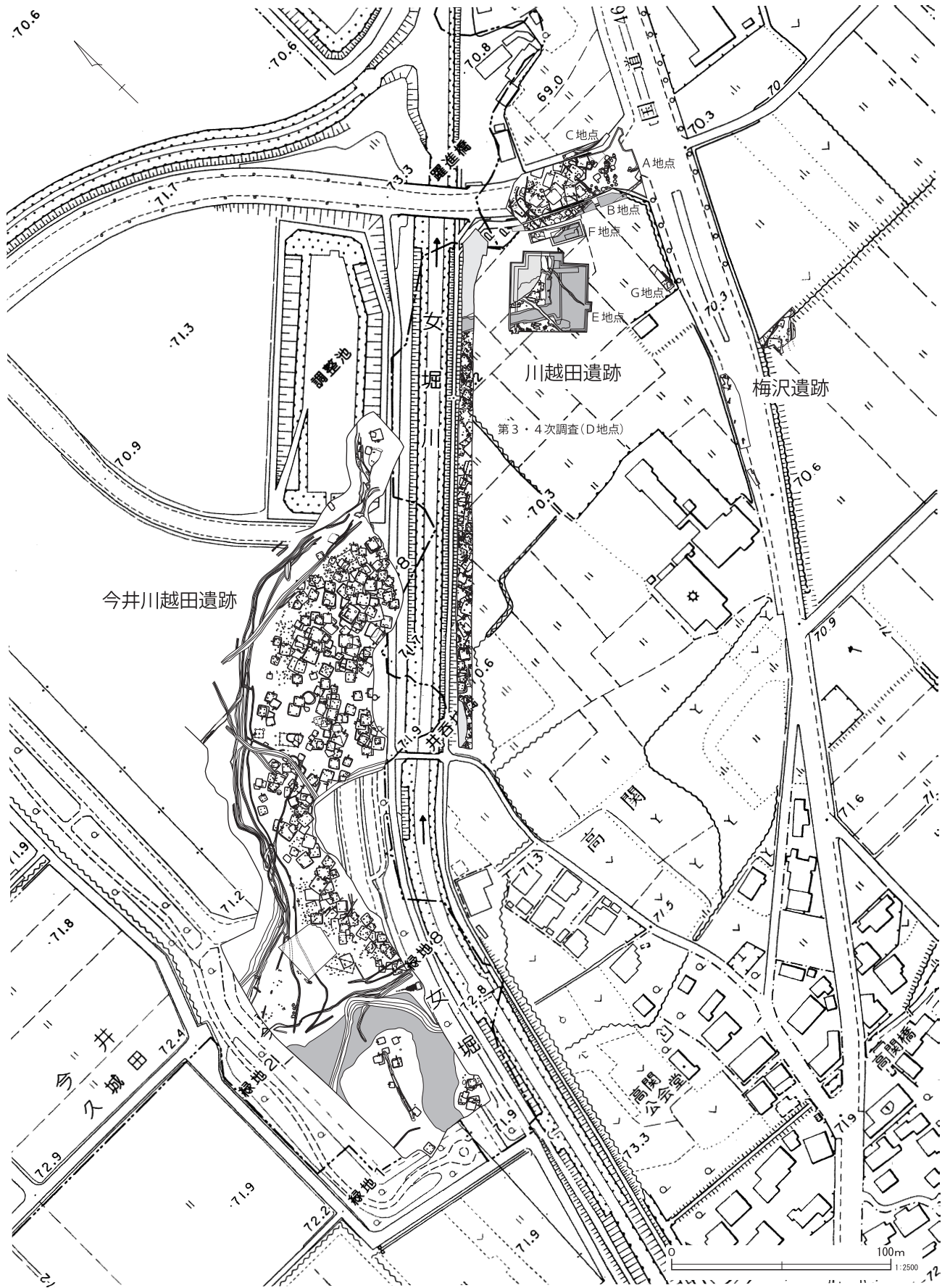
川越田遺跡の発掘調査は、昭和56・57年に当事業団が実施したA地点の調査を端緒として、平成4・5年に児玉町遺跡調査会が調査したB・C地点、平成17・18年に今回報告の第3・4次調査(D地点)、平成18年に本庄市教育委員会が調査したE～G地点の合計7地点の調査が実施されている(第6・7図)。これまでの調査によって検出された竪穴住居跡の総数は、153軒を数える。その内訳は、前期32軒、中期9軒、後期97軒、不明15軒である。時期によって住居跡の数に多寡はあるものの、古墳時代を通じてほぼ継続的に営まれた、極めて安定性の高い集落であることを物語っている。

周辺の同一自然堤防上には、北東約350mに後張遺跡が、南約100mに梅沢遺跡があり、同一遺跡を構成するものと考えられている。また現女堀川の対岸にも古墳時代から平安時代の住居跡が328軒検出された大規模集落の今井川越田遺跡が所在している(第4図)。

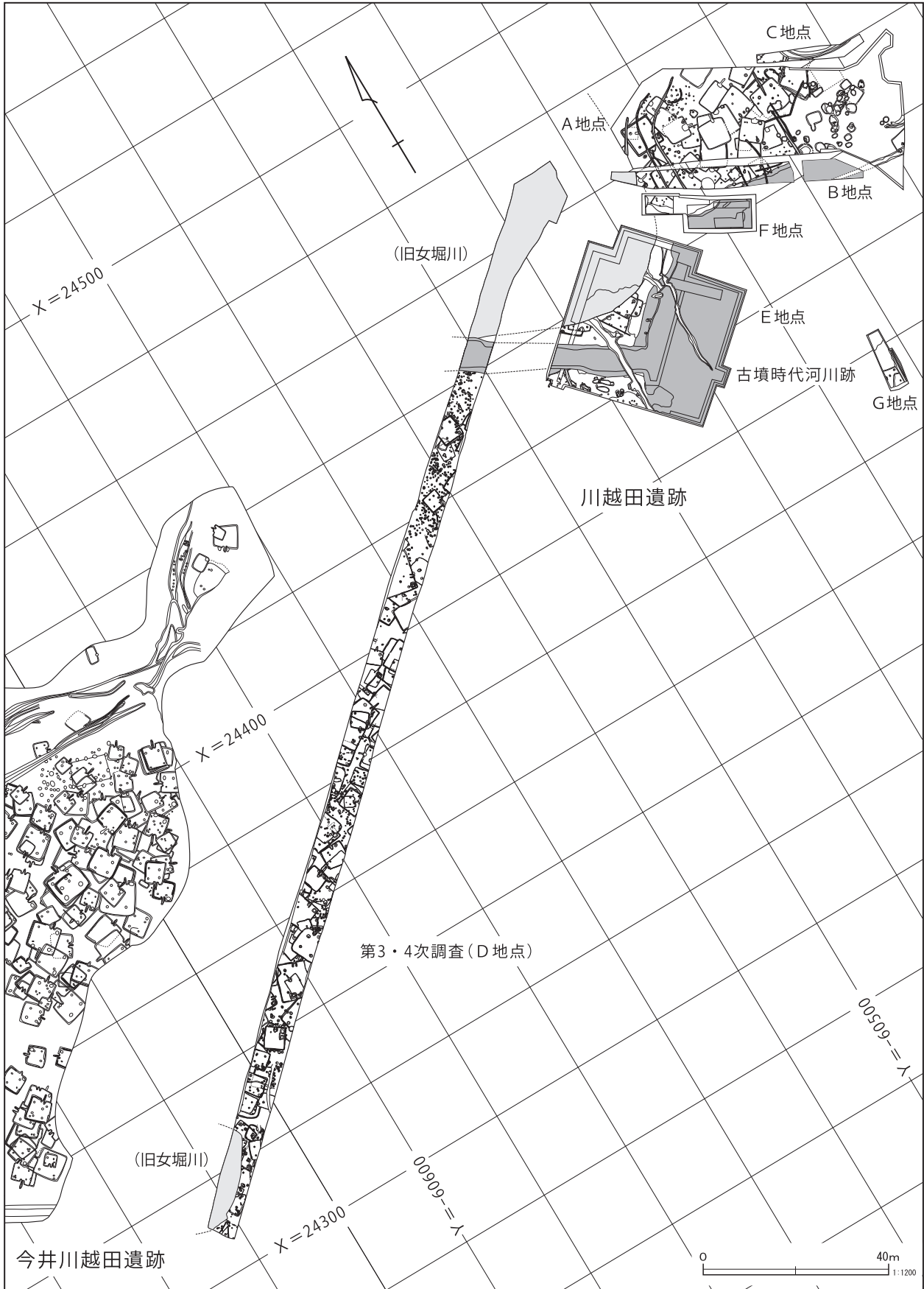
これらの近接する遺跡群がどのような集落景観を構成していたのか、当時の様相を復元することは難しいが、今井川越田遺跡の南西端で検出された古墳時代の旧河道が大きく蛇行しながら北東方向に流れを変え、川越田遺跡と梅沢遺跡の間を貫流し、B・E地点で検出された旧河道に繋がっていたものと仮定するならば、これらの遺跡群が同一河川の左岸自然堤防上に大きく展開した一連の遺跡群であった可能性が考えられる。しかし、現在川越田遺跡と今井川越田遺跡の間を隔てる女堀川は、河川改修以前には大きく蛇行しながら北東方向に流れていたことが現地地形や迅速図から読み取ることができる。つまり、遅くとも近世には現



第5図 基本層序



第6図 川越田遺跡周辺地形図



第7図 川越田遺跡調査区位置図

在の女堀川に近い河道が形成されていた可能性が強い。現状では、中世あるいは古代に遡って自然堤防を分断するような人工的な用水路が開削されたものであるのか、古墳時代にも二つの遺跡を隔てるような小河川や埋没谷が存在していたのか、明確にすることは難しい。

川越田遺跡は、女堀川中流域の古墳時代前期の遺跡の中でも、畿内系の小型精製土器群、叩き甕、東海西部系のパレス壺、S字状口縁台付甕、北陸東部系の千種甕など外来系土器を主体的に出土する遺跡として知られていた。今回の調査においても古墳時代前期の住居跡からは数多くの外来系土器が出土している。前期の住居跡は前期後半に位置づけられ、大量の土器が一括廃棄されていた第51号住居跡や大型有段口縁壺を出土した第100号住居跡を中心に散在した在り方を示す。

中期の住居跡は4軒と少なく、調査区中央部から南側にかけて分散的に存在し、カマドの導入期にあたる。

後期の住居跡は5世紀末葉から6世紀初頭に一度ピークを迎えた後、6世紀後半から7世紀初頭にかけて最盛期を迎え、7世紀中葉には住居跡が激減し、終焉を迎える。住居跡は一辺5～6mの大型、4m前後の中型、3m以下の小型の3タイプが認められ、後期前半の一辺8mを越す3基の大型住居跡(第42・96・97号住居跡)が傑出した存在である。また、第25号住居跡や第67号住居跡ではカマド周辺の床面と貯蔵穴から多数の土器が出土し、土師器坏・鉢・甕・甔等が主体を占めている。

カマドの導入は、後張遺跡よりもやや遅れたようであるが、導入以後は急速に普及・定着した。6世紀前半までは高坏や鉢等を逆さに置いた転用支脚が多く用いられているのに対し、6世紀後半以降は柱状支脚や鉢形支脚の土製専用支脚、棒状礫を使用した礫支脚へと変遷する。

土器以外では、刀子、鉄鏃、両頭金具等の鉄製

品や砥石等が出土した。漁撈に関わる土錘は11軒から出土しているが、一軒あたりの点数は1～4点と少ない。石製品では滑石製白玉が11軒から出土している。6世紀後半以降に出土例が増え、直径1cm以上の大型品が目立つ。紡錘車は石製のものが3点、土器片を再利用したものが1点ある。このうち石製紡錘車には鋸歯文が線刻されており注目される。

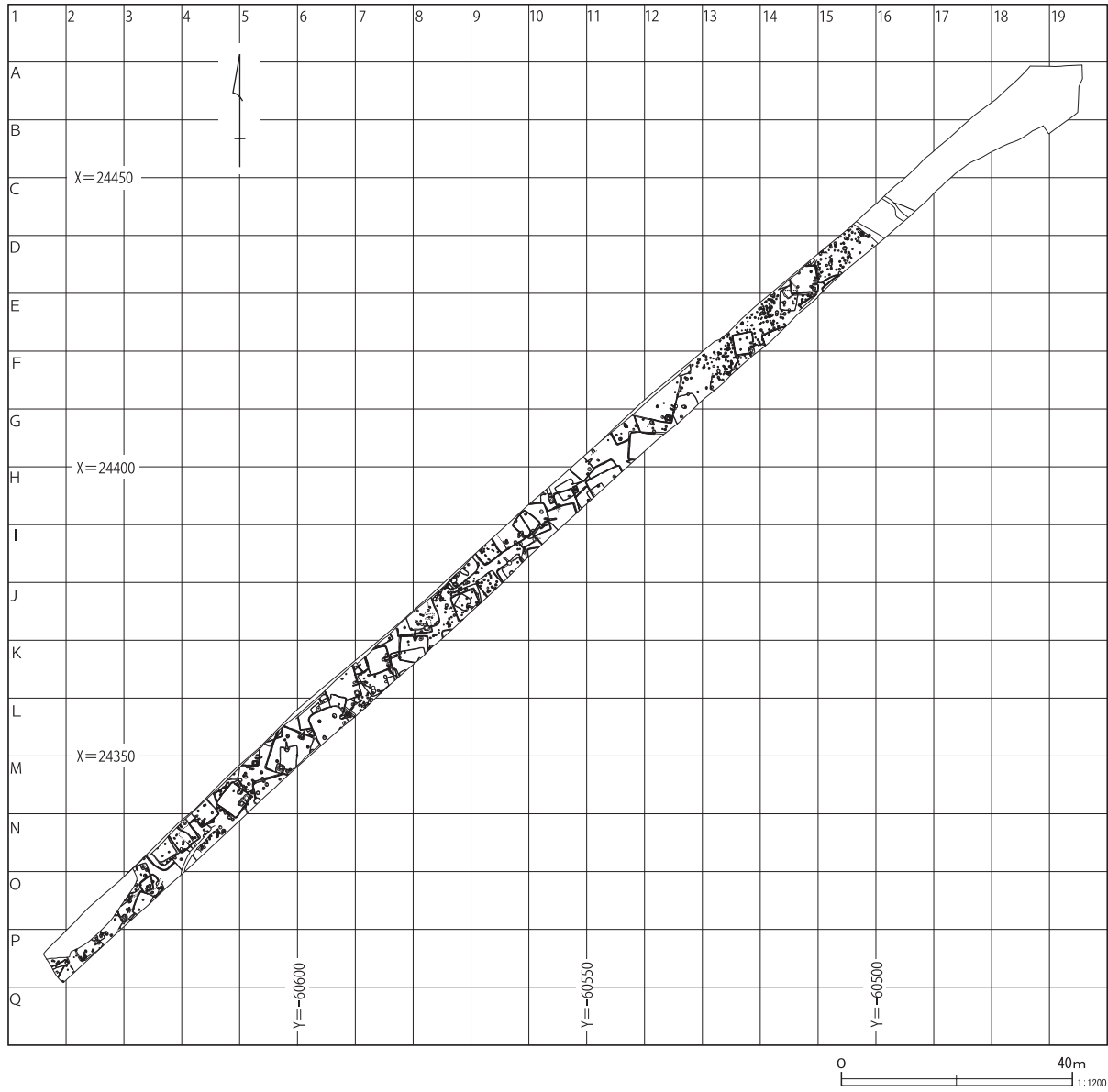
基本層序(第5図)は、現耕作土(第I層)の下に、浅間A軽石を含む暗褐色土(第II層)と浅間B軽石を含む暗褐色土(第III層)がほぼ水平に堆積し、それぞれ近世水田層と中世水田層に比定される。上層遺構確認面は、第III層下位の黒色土(第IV層)の上面をもって行い、古代から中・近世の溝跡が多数検出された。

さらに、上層遺構確認面の下位には河川氾濫土と想定される明褐色土(第V層)が10cmほどの厚さで堆積し、古墳時代後期の土器を多量に含む黒色土層(第VI層)を覆っていた。調査では第VI層を古墳時代後期の遺物包含層として扱ったが、厳密には竪穴住居跡などの遺構の構築面に相当するものであり、当時の表土面である。隣接するB・C地点の調査において黒色土遺物包含層とされたものと同じの堆積層であろう。

この第VI層上面における遺構の検出は遺構同士の重複が激しく困難を極めたため、調査区内を小グリッド(1m方眼)単位で掘り下げ、第VIII層の淡褐色土面において遺構の検出作業を行った。この第VII層上面が下層遺構確認面にあたる。

第VII層の下位には古墳時代前期の遺構面とした第VIII層の黒色土が堆積していたが、漸移的なものであり、古墳時代後期の住居跡の調査中、住居跡の壁面に前期の住居跡の掘り込みが見えるという状況であった。

なお、第IX層の黄褐色土は自然堤防の基盤をなすロームの再堆積層である。



小グリッド網図
(1m小グリッド)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	26	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

第8図 川越田遺跡グリッド網図



第9図 川越田遺跡全測図(1)



第10図 川越田遺跡全測図 (2)

IV 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

川越田遺跡第3・4次調査で検出された竪穴住居跡の総数は、調査段階では110軒を数えた。しかし、重複が激しく、整理段階の見直しによって7軒の住居跡（第22・63・74・86・92・93・98号住居跡）が欠番となり、最終的には103軒となった。出土遺物がまったくないため時期を特定することの難しい住居跡や調査の制約により、カマドや住居跡隅部のみを検出に留まったものも数多く含まれている。必ずしも住居跡として認定し得る十分な条件を満たしているとは言えないが、下層遺構確認面において検出されていることからすれば、すべて古墳時代の住居跡と判断しておきたい。時期細別の内訳は、古墳時代前期19軒、古墳時代中期4軒、古墳時代後期72軒、時期不明8軒である。

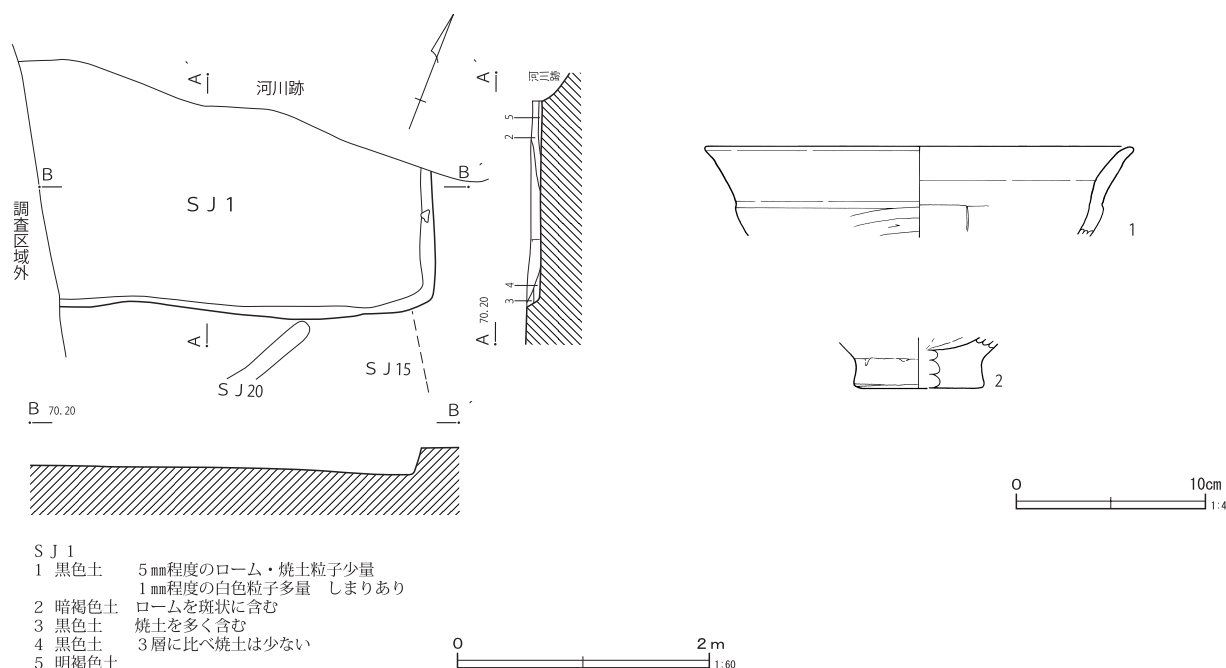
報告は、細別時期ごとの記載が適切であると思われるが、遺構間の重複が著しく、挿図作成上時期別に分解することが容易でないと判断したため、遺構番号順に記載することとした。

第1号住居跡（第11図）

第1号住居跡は調査区南西端のP-1・2グリッドに位置する。住居跡北半分を河川跡によって大きく削平され、西壁側は調査区外に延びる。第15・20号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.12m、短軸長1.97m、深さ0.21mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は黒色土を主体とし、第2層にローム粒子、第3層に焼土粒子の混



第11図 第1号住居跡・出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	鉢	(21.6)	4.7	—	BCEHIK	5	普通	にぶい橙		
2	土師器	甕	—	2.6	6.8	CEHI	40	普通	にぶい赤褐		

入が顕著である。貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、埋土中から土師器鉢・甕が出土した(第11図)。鉢は口径21.6cmに復元される大型のものである。大型鉢が器種組成に安定的に出現するのは6世紀後半から7世紀前半を中心とすることから、住居跡の時期は7世紀前半に位置づけられる。

第2号住居跡(第12図)

第2号住居跡は調査区南西端のP-2グリッドに位置する。住居跡北半部を河川跡によって大きく削平される。南西壁側で第16号住居跡と第2号土壇と重複し、それらに切られていた。

カマドを北東壁に設けた方形の住居跡と推定される。残存規模は長軸長1.51m、短軸長1.22m、深さ0.20mである。通有の住居に比べると極めて小型である。厨房施設のみを竪穴部(土間)とした可能性も考えておきたい。主軸方位はN-62°-Eを指す。

カマドは北東壁に設けられていた。明確な煙道部をもたず、燃焼部が壁外に張り出すタイプである。規模は、全長0.60m、カマド袖幅0.65m、深さ0.20mである。燃焼部は浅く皿状に窪み、奥壁はやや斜めに立ち上がる。

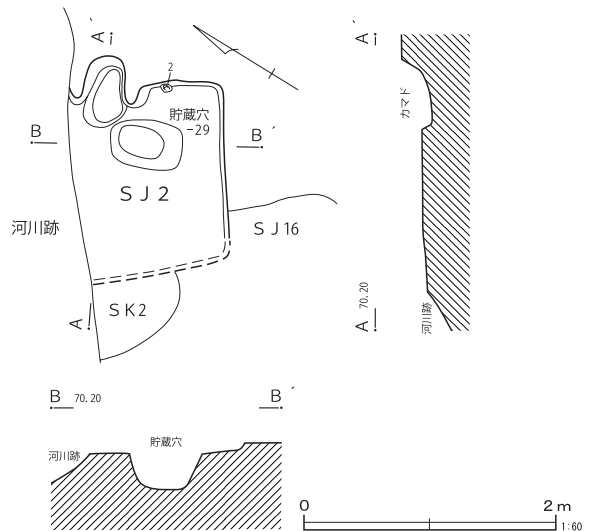
貯蔵穴はカマドに向かって右手前に検出された。平面長方形で、規模は長径0.56m、短径0.39

m、深さ0.29mである。カマドの焚口部に近接するため、別の住居に伴うものか、あるいはカマド使用時に埋め戻されていた可能性も考えられる。

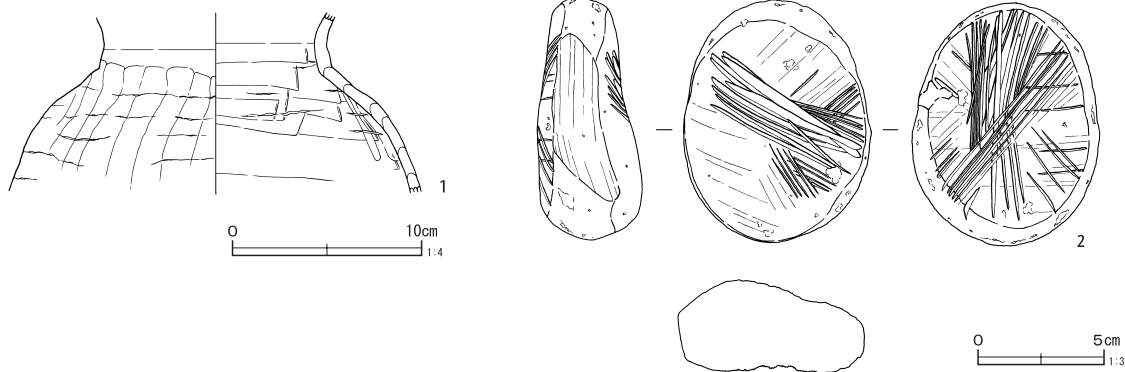
ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少ない。土師器甕と砥石がある(第13図)。1の土師器甕は胴部の張りが強く、外面に粘土紐の巻き上げ痕を明瞭に残す。頸部から口縁部へ直立気味に立ち上がる。2は安山岩製の砥石で、カマド右脇から出土した。表面に刀子等の刃砥ぎしたような擦痕が数多く残っている。

本住居跡を切っている第16号住居跡が6世紀前半に位置づけられることから、住居跡の時期は6世紀初頭以前に遡るものと考えられる。



第12図 第2号住居跡



第13図 第2号住居跡出土遺物

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	9.5	—	BCEHIL	75	普通	にぶい赤褐	No.1	91-1
2	石製品	砥石	長さ9.6cm	幅7.4cm	厚さ4.1cm	重さ194.85g	安山岩				

第3号住居跡 (第14図)

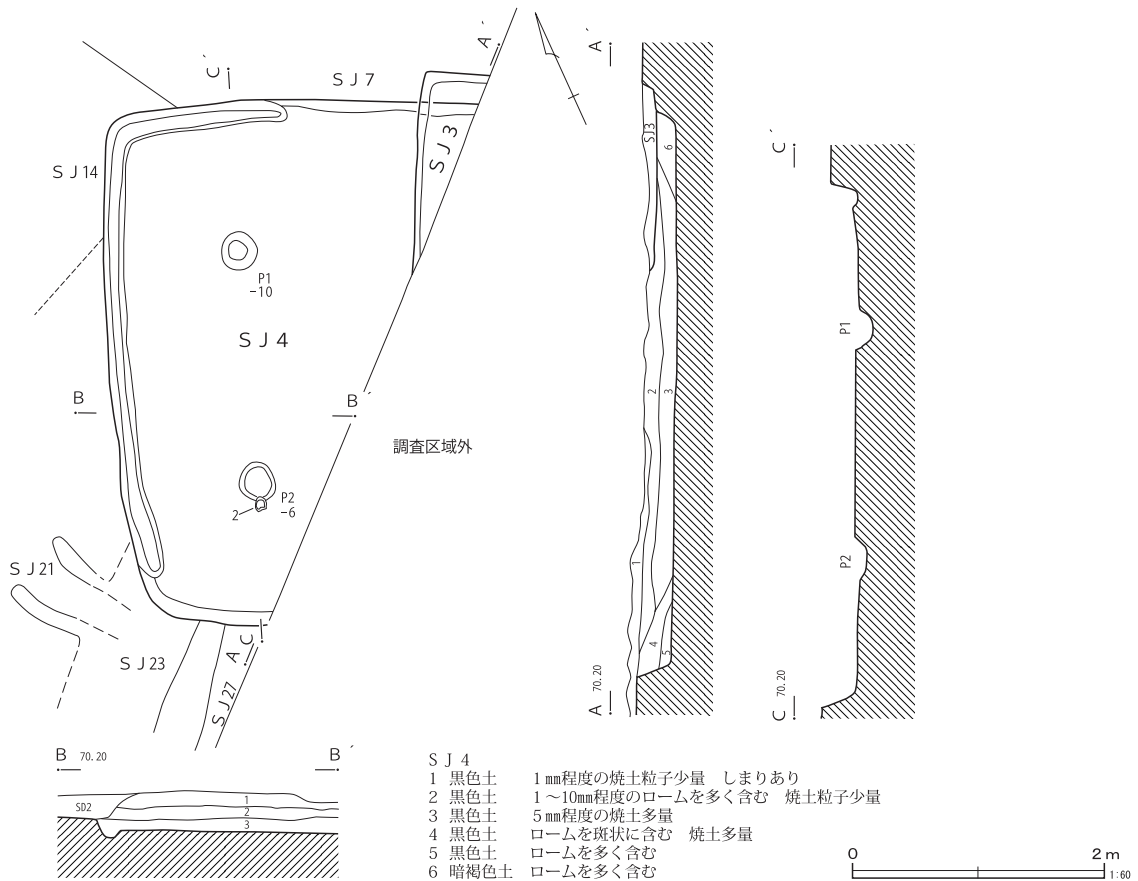
第3号住居跡は調査区南西端のO-3グリッドに位置し、住居跡の大半は調査区域外にある。第4・7号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長1.52m、短軸長0.50m、深さ0.10mである。主軸方位はN-30°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は非常に少なく、土師器壺の口頸部の破片のみである(第15図)。古墳時代前期の五領期のもので、おそらく混入品であろう。

遺構の重複関係から考えると、住居跡の時期は6世紀後半以降と考えられる。



第14図 第3・4号住居跡



第15図 第3号住居跡出土遺物

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	4.1	—	CEHIL	20	普通	橙		

第4号住居跡 (第14図)

第4号住居跡は調査区南西端のO-3グリッドに位置する。第3・7・14・21・23・27号住居跡と複雑に重複していた。遺物のない住居跡もあり、新旧関係については不明確な点も多いが、第3号住居跡に切られているほかは、いずれも切っていた。住居跡南東側大半は調査区外に延びる。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長4.17m、短軸長2.75m、深さ0.24mである。主軸方位はN-22°-Eを指す。

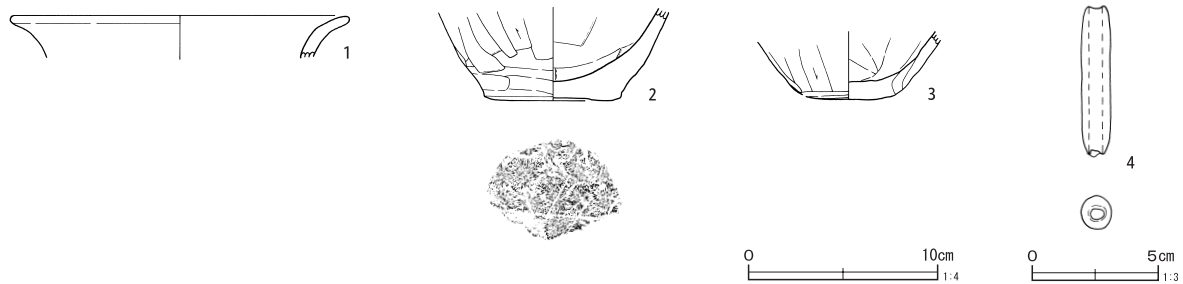
床面は概ね平坦である。覆土は6層に分層される。床面直上に堆積する第3層に多量の焼土が含まれており、人為的な埋め戻しの可能性もある。

ピットは2本検出された。位置的には支柱穴の可能性もあるが、掘り込みが浅いため断定することは難しい。P1は長径0.30m、短径0.28m、深さ0.10mである。P2は長径0.31m、短径0.29m、深さ0.06mである。

壁溝は、北隅部から西壁際にかけてL字形に巡っていた。幅15~22cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器甕、土錘がある(第16図)。2の甕は底部に木葉痕を残すもので、床面直上から出土した。その他はいずれも埋土中からの出土である。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から6世紀末葉に位置づけられる。



第16図 第4号住居跡出土遺物

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(17.5)	2.3	—	BCHIL	20	普通	橙		
2	土師器	甕	—	4.8	(7.2)	CEHIL	40	普通	明赤褐	底部木葉痕 No.1	
3	土師器	甕	—	3.6	(5.2)	ABCHIL	25	普通	褐灰	内面橙	
4	土製品	土錘	長さ6.0cm 孔径0.5cm	最大径1.2cm 重さ7.95g		CEHI	100	良好	明赤褐		

第5号住居跡 (第17図)

第5号住居跡は調査区南側のN・O-3グリッドに位置する。第6・10・11号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。

重複する遺構により床面の大半が削平されており、南西壁から南東壁の一部を残すのみであった。調査区南側に分布する住居跡の中では、本住居跡と南側に近接する第7・14号住居跡の間に僅かな空閑地が認められる。この空閑地を境に、便宜的

に調査区南西端に位置する住居群と区分することができる。

住居跡の全容については把握できなかったが、住居跡の平面形は方形系と推定され、南西壁側は胴張状に緩い弧を描きながら住居外に張り出していた。残存規模は長軸長4.13m、短軸長2.64mである。確認面から床面までの深さは0.06mしかなく、極めて浅かった。主軸方位はN-43°-Wを指す。

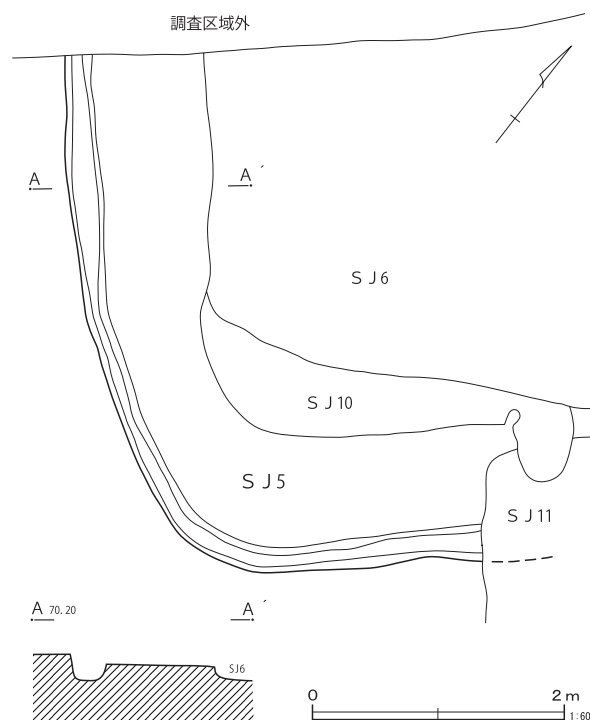
床面は概ね平坦である。壁溝は壁際を全周し、幅18~27cm、深さ12cmほどである。カマド、貯蔵穴、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ないが、埋土中から土師器坏・鉢・甕等が出土した（第18図）。

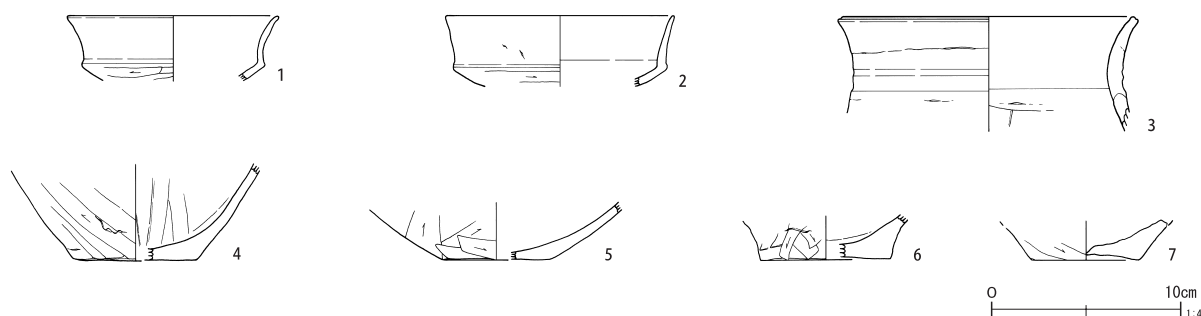
1・2は須恵器の坏蓋を模倣した模倣坏で、口縁部と体部の境に明瞭な段を残す。口縁部が長く緩やかに外反している。2は胎土が緻密である。3は頸部の括れの弱い器形の鉢と考えられる。

4~7は甕の底部片で、いずれも底部の突出は弱い。5は胴張甕の底部で、外面に黒斑を残す。7は僅かに上げ底となり、内面を欠損する。

住居跡の時期は、小型化した口縁部が緩やかに外反する模倣坏の特徴から考えて、鬼高II式の古い段階の様相を示し、年代的には6世紀中葉に位置づけられる。



第17図 第5号住居跡



第18図 第5号住居跡出土遺物

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表（第18図）

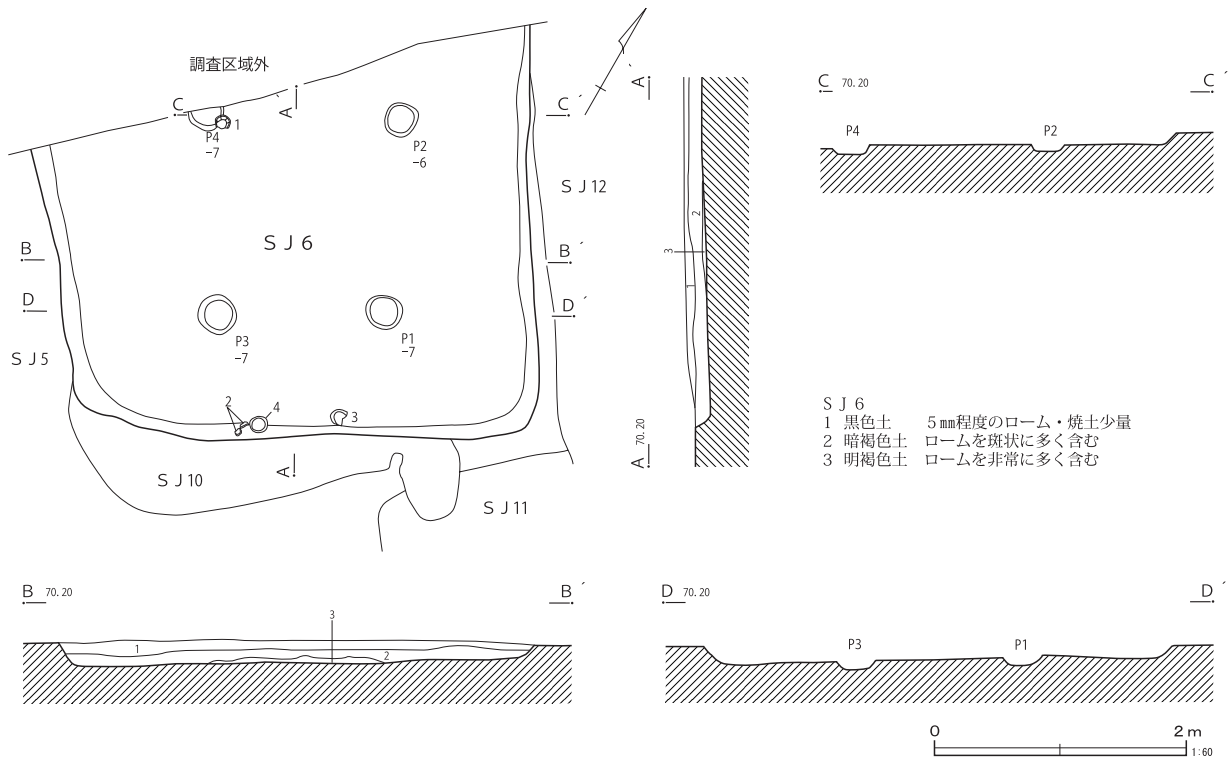
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	3.9	—	BCEHIL	15	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.0)	3.7	—	ACHI	15	普通	橙	胎土緻密	
3	土師器	鉢	(15.4)	6.1	—	BCEGH	10	普通	橙		
4	土師器	甕	—	5.0	(6.6)	CEHI	20	普通	明赤褐		
5	土師器	甕	—	3.0	(5.8)	CEGHI	25	普通	橙	外面黒斑	
6	土師器	甕	—	2.3	(7.0)	CEGHI	20	普通	橙		
7	土師器	甕	—	2.0	(5.7)	BEGHI	40	普通	明褐		

第6号住居跡（第19図）

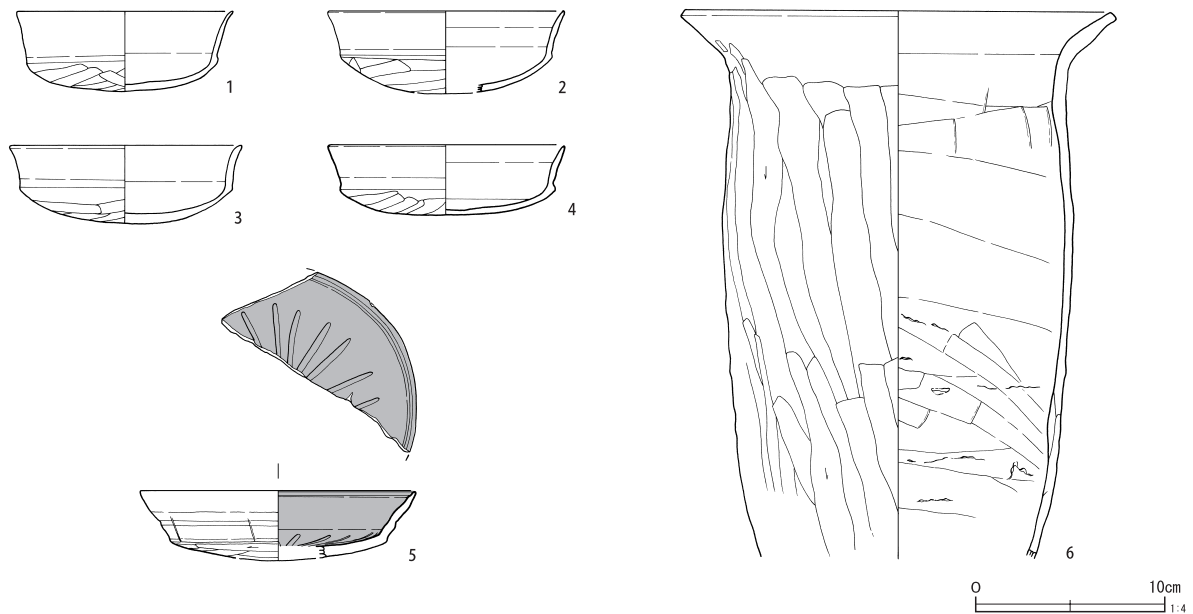
第6号住居跡は調査区南側のN-3グリッドに位置し、西側が大きく調査区域外に延びる。住居跡南東壁部分で第5・10号住居跡を切り、東壁部

分は第12号住居跡に接している。

平面形は方形と推定される。カマドが検出されていないことから西壁部分に存在する可能性が大きい。残存規模は長軸長3.86m、短軸長3.17m、



第19図 第6号住居跡



第20図 第6号住居跡出土遺物

第6表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.3	4.2	—	CH	90	普通	橙	外面黒斑 No.5	25-1
2	土師器	坏	(12.4)	4.2	—	CHI	40	普通	橙	No.3・4	25-2
3	土師器	坏	12.0	4.1	—	CHI	70	普通	橙	No.1	25-3
4	土師器	坏	12.4	3.6	—	CHI	100	普通	橙	No.2	25-4
5	土師器	坏	(14.6)	3.6	—	BCEGHI	30	普通	にぶい赤褐	内面黒色処理 放射状暗文	25-5
6	土師器	甕	(22.4)	28.9	—	CGHIKL	20	普通	明赤褐	N3G N3G	

深さ0.10mである。一辺4 mほどの住居跡と推定される。主軸方位はN-36°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は3層に分層される。自然堆積と思われるが、下層にロームの混入が顕著であった。

ピットは4本検出された。位置的に見て対角線上に配置されており、住居に伴う支柱穴と考えられる。しかし、ピットの規模はいずれも直径30cm前後、深さ7cmと浅い。

出土遺物は少なく、土師器杯・甕が出土したのみである(第20図)。1の土師器杯はP4脇の床直から出土した。2~4の土師器杯は南壁際からやや浮いた状態で出土し、5の杯と6の甕は埋土中からの出土である。6の長胴甕は、口縁部に最大径をもち、胴部の張りの弱い寸胴形であることから、やや新しい様相を示す。

住居跡の時期は、口径12cm台の坏蓋模倣杯を主体に、内面を黒色処理し放射状暗文を施す有段口縁杯が共伴することから、6世紀末葉から7世紀初頭を中心に位置づけられる。

第7号住居跡 (第21図)

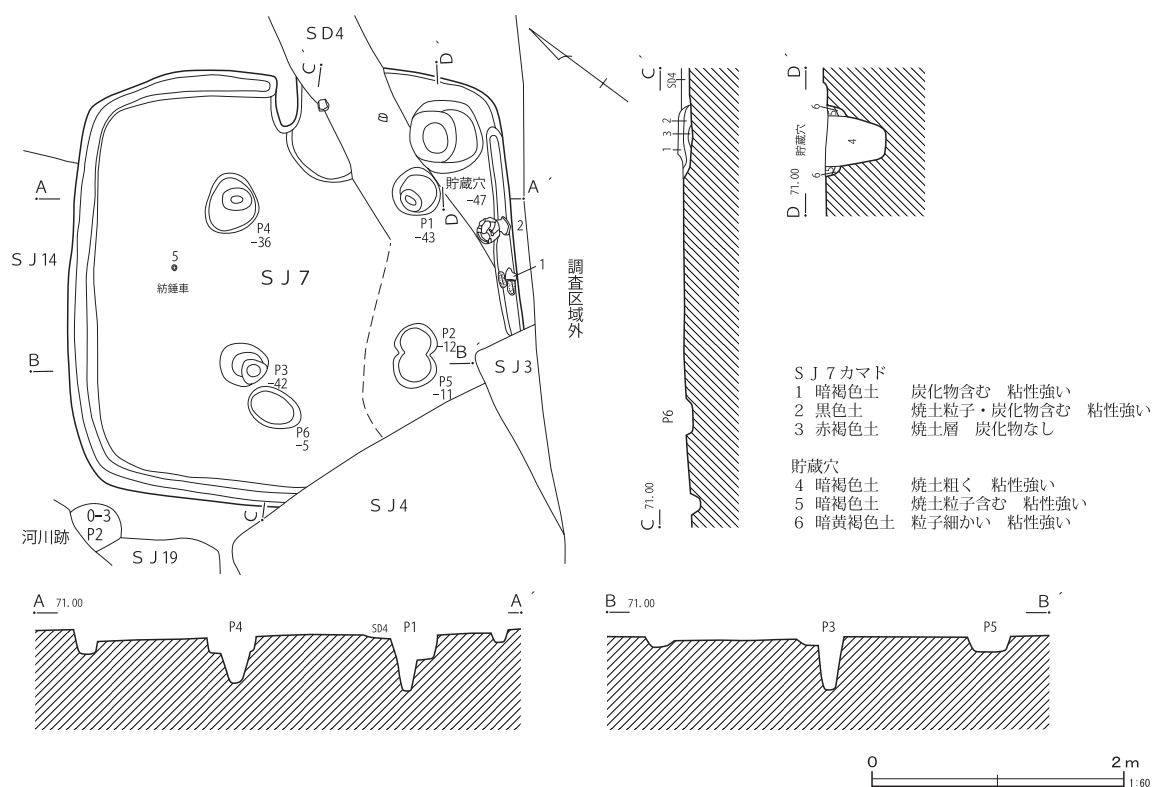
第7号住居跡は調査区南西端のO-3グリッドに位置する。重複関係は、住居跡の南隅部を第3・4号住居跡によって切られ、住居跡の西壁部分で第14号住居跡を切っていた。また、第4号溝跡によってカマドが大きく削平されていた。

平面形は方形を呈し、規模は長軸長3.60m、短軸長3.45m、深さ0.03mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられていたが、第4号溝跡に削平され、燃焼部と袖部の一部を残すのみである。残存部の規模は、全長0.75m、カマド袖幅0.65m、深さ0.05m、燃焼部の底面幅0.40mである。最下層に焼土化した赤褐色土が堆積していた。

貯蔵穴はカマドの右脇から検出された。平面楕円形で、長径0.60m、短径0.58m、深さ0.47mである。埋土は暗褐色土を主体とする。

ピットは6本検出された。このうちP1・P3~P5が支柱穴である。P6は浅く、住居に伴わ



第21図 第7号住居跡

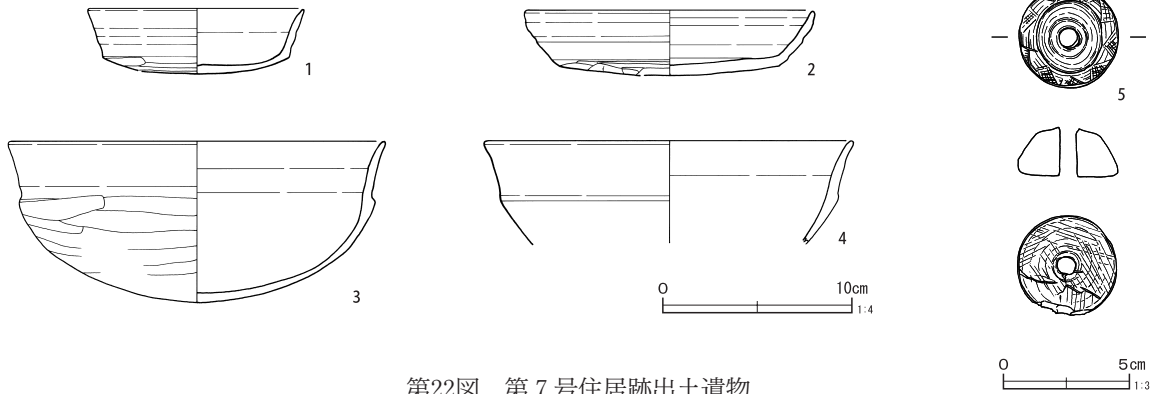
ないものと考えられる。

壁溝は、貯蔵穴のある北東隅部を除いてほぼ全周する。幅12～24cm、深さ11cmほどである。

出土遺物は少ないが、土師器坏・碗、滑石製紡錘車がある（第22図）。1・2の坏は、住居跡の南東壁際中央の床直から出土した。5の紡錘車はP 3

とP 4に挟まれた住居跡西側の床直から上面を上にした状態で出土した。紡錘車は断面台形で、側面には鋸歯文が線刻されている。

住居跡の時期は、有段口縁坏の段表現が退化し、体部が扁平化していることから7世紀前葉に位置づけられる。



第22図 第7号住居跡出土遺物

第7表 第7号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	3.4	—	CHI	40	不良	橙	No. 8	25-6
2	土師器	坏	(15.2)	3.4	—	ACHI	40	普通	灰黄褐	No. 5	25-7
3	土師器	碗	(19.8)	8.5	—	CEHI	50	普通	橙		25-8
4	土師器	碗	(19.4)	5.4	—	CHI	25	不良	橙		
5	石製品	紡錘車	上径2.5cm 底径3.9cm 孔径0.7～0.8cm 厚さ1.9cm 重さ36.23g				滑石			No. 1 鋸歯文線刻	89-3

第8号住居跡（第23図）

第8号住居跡は調査区南側のM・N-4グリッドに位置し、住居跡の北西部は調査区外に延びる。第9・12・13・24号住居跡と重複し、最も新しい。

平面形は方形で、規模は長軸長3.94m、短軸長3.38m、深さ0.22mである。主軸方位はN-131°-Wを指す。

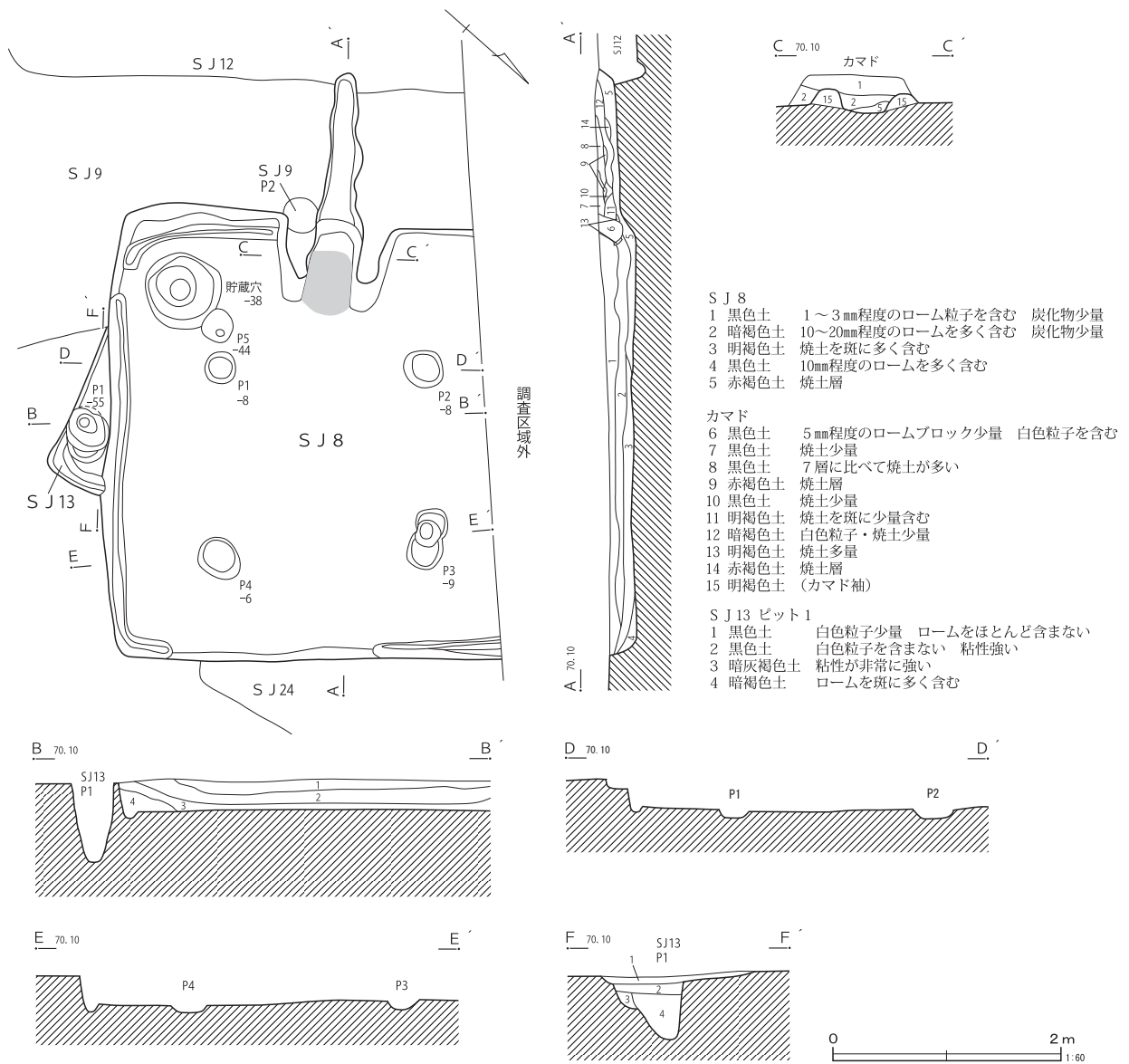
床面は平坦である。埋土は5層に大きく分層され、カマド手前の床面上にはカマドから掻き出されたと考えられる焼土が広がっていた。

カマドは南西壁のほぼ中央に設けられていた。煙道部が壁外に長く延びるタイプで、全長2.10m、カマド袖幅1.03m、深さ0.35mである。燃焼部は、長さ0.80m、底面幅0.35mの楕円形で、奥

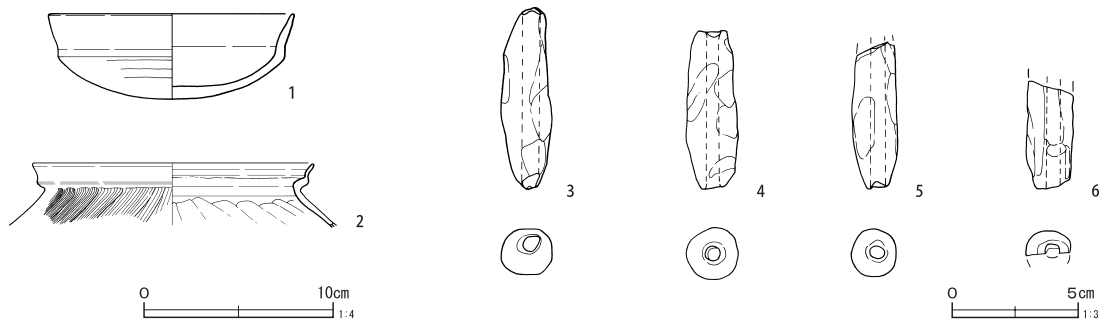
壁に段差をもって煙道部に移行する。煙道部は壁外に長く延び、長さ1.30mである。火床面は良く被熱し、赤変が顕著である。カマド袖部は明褐色土を用いて構築していた。貯蔵穴はカマドの左脇に設けられていた。平面形は円形で、長径0.66m、短径0.65m、深さ0.38mである。

ピットは5本検出された。直径30cm前後で、規則的な配置からP 1～P 4が支柱穴と考えられる。いずれも深度は10cm前後と浅いが、P 5のみ深さ44cmである。壁溝は部分的に巡り、幅6～19cm、深さ9cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器坏、土錘4点と混入品と考えられるS字状口縁台付甕の口縁部片がある（第24図）。1の土師器坏は坏蓋模倣坏で、口径



第23図 第8・13号住居跡



第24図 第8号住居跡出土遺物

第8表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

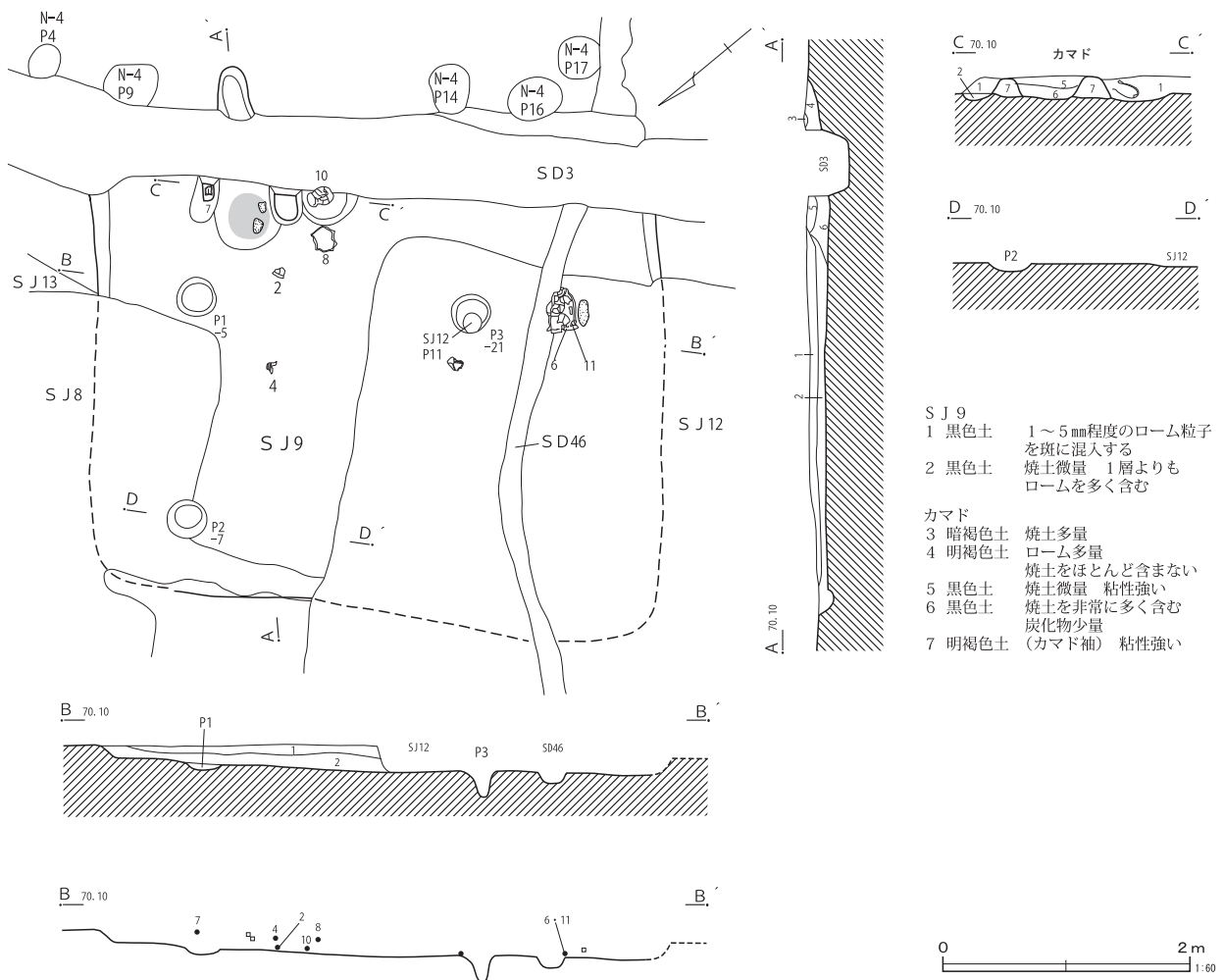
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	4.4	—	CH	15	不良	橙	S字甕 内外面煤付着	93-1
2	土師器	台付甕	(15.0)	3.3	—	CEGHI	20	普通	にぶい黄橙		
3	土製品	土錘	長さ7.2cm 最大径1.9cm 孔径0.5~0.8cm 重さ22.99g			ACHI	100	普通	明赤褐		
4	土製品	土錘	長さ6.2cm 最大径2.1cm 孔径0.5cm 重さ24.44g			ACEHI	100	普通	にぶい黄橙		93-1
5	土製品	土錘	長さ5.7cm 最大径1.8cm 孔径0.5~0.6cm 重さ16.45g			AHI	80	普通	橙		93-1
6	土製品	土錘	長さ5.2cm 最大径1.8cm 孔径0.5cm 重さ6.67g			ACEHI	30	普通	にぶい橙		

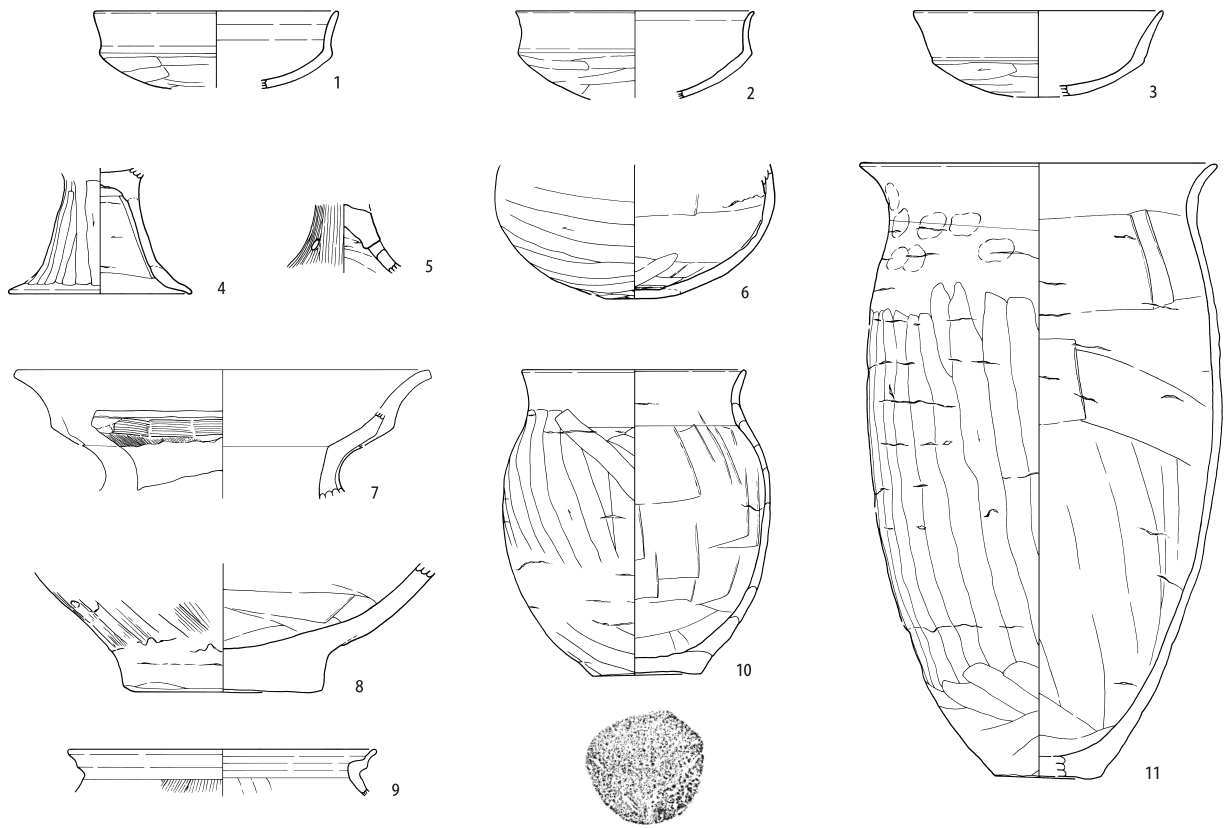
12.8cmに復元される。3~6は管状の土錘で、長さ6cm前後である。2のS字甕は重複する第13号住居跡に伴うものであろうか。

住居跡の時期は、出土した模倣坏から6世紀後葉から末葉に位置づけられる。

第9号住居跡 (第25図)

第9号住居跡は調査区南側のN-4グリッドに位置する。第8・12・13号住居跡、第3・46号溝跡と重複している。第8号住居跡によって北東壁の大半が削平されているほか、北壁から北西壁に





第26図 第9号住居跡出土遺物

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	4.0	—	CHI	25	普通	橙		
2	土師器	坏	(12.6)	4.6	—	AHIK	25	不良	橙	No.1	
3	土師器	坏	(13.2)	4.5	—	CEGHI	20	普通	橙		
4	土師器	高坏	—	6.6	(9.6)	AEHI	80	普通	明赤褐	No.2	
5	土師器	高坏	—	3.6	—	ACHI	50	良好	橙	三方透し	
6	土師器	壺	—	7.0	3.0	BCHIL	25	普通	橙	内面黒色	No.9
7	土師器	壺	—	4.7	—	BCEGHI	10	普通	明赤褐	No.3	
8	土師器	壺	—	6.8	10.5	ABCEHIL	80	普通	橙	外面黒斑	No.6
9	土師器	台付甕	(16.3)	2.4	—	CEGHI	10	良好	橙	S字甕 P2	
10	土師器	小型甕	11.9	16.1	5.7	CHIL	80	普通	にぶい橙	底部木葉痕 外面黒斑	No.7
11	土師器	甕	18.8	32.6	(5.6)	CDEHI	70	普通	橙	底部木葉痕	No.9

かけては第12号住居跡によって、カマドは第3号溝跡によって大半が壊されていた。

平面形は横長の長方形を呈し、残存規模は長軸長4.57m、短軸長3.92m、深さ0.20mである。主軸方位はN-129°-Eを指す。

カマドは南東壁の北寄りに設けられ、第3号溝跡によって大きく壊されていた。全長1.50m、カ

マド袖幅0.90m、深さ0.18mである。燃焼部は焚口を中心に火床面が良く残る。底面幅0.40mである。煙道部は壁外に緩やかに立ち上がる。

床面は重複のため大部分が削平され、部分的に残る。埋土は黒色土を主体とした自然堆積と考えられる。

ピットは支柱穴と考えられる3本を検出した。

本来は4本支柱穴と考えられるが、北西側のピットは第12号住居跡と重複するため欠落する。ピットの規模は直径30cm前後、深さ5～21cmで、深度は全体に浅い。貯蔵穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

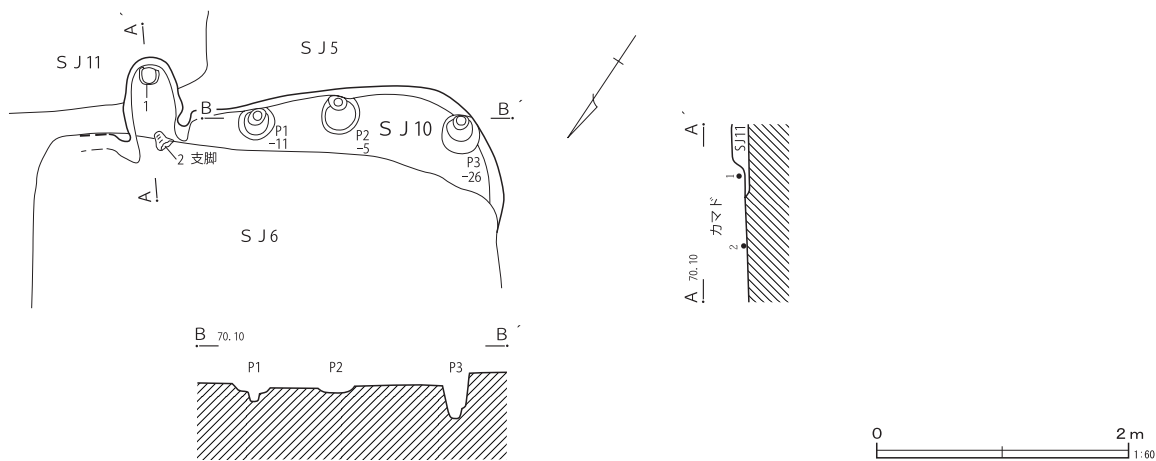
出土遺物は、土師器坏・高坏・壺・台付甕・小型甕・甕がある(第26図)。カマド周辺にまとまって出土した。カマド右袖に接するように10の小型甕が横倒しの状態で出土した。5～9は古墳時代前期の五領期の遺物であり、混入品である。おそらく北東側に接する第13号住居跡に伴うもので

あろうか。

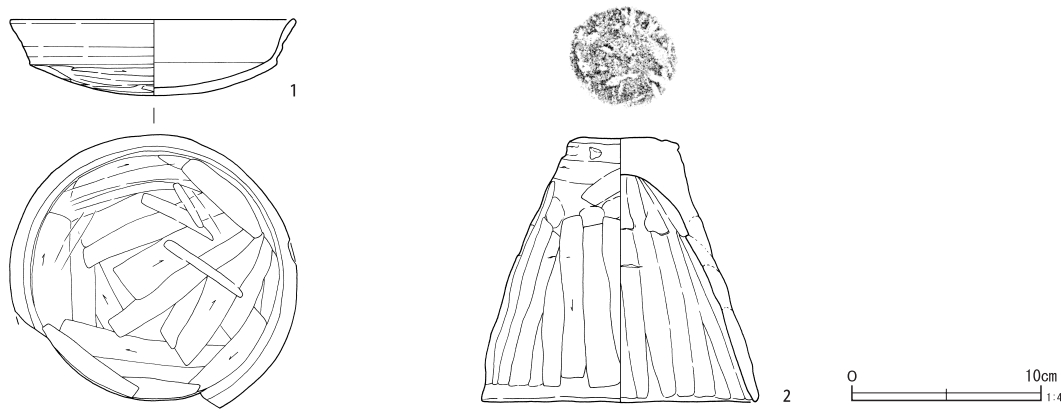
住居跡の時期は、口縁部が強く外反し、体部が深く丸味をもつ模倣坏を主体とすることから6世紀前葉に位置づけられる。

第10号住居跡 (第27図)

第10号住居跡は調査区南側のN-3グリッドに位置する。第5・6・11号住居跡と重複し、連続的な建て替えを窺わせる。先後関係は第5・11号住居跡を切り、第6号住居跡に切られていた。南東壁にカマドをもつ一辺約4mの住居跡である。住居跡の北西側に重複する第6号住居跡に



第27図 第10号住居跡



第28図 第10号住居跡出土遺物

第10表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	15.0	3.9	—	BCEGHI	80	普通	にぶい褐	外面黒斑 カマドNo.2	26-2
2	土製品	支脚	—	13.8	14.5	CEGHI	95	普通	橙	木葉痕 カマドNo.1	26-3

よって大半が削平され、南東壁部分のみを残す。

平面形は方形系で、南隅部は丸味をもつ。残存長軸長2.82m、短軸長0.68m、深さ0.08mである。主軸方位はN-142°-Eを指す。

カマドは南東壁の中央やや東寄りに設けられていた。燃焼部が壁外に楕円形に張り出すタイプで、明確な煙道部をもたない。袖部は僅かに残っていた。カマド残存長0.80m、カマド袖幅0.60m、燃焼部底面幅0.30mである。袖部の先端を結んだラインの中央やや右寄りから土製支脚が横倒しになった状態で出土した。カマド使用時における原位置をさほど移動していないものと考えられる。

床面は概ね平坦である。ピットはカマド右脇の南東壁際に3本が規則的に配置されていた。いずれも直径30cm前後、深さ5~26cmで全体に浅い。支柱穴ではないが、規則的な配列から住居に伴うものであろう。

出土遺物は土師器坏、土製支脚がある(第28図)。坏はカマド燃焼部先端から正位で出土した。口径15cmの大振りの有段口縁坏である。土製支脚は土器と同じように粘土紐を巻き上げて作られた鉢形

のものである。頂部平坦面に木葉痕を残す。児玉地方の土製専用支脚を検討した宍河内昭彦氏の鉢形支脚I型に該当する(宍河内2008)。

住居跡の時期は、大型の有段口縁坏の出土から6世紀後葉に位置づけられる。

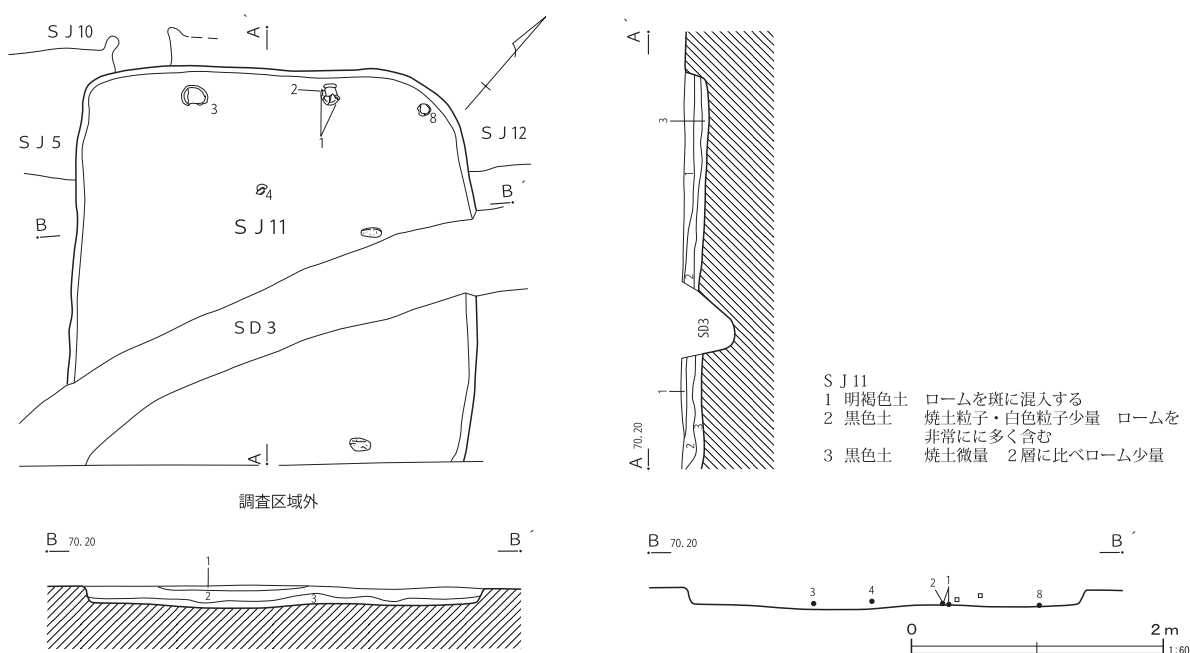
第11号住居跡 (第29図)

第11号住居跡は調査区南側のN・O-3・4グリッドに位置する。第5・10・12号住居跡と第3号溝跡と重複し、すべてに切られ、最も古い。住居跡の南東側は調査区域外に延びており、全容は不明である。

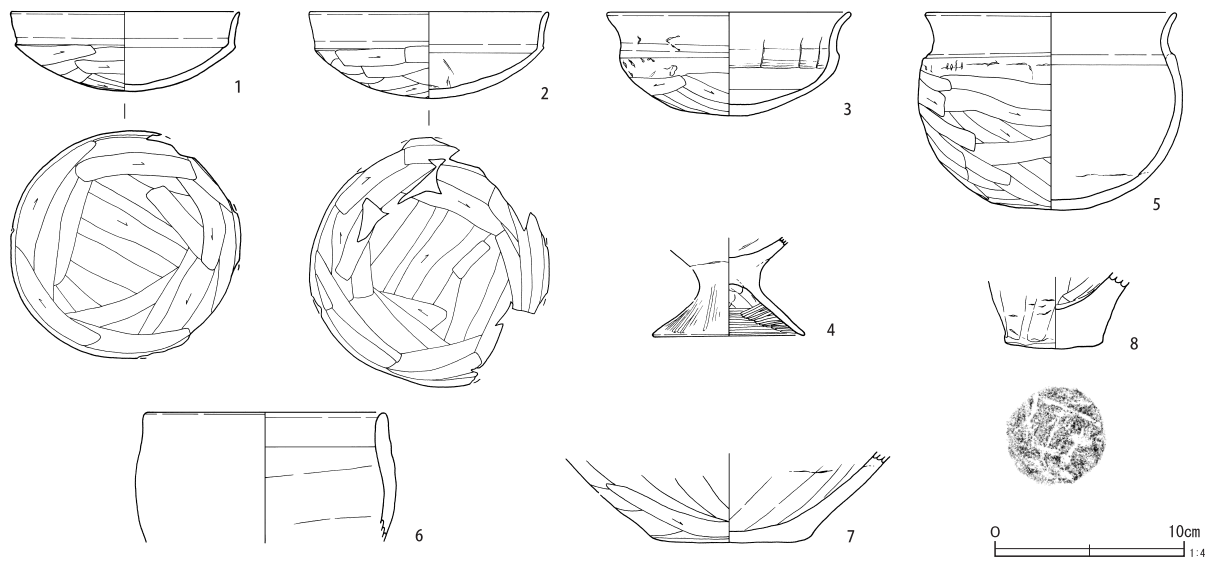
平面形は南北に長い長方形で、北西隅部は直角に近いが、北隅部はやや丸味をもつ。残存規模は長軸長3.20m、短軸長3.14m、深さ0.16mである。主軸方位はN-38°-Wを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は自然堆積を示している。大きく3層に分層され、黒色土を主体とする。カマド、貯蔵穴、ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・甕等がある(第30図)。北西壁際から3の坏、1・2の坏、8の甕



第29図 第11号住居跡



第30図 第11号住居跡出土遺物

第11表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.1	4.2	—	BCEHI	90	普通	にぶい橙	黒斑 No.3・4	26-4
2	土師器	坏	12.6	4.5	—	BCHI	80	普通	にぶい橙	黒斑 No.4	26-5
3	土師器	坏	12.6	5.3	—	CEHIK	95	普通	橙	No.1	26-6
4	土師器	高坏	—	5.1	(8.0)	CEHI	50	普通	橙	脚部内面黒色 No.2	
5	土師器	鉢	13.2	10.4	—	BCEGH	80	普通	橙	外面黒斑	26-7
6	土師器	鉢	(12.6)	6.8	—	BCEHIL	25	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	—	4.7	8.2	BCEHI	80	普通	橙		
8	土師器	甕	—	3.8	5.0	CEHIJ	90	良好	橙	底部木葉痕 内面黒色 No.5	

底部が出土した。また、住居跡中央部付近からは4の高坏脚部が出土した。この他に棒状礫が2点床直で出土した。

1・2の模倣坏は、口縁部が短く直立するタイプである。これに対し3は体部が深く、口縁部が強く外反し、口縁部内面に木口ナデが残る。4は高坏の脚部で、短脚化している。脚部内面に刷毛目を施す。5は体部の丸い深身の鉢である。6は頸部の収縮のほとんどない鉢と考えられる。7は胴張甕の底部片で、壺との判別が難しい。8は底部に木葉痕を残す長胴甕である。突出する底部で、器肉が厚い。

住居跡の時期は、遺構の切り合い関係や坏蓋模倣坏の特徴から6世紀前葉に位置づけておきたい。

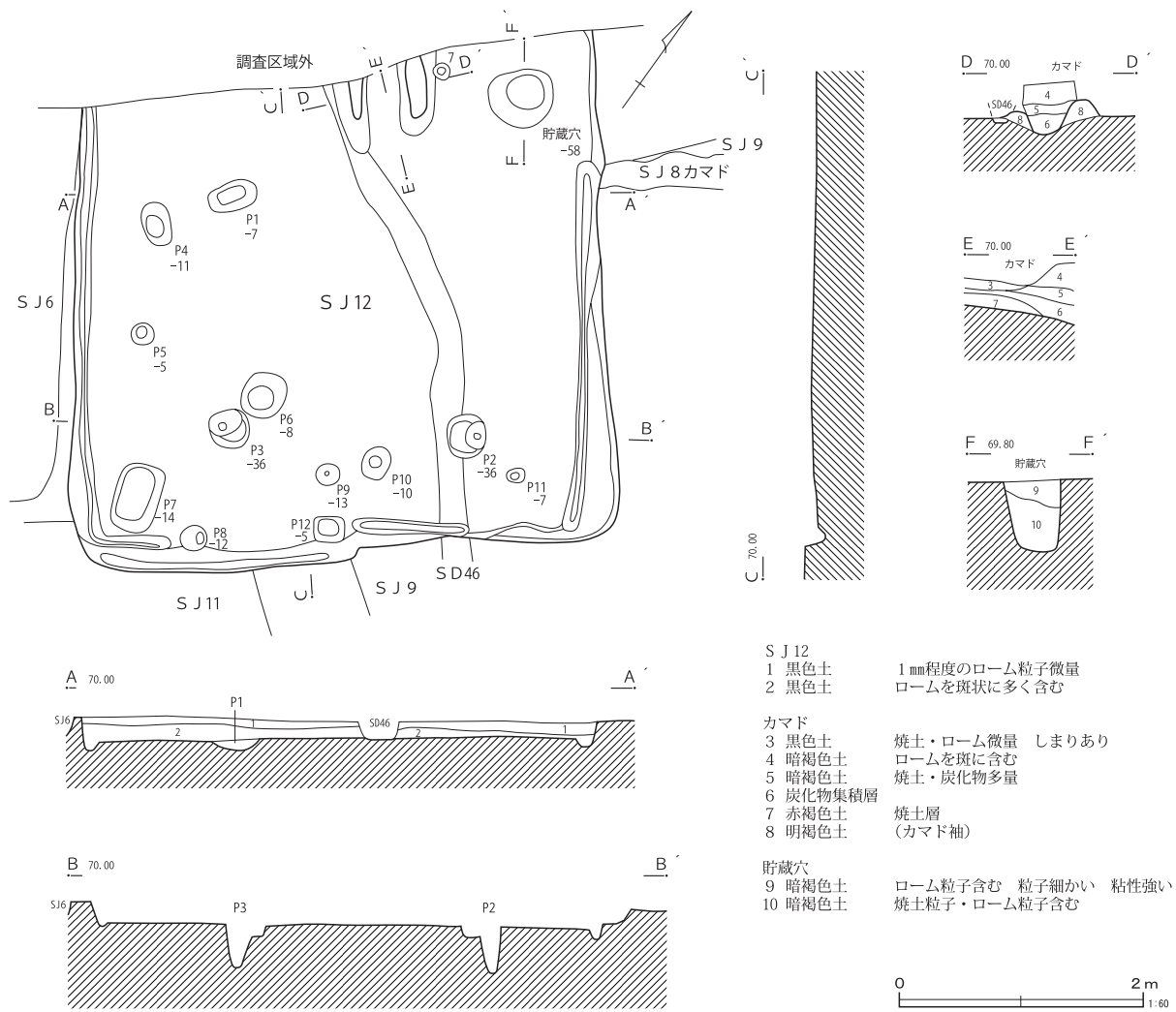
第12号住居跡 (第31図)

第12号住居跡は調査区南側のN-3・4グリッドに位置する。第6・8・9・11号住居跡、第46号溝跡と重複している。住居跡の南東壁から北東壁が第9・11号住居跡を切り、西壁部分は第6号住居跡と接し、北東壁は第8号住居跡のカマドによって一部削平されている。住居跡の北西壁側が調査区域外に延びているため、カマドを完掘することができず、煙道部の構造は不明である。

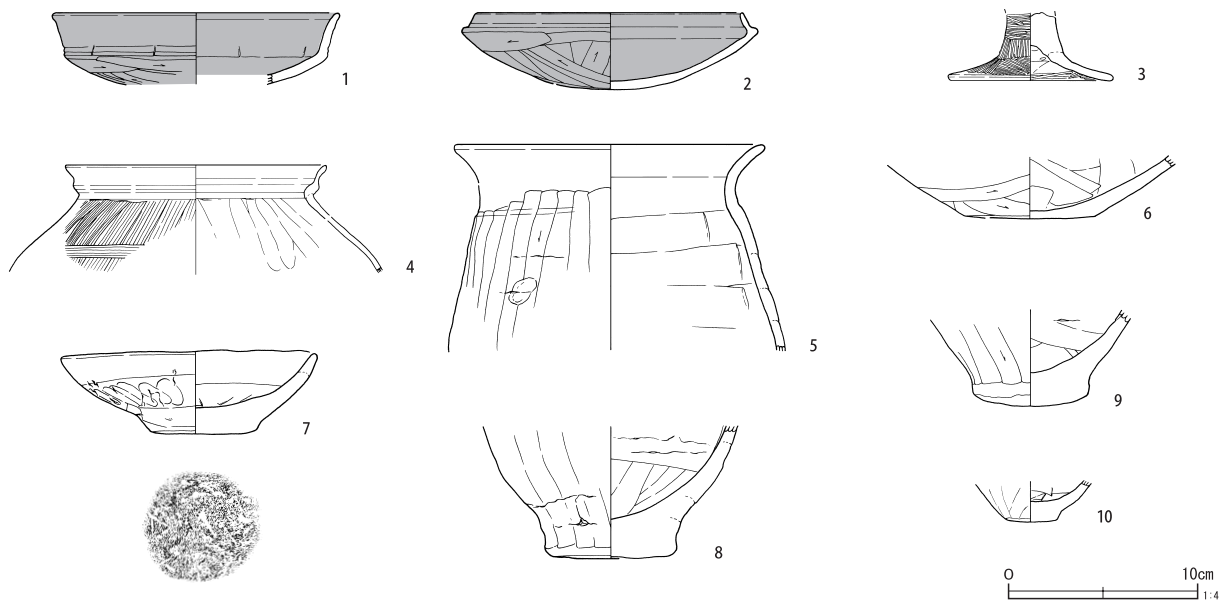
平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長4.37m、短軸長4.14m、深さ0.20mである。主軸方位はN-37°-Wを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は概ね自然堆積を示し、黒色土を主体とする。

カマドは北西壁の中央やや右寄りに設けられて



第31図 第12号住居跡



第32図 第12号住居跡出土遺物

第12表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.9)	3.8	—	CEHI	20	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理	26-8
2	土師器	坏	(13.9)	4.0	—	ACHI	25	普通	橙	内外面黒色処理	
3	土師器	高坏	—	3.6	8.9	CEHI	80	普通	橙		
4	土師器	台付甕	(14.0)	5.7	—	CHI	20	普通	にぶい黄橙	S字甕	
5	土師器	甕	16.4	10.8	—	BEGHI	30	普通	橙	貯蔵穴	
6	土師器	甕	—	3.2	(7.0)	CEHI	30	普通	橙		
7	土師器	埴	13.3	4.4	5.6	BCEH	90	普通	明赤褐	底部木葉痕 No.1	
8	土師器	甕	—	6.8	(6.3)	BCEGH	30	普通	明褐		
9	土師器	甕	—	5.6	(6.0)	BEHIK	30	普通	にぶい橙		
10	土師器	ミニチュア	—	2.1	1.8	CEHI	70	普通	橙		

いた。燃焼部には炭化物集積層と焼土層が厚く堆積し、カマド袖部は明褐色土を用いて構築されていた。燃焼部残存長0.60m、カマド袖幅0.95m、深さ0.25m、燃焼部底面幅0.25mである。

貯蔵穴はカマドの右脇に設けられていた。平面楕円形で、長径0.52m、短径0.47m、深さ0.58mである。埋土は暗褐色土を主体に、焼土粒子・ローム粒子の混入が見られる。

ピットは12本検出された。P1～P3は位置的に支柱穴と考えられる。しかし、4本支柱穴を想定した場合、北側の柱穴を欠いているほか、P2・P3に比べP1は深度が浅い。この他のピットに関しては、住居跡に伴うかどうかは明確でない。壁溝は、断続的ながら全周し、幅5～22cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は土師器坏・高坏・甕・埴・台付甕がある(第32図)。カマド右袖の外側に接するように7の埴が置かれていた。5の長胴甕は貯蔵穴からの出土である。3の高坏脚部と4のS字甕は混入と考えられる。

1は体部と口縁部の境に棒状工具を用いて沈線を巡らした坏蓋模倣坏である。2は坏身模倣坏である。1・2とも内外面を黒色処理する。3は脚部外面に横方向のミガキを丁寧に施す。4は肩部に横線を巡らした所謂C類のS字甕である。口縁部上段が強く外反する。5は胴部の張りの弱い長胴甕である。同じく8・9は長胴甕の底部で、器肉が厚く突出する。7は小型甕の胴部下半と同一

形態の粗製の埴である。胴部外面には粘土紐痕、指頭痕が顕著で、底部には木葉痕を残す。甕の分割成形を示すものであろう。10は埴形をしたミニチュアと考えられる。

住居跡の時期は、外反口縁の坏蓋模倣坏と坏身模倣坏が共伴することから6世紀後葉に位置づけられる。

第13号住居跡 (第23図)

第13号住居跡は調査区南側のM・N-4グリッドに位置する。第8・9号住居跡と重複し、住居跡の大半が削平され、住居跡の北東隅部付近を残すのみであった。

平面形は方形系と推定される。残存する南東壁の長さは1.33m、北東壁の長さ0.55m、確認面からの床面までの深さ0.25mである。主軸方位は南東壁を基準にすると、N-70°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。ピットは北東隅部に1本検出された。P1は長径0.47m、短径0.38m、深さ0.55mで、埋土は4層に分層される。第4層は柱痕の可能性が考えられることから、住居跡に伴うピットであろう。

壁溝は北東壁側に一部巡らしていた。規模は幅16cm、深さ5cmである。

出土遺物はほとんどなく、時期を判断することは難しい。しかし、重複する第8・9号住居跡に古墳時代前期の土器が少なからず混入していることから推して、本住居跡の時期は古墳時代前期の可能性はある。

第14号住居跡 (第33図)

第14号住居跡は調査区南西端のN・O-3グリッドに位置する。第4・7・18・19号住居跡と重複し、住居跡の南西壁側が削平され、かつ住居跡の北西部は河川跡によって大きく壊されていた。

平面形は方形である。残存規模は、長軸長4.80m、短軸長2.26m、深さ0.27mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は自然堆積を示し、大きく3層に分層され、黒色土及び暗褐色土を主体とする。

カマドは北壁に設けられていた。西側半分を河川跡によって大きく壊されており、全容は不明であるが、煙道部が壁外に延びないタイプであろう。残存規模は全長0.70m、カマド袖幅0.57mである。カマド埋土は黒色土を主体とする。燃焼部底

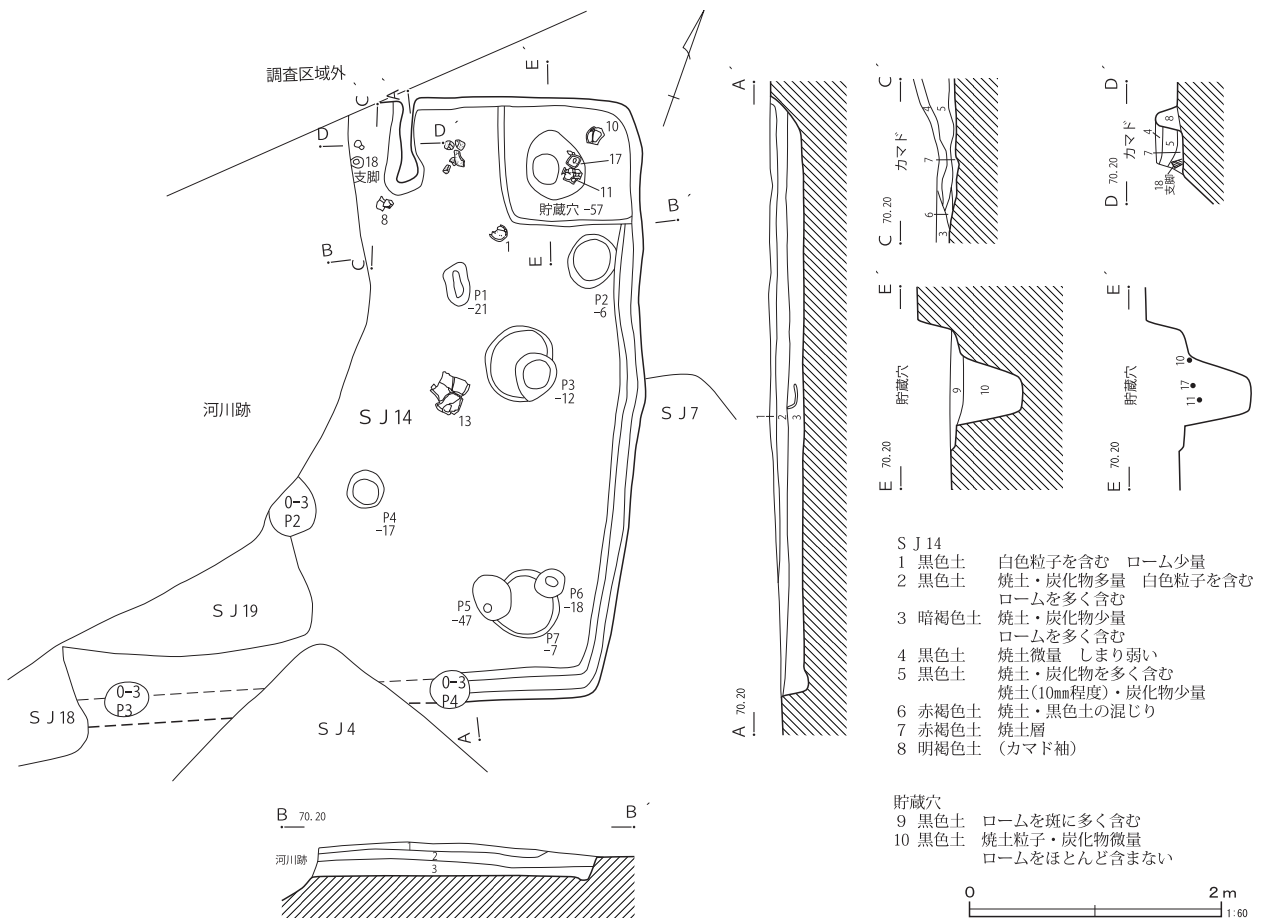
面には第7層の火床面が見られ、カマド袖部の内壁面も被熱により良く焼けていた。燃焼部底面中央には土製支脚(18)が設置されたままの状態が残っていた。

カマド右脇の北東隅部には、上面を一辺1mほどの方形に浅く掘り窪め、その中に貯蔵穴が設けられていた。平面形は楕円形で、長径0.52m、短径0.46m、深さ0.57mである。貯蔵穴の埋土は黒色土を主体とする。上面の方形の掘り込みは、木製の蓋を置くための造作であろうか。

ピットは7本検出された。位置的に見てP1・P5が支柱穴であろう。その他は深度も浅く、住居跡に伴うものであるかは不明である。

壁溝は貯蔵穴から東壁際を巡り、南壁へと続いている。幅16~25cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は土師器坏・鉢・小型甕・甕・台付甕・



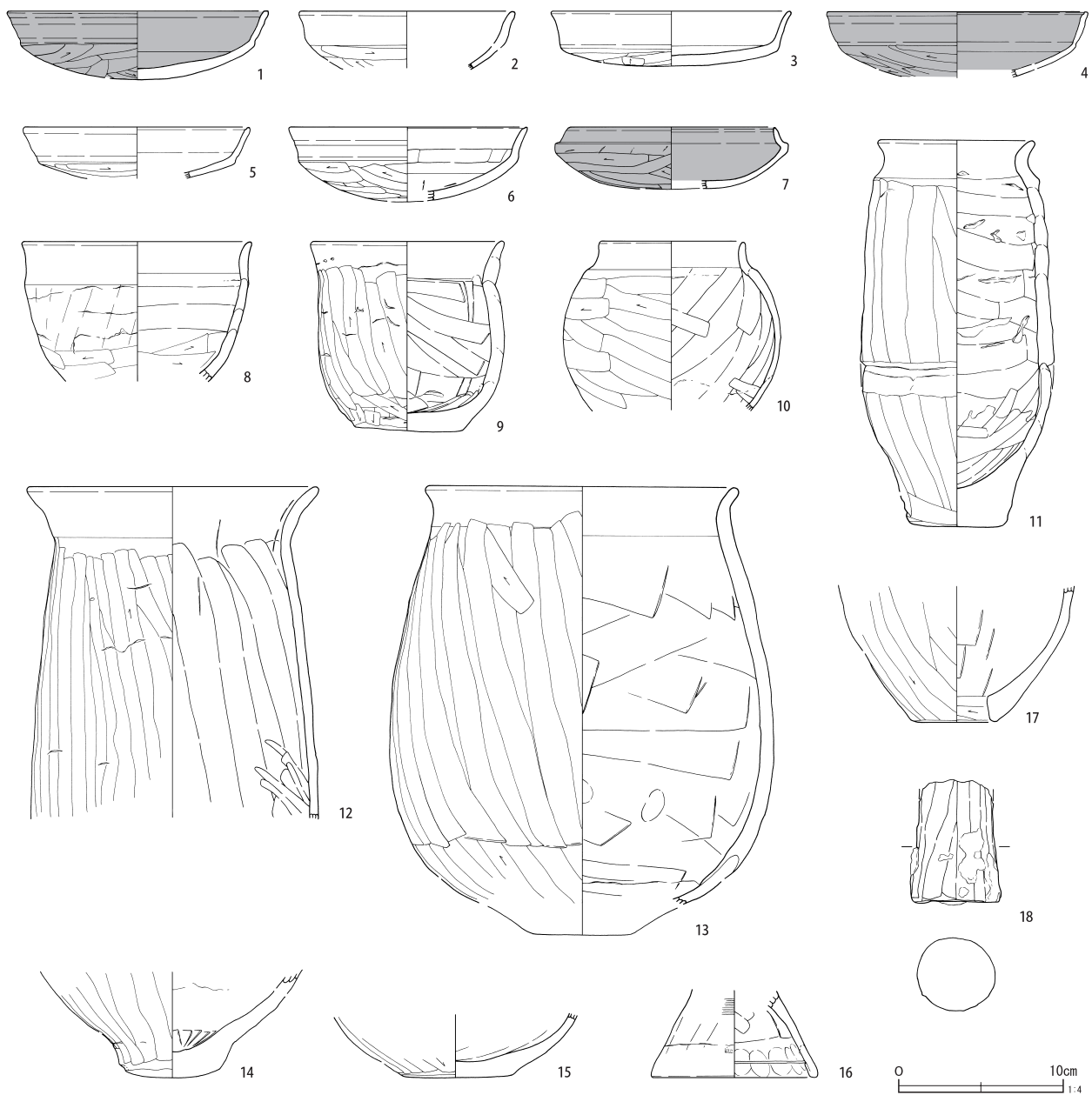
第33図 第14号住居跡

甕、土製支脚等がある(第34図)。カマドから18の柱状支脚が出土しており、カマドの使用状況を窺うことができる。8の鉢は床面から少し浮いた状態で、カマド手前から出土した。カマド右脇の貯蔵穴との間には棒状礫4個がまとめて置かれていた。貯蔵穴周辺からは1の坏が出土したほか、貯蔵穴内からは11の甕、17の甕、10の小型甕が出土し、前二者は周囲から貯蔵穴内に落ち込んだ状態であった。床面中央部からは13の下膨れの甕が潰

れた状態で出土した。なお、16の台付甕の脚台部は端部内面の折り返しの特徴からS字甕と推定される。おそらく混入であろう。

1～6の坏蓋模倣坏は口径13cmから15.8cmまでの幅があるが、口径15cm台の大型品が主体で、それに坏身模倣坏が僅かに伴う。煮沸具も長胴甕と小型甕がセットを構成する。

住居跡の時期については遺構の重複関係や出土土器の様相から6世紀後葉に位置づけられる。



第34図 第14号住居跡出土遺物

第13表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	坏	(15.8)	4.1	—	CEHI	30	普通	暗赤褐	内外面黒色処理		
2	土師器	坏	13.0	3.4	—	ACEHIL	45	普通	明赤褐			
3	土師器	坏	(14.5)	3.2	—	BCEHI	70	普通	明赤褐	No.3	27-1	
4	土師器	坏	(15.8)	3.9	—	CEHI	40	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理		
5	土師器	坏	(13.7)	3.0	—	ACEHI	20	普通	橙			
6	土師器	坏	(14.6)	4.4	—	CEHI	30	普通	明赤褐	外面黒斑	27-2	
7	土師器	坏	(12.4)	3.7	—	CHI	40	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	27-3	
8	土師器	鉢	(13.8)	8.4	—	BCGH	25	普通	橙	No.5		
9	土師器	鉢	11.7	11.5	6.7	CDEH	100	良好	明赤褐	外面黒斑 内面黒色	No.11	27-4
10	土師器	小型甕	(8.8)	10.2	—	ACEHIL	40	普通	橙	外面黒斑 No.12 貯蔵穴		
11	土師器	甕	(9.5)	22.4	6.0	ACEHIL	50	普通	にぶい橙	内面黒斑 0.3~1.0cm大の 石英多し No.2 貯蔵穴	27-5	
12	土師器	甕	(17.7)	20.1	—	BCHIL	25	普通	にぶい黄橙	No.10		
13	土師器	甕	(18.6)	25.3	—	BCEHL	40	普通	橙	外面黒斑 No.4		
14	土師器	甕	—	6.4	5.7	BCEIL	60	普通	橙			
15	土師器	甕	—	3.8	6.7	BCEHIL	60	普通	橙	外面黒斑		
16	土師器	台付甕	—	5.3	(10.0)	BCEHI	30	普通	橙	S字甕か		
17	土師器	甕	—	8.3	5.3	BCEHIL	60	普通	明赤褐	内面黒色 No.1		
18	土製品	支脚	高さ7.4cm 径5.4cm		—	AI	—	普通	にぶい橙	柱状支脚		

第15号住居跡 (第35図)

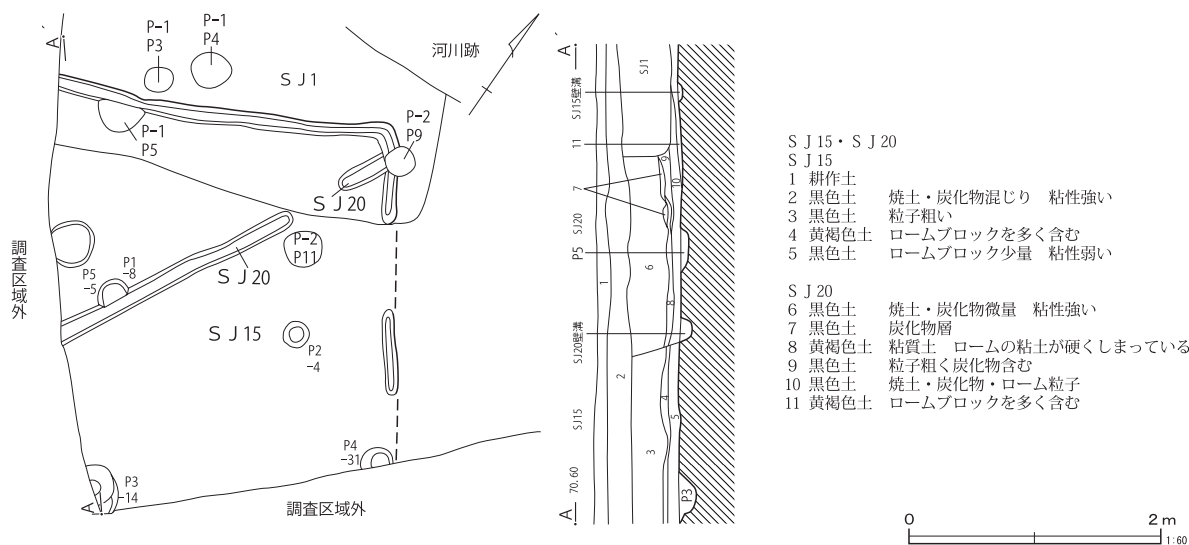
第15号住居跡は調査区南西端のP-1・2グリッドに位置する。第1・20号住居跡と重複し、土層断面の観察から本住居跡が最も古いことが分かる。住居跡の南西側から南東側は調査区域外に延びているため、全容は不明である。住居の掘り込みは浅く、床面及び壁溝を検出したにすぎない。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸

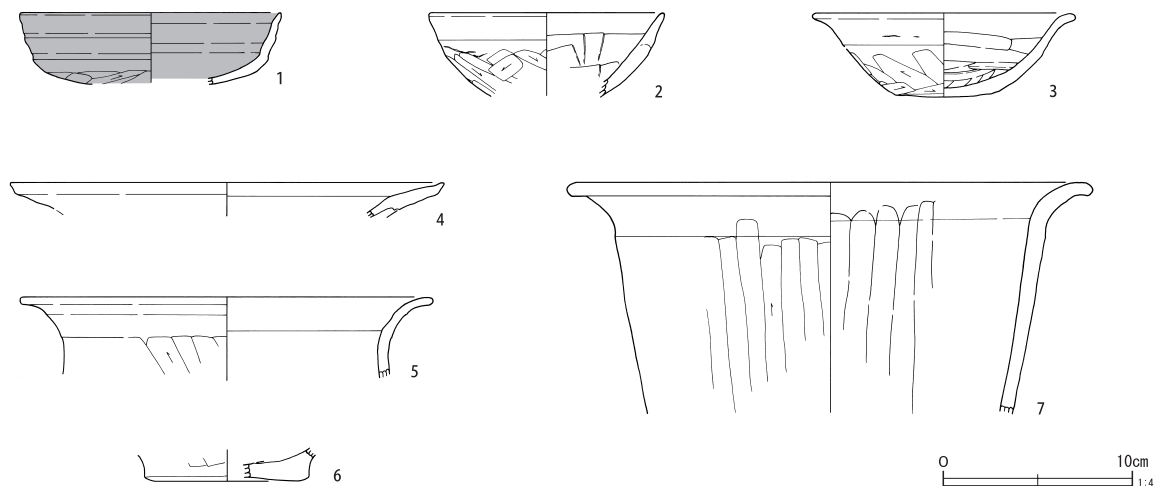
長3.35m、短軸長2.74m、深さ0.02mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は2層に分層され、黄褐色土、黒色土が自然堆積する。ピットは5本検出された。規則的な配置を示さず、深度も浅いことから住居に伴わないものと考えられる。壁溝は幅10~15cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器坏・壺・甕・甗等が



第35図 第15・20号住居跡



第36図 第15号住居跡出土遺物

第14表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.7)	3.7	—	CEHI	20	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理	27-6
2	土師器	坏	(12.3)	4.4	—	CEHI	25	普通	橙		
3	土師器	坏	(14.0)	4.4	5.1	BCHIL	30	普通	橙	P 2 G-51	
4	土師器	壺	(23.0)	1.7	—	BCHI	10	普通	橙		
5	土師器	甕	(21.8)	4.2	—	BCEHI	5	普通	にぶい橙		
6	土師器	甕	—	1.6	(8.7)	CEHI	30	普通	橙		
7	土師器	甕	(27.9)	12.1	—	BCHIL	10	普通	橙		

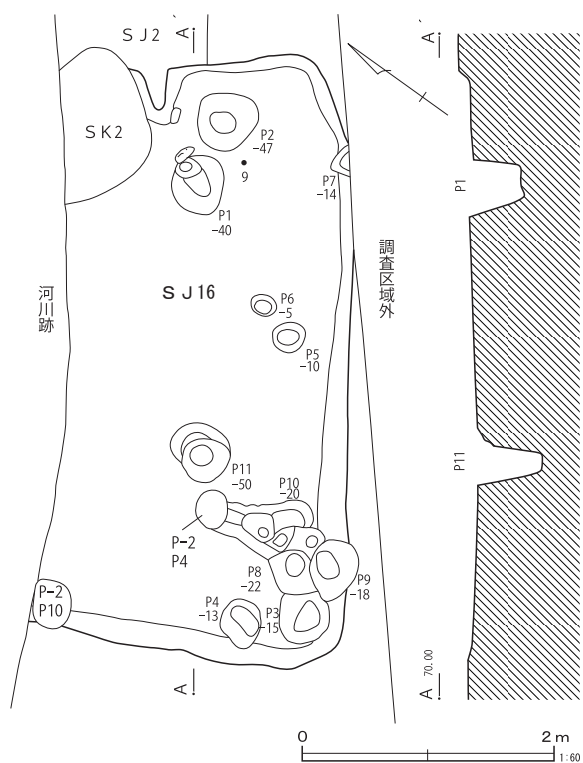
ある(第36図)。いずれも埋土中から出土した。1は口径13.7cmの有段口縁坏で、内外面黒色処理される。2は体部の深い坏で、口縁部は僅かに外反する。3は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反する坏である。4の壺口縁部は混入であろう。5・6は甕である。5は口縁部が外折し、寸胴形となる。7は大型甕と推定される。

住居跡の時期は、体部の浅い有段口縁坏の特徴から6世紀後葉から末葉に位置づけられる。

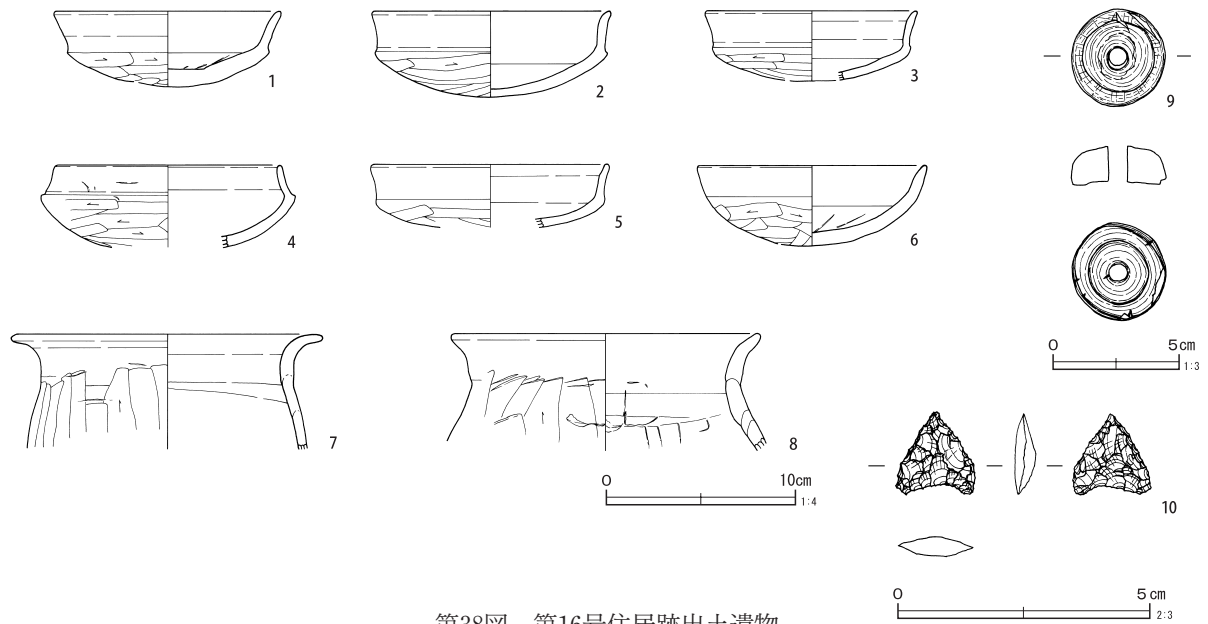
第16号住居跡 (第37図)

第16号住居跡は調査区南西端のP-2グリッドに位置する。住居跡の北西側は近代の河川跡によって削り取られ、さらに第2号住居跡と第2号土壌によってカマドの大部分が削平されていた。

平面形は不整形と推定される。残存長は長軸長4.62m、短軸長2.40m、深さ0.08mである。主



第37図 第16号住居跡



第38図 第16号住居跡出土遺物

第15表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	3.9	—	BCEHI	20	普通	褐灰	内面橙	
2	土師器	坏	(12.6)	4.5	—	CHI	25	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(11.1)	3.6	—	CEH	20	普通	橙		
4	土師器	坏	(11.8)	4.3	—	ACHI	20	普通	にぶい褐		
5	土師器	坏	(12.5)	3.3	—	ACEHI	30	不良	明赤褐		
6	土師器	坏	(12.0)	4.2	—	ACEHI	30	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	(16.6)	6.1	—	BCEHI	20	普通	橙		
8	土師器	甕	(16.2)	6.1	—	AEHIL	20	普通	橙		
9	石製品	紡錘車	上径2.8cm 底径3.7cm 孔径0.8cm 厚さ1.5cm 重さ35.48g			滑石			No. 1	89-4	
10	石製品	石鏃	長さ1.6cm 幅1.6cm 厚さ0.4cm 重さ0.76g			黒曜石				93-8	

軸方位はN-56°-Eを指す。

カマドは北東壁に設けられていたが、第2号住居跡及び第2号土壌によって壊され、カマド右袖部を残すのみである。カマド右脇のP2は、長径0.49m、短径0.45m、深さ0.47mで、位置的に見て貯蔵穴の可能性が考えられる。

床面は概ね平坦で、掘り込みが全体に浅い。ピットは11本検出された。P1・P11は、形状、埋土が類似しており、位置的に見て主柱穴であろう。柱間距離は2.3mである。その他のピットは小規模で深度も浅く、切り合い関係にあることから、住居跡に伴うものではない。

出土遺物は土師器坏・甕、滑石製紡錘車、縄文

時代の石鏃等がある(第38図)。すべて埋土中から出土した。

坏は1~3・5の坏蓋模倣坏、4の坏身模倣坏、6の半球形坏に区分される。このうち坏蓋模倣坏は口縁部が直立する2・3・5と口縁部が外反して立ち上がる1に分けられる。4の坏身模倣坏は口径11.8cmと小振りである。9は滑石製紡錘車である。断面半円形で、下面は中窪みに整形されている。10は黒曜石製の石鏃である。平基無茎で平面形状は正三角形に近い。縄文時代の所産である。

住居跡の時期は、6世紀後半に大型化する模倣坏以前の様相を示す小型品が多いことから6世紀前葉に位置づけられる。

第17号住居跡 (第39図)

第17号住居跡は調査区南西端の調査区際、O—3、P—2・3グリッドに位置する。住居跡の南東側の大半が調査区域外に延びる。第23・27号住居跡、第2・61号溝跡と重複し、北西隅部付近の壁面を残すのみであった。

平面形は方形系と推定されるが、明確でない。残存規模は、長軸長2.44m、短軸長0.87m、深さ0.16mである。主軸方位はN—30°—Eを指す。

床面は平坦である。ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物がなく、住居跡の時期は不明である。

第18号住居跡 (第40図)

第18号住居跡は調査区南西端のO—2・3グリッドに位置する。第14・19・21号住居跡と重複し、和泉期後半の第21号住居跡を切り、鬼高期後半の第14・19号住居跡に切られる。また住居跡の西側を大きく河川跡によって削平され、住居跡の北東隅部から東壁部分をかろうじて残す。

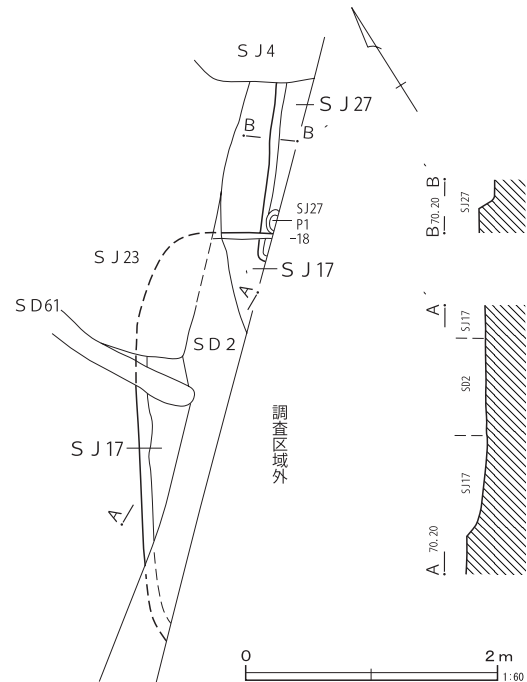
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.54m、短軸長0.82m、深さ0.20mの比較的小型の住居跡と推定される。主軸方位はN—35°—Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は自然堆積で、黒色土を主体とする。南東隅部付近には床下土壌が確認された。平面楕円形で、規模は長径0.64m、短径0.50m、深さ0.25mである。埋土はローム粒子・焼土粒子の混入が見られる。調査の制約もあり明確でないが、本来は貯蔵穴の可能性もある。

ピットは1本検出された。P1は長径0.42m、短径0.26m、深さ0.14mである。土層断面の観察では床下土壌を切り込むことから、住居跡に伴うものと考えられる。

出土遺物は少ないが、土師器片がある(第41図)。1の坏は床下土壌の埋土中からの出土である。底面から16cmほど浮いた状態で出土した。

1・2とも体部が扁平な坏蓋模倣坏である。3



第39図 第17・27号住居跡

は口径16.6cmの大振り of 坏で、口縁端部が強く外反する。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や模倣坏の特徴から6世紀初頭に位置づけられる。

第19号住居跡 (第40図)

第19号住居跡は調査区南西端のO—3グリッドに位置する。第14・18号住居跡を切り、住居跡の西側を河川跡によって大きく削平される。かろうじて住居跡の北東隅部から東壁のみを残していた。

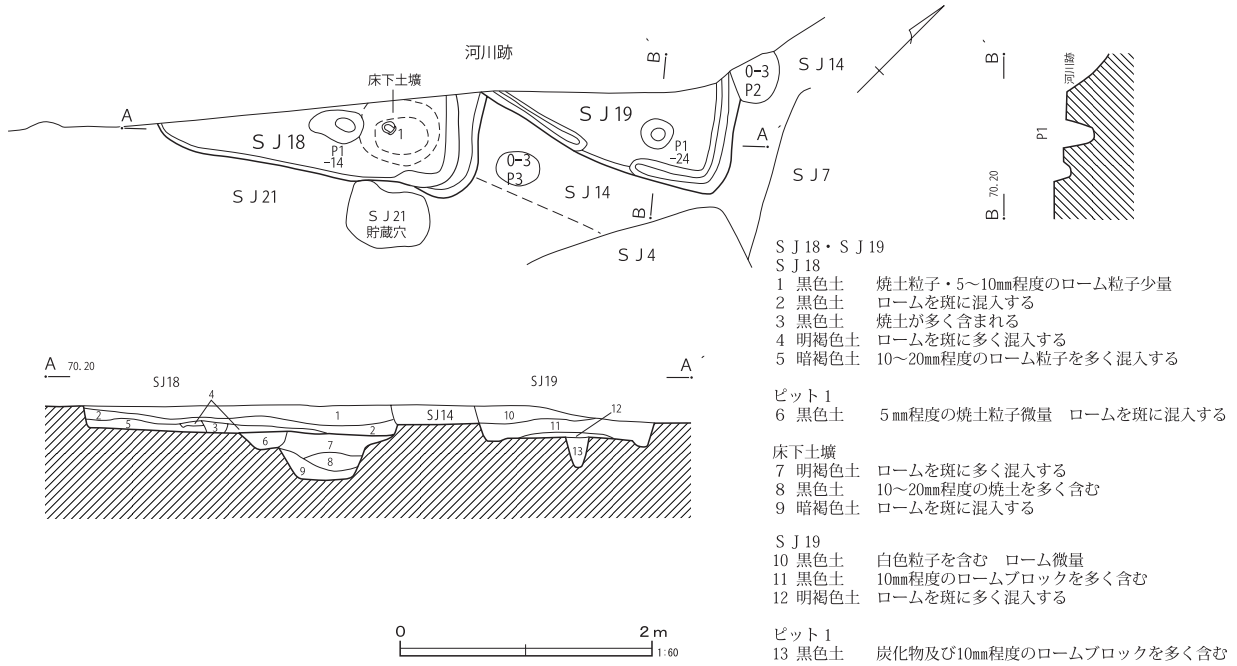
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長1.96m、短軸長0.96m、深さ0.16mである。主軸方位はN—19°—Wである。

床面は概ね平坦である。埋土は黒色土を主体とする。自然堆積であろう。

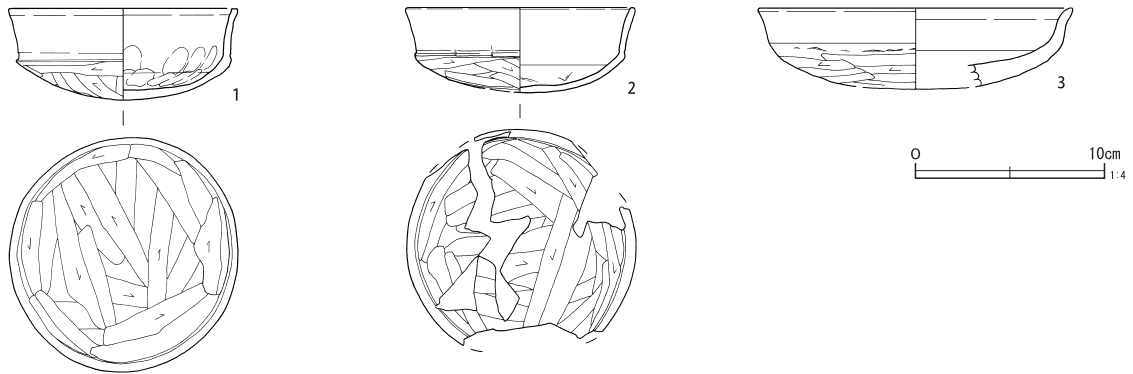
ピットは南東隅部寄りに1本検出された。P1は長径0.24m、短径0.23m、深さ0.24mである。

壁溝は一部途切れながら全周する。幅8～19cm、深さ5cmほどである。

出土遺物がないため住居跡の時期は明確にできないが、遺構の重複関係から古墳時代後期に位置づけられる。



第40図 第18・19号住居跡



第41図 第18号住居跡出土遺物

第16表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	4.8	—	A B C E G H	100	良好	橙	外面底部黒斑 No. 1	27-7
2	土師器	坏	12.0	4.5	—	C E H I	75	普通	橙		
3	土師器	坏	(16.6)	4.1	—	B C G H I	25	普通	橙		

第20号住居跡 (第35図)

第20号住居跡は調査区南西端のP-1・2グリッドに位置する。土層断面の観察では、第1号住居跡に切られ、第15号住居跡を切っていることがわかる。住居跡の北側は河川跡によって削平され、南西側は調査区域外に延びる。床面の一部と壁溝を検出しただけで住居跡の全容は不明である。

検出した床面 (壁溝) の長さは2.95mである。主軸方位はN-30°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は黒色土を主体とする。住居跡に伴うピットはない。壁溝は直接的に延び、幅12~16cm、深さ12cmほどである。

出土遺物はまったくない。時期は遺構の重複関係から古墳時代後期と考えられる。

第21号住居跡 (第43図)

第21号住居跡は調査区南西端のO-2・3グリッドに位置する。第4・14・18・19・23号住居跡との重複が著しく、個々の新旧関係については明確でない。本住居跡のカマドが床面を壊している第23号住居跡以外は、すべて新しいと考えられる。北西側は河川跡によって大きく削平され、南東壁に設けられたカマドから南隅部を中心に住居跡を検出した。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.46m、短軸長1.72m、深さ0.06mである。主軸方位はN-143°-Eを指す。

カマドは南東壁に設けられていた。燃焼部を壁内に収め、煙道部が壁外に延びるタイプである。煙道部は削平を受け明瞭でないが、燃焼部長0.55m、カマド袖幅0.75m、燃焼部底面幅0.25mである。カマド袖部は明褐色土で構築されていた。

床面は概ね平坦である。貯蔵穴、壁溝等は検出されず、カマド手前からピット1本のみが検出された。P1は長径0.66m、短径0.44m、深さ0.11mである。

出土遺物は少なく、僅かに土師器高坏がある(第42図)。1の高坏は住居跡中央部の西寄り床面直上から出土した。坏部内面に放射状の暗文を施した

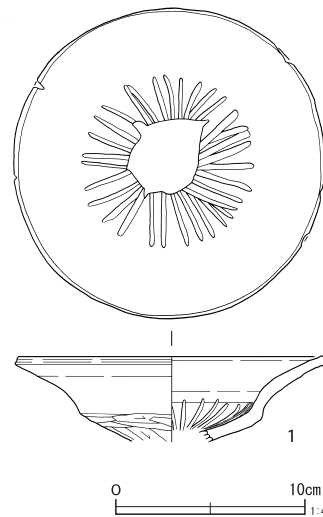
ものである。坏底部が浅く窪む特徴的なもので、口唇部を面取りする。

住居跡の時期は高坏の特徴から、和泉期後半から終末の5世紀中葉に位置づけられる。

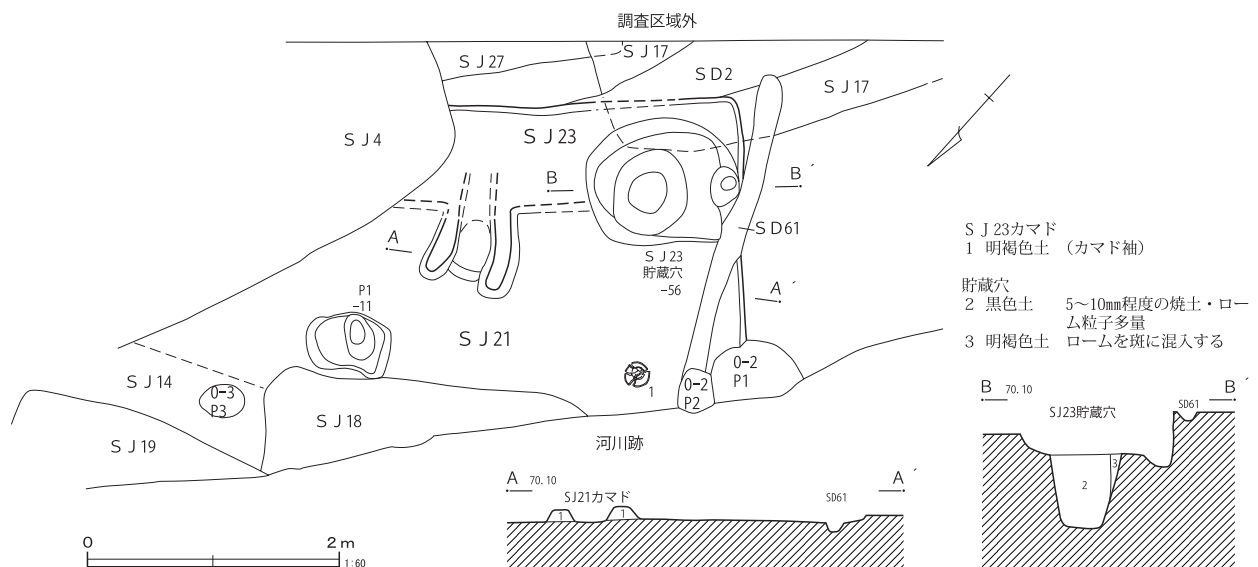
第22号住居跡 (欠番)

第23号住居跡 (第43図)

第23号住居跡は調査区南西端のO-2・3グリッドに位置する。第4・17・21・27号住居跡等との重複が著しい。出土遺物等の検討から、本住居跡が最も古く位置づけられる。重複する第21号住居跡とは主軸方位が一致しており、連続的な建



第42図 第21号住居跡出土遺物



第43図 第21・23号住居跡

第17表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	16.0	4.5	—	BCEGHI	95	普通	明赤褐	内面放射状暗文 外面黒斑 No.1	

て替えの可能性も考えられる。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.56m、短軸長2.26m、深さ0.04mである。主軸方位はN-134°-Eを指す。

貯蔵穴は南西隅部に設けられていた。平面略円形を呈し、長径1.18m、短径0.98m、深さ0.56mである。埋土は黒色土・明褐色土を主体とする。

出土遺物は少ないが、貯蔵穴から土師器坏が出土している(第256図10)。なお、貯蔵穴は調査段階ではO-3グリッドのP1として扱ったが、整理段階で第23号住居跡の貯蔵穴に変更した。出土した坏は、坏蓋模倣坏としては新しい時期の所産であり、住居跡に直接伴わないものと判断される。明確な出土遺物がなく、住居跡の時期は不明であるが、遺構の重複関係から古墳時代中期としておきたい。

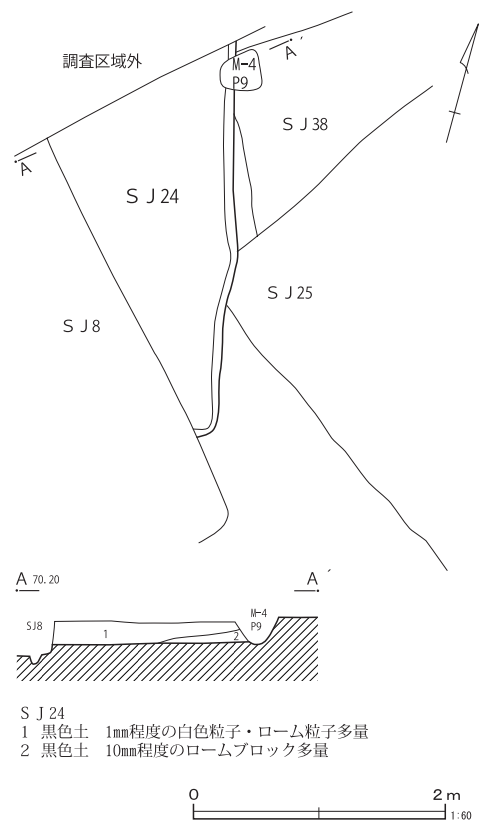
第24号住居跡 (第44図)

第24号住居跡は調査区南側のM・N-4グリッドに位置する。第8・25・38号住居跡と重複する。住居跡の東壁から南東隅部にかけてを残存し、北壁部分は調査区外に延びている。五領期の第38号住居跡との先後関係は明確でないが、他の2軒には切られている。

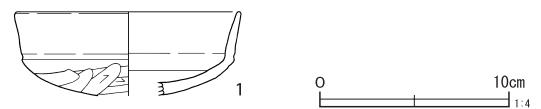
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.08m、短軸長1.47m、深さ0.19mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は黒色土を主体とし、ロームブロックの混入が多い。ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は少なく、土師器模倣坏が1点出土した(第45図)。1は体部が扁平で浅くなっており、6世紀後半を中心とする時期に位置づけられる。西側に重複する第8号住居跡からの混入の可能性が高い。住居跡の時期については確実に伴う遺物がなく不明である。



第44図 第24号住居跡



第45図 第24号住居跡出土遺物

第18表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.7)	4.4	—	CEHI	30	普通	橙	No.10	28-1

第25号住居跡（第46～48図）

第25号住居跡は調査区南側のM・N-4・5グリッドに位置する。五領期の第38号住居跡、和泉期の第40号住居跡を切り、住居跡の西隅部は第24号住居跡に切られる。北東壁にカマドをもつ一辺5m前後の住居跡で、カマド、貯蔵穴周辺から良好な一括遺物が出土した。

平面形は、比較的形の整った南北方向に僅かに長い長方形を呈する。規模は長軸長4.79m、短軸長4.44m、深さ0.48mである。主軸方位はN-34°-Eを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は大きく6層に分層され、概ね自然堆積を示す。床面を覆うように薄く堆積する第6層は炭化物を多量に含む黒色土で、床面上に敷かれていた有機質の敷物（ムシロ等）が炭化した可能性も考えられる。

カマドは北東壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部が壁内に収まり、煙道部をもたないタイプで、燃焼部奥壁と、住居跡の壁面が一体化した構造である。カマド袖部は壁面に対して「ハ」の字に開いた状態で取り付けられている。全長1.20m、カマド袖幅0.90m、深さ0.52m、燃焼部底面幅0.30～0.40mである。

カマド埋土は第7層が天井崩落土、焼土ブロックからなる赤褐色土の第10層、炭化物を主体とする黒色土の第11層が使用面に相当する。燃焼部底面のほぼ中央には円礫の上に35の高坏を伏せて支脚に転用していた。また燃焼部底面は被熱により良く焼けていた。カマド袖部は明褐色土を用いて構築されており、内壁面は被熱により赤変していた。

貯蔵穴はカマド右脇の北東隅部に検出された。平面楕円形を呈し、長径1.14m、短径0.94m、深さ0.50mである。また、貯蔵穴の南側に接してL字形の周堤帯と平面方形の浅い掘り込みをもつ土壙が検出された。周堤帯は床面よりも僅かに盛り上がった土手状の造作であった。

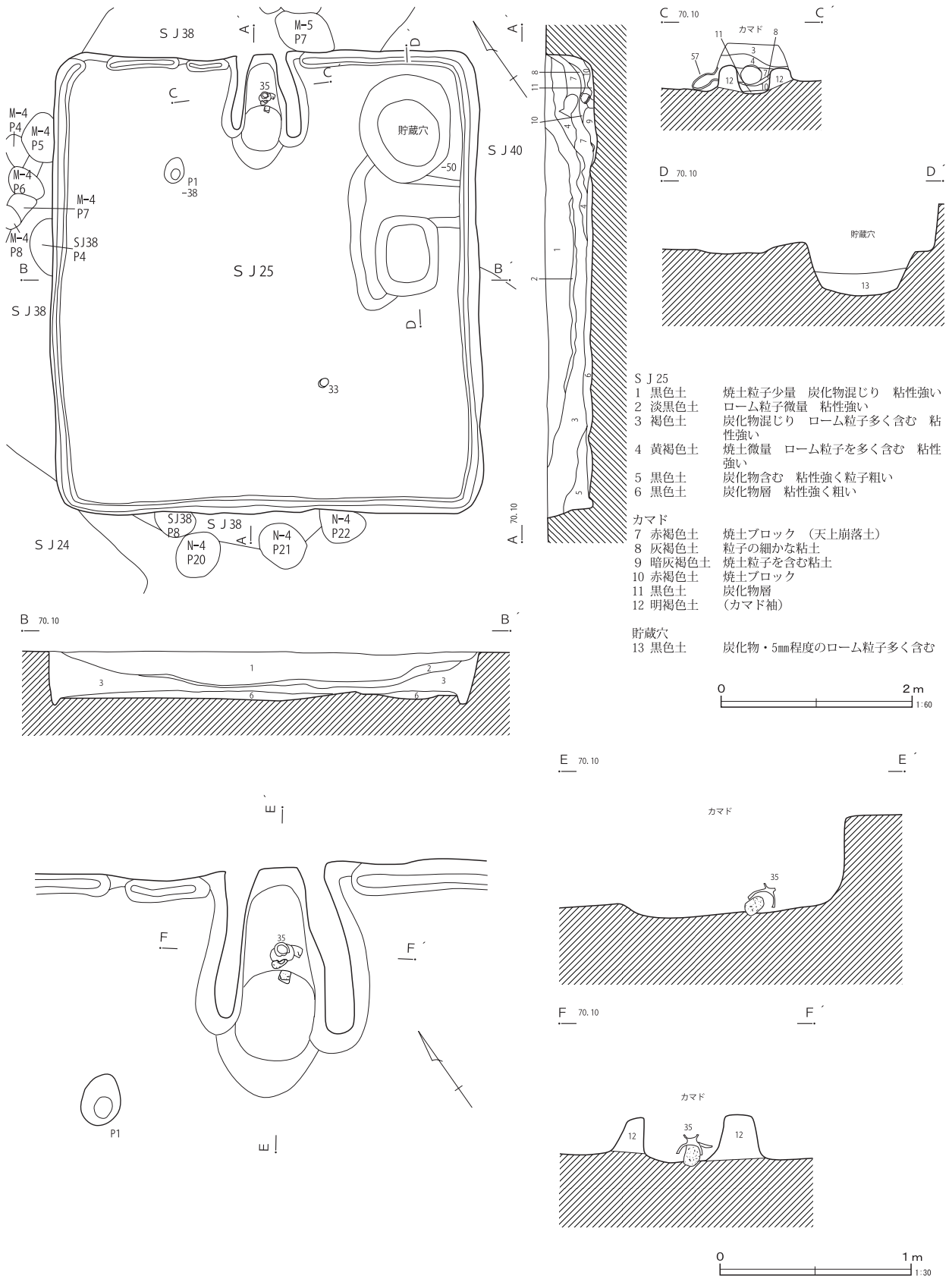
ピットはカマド左前方に1本のみ検出され、主柱穴等は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、規模は幅10～22cm、深さ10cmほどである。

出土遺物は多く、土師器坏・埴・高坏・小型壺・短頸壺・壺・小型甕・甕・甑、須恵器高坏・短頸壺、有孔円板、砥石等がある（第49～54図）。

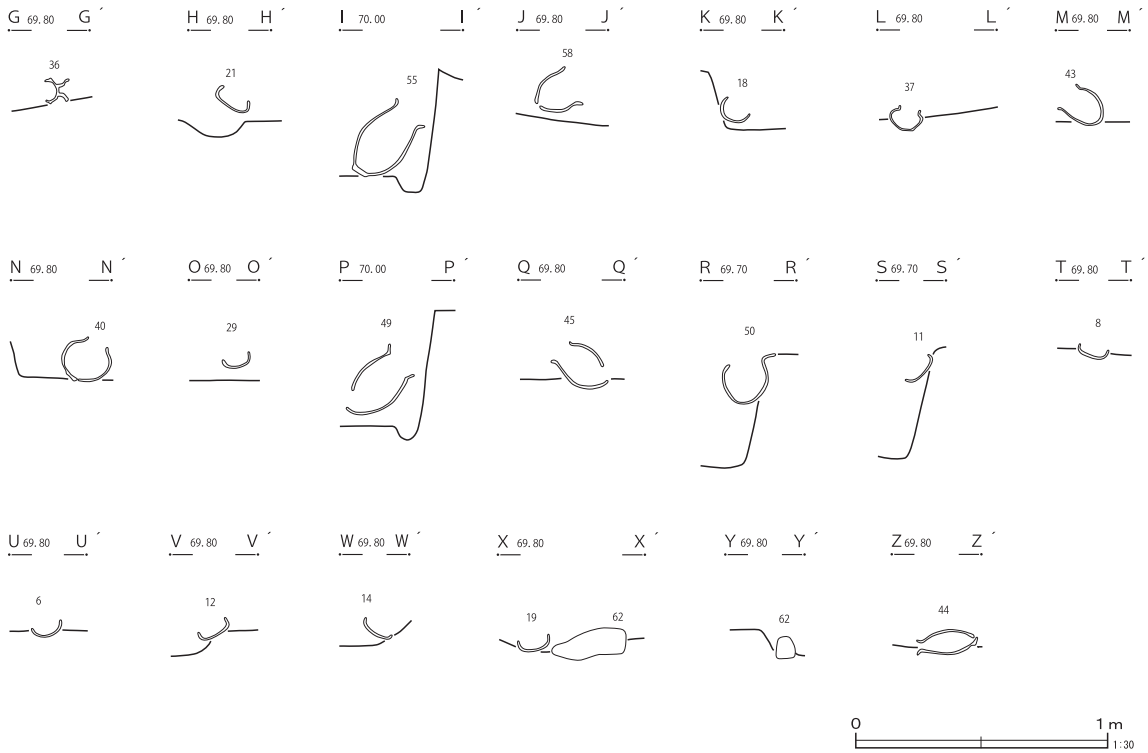
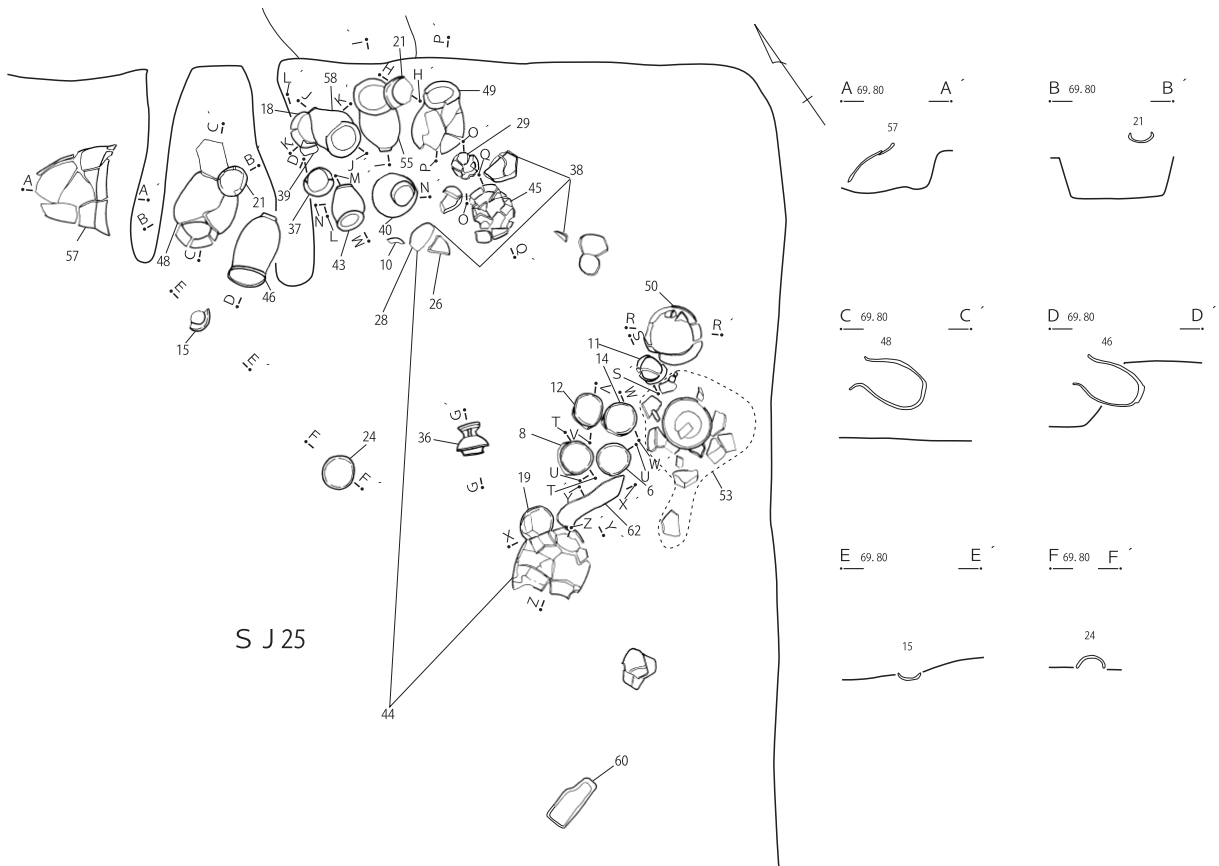
遺物は、カマド及び貯蔵穴周辺からまとまって出土した。カマドには46と48の甕が掛口に掛けられたままの状態に残され、その脇から21の坏が出土している。また、前述したように燃焼部底面には転用支脚として円礫の上に被せた状態で35の高坏が出土した。カマド前面からは15の坏、カマド左袖脇からは57の大型甑、カマド右袖脇からは壁にもたれ掛かるように49・55の甕、58の小型甑、18・21の坏、39・43の小型甕、40の短頸壺、37の須恵器短頸壺等が出土した。貯蔵穴の北側からは26・29の坏、28の埴、38の小型壺、45の甕が壁際にまとまっていた。さらに、貯蔵穴南側の周堤帯上には壁側に53の壺を置き、その脇に6・8・12・14の坏を4個、口縁部を上にして2列に意図的に配列されていた。周辺からは36の須恵器有蓋高坏をはじめ、19・24の坏、44の甕、62の大型砥石が出土した。また、南西にやや離れた場所から60の大型砥石が床直で出土した。

貯蔵穴の内部からも多数の土器が出土している。貯蔵穴上面からは南側の肩口から11の坏と50の甕が床面から内部に落ち込むような状態で出土している。北側の肩口部分では1・4・5・7・13・17・30の坏が2～3個重なった状態で落ち込んでいるほか、33の埴、34の高坏、56の甕等が出土した。また、底面付近からは47の甕、51の広口壺、54の二重口縁壺、9・10・16・23・27の坏がまとまって出土している。この他に埋土中から59の滑石製有孔円板、61の砥石が出土している。

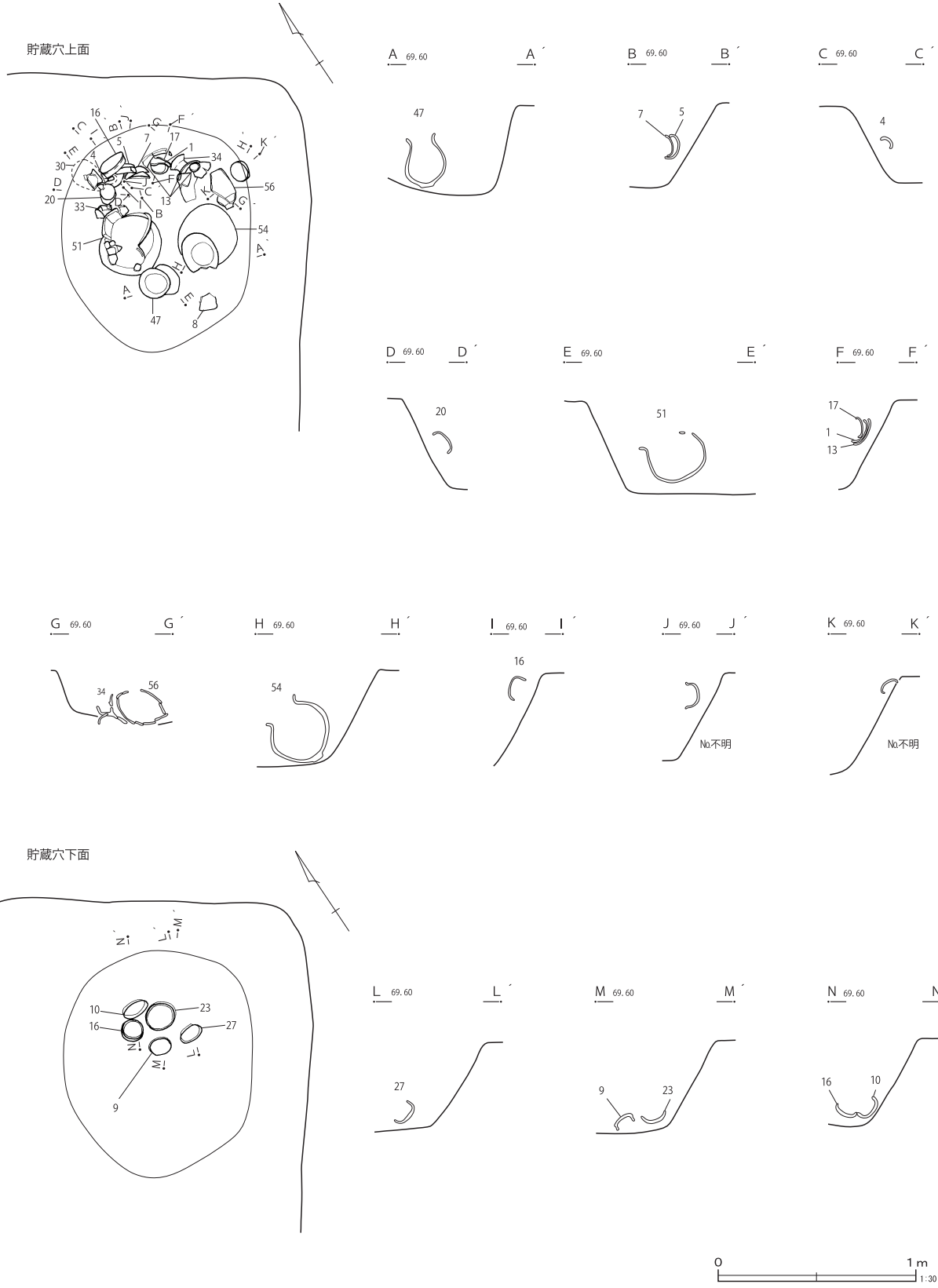
1～32は坏である。口縁部が直立し、口唇部を丸く収める坏蓋模倣坏が主体を占め、これに口縁部が若干外傾し、口唇部に端面をもつ模倣坏が定



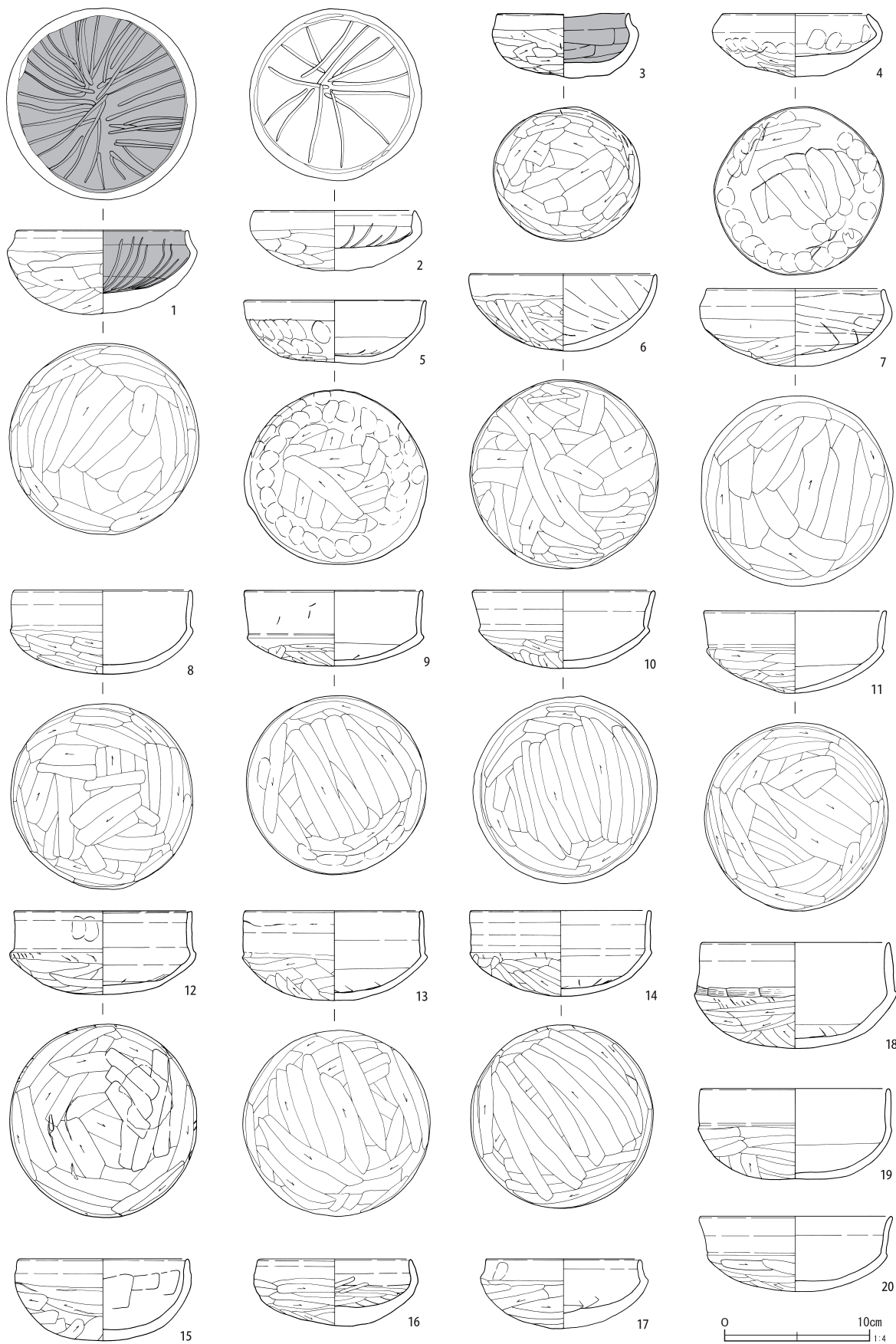
第46図 第25号住居跡・カマド



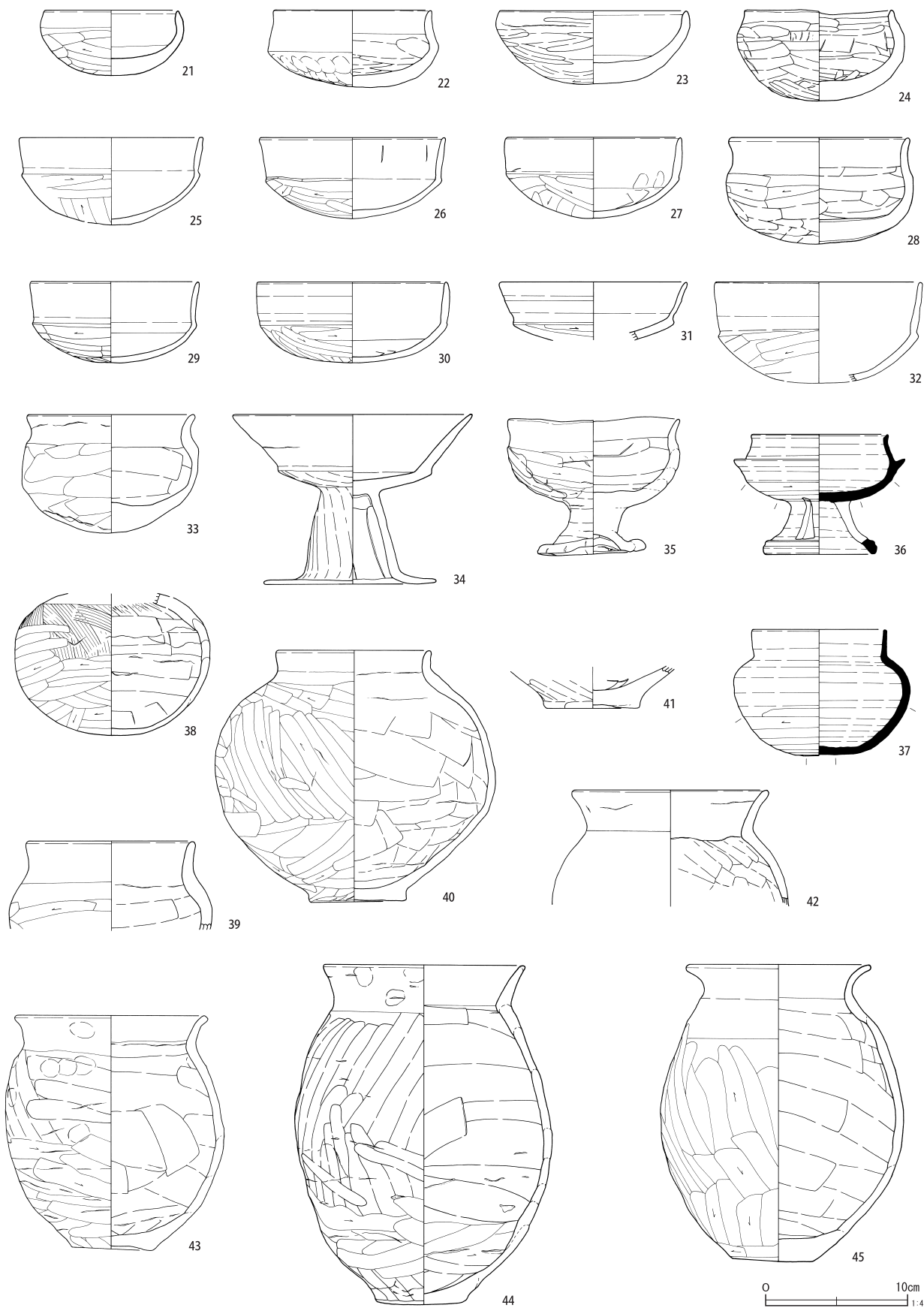
第47图 第25号住居跡遺物出土状况 (1)



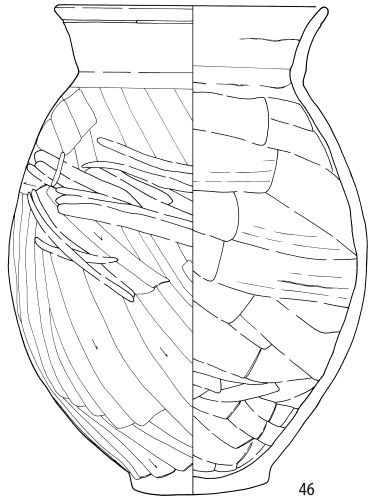
第48図 第25号住居跡遺物出土状況（2）



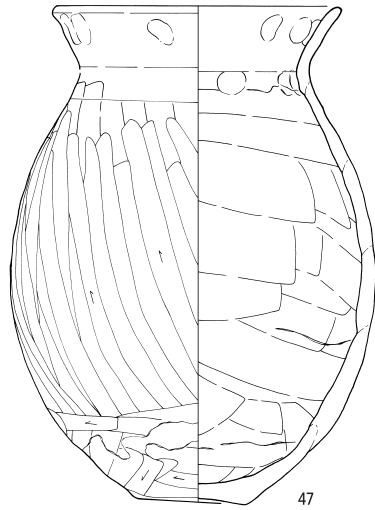
第49図 第25号住居跡出土遺物（1）



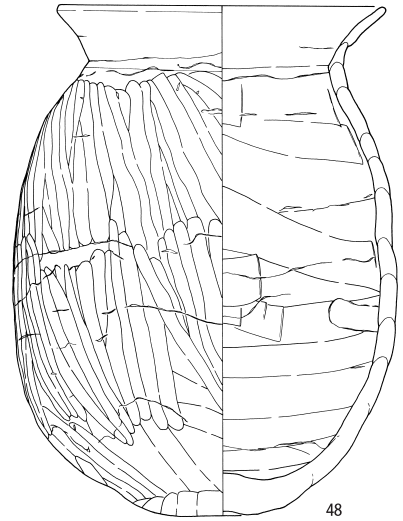
第50図 第25号住居跡出土遺物（2）



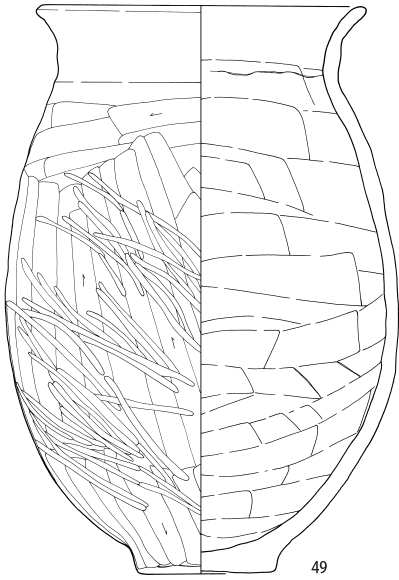
46



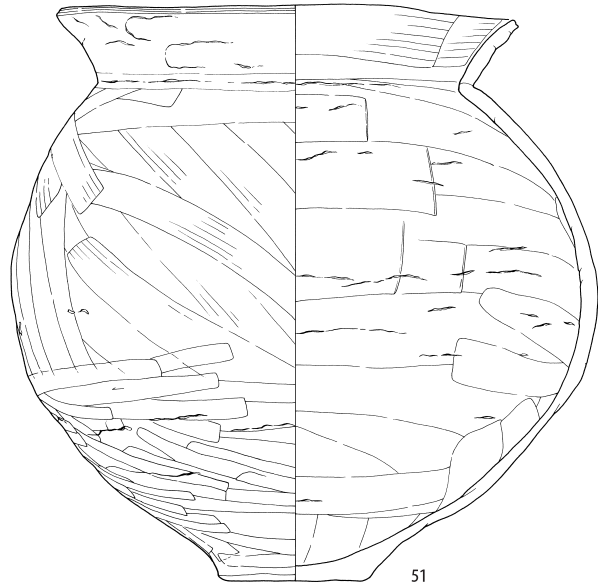
47



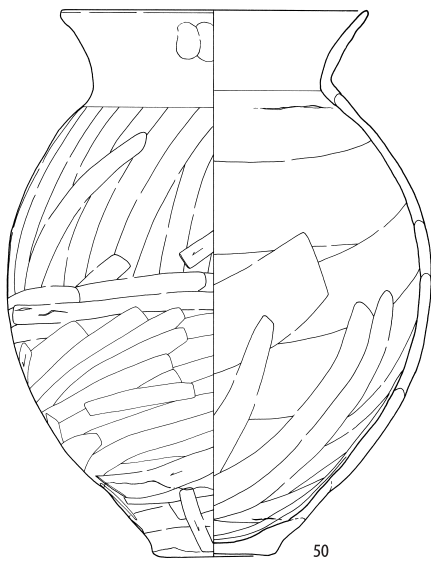
48



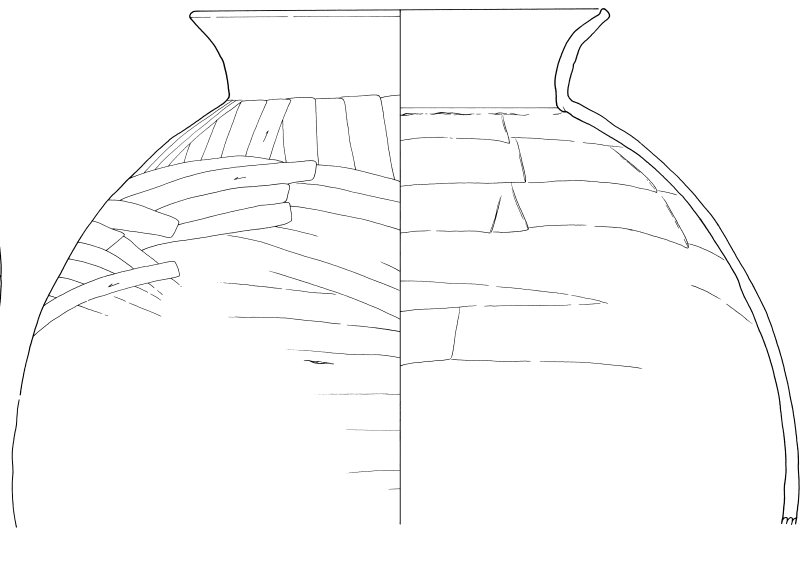
49



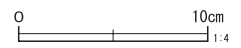
51



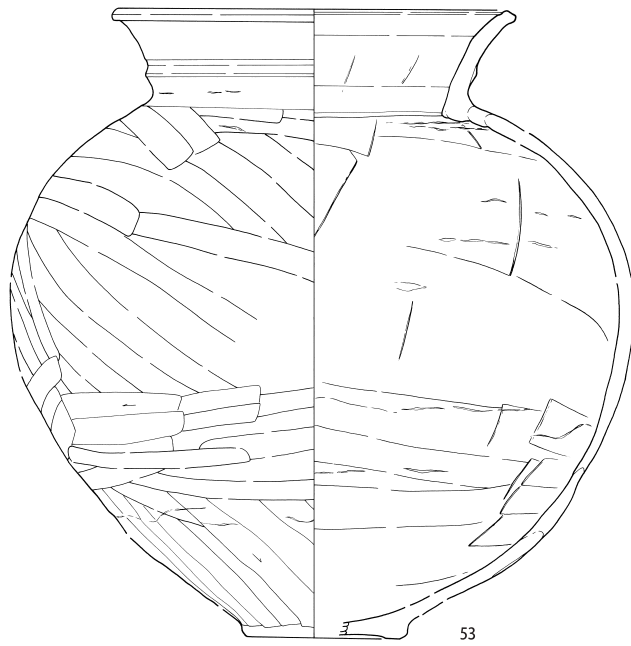
50



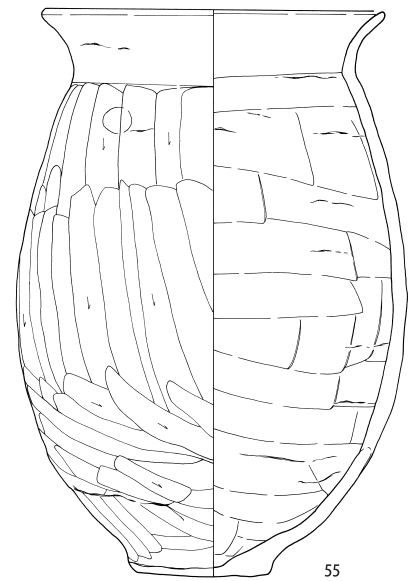
52



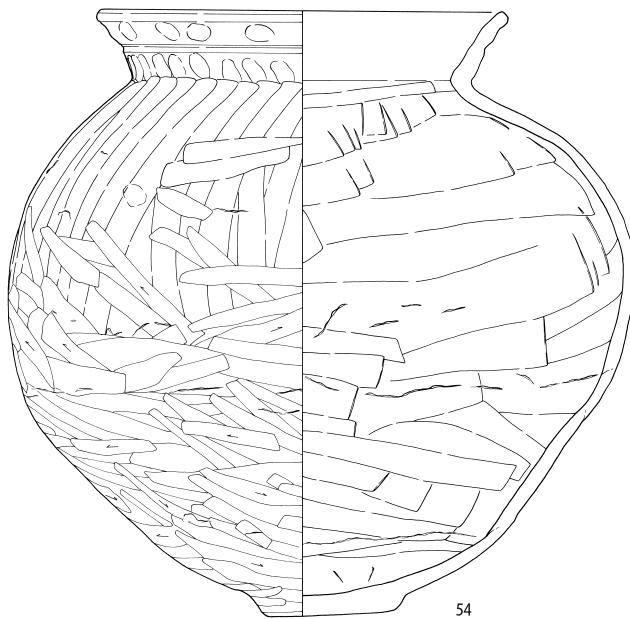
第51図 第25号住居跡出土遺物（3）



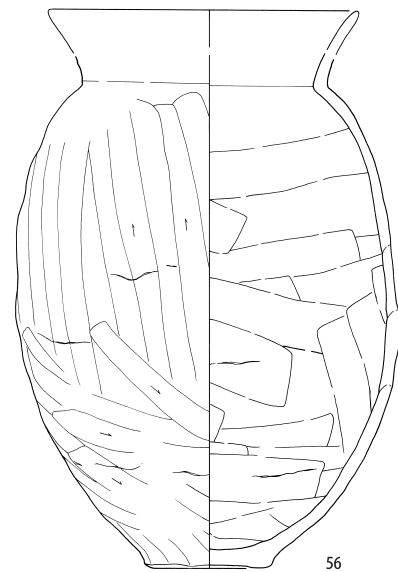
53



55



54



56

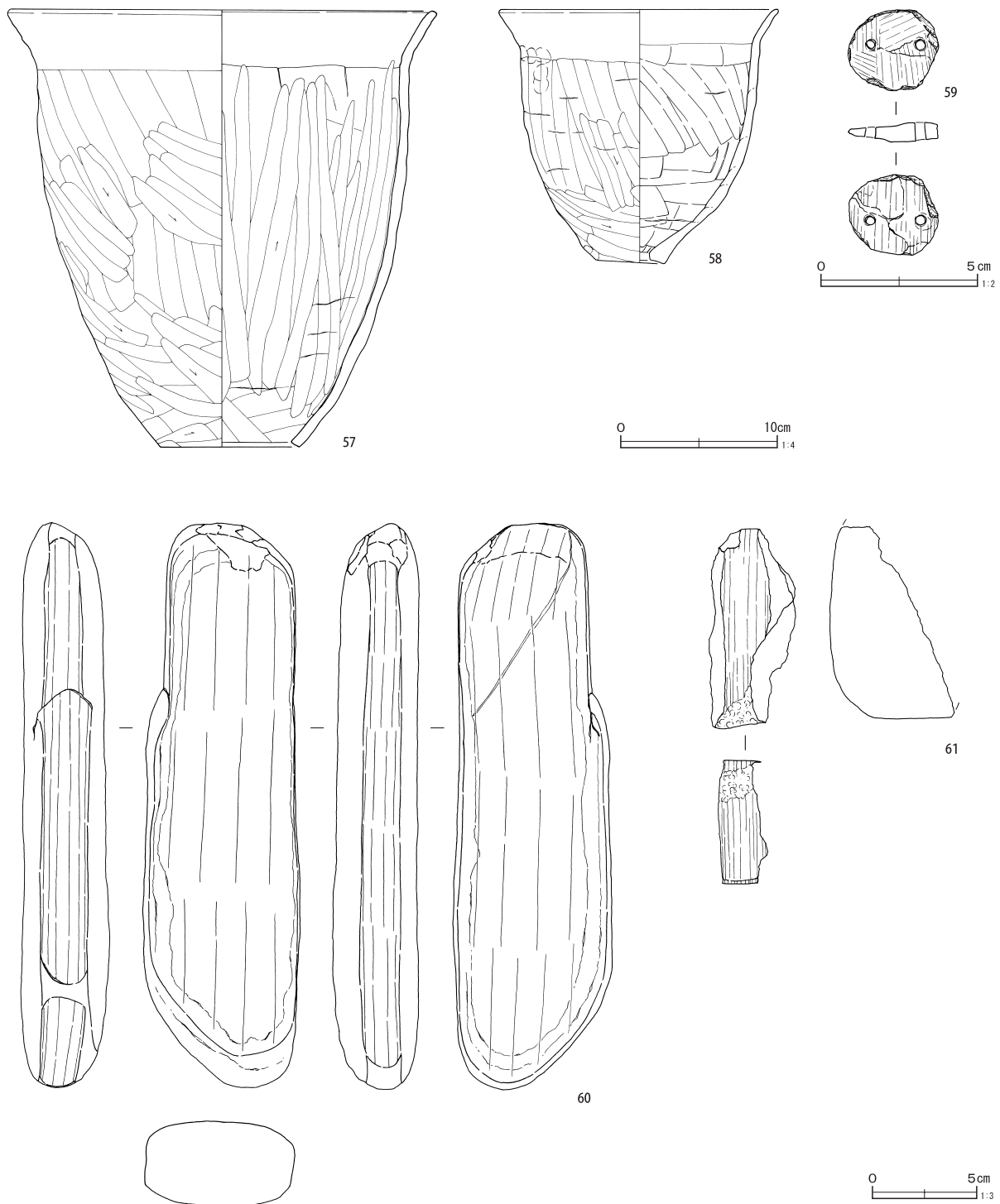


第52図 第25号住居跡出土遺物（4）

量で加わっている。1～4・17・21は口縁部の内屈する須恵器坏身模倣坏である。1・2は内面に放射状の暗文が施される。次期に定型化する坏身模倣坏の初現的なものであろう。この他に32のように口径14cmを超える大型坏の存在も該期の特

徴である。また前時期の系譜を引く6・15・16・21・23の半球形坏や口縁部が短く外反する和泉型の壺に近い24・28も残存する。高坏は34の和泉型高坏と和泉型壺に短い脚部が付いた35がある。

38は小型壺で口縁部を欠損しており、直口壺に



第53図 第25号住居跡出土遺物（5）

なる可能性もある。40は短頸壺としたものである。44～50・55・56の甕は、胴部中位に最大径をもち、まだ長胴化の進行していないものである。これに39・42・43の小型甕が伴う。51は広口の胴張甕、52は器高50cm前後に復元される大型甕である。

53・54は二重口縁壺で、口縁部の中位に段を作り、口唇部を面取りする。57は大型甕、58は小型甕のセットである。

須恵器は36の有蓋高坏と37の短頸壺がある。36はTK47型式併行期のもので、おそらく猿投窯産



62

第54図 第25号住居跡出土遺物（6）

の搬入品であろう。短頸壺は口縁部が直立し、胴部下半に回転ヘラケズリを施すもので、群馬産である。時期は高坏と同じくTK47型式併行期であろう。

土器以外では59の滑石製有孔円板や60～62の3点の砥石の出土が目される。特に60・62は大

型砥石であり、当時の農耕具等の鉄器の保有状況や普及率の問題を考える上で貴重である。

住居跡の時期については、典型的な坏蓋模倣坏や須恵器高坏などの出土から5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられる。

第19表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第49~54図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.7	5.7	—	ABCDHL	95	良好	橙	内面黒色処理 放射状暗文 貯蔵穴No11	28-2
2	土師器	坏	11.0	4.1	—	ACFHI	100	普通	橙	暗文	28-3
3	土師器	坏	9.0	4.4	—	CEGHI	100	普通	橙	内面黒色処理 No40	28-4
4	土師器	坏	10.0	4.3	—	ACDHI	100	普通	橙	煤付着 貯蔵穴No.6	28-5
5	土師器	坏	12.5	4.2	—	ABCDH	95	良好	橙	貯蔵穴No.4	28-6
6	土師器	坏	12.8	5.3	—	BCDHI	100	良好	橙	No32	28-7
7	土師器	坏	12.2	5.3	—	ACEHI	100	良好	橙	貯蔵穴No.5	28-8
8	土師器	坏	12.2	5.8	—	ACHI	95	良好	橙	煤付着 No31	28-9
9	土師器	坏	12.2	5.2	—	ACDHI L	100	良好	橙	黒斑 貯蔵穴No18	28-10
10	土師器	坏	12.5	5.3	—	AHI	100	普通	にぶい橙	貯蔵穴No19	29-1
11	土師器	坏	12.5	5.6	—	BCDHL	100	良好	橙	No29	29-2
12	土師器	坏	12.2	5.7	—	CEHI	100	良好	橙	No33	29-3
13	土師器	坏	12.2	6.1	—	ACHI	95	良好	橙	貯蔵穴No12	29-4
14	土師器	坏	12.7	6.0	—	CEHI J	100	普通	橙	No34	29-5
15	土師器	坏	11.7	5.6	—	AHI	60	良好	橙	No.6	29-6
16	土師器	坏	10.4	4.6	—	ACHI	95	普通	橙	貯蔵穴No20	29-7
17	土師器	坏	10.6	4.7	—	ACGHI	80	普通	橙	黒斑 貯蔵穴No10	29-8
18	土師器	坏	12.9	7.2	—	ABCDHI L	100	良好	橙	No12	
19	土師器	坏	12.8	6.2	—	ABCHI	90	普通	橙	No35	29-9
20	土師器	坏	13.2	5.1	—	ACHI L	95	良好	にぶい橙	貯蔵穴No.7	29-10
21	土師器	坏	9.4	4.5	—	ABCHI	100	普通	橙	No.2	30-1
22	土師器	坏	11.0	5.3	—	ABCDEHI L	95	普通	橙	No40	30-2
23	土師器	坏	13.2	5.1	—	ABCHI	100	普通	明赤褐	貯蔵穴No17	30-3
24	土師器	坏	10.3	6.3	—	ACHI	100	良好	橙	No.7	30-4
25	土師器	坏	(12.9)	6.1	—	ACHI	50	普通	橙	外面黒斑	
26	土師器	坏	13.0	5.6	—	ACHI	100	良好	明赤褐	No21	30-5
27	土師器	坏	12.2	5.6	—	ABCEHI	100	普通	橙	黒斑 貯蔵穴No16	30-6
28	土師器	塊	12.5	7.4	—	ACHI	95	普通	にぶい橙	No20	30-7
29	土師器	坏	11.8	5.6	—	AHI	95	不良	橙	No17	30-8
30	土師器	坏	13.2	5.6	—	ABCDHL	95	普通	橙	貯蔵穴No.3	30-9
31	土師器	坏	(13.1)	4.1	—	CHI	20	普通	橙		
32	土師器	坏	(14.4)	7.0	—	ABCHI	25	普通	橙		
33	土師器	鉢	11.7	8.3	—	ACHI	90	普通	にぶい赤褐	黒斑 貯蔵穴No.8	30-10
34	土師器	高坏	16.8	11.8	11.9	ACHI	90	普通	橙	貯蔵穴	31-1
35	土師器	高坏	12.1	9.4	7.6	ACHI	95	普通	橙	No41	31-2
36	須恵器	高坏	9.6	8.4	7.7	IK	100	良好	灰白	No.8	31-3
37	須恵器	短頸壺	9.4	8.7	—	IKL	100	良好	灰	No14	31-4
38	土師器	小型壺	—	9.9	—	ACHI	90	普通	橙	No20・22・24・25	
39	土師器	小型甕	11.8	6.2	—	ACHI	55	普通	橙	No13	
40	土師器	短頸壺	10.7	17.5	6.6	ACI	100	良好	橙	No16	31-5
41	土師器	壺	—	2.9	6.4	ACEHI	70	普通	橙		
42	土師器	小型甕	13.6	8.1	—	ACHI	50	不良	橙	器面荒れ激しい	
43	土師器	小型甕	13.2	16.3	5.7	ACHI	100	良好	橙	内外面一部煤付着 No15	31-6
44	土師器	甕	14.0	23.8	6.5	CEHI	90	普通	赤褐	外面黒斑 No20・36	32-1
45	土師器	甕	12.7	20.7	5.8	ACEHI	95	良好	橙	黒斑 外面一部煤付着 No23	32-2
46	土師器	甕	14.2	25.9	7.0	ABDHL	100	良好	明赤褐	黒斑 No.5	32-3
47	土師器	甕	15.1	26.3	5.9	ABCHI	100	良好	橙	貯蔵穴No.1	32-4
48	土師器	甕	17.2	26.8	7.0	ACEHI	95	普通	にぶい橙	No.4	33-1
49	土師器	甕	17.0	30.0	7.1	ACEHI	90	普通	橙	胴部一部煤付着 No18	33-2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
50	土師器	甕	16.1	28.8	6.6	A C E H I	90	普通	にぶい赤褐	外面胴部黒斑 No25・28	33-3	
51	土師器	甕	24.0	30.2	8.1	B C E G H I	95	普通	橙	外面黒斑 貯蔵穴No.9	34-1	
52	土師器	壺	21.8	27.2	—	B C H I L	50	普通	橙			
53	土師器	壺	20.7	33.3	(8.8)	B C H I	60	普通	にぶい橙	外面黒斑 底部木葉痕 No.3・8・28・30・37・41 貯蔵穴 カマド SJ43	34-2	
54	土師器	壺	21.2	32.2	6.7	A C E H I	100	普通	橙	外面黒斑 胴部下半煤付着 貯蔵穴No.15	34-3	
55	土師器	甕	18.0	29.9	7.0	A C E G H I	95	良好	黄橙	外面煤付着 底部木葉痕 No.10	33-4	
56	土師器	甕	—	27.2	6.0	A B E I L	60	不良	にぶい橙	貯蔵穴No.13		
57	土師器	甗	27.0	27.9	9.0	C F H I K	100	良好	橙	No.1	34-4	
58	土師器	甗	17.8	16.1	4.4	A C E F G H I	100	良好	橙	No.11	34-5	
59	石製品	有孔円板	長さ2.6cm 幅2.9cm 厚さ0.6cm 重さ4.59g 滑石									89-1
60	石製品	砥石	長さ26.9cm 幅7.6cm 厚さ4.2cm 重さ1475.65g 緑泥片岩									90-1
61	石製品	砥石	長さ4.1cm 幅9.5cm 厚さ5.8cm 重さ238.49g 砂岩									90-2
62	石製品	砥石	長さ34.3cm 幅10.3cm 厚さ9.3cm 重さ4481.90g 砂岩									90-3

第26号住居跡 (第55図)

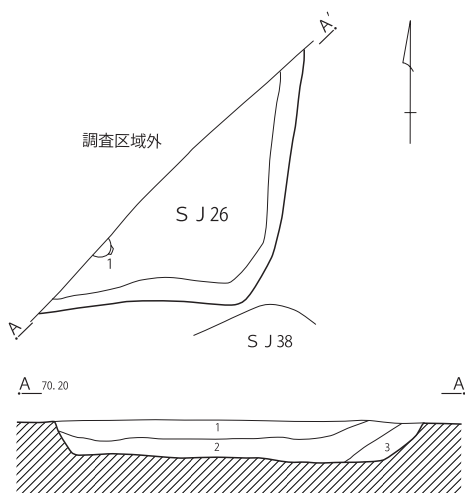
第26号住居跡は調査区南側のM-4・5グリッドに位置する。住居跡の北側の大部分が調査区域外に延び、住居跡の南東隅部付近を検出した。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.02m、短軸長1.64m、深さ0.30mである。主軸方位はN-4°-Eを指す。

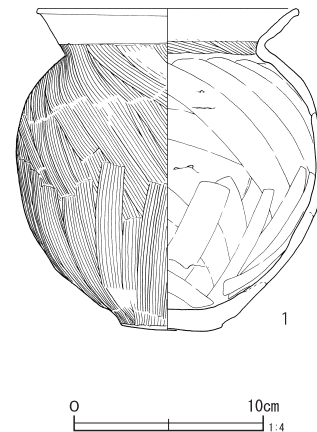
床面はやや凹凸が見られる。埋土は3層に分層され、黒色土を基本とした自然堆積である。

出土遺物は土師器甕がある(第55図)。1の甕は調査区壁際の床面直上から出土した。胴部に目の細かい刷毛目を施す小型の甕である。頸部から口縁部に向かってくの字に屈曲する。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半新相に位置づけられる。



S J 26
 1 黒色土 1mm程度の白色粒子を多く含む
 2 黒色土 1層に比べ白色粒子は少ない ローム少量
 3 黒色土 10~20mm程度のロームブロックを多く含む



第55図 第26号住居跡・出土遺物

第20表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(13.7)	16.9	5.4	CEHI	90	普通	橙	外面黒斑 No 1	34-6

第27号住居跡 (第39図)

第27号住居跡は調査区南西端のO-3グリッドに位置する。第4・17号住居跡、第2号溝跡と重複し、それらに切られている。住居跡の大半が調査区域外に延び、住居跡の南西隅部付近を検出したにすぎない。

平面形は方形系と推定される。残存規模は、長軸長1.46m、短軸長0.26m、深さ0.12mである。主軸方位はN-38°-Eを指す。

床面は平坦である。南西隅部にピット1本を検出したが、住居跡に伴うかどうかは明確でない。

出土遺物はまったくなく、住居跡の時期については不明である。

第28号住居跡 (第56図)

第28号住居跡は調査区北側のE・F-13グリッドに位置する。第110号住居跡と重複し、それを切っていた。東カマドをもつ小型の住居跡で、南東隅部がトレンチによって削平されている以外は全容を把握できた。

平面形は比較的形の整った方形を呈する。規模は、長軸長3.86m、短軸長3.57m、深さ0.24mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は大きく8層に分層される。黒色土を主体とし、概ね自然堆積を示している。

カマドは東壁中央やや南寄りに設けられていた。燃焼部は壁内に収まり、燃焼部の奥壁に段差を作り、緩やかに立ち上がりながら煙道部に移行する。全長1.30m、カマド袖幅1.00m、深さ0.30m、燃焼部長0.75m、燃焼部底面幅0.30m、煙道部長0.55mである。カマド埋土は第8層が天井崩落土である。燃焼部底面には被熱により良く焼けた火床面が認められた。また、燃焼部底面のほぼ中央に4の坏が伏せた状態で置かれていた。支脚

として転用された可能性も考えられる。カマド袖部は壁面に対し「ハ」の字に開くように取り付く。明褐色土によって構築され、袖部内壁面は被熱により赤変していた。

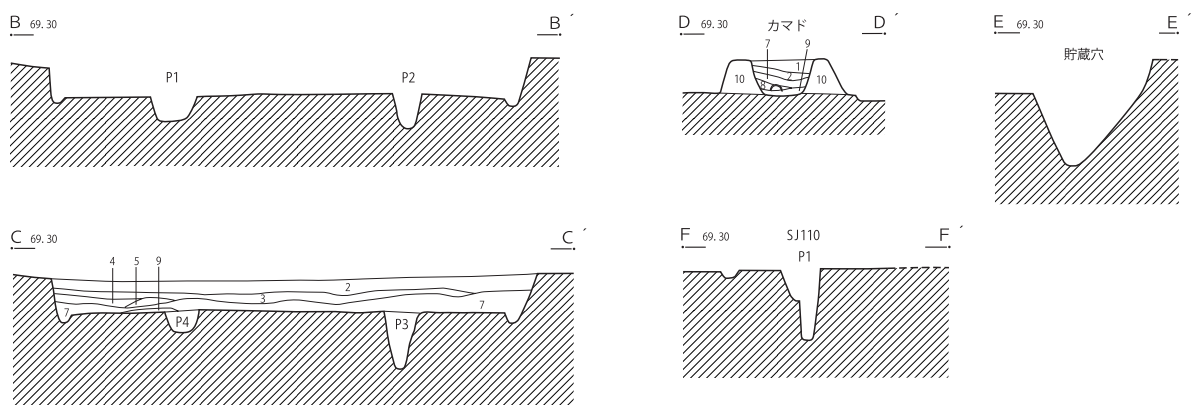
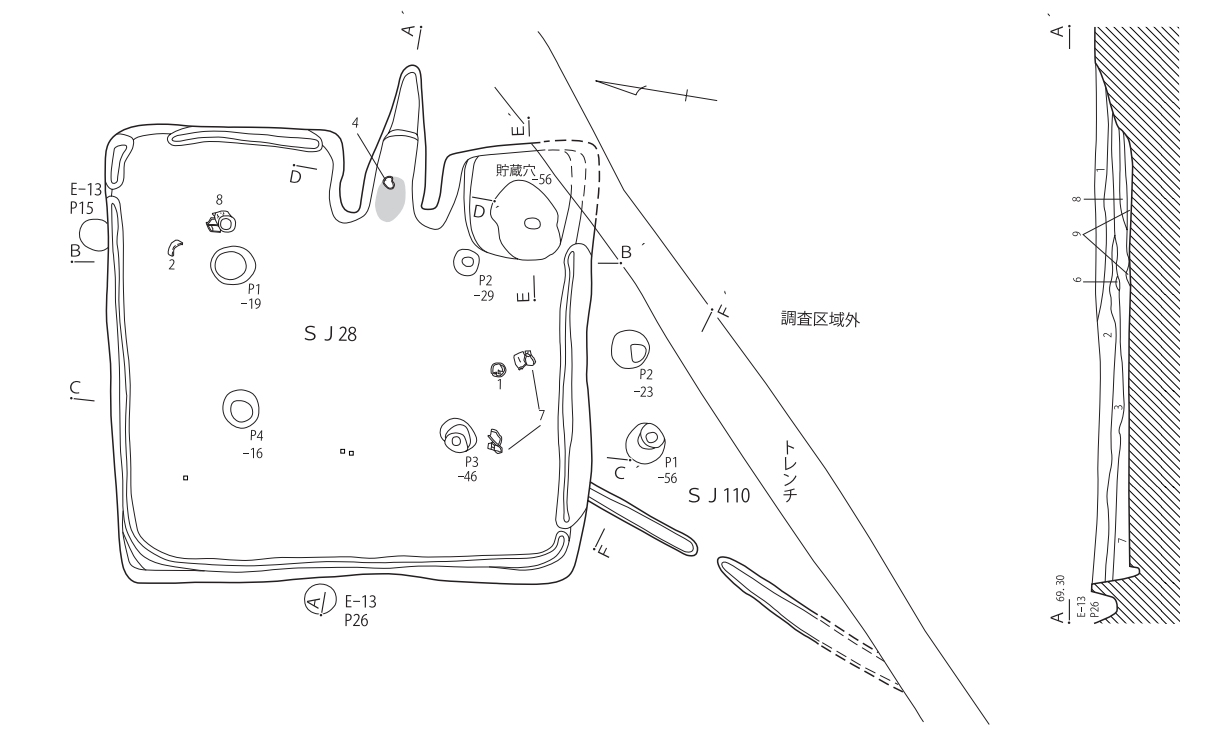
貯蔵穴はカマド右脇の南東隅部に検出された。上面は不整形、底面は略円形を呈する。断面形は摺鉢形で、底面が極端に狭くなっている。規模は長径0.91m、短径0.82m、深さ0.56mである。

ピットは対角線上に配置された支柱穴4本を検出した。柱間距離はP1~P2間が1.85m、P2~P3間が1.50m、P3~P4間が1.65m、P4~P1間が1.20mをそれぞれ測る。ピットの埋土の状況は判然としないが、P2・P3は深度も深く、しっかりした掘り込みをもつ。一方、P1・P4は深度が浅く、対照的である。

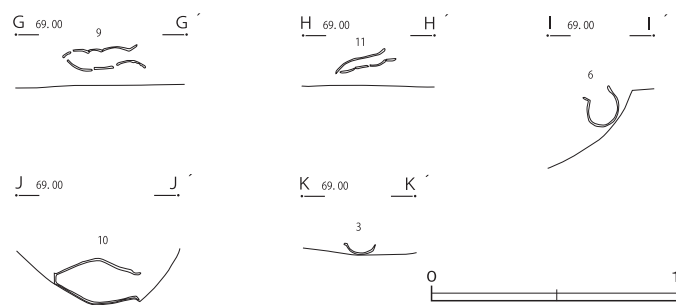
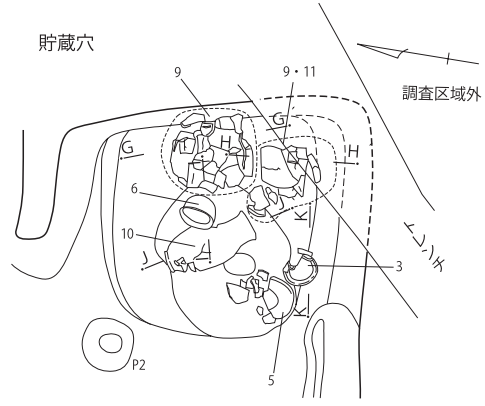
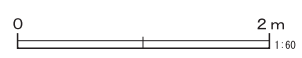
壁溝は、断続的ながらほぼ全周する。規模は、幅11~24cm、深さ8cmほどである。

出土遺物は土師器坏・高坏・小型甕・甕・甗等がある(第57図)。カマド燃焼部底面から4の坏が伏せられた状態で出土しており、転用支脚の可能性もある。貯蔵穴からは、3の坏、5の高坏、6の小型甕、9・10の甕、11の甗がまとまって出土し、良好な土器組成を示している。この他にP1周辺から8の甕上半部が床直の状態、2の坏が床面から少し浮いた状態で出土した。P3周辺では1の坏と7の小型甕が床直から、P4周辺では棒状礫が3点出土した。

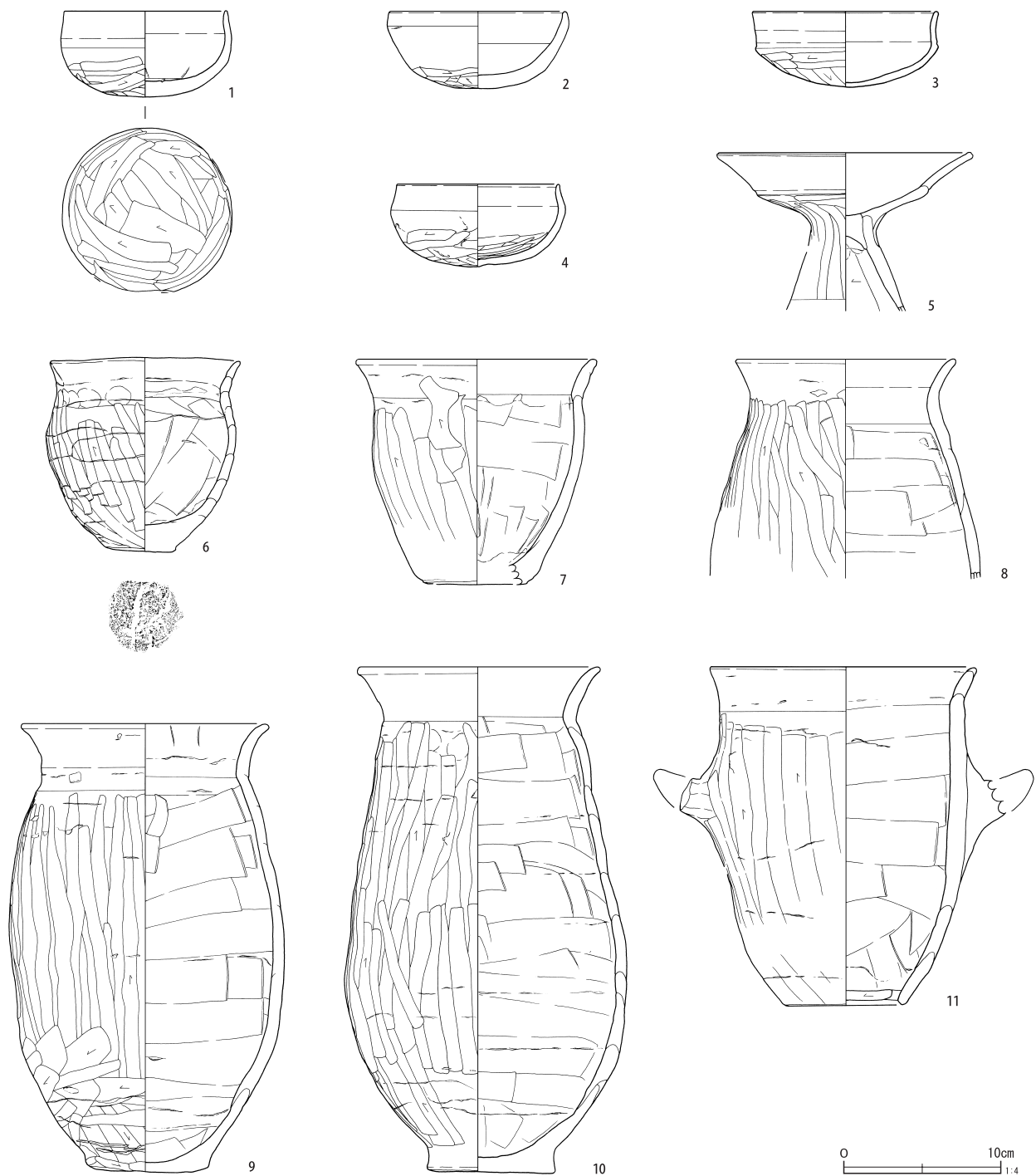
1~4は土師器坏である。1・4は口縁部が緩やかに内屈する深身の坏である。2は口縁部が短く内屈する深身の坏で、底部外面のみをヘラケズりする。3は典型的な須恵器坏蓋模倣坏で、口縁部は長く直立する。5は和泉型高坏で、脚部内面に篋削りを加える。6・7は小型甕である。6は底部に木葉痕を残す。7は頸部の括れの弱いものである。



- S J 28
- | | | | |
|--------|--------------------------------------|---------|-------------|
| 1 黒色土 | 1~2mm程度の焼土粒子・白色粒子少量 | 6 赤褐色土 | 焼土 |
| 2 暗褐色土 | 1~2mm程度の焼土粒子・白色粒子を多く含む
ロームを斑に混入する | 7 黒色土 | ロームを斑に少量 |
| 3 明褐色土 | 焼土・炭化物を非常に多く含む 粘性強い | 8 黒色土 | 焼土を非常に多く含む |
| 4 黒色土 | 焼土粒子微量 5mm程度のローム粒子少量 | 9 黒色土 | ロームを非常に多く含む |
| 5 黒色土 | ロームを斑に非常に多く混入する | 10 明褐色土 | (カマド袖) |



第56図 第28・110号住居跡・遺物出土状況



第57図 第28号住居跡出土遺物

8～10は甕である。8は胴部上半部から口縁部の破片で、器台に転用されたものであろう。9は胴部最大径を中位にもつタイプ、10は胴部下半にもつ下膨れタイプで、底部が突出する。両者とも胴部外面に縦方向の篋削りを施す。11は角状の把

手をもつ単孔の甕で、孔端面をヘラケズリする。

住居跡の時期は、3の典型的な須恵器蓋坏模倣坏と深身の坏が共伴し、和泉型高坏や把手付甕が見られることから、5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられる。

第21表 第28号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	10.2	5.4	—	A C H I	75	普通	橙	外面黒斑 No. 8	35-1
2	土師器	坏	(11.0)	4.9	—	C G H I	50	普通	にぶい橙	No.12	35-2
3	土師器	坏	11.7	4.8	—	C G H I	95	普通	橙	No. 6	35-3
4	土師器	坏	10.2	5.2	—	A C H I	80	普通	橙	カマドNo.10	35-4
5	土師器	高坏	16.0	10.0	—	C G H I	60	普通	橙	貯蔵穴No.13	35-5
6	土師器	小型甕	12.0	12.2	4.6	C E G H I	100	普通	にぶい橙	底部木葉痕 外面黒斑 No. 3	35-6
7	土師器	小型甕	15.1	14.3	(6.6)	C E G H I	75	普通	にぶい橙	No. 7・9	35-7
8	土師器	甕	13.9	13.9	—	C E G H I	60	普通	橙	No.11	
9	土師器	甕	15.5	28.5	7.7	A C E H I K	90	普通	褐	外面黒斑・煤付着 No. 1・2	36-1
10	土師器	甕	15.2	32.2	8.1	A B C E H I J	90	普通	にぶい赤褐	外面黒斑・煤付着 No. 4	36-2
11	土師器	甕	(16.9)	21.5	7.7	A C E H I K L	60	普通	にぶい橙	内面黒斑 No. 1	36-3

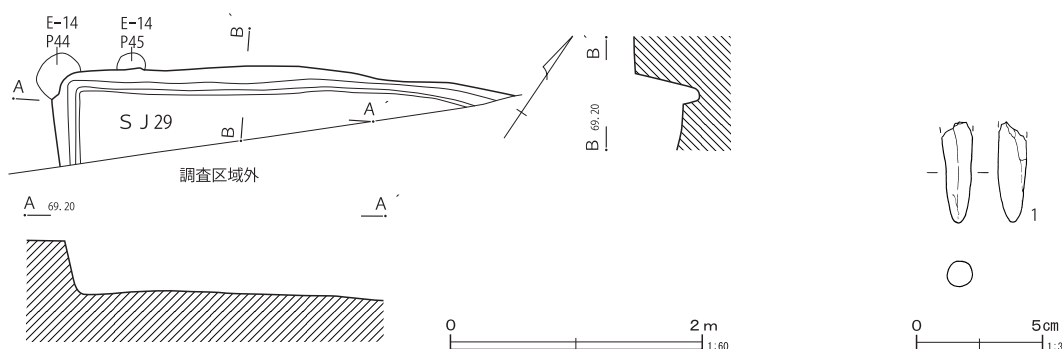
第29号住居跡 (第58図)

第29号住居跡は調査区北側のE-14グリッドに位置する。第30号住居跡の南側に近接し、住居跡の大半が調査区域外に延びている。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.64m、短軸長0.72m、深さ0.40mである。主軸方位はN-32°-Wを指す。

床面はやや凹凸が見られる。壁溝は全周し、規模は幅10~22cm、深さ3~10cmと一様でない。

出土遺物は極めて少なく、棒状土製品1点である(第58図)。1は粘土塊を棒状に成形した土製品である。上半部を折損しており、本来の形状は不明である。時期を示す遺物がなく、住居跡の時期は不明である。



第58図 第29号住居跡・出土遺物

第22表 第29号住居跡出土遺物観察表 (第58図)

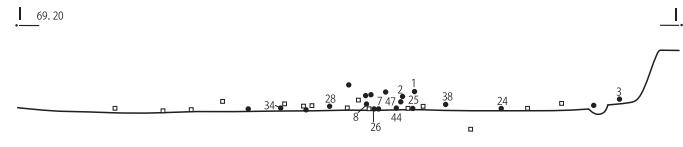
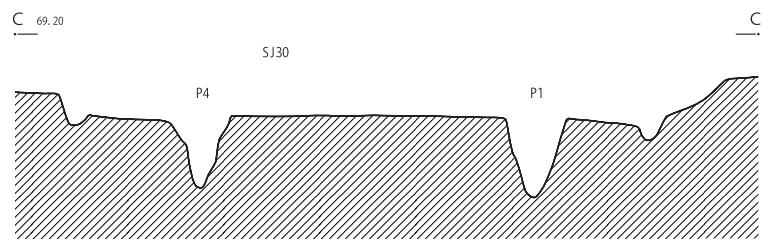
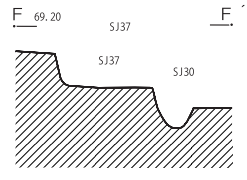
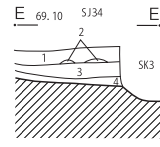
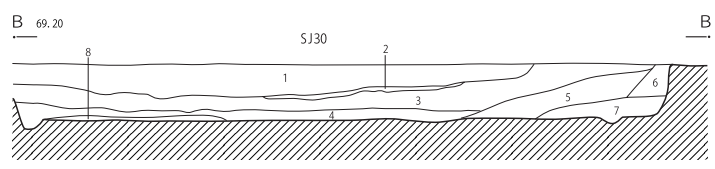
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土製品	棒状品	残存長4.0cm	径1.0cm		C H I K	—	普通	明赤褐		93-4

第30号住居跡 (第59・60図)

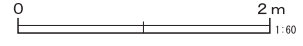
第30号住居跡は調査区北側のD・E-14・15グリッドに位置する。調査区内の住居跡群としては北端に展開する一群に属している。住居跡の北西隅部は調査区域外に延び、第34・35・37号住居跡、第3号土壌を切っている。

平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長5.23m、短軸長4.85m、深さ0.44mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

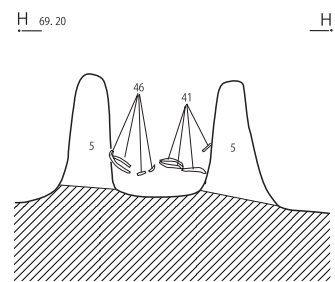
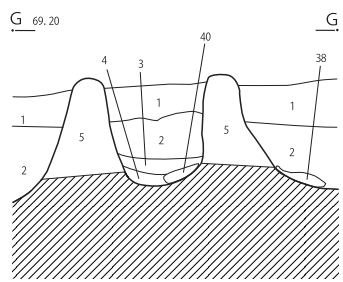
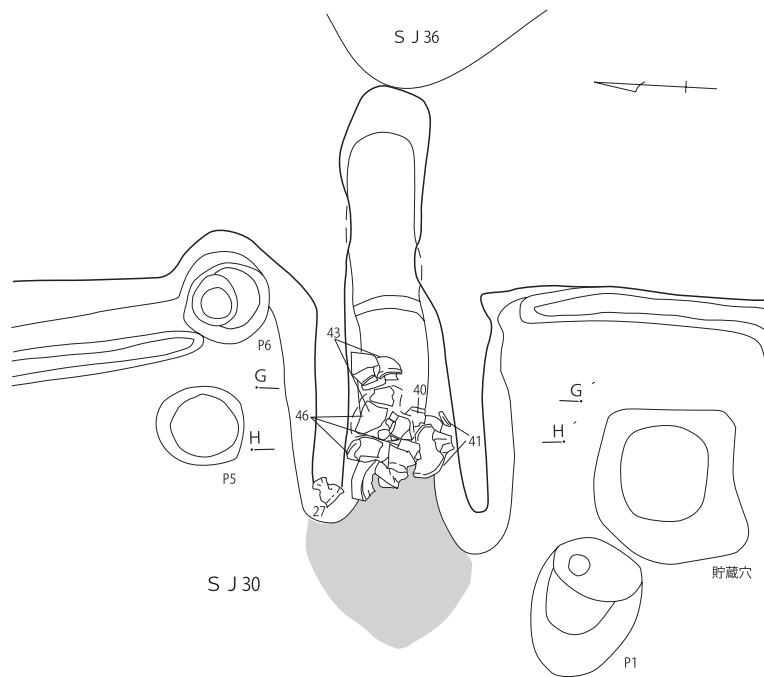
床面は概ね平坦である。埋土は8層に分層される。自然堆積に近いものの、第2層と床面直上を覆う第8層に炭化物集積層が認められた。



- S J 30
- 1 黒色土 5~10mm程度の焼土粒子多量 炭化物微量
 - 2 炭化物集積層
 - 3 黒色土 1層に比べ焼土粒子少量 5mm程度の炭化物粒子多量
 - 4 暗灰褐色土 焼土・炭化物微量 粘性強い
 - 5 明褐色土 焼土・炭化物微量 ロームを斑に多く含む
 - 6 黒色土 1mm程度の炭化物少量 ロームを斑に少量混入する
 - 7 暗褐色土 1mm程度の炭化物多量 ロームを斑に少量混入する
 - 8 炭化物集積層
- カマド
- 9 赤褐色土 焼土層
 - 10 暗褐色土 1mm程度の炭化物多量 ロームを斑に少量混入する
 - 11 暗褐色土 1mm程度の炭化物多量 ロームを斑に少量混入する
- S J 34
- 1 暗褐色土 5mm程度の焼土粒子・炭化物を多く含む
 - 2 炭化物集積層
 - 3 暗褐色土 焼土粒子微量 ロームを斑に混入する
 - 4 明褐色土 ロームを斑に多く含む



第59図 第30・34・37号住居跡



- S J 30カマド
- 1 黒色土 5～10mm程度の焼土粒子多量炭化物微量
 - 2 黒色土 1層に比べ焼土粒子少量 5mm程度の炭化物粒子多量
 - 3 赤褐色土 焼土層
 - 4 暗褐色土 1mm程度の炭化物多量 ロームを斑に少量混入する
 - 5 明褐色土 (カマド袖)



第60図 第30号住居跡カマド

カマドは東壁中央やや南寄りに設けられていた。燃焼部は壁を切り込まず、燃焼部奥壁に段を作り出し煙道部に至る。煙道部は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。全長1.80m、カマド袖幅0.90m、深さ0.45m、燃焼部長1.00m、燃焼部底面幅0.28m、煙道部長0.80mである。カマド埋土は焼土層の第9層が天井崩落土に該当する。燃焼部から焚口部の底面には、被熱によって赤く焼けた火床面が見られた。カマド袖部は明褐色土によって構築され、袖部内壁面は良く焼けて赤変していた。

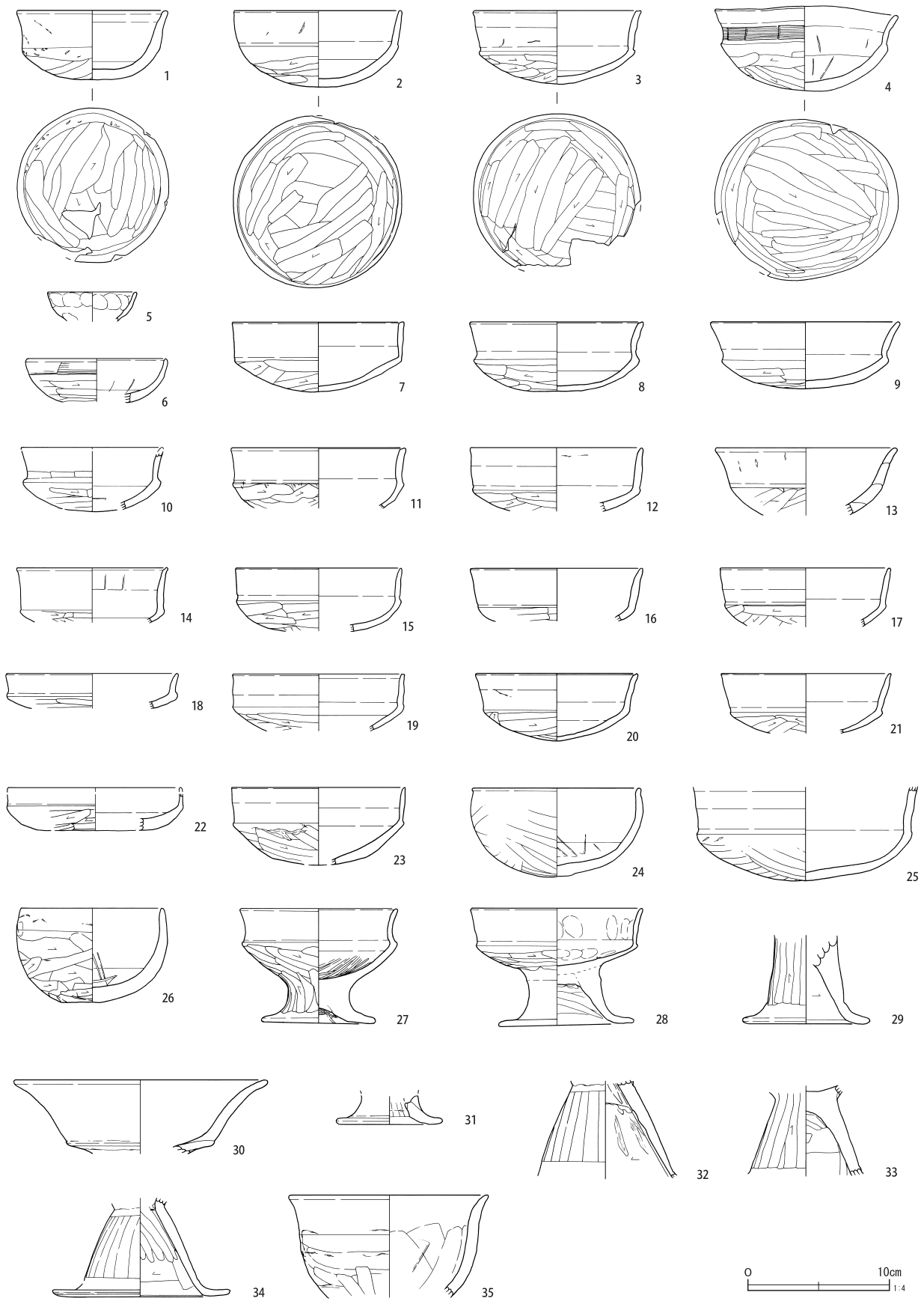
貯蔵穴はカマド右脇の南東隅部に検出された。平面方形を呈し、長径0.61m、短径0.56m、深さ0.45mである。

ピットは6本検出された。P 1～P 4は対角線

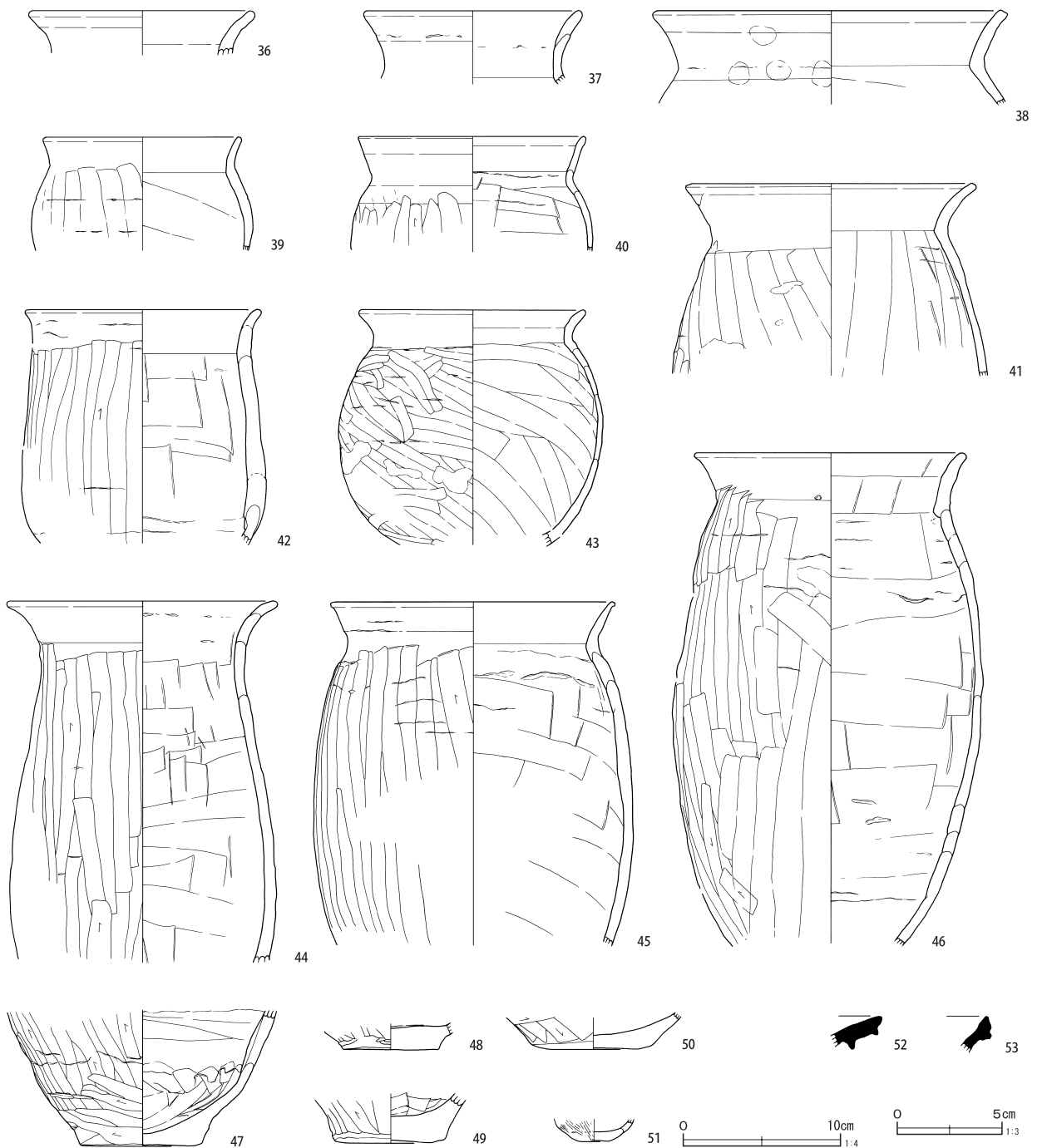
上に配置された支柱穴である。柱間距離はP 1～P 2間が2.55m、P 2～P 3間が2.45m、P 3～P 4間が2.15m、P 4～P 1間が2.55mである。この他にカマド左脇にP 5・P 6の2本が検出されている。P 6は壁を切り込んでおり、住居跡に伴うかは明確でない。

壁溝はほぼ全周するが、南壁部分のみ壁際よりも30cm前後内側を巡っていた。規模は幅10～20cm、深さ10cmほどである。

出土遺物は多く、土師器坏・壺・高坏・鉢・小型甕・甕・手捏ね・ミニチュア、須恵器甕等がある(第61・62図)。カマド燃焼部からは41・46の長胴甕と40・43の小型甕が潰れた状態で出土し、その下に32の高坏脚部が置かれていた。おそらく転



第61図 第30号住居跡出土遺物（1）



第62図 第30号住居跡出土遺物（2）

用支脚であろう。また、カマド左袖先端部に27の高坏が、カマド右袖部脇には38の広口甕と24の深身の半球形坏があった。カマド前面からは25の大型坏、34の高坏脚部、44の長胴甕が出土した。この他に床面中央部から西壁にかけて円礫とともに、1・2・4・7・8の坏、26の埴、28の高坏、

47の甕等がまとまって出土し、3の坏は南壁際に単独で置かれていた。

住居跡の時期は、口縁部が長く直立する坏蓋模倣坏が主体的に存在することや、和泉型高坏の残存、鬼高型高坏の出現を指標として、6世紀前葉に位置づけておきたい。

第23表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第61・62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	10.4	4.9	—	ACEHI	90	普通	明赤褐	No.19	36-4
2	土師器	坏	11.7	5.4	—	ACHI	95	普通	橙	外面黒斑 No.13	36-5
3	土師器	坏	11.7	5.1	—	CEH	80	良好	橙	外面黒斑 No.47	36-6
4	土師器	坏	12.9	6.0	—	ACDEHI	80	普通	にぶい橙	No.21・22	37-1
5	土師器	手捏ね	6.1	2.1	—	AHI	25	普通	橙		
6	土師器	坏	(9.8)	3.0	—	ACHI	15	普通	にぶい黄橙		
7	土師器	坏	12.0	4.9	—	ACEHI	60	普通	橙	No.14	37-2
8	土師器	坏	(12.1)	4.8	—	ACHIK	50	普通	にぶい橙	外面黒斑 No.26	37-3
9	土師器	坏	(13.1)	4.7	—	ACHI	30	普通	橙		
10	土師器	坏	—	4.0	—	AHI	10	普通	にぶい褐		
11	土師器	坏	(12.2)	4.2	—	ACEHI	25	普通	橙		
12	土師器	坏	(12.1)	4.4	—	ACEHI	20	普通	橙	外面底部黒斑	
13	土師器	坏	(12.6)	4.7	—	ACEGHI	50	普通	橙		
14	土師器	坏	(11.5)	3.8	—	ACHI	15	普通	にぶい赤褐		
15	土師器	坏	(11.6)	4.4	—	ACEGHI	20	普通	橙		
16	土師器	坏	(12.0)	3.7	—	ACEHI	25	普通	にぶい橙	カマド	
17	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	ACEHI	40	普通	にぶい橙	D14G-98	
18	土師器	坏	(12.0)	2.4	—	AH	10	不良	橙		
19	土師器	坏	(12.1)	4.0	—	ACHI	20	普通	橙	カマド	
20	土師器	坏	(11.4)	4.7	—	CEHI	30	普通	橙	外面底部黒斑	
21	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	ACHI	15	普通	橙		
22	土師器	坏	—	2.5	—	CEHIJ	10	普通	にぶい赤褐		
23	土師器	坏	(12.1)	5.4	—	AHI	70	普通	橙		37-4
24	土師器	坏	11.7	6.2	—	ACHI	75	普通	橙	No.43	37-5
25	土師器	坏	—	6.5	—	ACHI	40	不良	橙	No.45	
26	土師器	壺	10.0	6.6	—	ACEHI	95	普通	橙	外面黒斑 No.16	37-6
27	土師器	高坏	11.0	8.2	8.0	ACEHI	100	普通	橙	No.1	37-7
28	土師器	高坏	12.0	8.2	9.5	ABCHI	90	普通	にぶい橙	No.17	37-8
29	土師器	高坏	—	6.2	(9.0)	ACHI	30	普通	橙		
30	土師器	高坏	(17.8)	5.2	—	ACEHI	20	普通	明赤褐	カマド	
31	土師器	高坏	—	2.0	(7.5)	ACHI	50	普通	橙		
32	土師器	高坏	—	6.9	—	ACEHI	95	普通	赤褐	No.48	
33	土師器	高坏	—	6.4	—	ACEHIL	70	普通	橙		
34	土師器	高坏	—	6.9	(12.5)	BCHI	60	普通	明赤褐	No.40	
35	土師器	鉢	(14.0)	7.3	—	CEHI	25	普通	にぶい赤褐	カマド	
36	土師器	甕	(14.0)	2.8	—	CEHI	20	普通	にぶい橙		
37	土師器	甕	(13.7)	4.6	—	ACEHI	20	普通	明赤褐		
38	土師器	甕	22.0	6.0	—	ACEHIJK	95	普通	にぶい橙	No.7・12 カマド	
39	土師器	甕	(12.7)	7.2	—	ACHI	25	普通	橙		
40	土師器	小型甕	(14.4)	6.8	—	ACEHI	40	普通	明赤褐	No.8	
41	土師器	甕	17.8	12.2	—	ACEHI	50	普通	橙	外面煤付着 No.7・9・10 カマド	
42	土師器	甕	(14.9)	14.8	—	CEHI	40	普通	明赤褐	カマド	
43	土師器	小型甕	14.0	14.8	—	EHI	70	普通	にぶい黄橙	外面黒斑 内外面煤付着 No.2 カマド 貯蔵穴	38-1
44	土師器	甕	(17.0)	23.0	—	BCEHI	25	普通	橙	外面黒斑 No.41 E14G-35	
45	土師器	甕	(17.6)	21.8	—	CEHI	30	普通	にぶい橙		
46	土師器	甕	16.9	31.3	—	ACEHIK	70	普通	明赤褐	No.3・4・6 カマド	38-2
47	土師器	甕	—	8.5	7.7	ACEHI	75	普通	にぶい赤褐	No.20 カマド	
48	土師器	甕	—	1.6	6.0	ACEHI	90	普通	明赤褐		
49	土師器	甕	—	3.1	7.0	ACEHI	75	普通	橙		
50	土師器	甕	—	2.0	7.8	CEGH	90	普通	にぶい橙	外面黒斑	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
51	土師器	ミニチュア	—	1.4	(2.0)	A C H I	25	普通	橙		
52	須恵器	甕	—	1.5	—	I K	5	良好	灰	陶邑産か	焼成堅緻
53	須恵器	甕	—	1.7	—	I K	5	普通	灰	焼成堅緻	

第31号住居跡 (第64図)

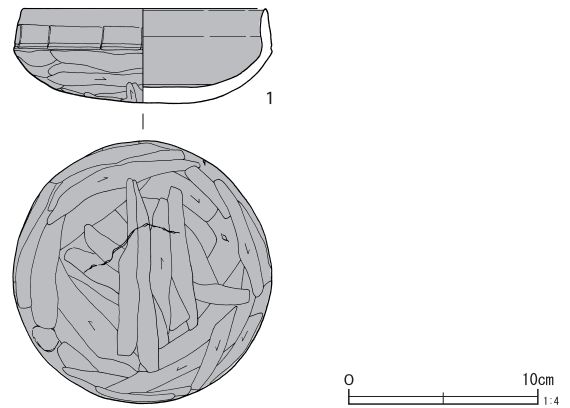
第31号住居跡は調査区北側のD-15グリッドに位置する。第1号溝跡から南へ約8mの距離にあり、住居跡の中では最も北側に所在する。第36号住居跡と重複し、それを切っている。北西壁部分のみの確認で、大半は調査区域外に延びる。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.82m、短軸長0.74m、深さ0.32mである。主軸方位はN-42°-Wを指す。

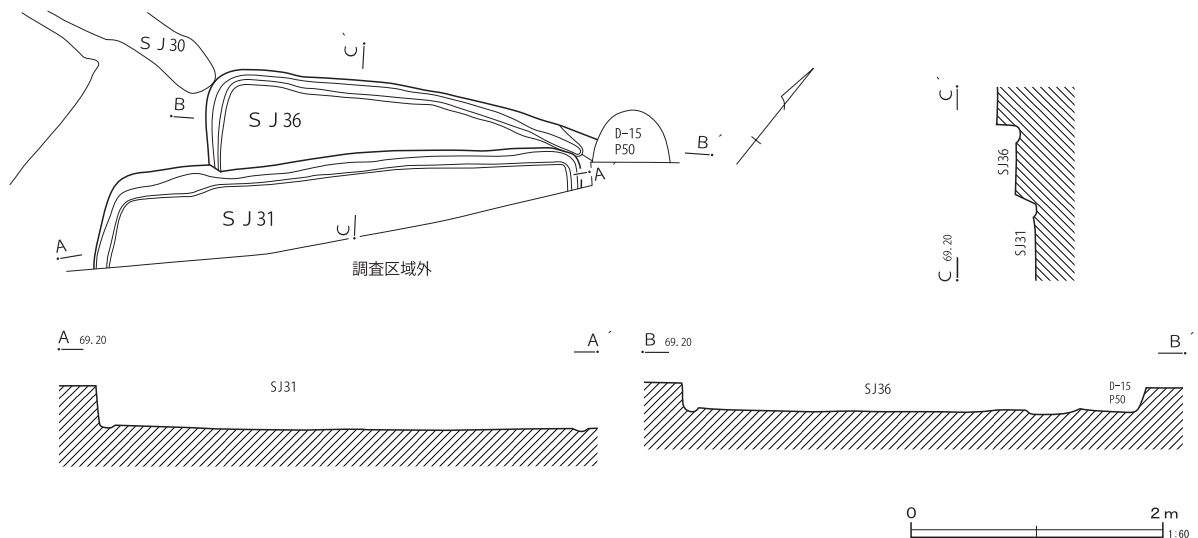
床面は概ね平坦である。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。壁溝は全周し、幅11~23cm、深さ4cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器環1点のみを図示した(第63図)。1は完形の土師器環である。内外面

に黒色処理を施す坏身模倣坏で、胎土に片岩粒の混入が顕著である。住居跡の時期は、6世紀中葉に位置づけられる。



第63図 第31号住居跡出土遺物



第64図 第31・36号住居跡

第24表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.8	4.9	—	B C E H I K	100	普通	にぶい黄褐	内外面黒色処理 片岩を多く含む Na.2	38-3

第32号住居跡（第65図）

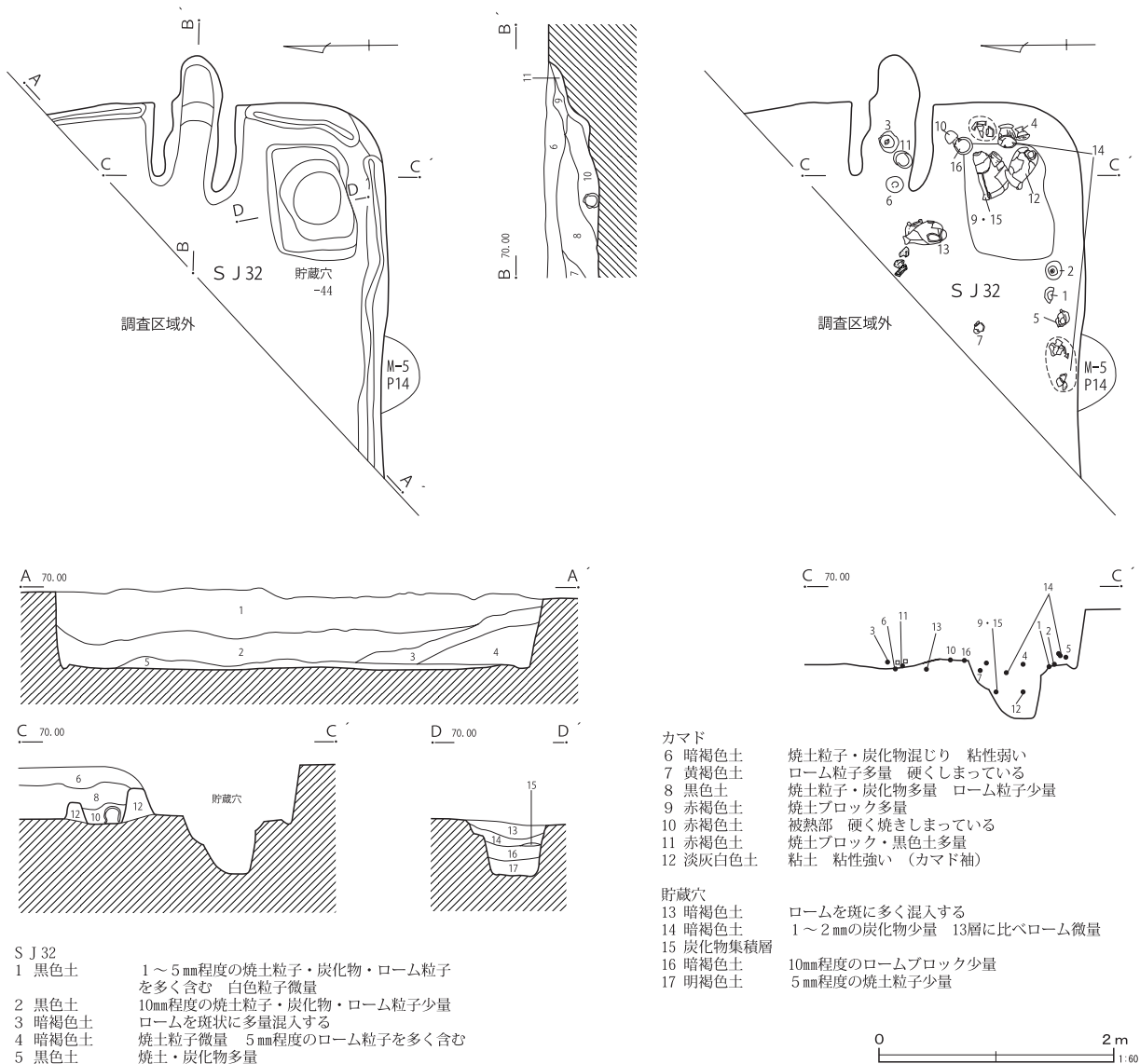
第32号住居跡は調査区南側のM-5グリッドに位置する。住居跡の北西側大半が調査区域外に延び、南西側に第26号住居跡が近接する。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.90m、短軸長2.62m、深さ0.60mである。主軸方位はN-92°-Eである。

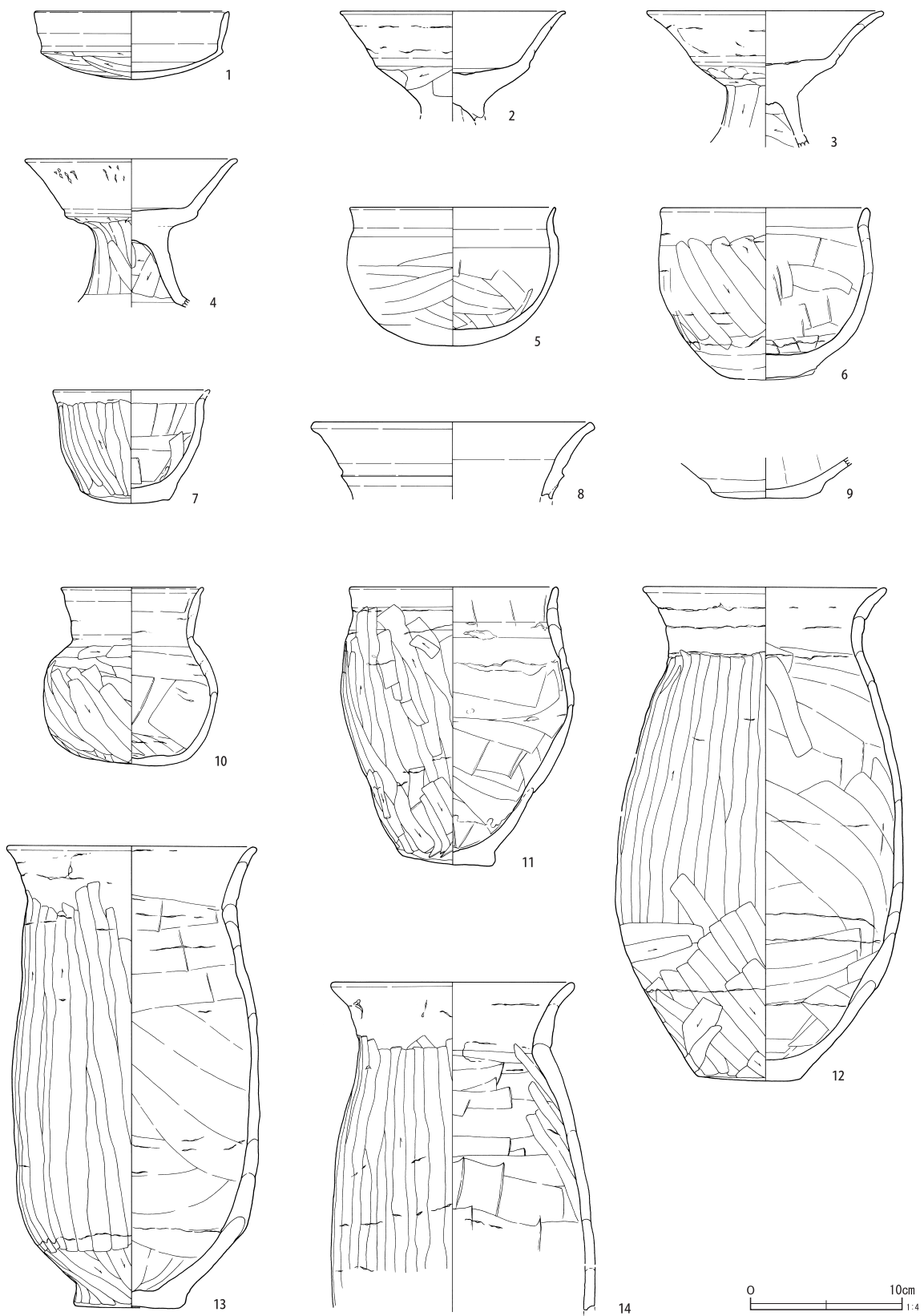
床面はやや凹凸がある。埋土は5層に分層され、黒色土、暗褐色土を主体とする。概ね自然堆積を示すが、床面上には焼土・炭化物を多量に含む黒色土（第5層）が薄く広がっていた。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部は壁を切り込まず、燃焼部奥壁に段差を作り、煙道部に移行する。煙道部は短く緩やかに立ち上がる。全長1.25m、カマド袖幅0.84m、深さ0.45m、燃焼部長0.55m、燃焼部底面幅0.25m、煙道部長0.70mである。カマド埋土は第9層が天井崩落土、第10層が使用面に相当する。燃焼部床面中央には3の高坏を伏せ、転用支脚としていた。カマド袖部は淡灰白色土を用いて構築されていた。

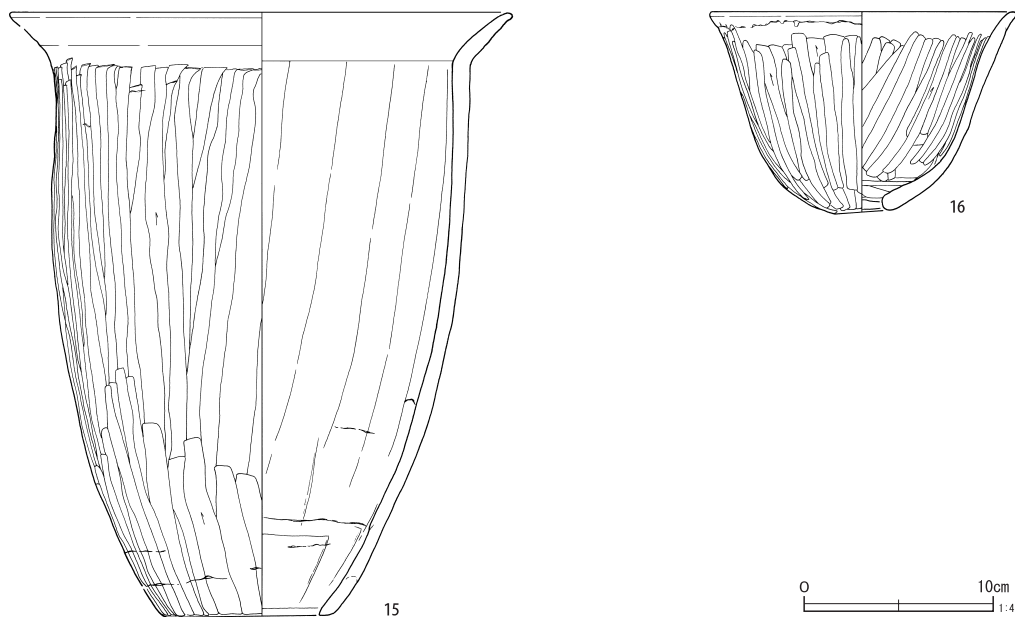
貯蔵穴はカマド右脇の南東隅部に検出された。平面形は上面が長方形を呈し、内部は平面楕円形



第65図 第32号住居跡・遺物出土状況



第66図 第32号住居跡出土遺物（1）



第67図 第32号住居跡出土遺物（2）

第25表 第32号住居跡出土遺物観察表（第66・67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	4.5	—	E H I	40	普通	橙	No.15	38-4
2	土師器	高坏	14.9	7.2	—	C D E H I	90	普通	橙	No.14	
3	土師器	高坏	15.5	8.9	—	C H I	90	普通	橙	No.1	38-5
4	土師器	高坏	13.9	9.7	—	A C E H I	85	普通	橙	No.11	38-6
5	土師器	鉢	13.6	7.1	—	A C E H I	80	普通	明赤褐	外面黒斑 No.6	38-7
6	土師器	鉢	13.6	11.2	6.6	C E H I	90	普通	明赤褐	No.3	39-1
7	土師器	鉢	10.3	7.4	5.9	A C E H I	75	普通	明赤褐	内面黒斑 No.19	
8	土師器	壺	(18.3)	5.0	—	A C E H I	20	普通	橙		
9	土師器	壺	—	2.6	(7.2)	B C E G H I	40	普通	橙	No.20	
10	土師器	小型壺	9.4	11.5	6.7	C D H I	100	普通	橙	内外面黒斑 No.8	39-2
11	土師器	小型甕	13.5	18.2	5.9	C E H I	100	普通	赤褐	外面黒斑・煤附着 No.2	39-3
12	土師器	甕	15.7	32.5	6.8	A C E H I	90	良好	明赤褐	外面黒斑 No.13	39-4
13	土師器	甕	16.2	30.5	7.0	A B C E H I	90	普通	明赤褐	No.4	39-5
14	土師器	甕	16.0	21.6	—	B E H I L	80	普通	橙	No.12・18	40-1
15	土師器	甕	26.2	32.0	8.6	A C E H I	80	良好	にぶい橙	外面黒斑 No.20	40-2
16	土師器	甕	16.0	10.6	3.2	C E H I	100	普通	明赤褐	No.9	40-3

の土壇状となる。長径0.96m、短径0.72m、深さ0.44mである。貯蔵穴埋土は5層に分層され、暗褐色土を主体に、中間層に炭化物集積層を介在させていた。

ピットは検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、規模は幅10～22cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・小型壺・壺・小型甕・甕・甕等である（第66・67図）。カマド燃烧部底面のほぼ中央には3の高坏を伏せた転用支

脚を設置し、その脇から11の小型甕は正位で、6の鉢は逆位の状態で出土した。貯蔵穴の壁際には10の小型壺、16の小型甕、14の甕、4の高坏が並んでいたほか、貯蔵穴の中に落ち込んだ状態で12の甕、15の大型甕が出土した。またカマド前面の床面直上からは13の甕が横倒しの状態で、南壁際からは1の坏、2の高坏、5の鉢が—列に並び、少し離れた位置から7の鉢が出土した。

住居跡の時期は、口縁部の直立する坏蓋模倣坏、

定量で存在する和泉型高坏・二重口縁壺・小型壺、最大径を胴部中位か、やや下位にもつ長胴甕、砲弾形の大型甕と鉢形の小型甕のセット等の土器組成から6世紀前葉に位置づけられる。

第33号住居跡 (第68図)

第33号住居跡は調査区北側のE-14グリッドに位置する。第28号住居跡の東側に隣接し、住居跡の南東部の大半が調査区域外に延びる。

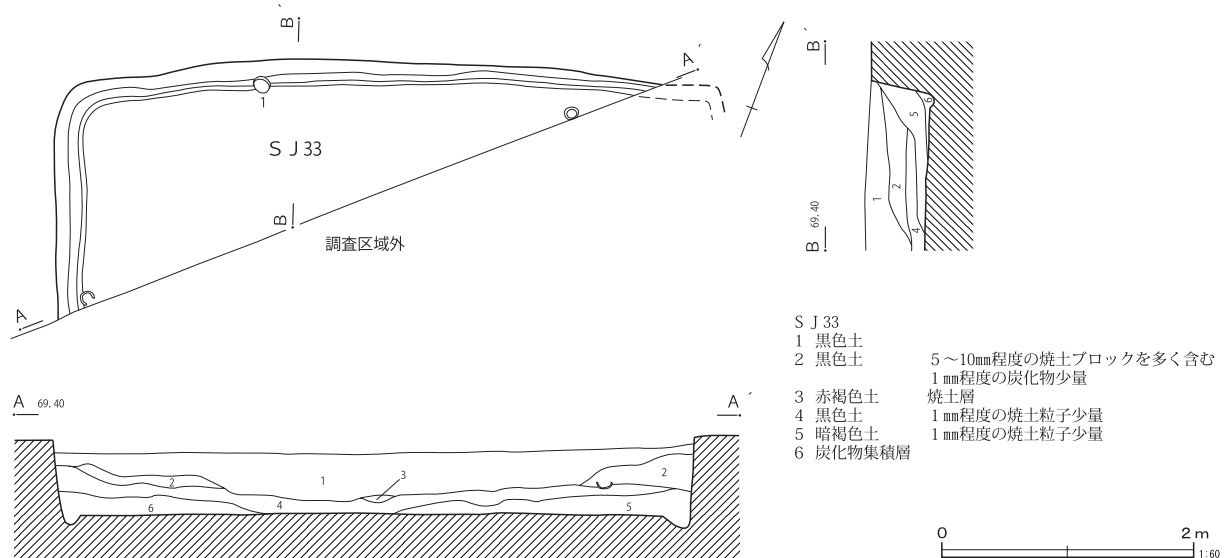
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長4.68m、短軸長1.76m、深さ0.46mである。主軸方位はN-22°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。掘り込みが深く、埋土は大きく6層に分層され、黒色土を主体とする。

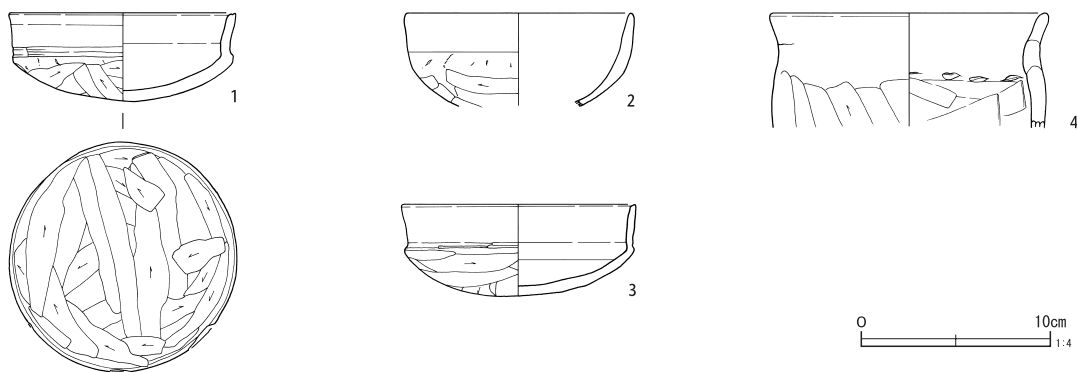
西側床面直上には第6層の炭化物集積層が厚く堆積しており、人為的な埋め戻しが考えられる。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。壁溝は全周しており、幅11~24cm、深さ6cmほどである。

出土遺物は土師器坏・小型甕がある(第69図)。1・3は口縁部の直立する模倣坏である。1は北壁の壁溝部分から出土し、壁溝底面から30cmほど浮いていた。2は口縁部と体部の境をヨコナデによって作出している。4は広口の小型甕で、鉢の可能性もある。

住居跡の時期は、模倣坏の特徴から6世紀前葉に位置づけられる。



第68図 第33号住居跡



第69図 第33号住居跡出土遺物

第26表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.9	4.6	—	CEHI	100	良好	明赤褐	No. 2	40-4
2	土師器	坏	(11.9)	4.8	—	CEHI	25	普通	橙		
3	土師器	坏	12.3	4.8	—	ACEHI	60	普通	にぶい橙	No. 3	40-5
4	土師器	小型甕	(14.4)	6.0	—	ACEHI	20	普通	明赤褐		

第34号住居跡 (第59図)

第34号住居跡は調査区北側のD-14グリッドに位置する。第30号住居跡、第3号土壇と重複し、切られる。住居跡の南壁部分のみの検出で、大半が調査区域外に延びる。

平面形については不明であるが、残存規模は長軸長1.58m、短軸長0.82m、深さ0.15mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

床面はやや凹凸が見られる。埋土は大きく4層に区分され、上層から中層にかけて焼土粒子・炭化物粒子の混入が目立つ。第2層は炭化物集積層を形成しており、人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物がまったくないため、時期は不明である。遺構の重複関係から考えると古墳時代前期に遡る可能性もある。

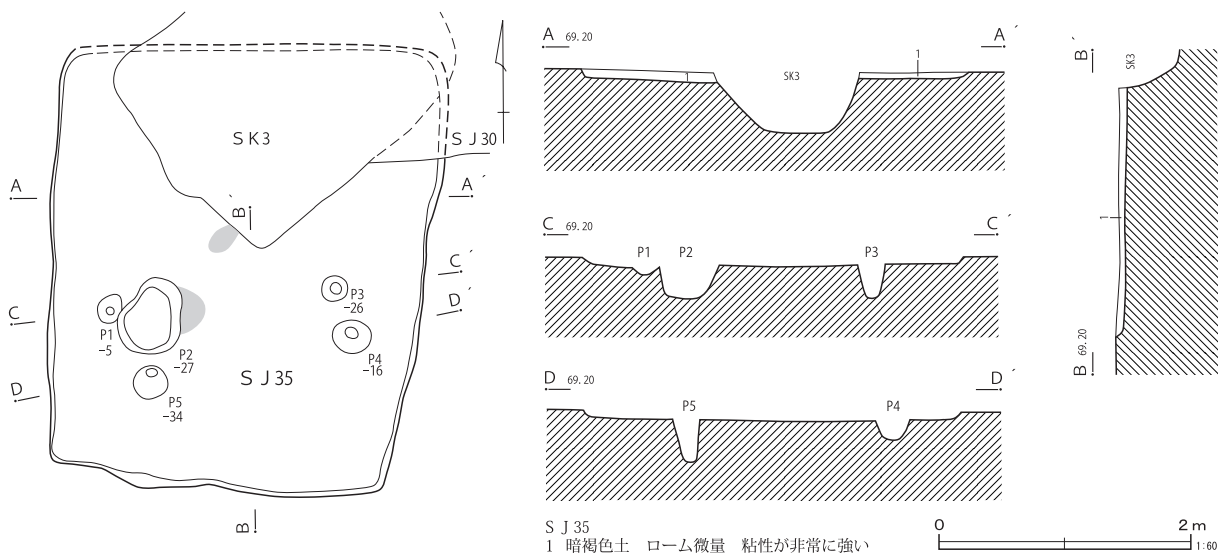
第35号住居跡 (第70図)

第35号住居跡は調査区北側のD・E-14グリッドに位置する。住居跡の北壁部分が重複する第30号住居跡と第3号土壇によって削平されているが、全容を把握できる古墳時代前期の数少ない住居跡のひとつである。

平面形は南北方向に長軸をもつ、やや歪んだ長方形を呈する。規模は長軸長3.26m、短軸長3.00m、深さ0.07mである。主軸方位はN-5°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、埋土は粘性の強い暗褐色土の単一層である。床面中央部に焼土の分布が2箇所認められた。炉跡の可能性も考えられるが、床面には明確な被熱痕は残っていなかった。

ピットは住居跡南半部を中心に5本検出された。配置に規則性がないため、住居跡に伴うかどうかは明確でない。ピットの規模は直径20~60



第70図 第35号住居跡

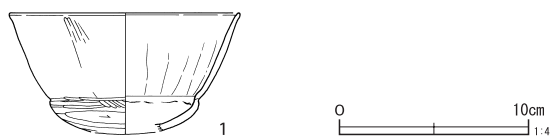
cm、深さは5～34cmとやや幅がある。貯蔵穴、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は少ないが、小型丸底埴が1点出土した(第71図)。胎土が精選され、器壁も薄く、作りも丁寧である。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半新相に位置づけられる。

第27表 第35号住居跡出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	(12.2)	6.1	—	BCEGHI	40	良好	にぶい橙		



第71図 第35号住居跡出土遺物

第36号住居跡(第64図)

第36号住居跡は調査区北側のD-15グリッドに位置し、住居跡の中では最も北に分布する。第31号住居跡に切られ、住居跡の北壁から北西隅部にかけてを検出した。

平面形は方形系と推定される。残存規模は、長軸長3.08m、短軸長0.78m、深さ0.21mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。貯蔵穴、ピット等の付属施設は検出されなかったが、壁溝が全周していた。規模は幅11～17cm、深さ3cmほどである。

出土遺物がなく、住居跡の時期は不明である。

第37号住居跡(第59図)

第37号住居跡は調査区北側のD-14グリッドに位置する。第30号住居跡、第51号溝跡と重複し、切られる。住居跡の大半が調査区域外に延びているため、北東壁の一部と床面を検出しただけで、住居跡と認定する根拠に乏しい点是否めない。

住居跡の全容は不明であるが、残存規模は、長軸長0.86m、短軸長0.45m、深さ0.28mである。主軸方位はN-43°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、壁面はやや開きながら立ち上がる。ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物がなく、住居跡の時期は不明である。

第38号住居跡(第72図)

第38号住居跡は調査区南側のN-4、M-4・5グリッドに位置する。第25号住居跡と住居跡の大半が重複しているため、残存状況はあまり良好でない。

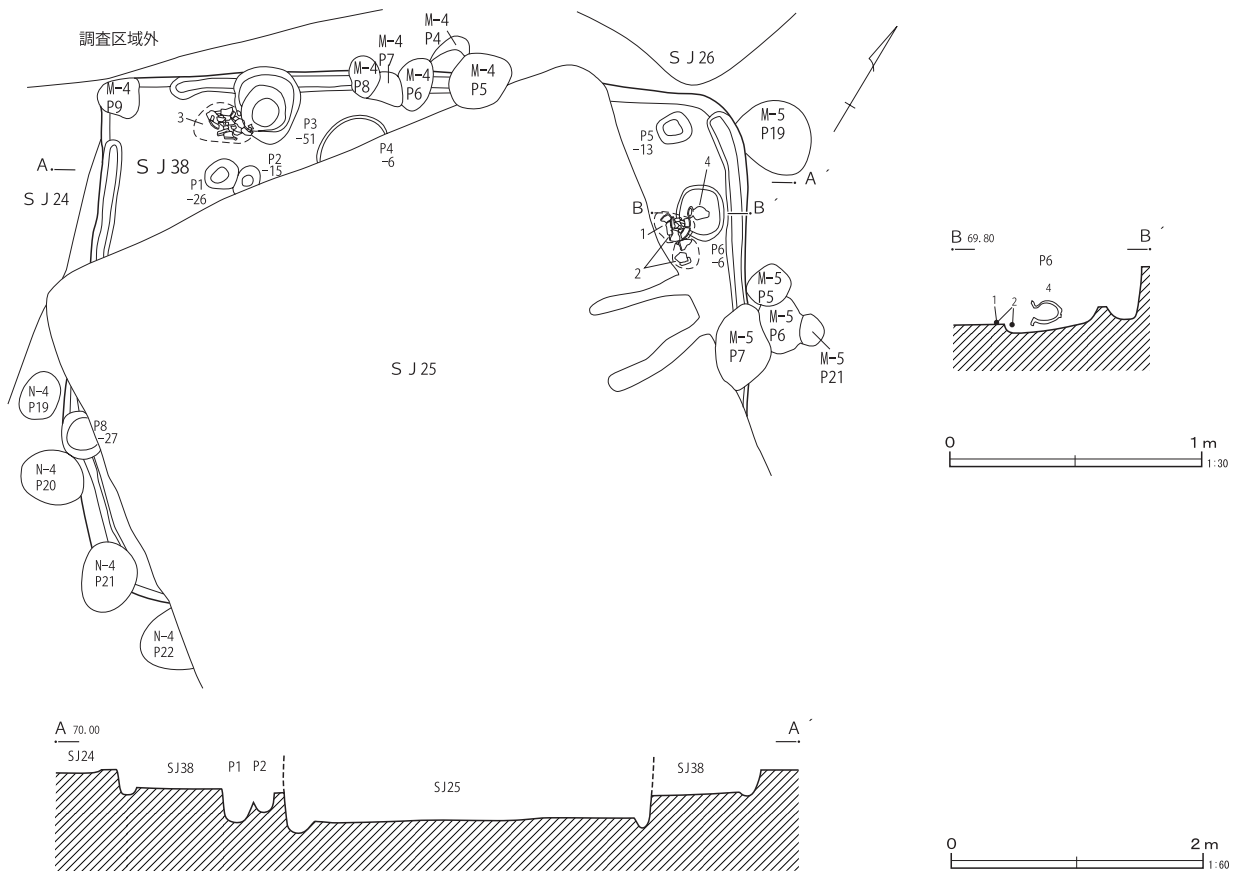
南東隅部を除く各隅部がころうじて残っているため、平面形が方形を呈することがわかる。規模は、長軸長5.13m、短軸長4.22m、深さ0.19mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。ピットは7本(P7は欠番)を検出したが、住居跡の周囲には多数のピットがあり、住居跡に伴うものを識別することは難しかった。ピットの配置及び形状・規模等にはまとまりが見られなかった。規模は、直径30～60cm、深さは6～51cmとやや幅がある。

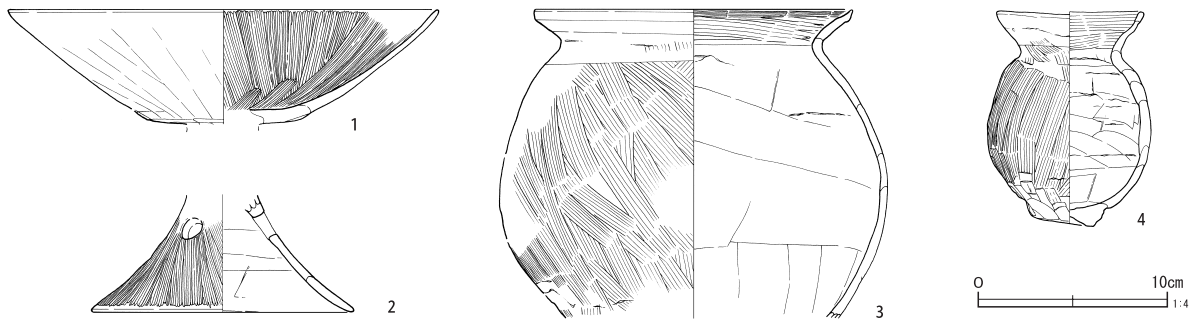
壁溝は各壁とも部分的に巡らしていたものと考えられる。幅12～22cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は北東隅部付近のP6と北西隅部付近のP3から土師器の高坏・甕・小型壺がまとまって出土した(第72図)。P6の中から4の小型壺が横倒しになった状態で出土し、その脇の床面には坏部を伏せた状態にした1・2の高坏が置かれていた。P3の脇からは3の受口状口縁の甕が潰れた状態で出土した。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半古相に位置づけられる。



第72図 第38号住居跡



第73図 第38号住居跡出土遺物

第28表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	22.8	6.1	—	BHIL	70	普通	橙	No. 2	
2	土師器	高坏	—	6.2	13.9	BCEGHI	80	普通	橙	No. 1・2	
3	土師器	甕	17.0	16.2	—	ACHIL	50	普通	にぶい黄橙	No. 4	40-6
4	土師器	小型壺	7.6	11.3	3.3	BEGHI	100	普通	にぶい橙	外面黒斑 No. 3	40-7

第39号住居跡 (第74図)

第39号住居跡は調査区南側のM-5グリッドに位置する。第40・42号住居跡、第4号土壌と重複し、住居跡南側の大半は調査区域外に延びる。重複関係は、第40・42号住居跡を切り、第4号土壌に切られていた。

平面形は方形系と推定される。残存規模は、長軸長5.60m、短軸長3.38m、深さ0.32mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

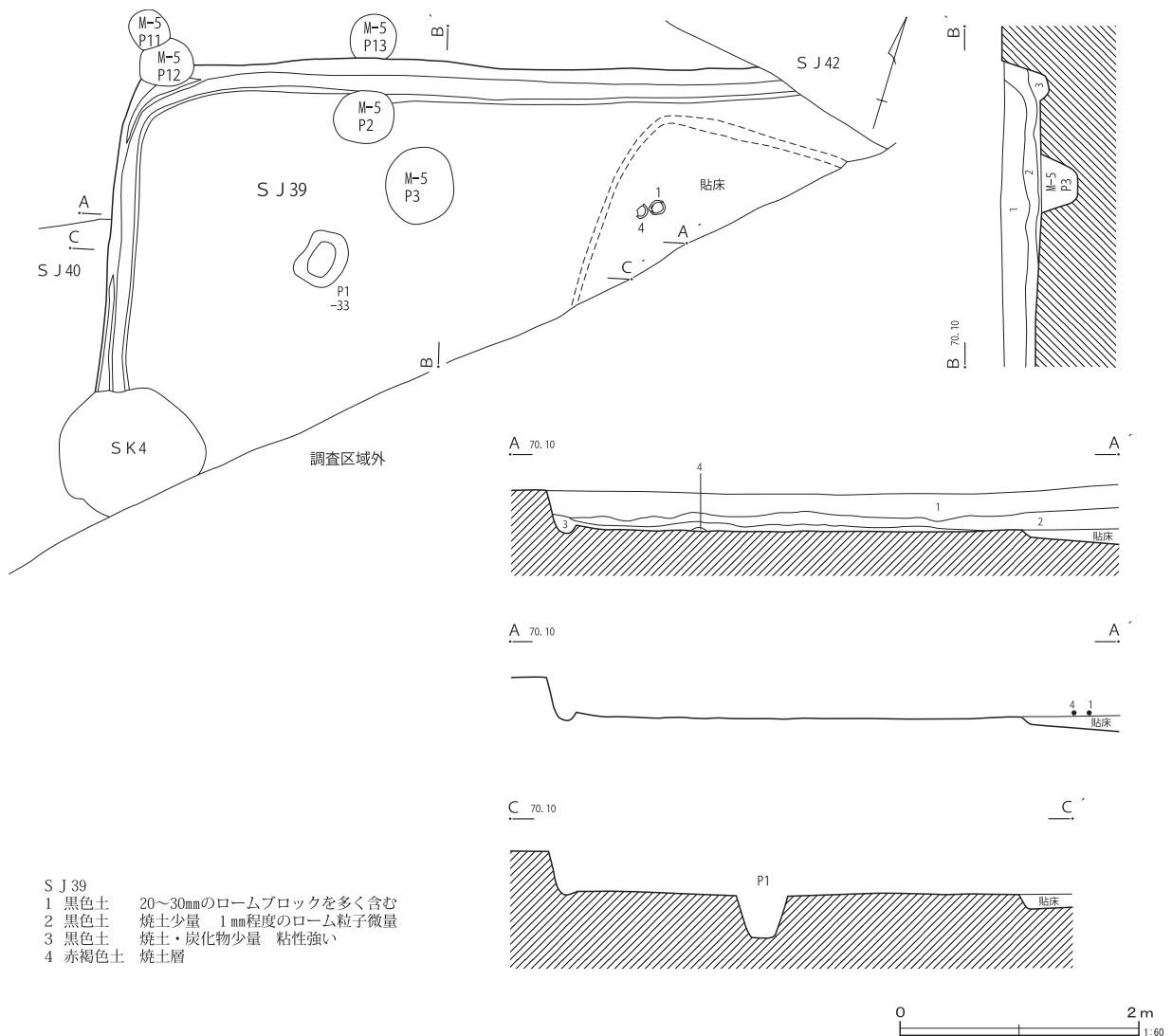
床面は概ね平坦で、東側床面の一部に貼床が認められた。貼床部分は矩形平面で、ロームブロックを含む暗褐色土によって埋め戻されていた。埋

土は大きく3層に分層され、概ね自然堆積を示している。ただし、床面には部分的に焼土を主体とする赤褐色土が堆積していた。

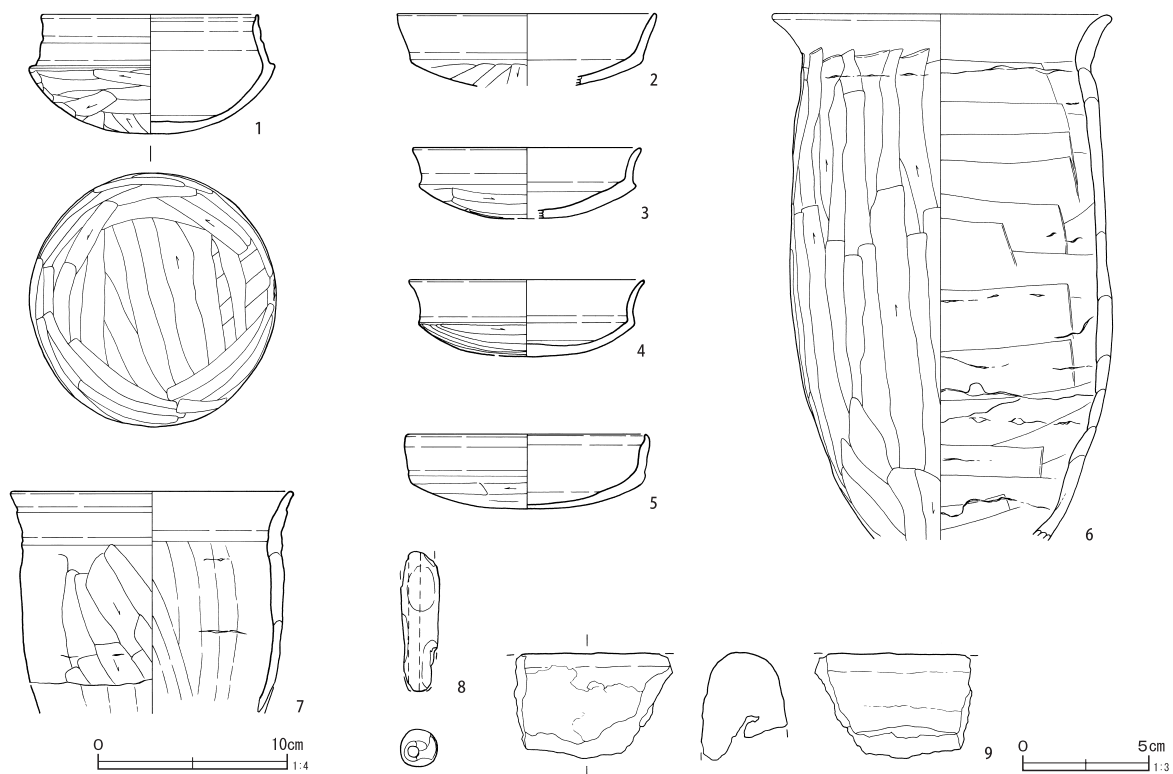
ピットは北西隅部寄りに1本検出された。P1は長径46cm、短径34cm、深さ33cmである。

壁溝はほぼ全周しており、規模は幅17~35cm、深さ6cmほどである。

出土遺物は土師器坏・甕・鉢、土錘、不明土製品等がある(第75図)。1・4の坏は貼床部分の床直から出土したが、その他は埋土からの出土である。坏は坏蓋模倣坏が主体で、口縁部が有段のもの、外反するもの、直立するものがある。1は坏



第74図 第39号住居跡



第75図 第39号住居跡出土遺物

第29表 第39号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.4	6.2	—	CEHI	100	普通	にぶい橙	No. 1	41-1
2	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	HIK	30	不良	橙	No. 2	41-2 41-3 41-4
3	土師器	坏	(12.0)	3.7	—	ACHIL	15	普通	明赤褐		
4	土師器	坏	(12.4)	4.0	—	HI	50	不良	橙		
5	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	HI	50	不良	橙		
6	土師器	甕	17.6	27.7	—	BCEHIL	70	普通	橙		
7	土師器	鉢	(15.0)	11.6	—	BCDEGHI	15	普通	橙		
8	土製品	土錘	長さ5.5cm 最大径1.5cm 孔径0.4cm 重さ10.27g			ACEI	80	普通	橙		
9	土製品	不明	長さ6.2×幅4.1cm 厚さ3.4cm			BCEHI	—	普通	明赤褐		93-5

身模倣の体部が深身の有段内屈口縁坏である。2～5は坏蓋模倣坏で、2は口縁部が外に直線的に開く、3・4は強く外反する、5は直立し口唇部内面を内削ぎするものである。6は長胴甕で、口縁部は弱く外反して開く。7は頸部の収縮の弱い鉢。8は管状の土錘。9の不明土製品は粘土板を逆U字形に折り曲げたもので、埴輪質である。

住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土土器の様相から6世紀後葉に位置づけられる。

第40号住居跡 (第76図)

第40号住居跡は調査区南側のM・N-5グリッドに位置する。住居跡の南側は調査区域外に延びる。第25・39号住居跡、第4号土壌と重複し、すべてに切られる。一辺3m前後の小型住居跡であろう。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長2.92m、短軸長2.22m、深さ0.22mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

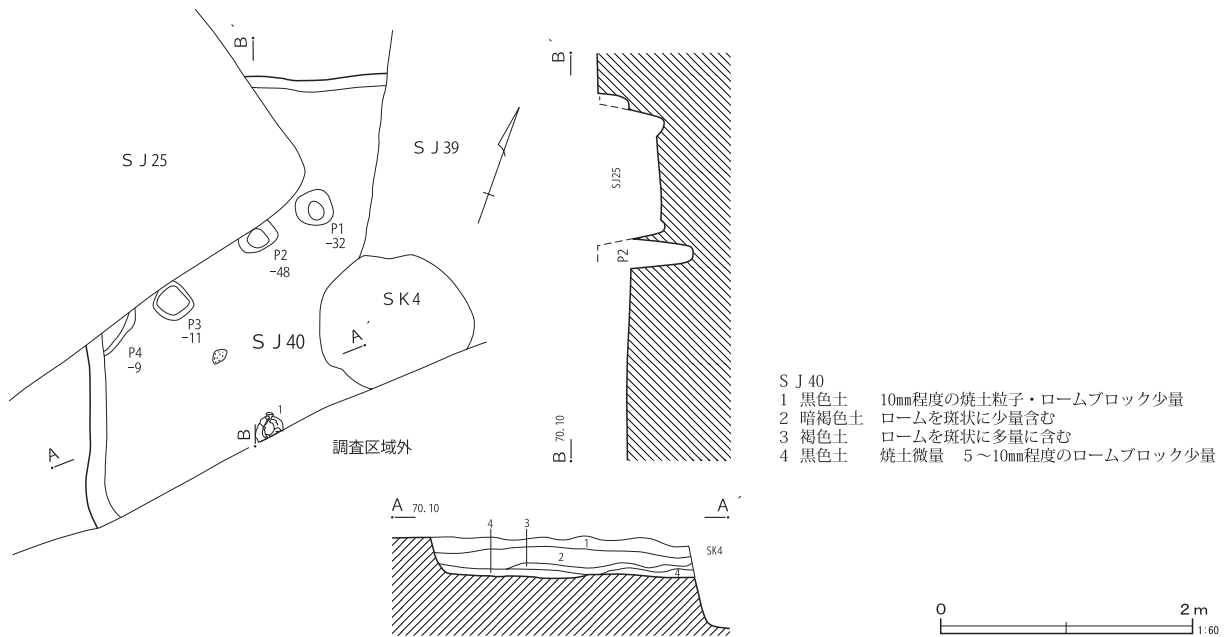
床面は概ね平坦である。埋土は4層に分層され、

自然堆積を示す。ピットは4本検出された。第25号住居跡の南東壁に沿うように4本のピットが一行に並んでいた。直径30cmほどであるが、深度は一樣でない。壁溝等は検出されなかった。

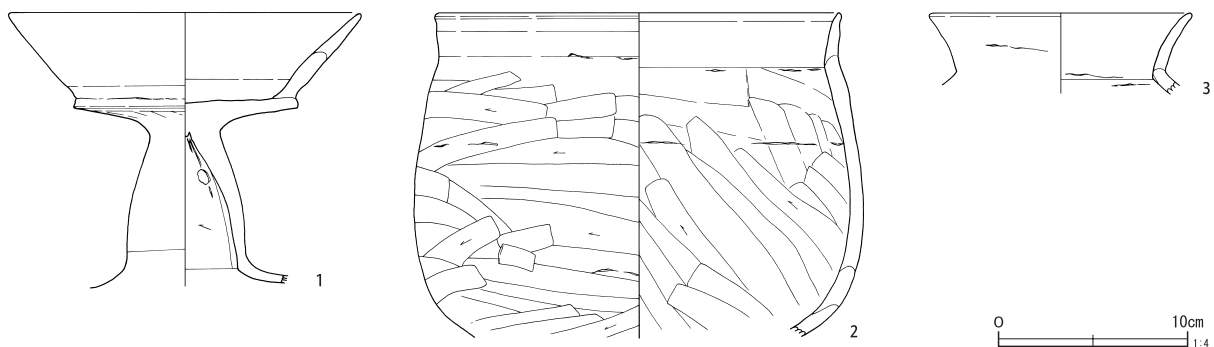
出土遺物は少なく、土師器高坏・鉢・小型甕等がある(第77図)。1の高坏は調査区壁際の床面直上から出土した。他に円礫が床面中央部から出土

している。1の高坏は円板状の坏底部の上に口縁部を乗せ外面に明瞭な段を作り出している。脚部は中膨らみとなり、内面に篋削りを施す。2は体部下半に最大径をもち、口縁部が短く外反する大型鉢で、あまり類例のないものである。

住居跡の時期は、重複関係や和泉型高坏の存在から和泉期後半の5世紀中葉に位置づけられる。



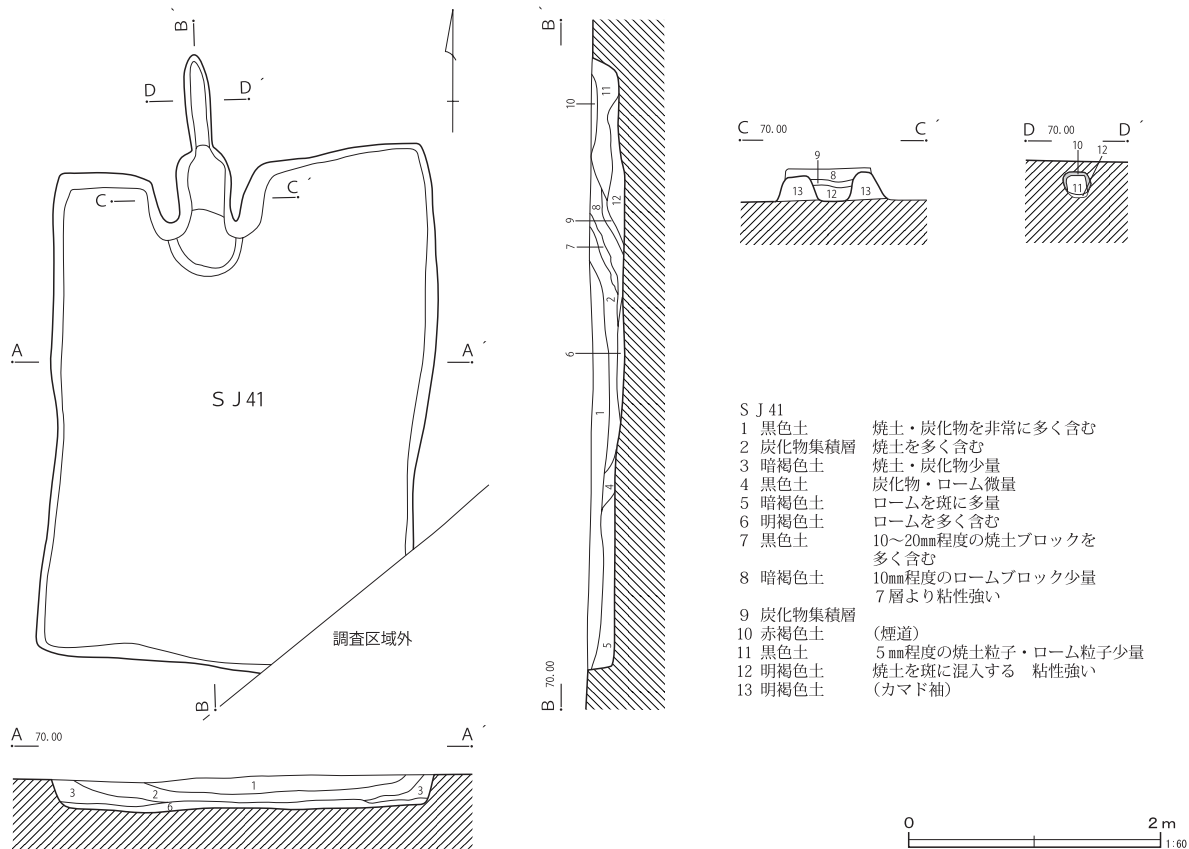
第76図 第40号住居跡



第77図 第40号住居跡出土遺物

第30表 第40号住居跡出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	18.4	14.4	—	CEHI	90	普通	橙	No.2	41-5
2	土師器	鉢	(21.2)	17.0	—	CHI	30	普通	にぶい黄橙	SJ25	41-6
3	土師器	小型甕	(13.8)	4.2	—	CEHI	20	普通	橙		



第78図 第41号住居跡

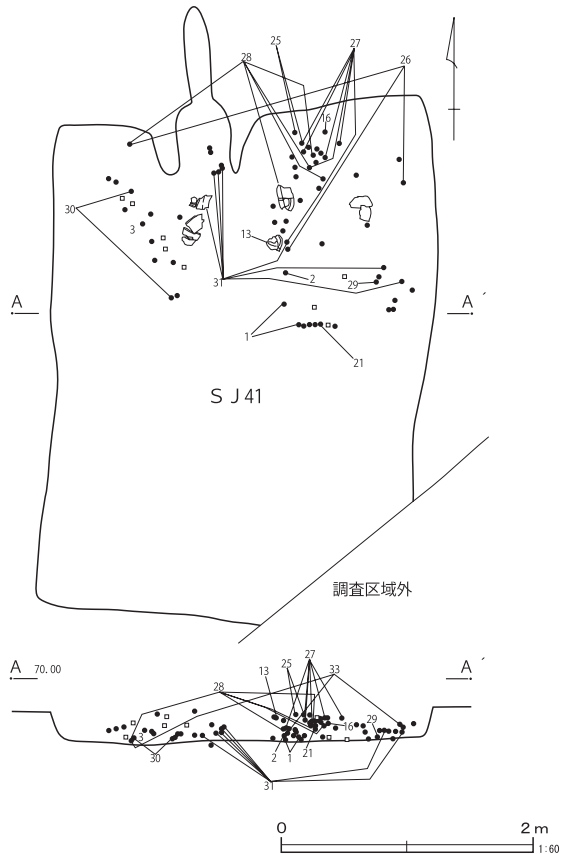
第41号住居跡 (第78・79図)

第41号住居跡は調査区南側のL・M-5・6グリッドに位置する。本住居跡は、鬼高期の大型住居跡である第42号住居跡の廃絶後、その埋土を掘り込んで構築された北カマドの小型の住居跡で、住居跡の南東隅部は調査区域外に延びている。

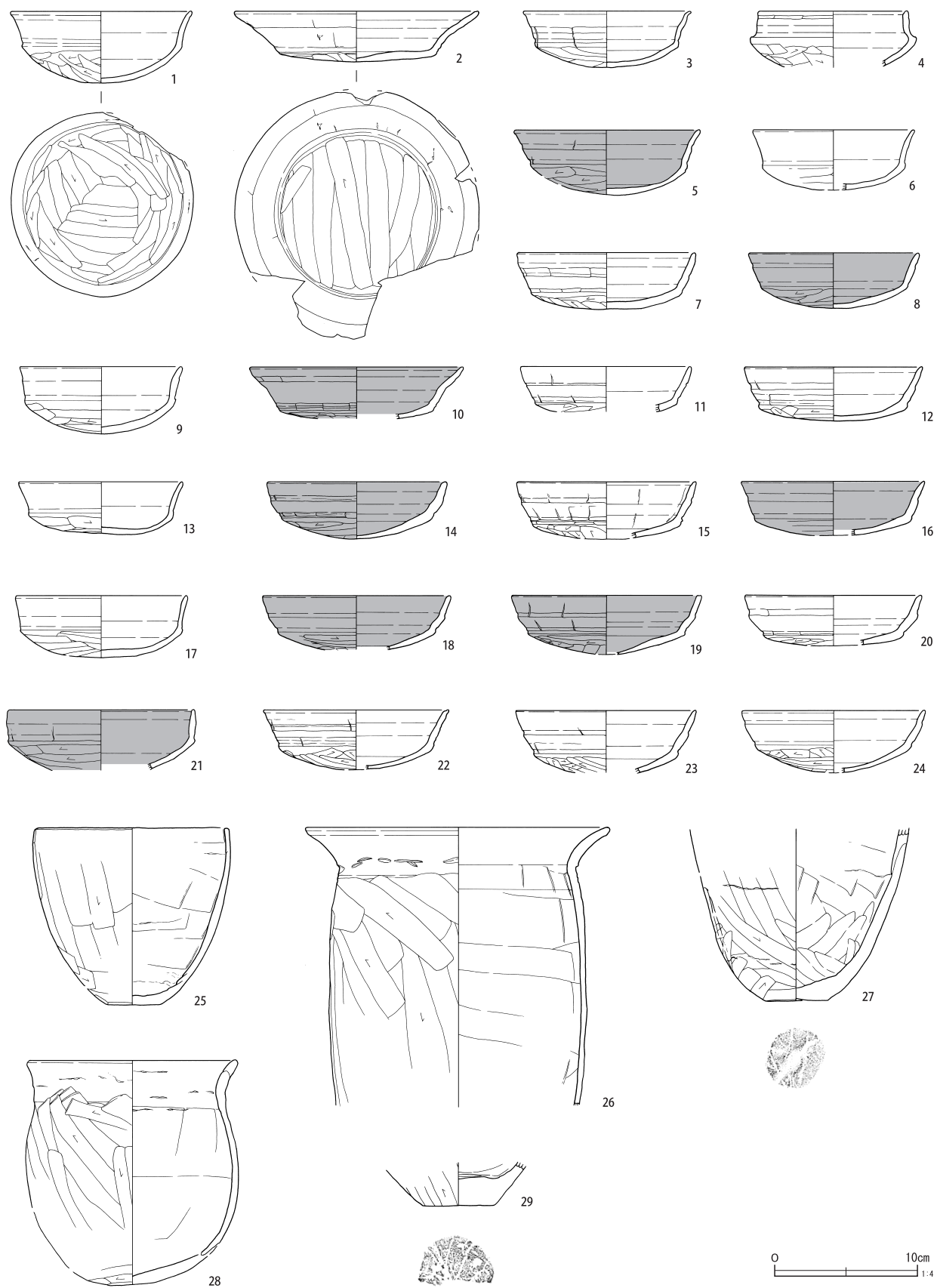
平面形は南北に長い、やや歪んだ長方形を呈する。規模は、長軸長4.05m、短軸長3.02m、深さ0.22mである。主軸方位はN-2°-Eを指す。

床面はやや凹凸がある。埋土は大きく6層に分層される。自然堆積を示すが、第1層は焼土・炭化物を非常に多く含む黒色土で、人為的な埋め戻しの可能性もある。

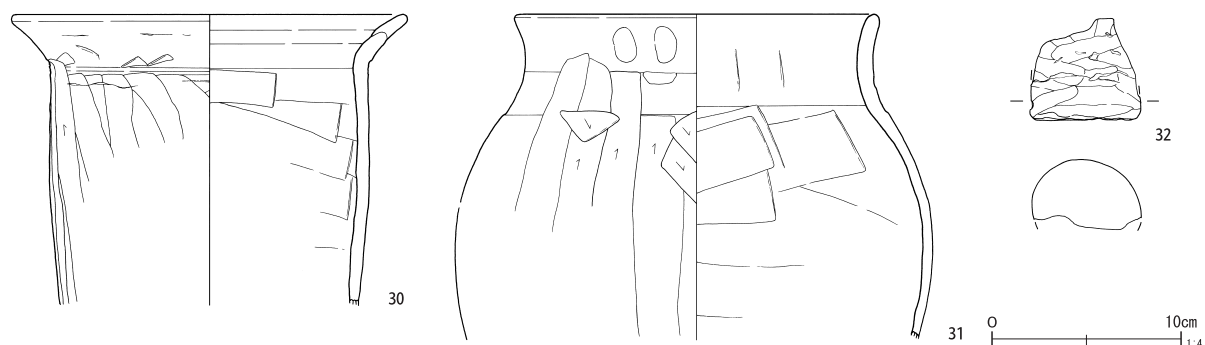
カマドは北壁中央やや西寄りに設けられていた。燃烧部は平面方形で壁を大きく切り込む。煙道部はトンネル状に掘り抜き、燃烧部からはほぼ水平に延びる。全長1.78m、カマド袖幅1.05m、深さ0.26m、燃烧部長1.05m、燃烧部底面幅0.30m、



第79図 第41号住居跡遺物出土状況



第80図 第41号住居跡出土遺物(1)



第81図 第41号住居跡出土遺物（2）

第31表 第41号住居跡出土遺物観察表（第80・81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.6	5.0	—	CEHI	90	良好	明赤褐	No.42・44	41-7
2	土師器	皿	17.2	3.5	—	CEHI	90	普通	橙	No.41	41-8
3	土師器	坏	(11.7)	3.9	—	ACHI	60	不良	橙	No.56	42-1
4	土師器	坏	(10.3)	3.9	—	CEHIK	20	普通	にぶい赤褐		
5	土師器	坏	13.0	4.4	—	CEHI	55	普通	橙	内外面黑色処理	42-2
6	土師器	坏	(11.3)	4.2	—	HI	30	不良	橙		
7	土師器	坏	12.4	3.9	—	ABHI	75	普通	にぶい橙		42-3
8	土師器	坏	(11.8)	3.8	—	CHI	30	普通	にぶい赤褐	内外面黑色処理	
9	土師器	坏	11.3	4.6	—	CEHI	60	普通	橙		42-4
10	土師器	坏	(14.8)	3.6	—	CEHI	40	普通	橙	内外面黑色処理	
11	土師器	坏	11.8	3.1	—	CHI	20	普通	橙		
12	土師器	坏	12.4	3.7	—	CEHI	50	普通	橙		42-5
13	土師器	坏	11.4	3.5	—	AHIK	90	普通	橙	No.38	42-6
14	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	CEHI	40	普通	橙	内外面黑色処理	
15	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	CEHI	25	普通	橙		
16	土師器	坏	12.8	3.7	—	CEHI	25	普通	橙	内外面黑色処理 No.10	
17	土師器	坏	(11.8)	3.3	—	ACHI	30	不良	橙		
18	土師器	坏	(13.0)	3.7	—	CEHI	20	普通	にぶい褐	内外面黑色処理	
19	土師器	坏	(13.2)	4.1	—	CEHI	25	普通	灰褐	内外面黑色処理 No.32	
20	土師器	坏	(12.3)	3.4	—	CEHI	25	普通	橙		
21	土師器	坏	(13.0)	4.1	—	CEHI	20	普通	にぶい赤褐	内外面黑色処理 No.45	
22	土師器	坏	(13.0)	4.1	—	CEHI	30	普通	橙	L 5 G-99	
23	土師器	坏	(12.6)	4.3	—	CHI	30	良好	にぶい黄橙		
24	土師器	坏	(12.9)	4.3	—	CHI	30	普通	にぶい黄橙	カマド	
25	土師器	鉢	(13.2)	12.3	3.8	CEHI	50	普通	褐灰	No.8・9	
26	土師器	甕	21.3	19.4	—	ACHI	50	普通	にぶい黄橙	No.24・39・72	42-7
27	土師器	甕	—	11.9	4.4	CEGHI	80	普通	にぶい橙	底部木葉痕 No.2・3・7・8・11・51	
28	土師器	小型甕	14.6	15.6	—	ACGHI	60	普通	にぶい黄橙	No.11・13・16・24・31	42-8
29	土師器	甕	—	3.0	4.1	ABEHI L	50	普通	明赤褐	底部木葉痕 No.79	
30	土師器	甕	(20.9)	15.3	—	CEHI L	20	普通	橙	No.64・70	
31	土師器	甕	18.9	17.2	—	BCEHI	40	普通	橙	外面黒斑 No.20・21・51・53・73・75	
32	土製品	支脚	高さ5.2cm 径5.7cm		—	AHI	40	普通	にぶい橙	柱状支脚	

煙道部長0.73mである。カマド埋土は第9層が炭化物集積層、第10層が被熱により赤変した煙道部内壁面である。カマド袖部は明褐色土を用いて構築されていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・鉢・甕・小型甕、土製支脚等がある(第80・81図)。カマドの右脇から前面にかけて出土し、埋土中に廃棄されたものが多い。カマド右脇からは25の鉢、27の甕、28の小型甕、カマド前面からは31の甕、1・2・13の坏等が出土した。

坏は口径11~12cm台の小型化した単純口縁の坏蓋模倣坏と有段口縁坏が主体を占める。有段口縁坏は黒色処理を施すものと無彩の二者があり、口縁部の段は2段がほとんどである。これに4の小型化した坏身模倣坏や2の口縁部が外反し体部が扁平な皿が伴う。甕は長胴甕と胴張甕がある。長胴甕は口縁部に最大径をもち、胴部上半を斜めにヘラケズリするものが見られる。32は柱状の土製支脚である。

住居跡の時期は、7世紀前葉を中心に位置づけられる。

第42号住居跡(第82図)

第42号住居跡は調査区南側のL・M-5・6グリッドに位置する。五領期の第52・53号住居跡及び鬼高期初頭の第54号住居跡を切り、鬼高期後半の第39・41・45号住居跡及び第11号土壌に切られる。一辺8m前後の大型住居跡で今回の調査では第97号住居跡に次ぐ規模である。住居跡の北西隅部及び東壁部分から南東隅部にかけては調査区域外に延びる。

平面形は方形と推定される。規模は長軸長7.95m、短軸長6.55m、深さ0.40mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は4層に大きく分層され、自然堆積を示す。住居廃絶後、埋土を掘

削して第41号住居跡が構築されていた。

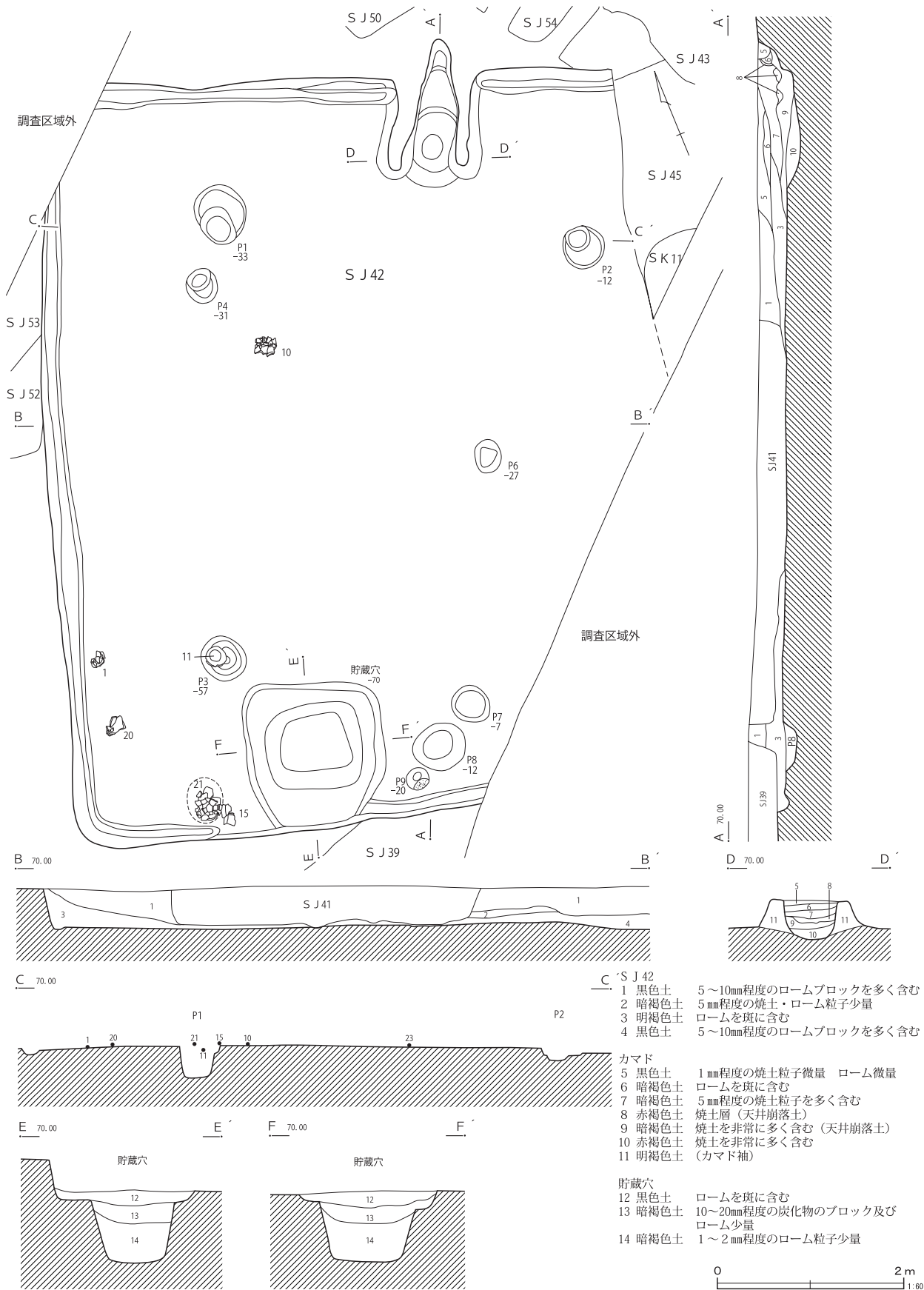
カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。燃燒部は皿状に浅く掘り込まれ、段差をもって壁を短く切り込んだ煙道部に移行する。全長1.60m、カマド袖幅1.10m、深さ0.45m、燃燒部長1.30m、燃燒部底面幅0.40m、煙道部長0.30mである。カマド埋土は第8・9層が天井崩落土、第10層が使用面に相当する。カマド袖部は壁に対し、やや左に傾いて取り付け、明褐色土で構築されていた。

貯蔵穴は、カマドと反対側の南壁中央西寄りの壁際に設けられていた。平面形は上面を不整形に浅く掘り込み、その内部に隅丸方形の貯蔵穴が掘り込まれていた。規模は上面が長径1.60m、短径1.50m、下面が長径1.03m、短径0.94m、深さ0.70mである。貯蔵穴埋土は3層に分層され、暗褐色土を主体とする。

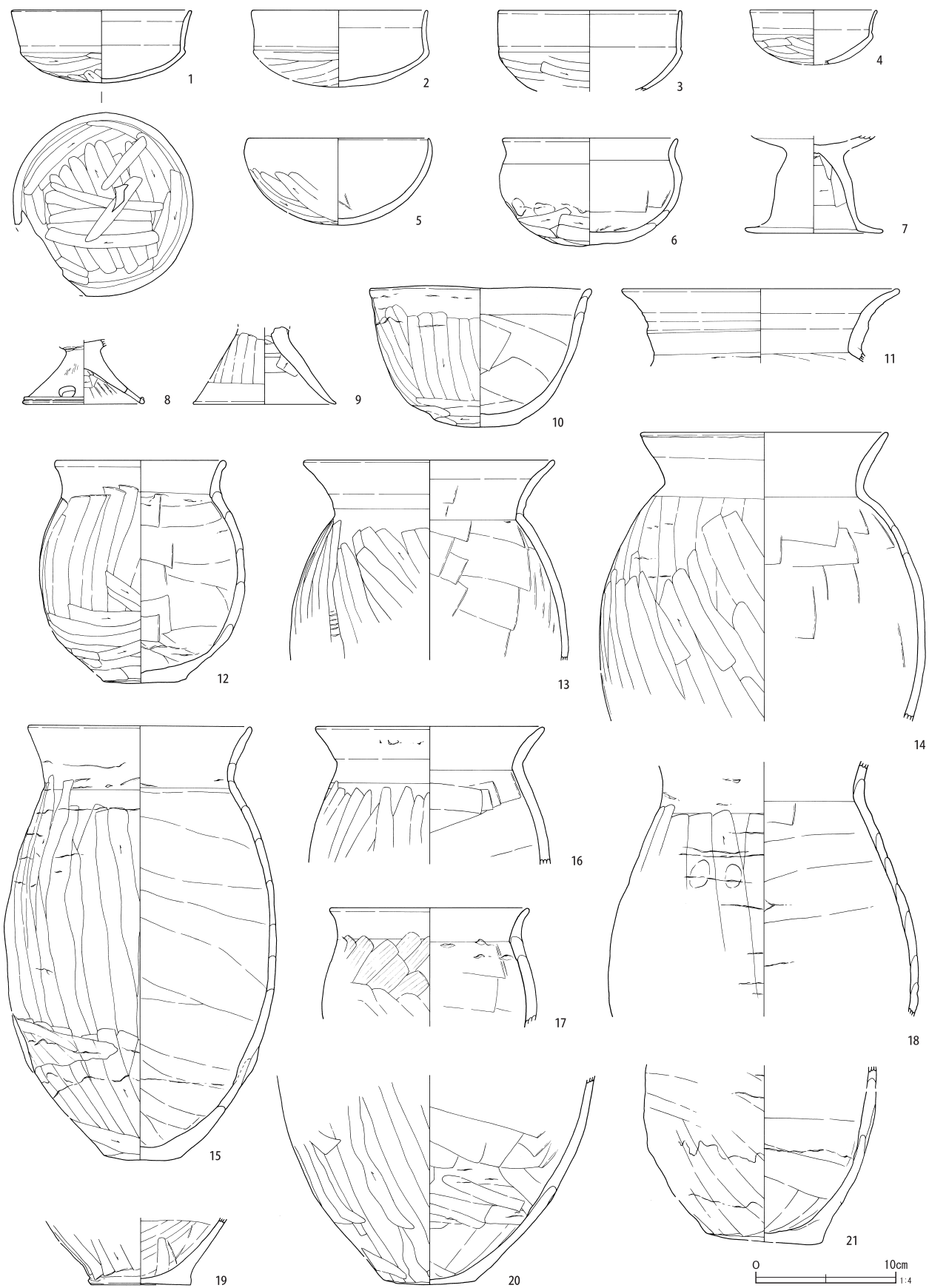
ピットは9本検出された。対角線上に規則的な配置が想定されるP2~P4の3本が支柱穴と考えられる。柱間距離はP2~P4が4.00m、P4~P3が4.10mである。その他のピットについては住居跡に伴うものかどうかは明確でない。しかし、大型住居跡であることから、補助的な柱や入口施設に関わる可能性も考えられる。壁溝はほぼ全周し、幅14~29cm、深さ7cmほどである。

出土遺物は土師器坏・埴・高坏・鉢・壺・小型甕・甕・甔、砥石等がある(第83・84図)。遺物は、住居跡南西隅部から貯蔵穴周辺に集中する。西壁際南寄りから1の坏、20の甕、貯蔵穴周辺から15の甕が出土した。P3の内部には11の壺口縁部が埋設されていた。この他にP4付近から10の鉢が床直で出土した。8の高坏脚部は混入と考えられる。23は凝灰岩製の砥石である。

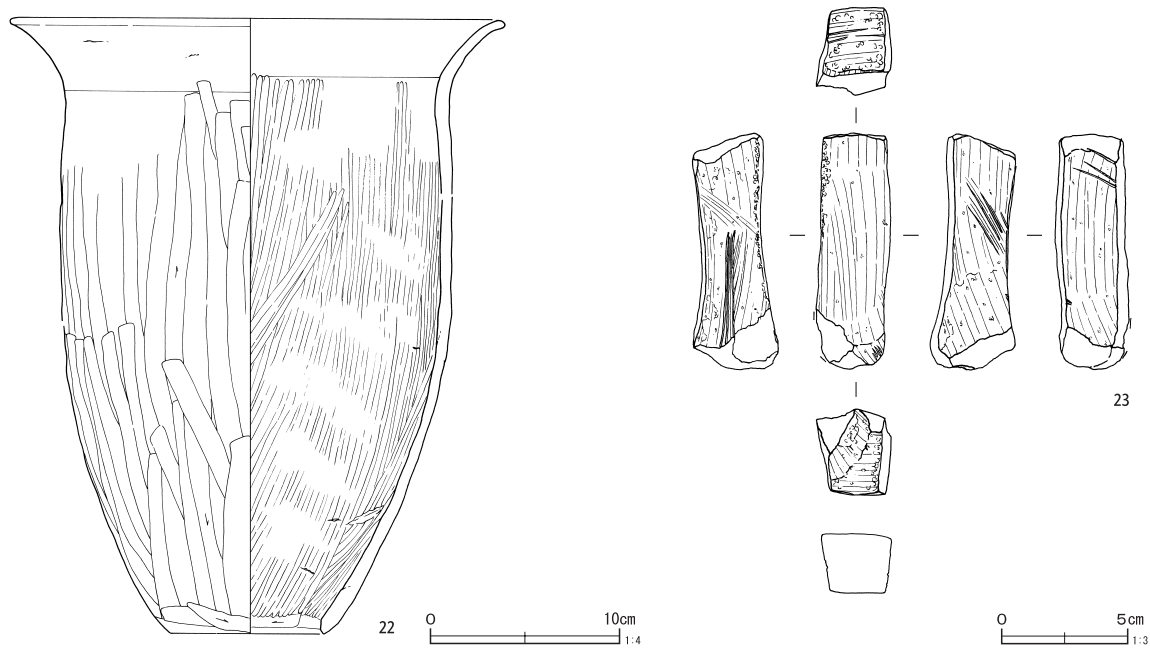
住居跡の時期は、口縁部が長く直立する模倣坏、二重口縁壺、胴部に最大径をもつ長胴甕、内面を丁寧にヘラミガキする大型甔等の特徴を考え合わせると、5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられる。



第82図 第42号住居跡



第83図 第42号住居跡出土遺物（1）



第84図 第42号住居跡出土遺物（2）

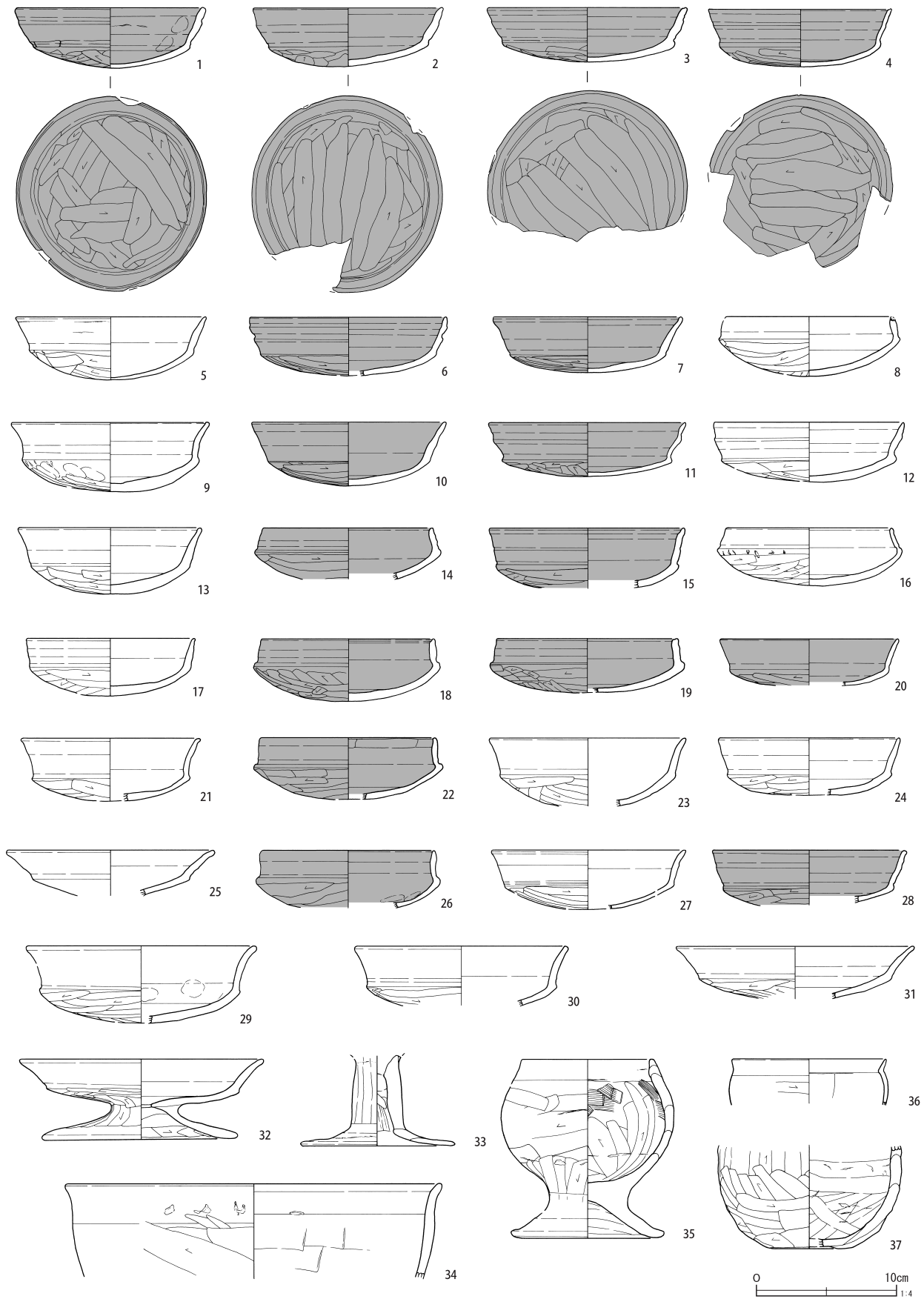
第32表 第42号住居跡出土遺物観察表（第83・84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	坏	12.8	5.1	—	CHI	90	普通	にぶい橙	外面黒斑 No.2	42-9	
2	土師器	坏	12.6	5.4	—	AEH	90	不良	橙		43-1	
3	土師器	坏	(13.0)	5.7	—	ACHI	25	普通	にぶい橙			
4	土師器	坏	9.0	3.8	—	AEHI	80	普通	橙		43-2	
5	土師器	坏	(12.9)	6.2	—	BCEHL	40	普通	橙	カマド		
6	土師器	壺	12.4	7.5	—	CEHI	80	普通	橙		43-5	
7	土師器	高坏	—	6.9	(9.9)	CHI	80	普通	橙			
8	土師器	高坏	—	4.5	8.6	CEI	70	普通	橙	三方透孔	43-3	
9	土師器	高坏	—	5.4	(10.2)	ACHI	80	普通	明赤褐			
10	土師器	鉢	15.7	9.7	6.0	BCEHIL	90	普通	にぶい黄橙	No.1	43-4	
11	土師器	壺	19.6	5.3	—	ACEHI	95	普通	明赤褐	内面黒斑 No.6		
12	土師器	小型甕	12.2	15.7	6.0	CHI	75	普通	明赤褐	内外面煤付着 P5	43-6	
13	土師器	甕	(17.9)	14.2	—	ACHI	40	普通	にぶい赤褐			
14	土師器	甕	17.9	20.5	—	ACHI	70	普通	にぶい橙	外面黒斑		
15	土師器	甕	15.8	31.0	5.5	ABCEHIJ	90	普通	橙	No.5	43-7	
16	土師器	甕	(16.2)	9.7	—	ACEHI	20	普通	橙			
17	土師器	小型甕	(14.0)	8.4	—	CEH	15	普通	明赤褐			
18	土師器	甕	—	18.1	—	BEGI	20	普通	にぶい褐	外面煤付着		
19	土師器	甕	—	4.7	7.1	ABCEHI	70	普通	明赤褐			
20	土師器	甕	—	14.8	6.5	BCGHI	30	普通	にぶい橙	No.3		
21	土師器	甕	—	12.7	8.3	ABCEHIL	50	普通	橙	No.4		
22	土師器	甕	(26.2)	32.5	8.2	CEHI	50	普通	にぶい橙	外面黒斑 M6G-3		
23	石製品	砥石	長さ9.3cm 幅3.0cm 厚さ2.4cm 重さ115.64g					凝灰岩				91-2

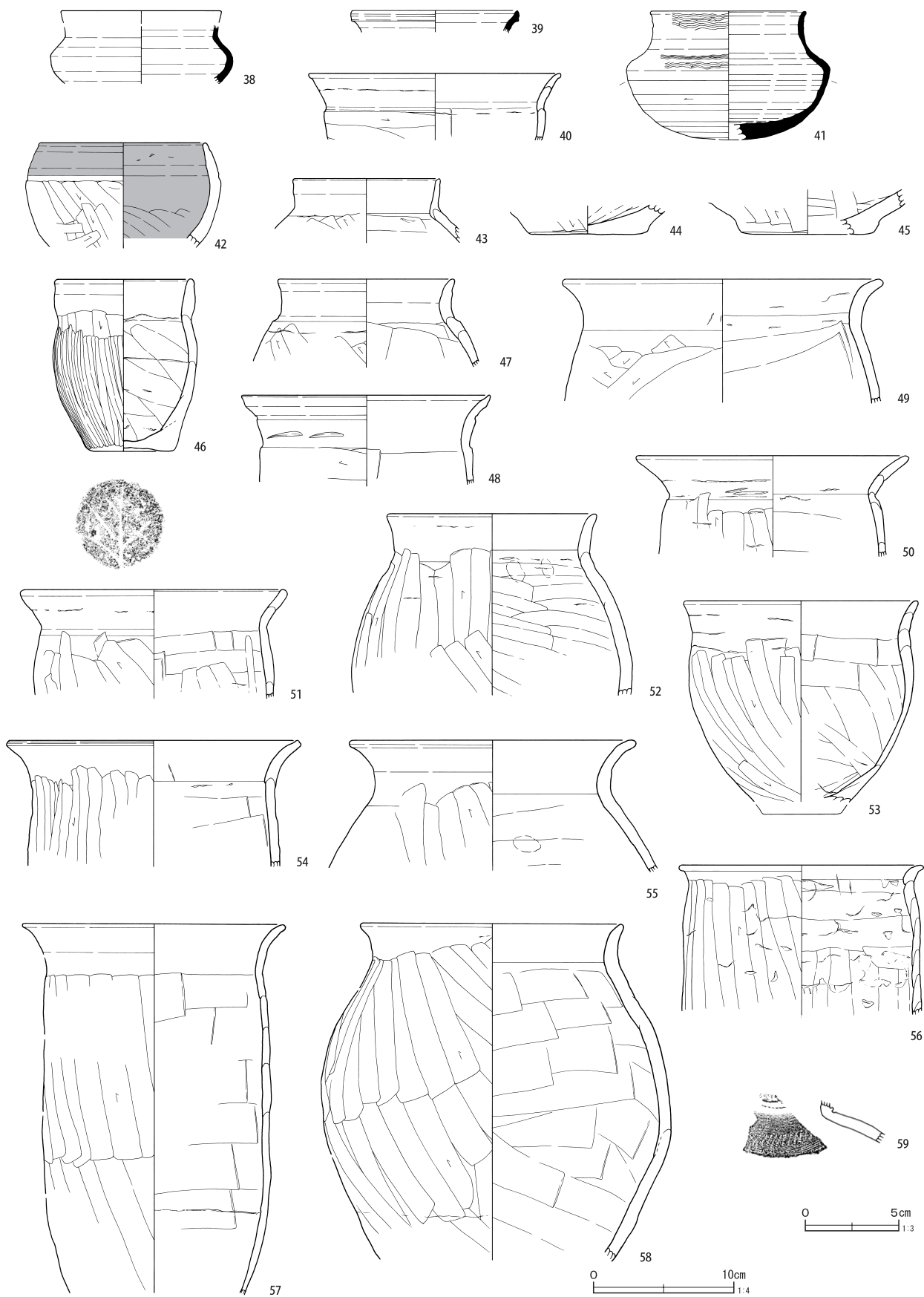
第43号住居跡（第85図）

第43号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6グリッドに位置する。今回の調査区の中で最も重

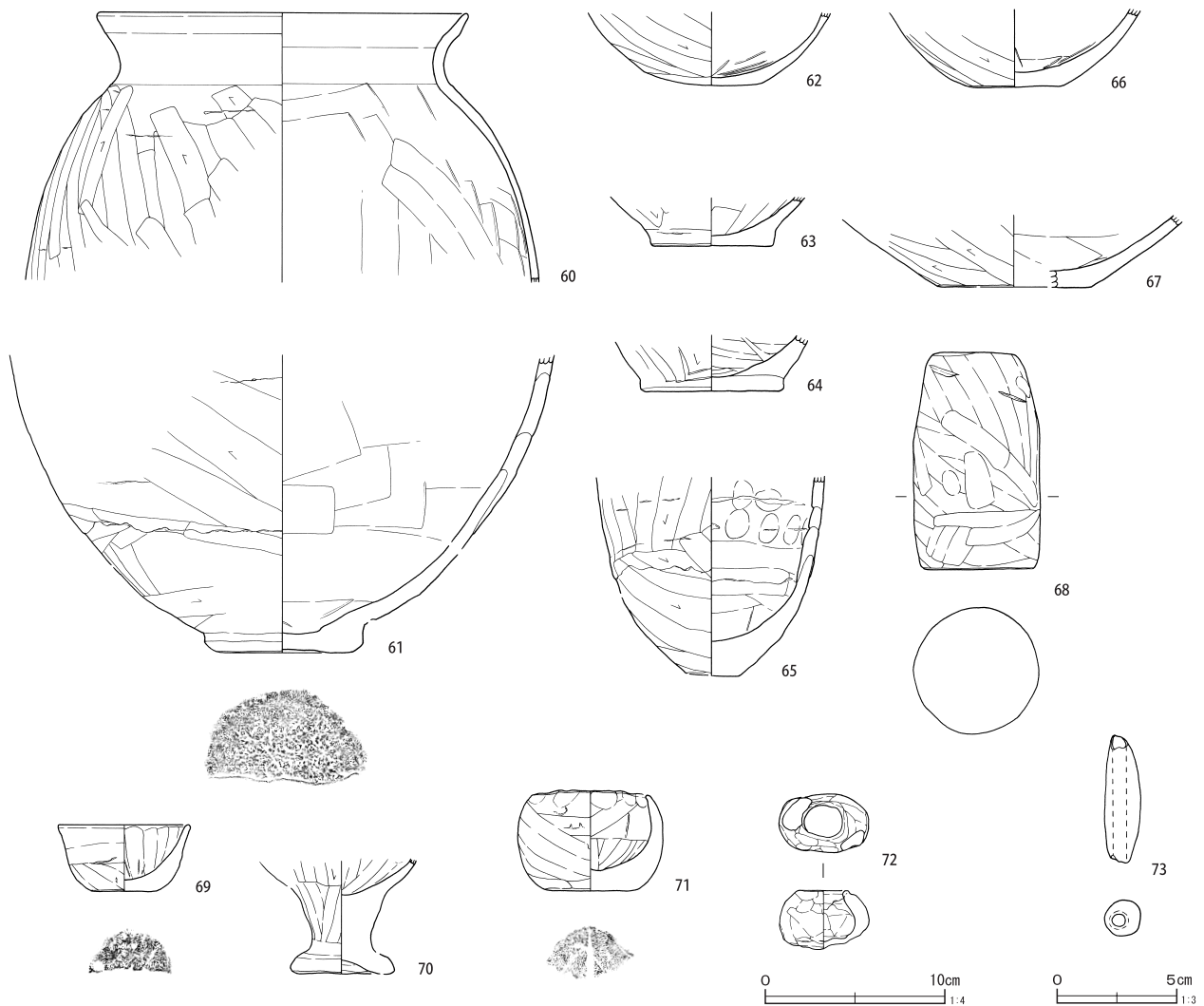
複の著しい箇所、かつ近接した時期の重複である。第45・49・50・54・55・73号住居跡の6軒と重複し、いずれも切っている。住居跡の南東側の



第86図 第43号住居跡出土遺物（1）



第87图 第43号住居跡出土遺物 (2)



第88図 第43号住居跡出土遺物（3）

大半が調査区域外に延びているため全容は不明であるが、一辺6mを超す大型住居跡である。

平面形は隅丸方形と推定される。残存規模は、長軸長6.38m、短軸長5.40m、深さ0.43mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は大きく7層に分層される。明褐色土、暗褐色土を主体とし、床面直上に第6層の炭化物集積層が確認された。

カマドは北東壁中央やや北寄りに設けられていた。燃焼部は床面より僅かに高く、燃焼部奥壁に段差をもって水平に延びる煙道部に移行する。煙道部先端はピット状に掘り込まれ、垂直に立ち上がる。全長2.10m、カマド袖幅0.80m、深さ0.45

m、燃焼部長0.95m、燃焼部底面幅0.35m、煙道部長1.15mである。カマド埋土は第10・12層が天井崩落土、第14層が使用面に当たる。燃焼部底面奥壁寄りに68の土製支脚が設置されていた。カマド袖部は明褐色土を用いて構築していた。

貯蔵穴は、カマド右脇に検出され、南東側は調査区域外にかかる。平面楕円形と推定される。残存規模は、長径0.55m、短径0.72m、深さ0.53mである。貯蔵穴埋土は2層に分層される。

ピットは規則的に配置され4本を検出した。東側に位置するP2は調査区域外にかかる。いずれも深度は12cmほどで浅い。柱間距離はP1～P2間は2.35m、P2～P3間は3.10m、P3～P4

第33表 第43号住居跡出土遺物観察表 (第86~88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.3	4.3	—	BCHI	95	普通	黒褐	内外面黒色処理 No.2	44-1
2	土師器	坏	13.4	4.1	—	CEHI	90	普通	橙	内外面黒色処理	44-2
3	土師器	坏	14.2	3.8	—	CEHI	75	普通	灰黄	内外面黒色処理	44-3
4	土師器	坏	(13.0)	4.2	—	ACHI	65	普通	褐灰	内外面黒色処理	44-4
5	土師器	坏	13.5	4.4	—	BEHI	95	不良	橙	カマド	44-5
6	土師器	坏	(14.0)	4.1	—	ACHI	50	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	44-6
7	土師器	坏	(13.5)	3.9	—	ACEHI	40	普通	橙	内外面黒色処理	44-7
8	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	CEHI	30	普通	橙		
9	土師器	坏	(14.0)	4.9	—	ACEHI	50	普通	橙	外面黒斑	44-8
10	土師器	坏	(13.8)	4.5	—	ACEHI	30	普通	にぶい褐	内外面黒色処理	
11	土師器	坏	(14.0)	3.8	—	ACEHIK	45	普通	にぶい橙	内外面黒色処理 胎土緻密 K17G-10	44-9
12	土師器	坏	13.5	4.2	—	CEHI	60	普通	にぶい黄橙	外面黒斑	44-10
13	土師器	坏	(13.0)	4.6	—	BCEHI	45	普通	橙	片岩(1.0~5.0mm大)多量	45-1
14	土師器	坏	(12.0)	3.7	—	ACHI	40	良好	にぶい橙	内外面黒色処理	
15	土師器	坏	(14.0)	4.2	—	CEHI	25	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
16	土師器	坏	11.7	4.1	—	CEHI	55	普通	橙		45-2
17	土師器	坏	(12.0)	4.0	—	ACEHI	30	普通	橙		45-3
18	土師器	坏	12.3	4.4	—	ACEHI	60	普通	橙	内外面黒色処理	45-4
19	土師器	坏	(13.0)	3.8	—	ACEGHI	30	良好	にぶい褐	内外面黒色処理	
20	土師器	坏	(12.6)	3.3	—	ABCHI	20	普通	橙	内外面黒色処理	
21	土師器	坏	(12.6)	4.4	—	HI	40	普通	橙		
22	土師器	坏	(12.4)	4.3	—	ACHI	30	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	45-5
23	土師器	坏	(14.0)	4.8	—	AEHIL	40	普通	橙	カマド	
24	土師器	坏	(12.8)	3.9	—	CEHI	20	普通	にぶい褐		
25	土師器	坏	(14.7)	3.2	—	AHI	20	普通	にぶい橙		
26	土師器	坏	(12.2)	4.1	—	CEHI	25	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
27	土師器	坏	13.8	4.2	—	CEHI	40	普通	橙		45-6
28	土師器	坏	13.6	3.8	—	CEHI	60	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	45-7
29	土師器	坏	(16.2)	5.4	—	ABCHI	70	普通	橙	外面黒斑	45-8
30	土師器	坏	(15.0)	4.2	—	AHI	20	良好	にぶい橙		
31	土師器	坏	(17.0)	3.7	—	ACEHI	40	良好	にぶい橙		
32	土師器	高坏	17.2	5.6	14.0	ACHI	75	普通	橙		46-1
33	土師器	高坏	—	6.4	(11.0)	CEHI	25	普通	にぶい黄橙		
34	土師器	鉢	(26.8)	6.7	—	BCHI	10	普通	橙		
35	土師器	台付埴	(9.4)	12.7	(10.9)	BCHI	50	普通	にぶい赤褐	L6G-37	45-9
36	土師器	鉢	(11.0)	3.2	—	CHI	10	普通	にぶい橙		
37	土師器	鉢	—	7.3	(6.4)	ABCEHIL	40	普通	明赤褐		
38	須恵器	短頸壺	—	4.1	—	IKL	10	普通	黄灰		
39	須恵器	壺	(11.8)	1.5	—	IKL	5	普通	灰		
40	土師器	鉢	(17.8)	4.7	—	BCEHIL	20	普通	橙		
41	須恵器	短頸壺	(11.0)	9.1	—	IKL	25	良好	灰		
42	土師器	鉢	(11.7)	7.4	—	CEHI	40	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
43	土師器	小型甕	(10.4)	4.5	—	ACHI	20	良好	にぶい赤褐		
44	土師器	壺	—	2.0	8.5	BCEHIL	50	普通	橙		
45	土師器	壺	—	3.1	(9.6)	AHKL	30	普通	にぶい黄橙		
46	土師器	小型甕	9.7	12.1	6.2	EGIK	100	普通	にぶい黄橙	底部木葉痕	46-2
47	土師器	甕	(12.5)	6.2	—	ABCHIL	30	普通	にぶい橙		
48	土師器	甕	(17.8)	6.4	—	CHI	20	普通	にぶい褐	貯蔵穴	
49	土師器	甕	(22.4)	8.7	—	BCEHI	20	普通	にぶい褐	外面黒斑	
50	土師器	甕	(19.2)	7.2	—	BCEHI	15	普通	にぶい赤褐		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
51	土師器	甕	(18.3)	7.7	—	BCEHL	20	普通	橙		
52	土師器	甕	(14.7)	12.9	—	ACEHIL	25	普通	橙	外面黒斑	
53	土師器	小型甕	16.6	14.2	—	CGI	40	普通	にぶい褐		46-4
54	土師器	甕	(20.6)	8.9	—	ABCEHI	20	普通	にぶい橙		
55	土師器	甕	(20.2)	9.2	—	ACEHI	25	普通	にぶい橙	カマド	
56	土師器	甕	(17.0)	10.5	—	BCHIL	40	普通	明褐	L 6 G-46	
57	土師器	甕	18.5	26.3	—	ACDEHIL	50	普通	明赤褐	外面黒斑	46-3
58	土師器	甕	18.7	24.0	—	CEHIL	50	普通	橙		46-5
59	土師器	壺	—	2.2	—	AEHIK	5	普通	橙		
60	土師器	甕	(20.4)	14.9	—	BCEHIL	30	普通	橙	外面黒斑	
61	土師器	甕	—	16.5	8.8	ACEHI	40	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕 外面黒斑	
62	土師器	甕	—	4.0	6.6	CEHI	70	良好	にぶい黄橙	外面黒斑	
63	土師器	甕	—	2.7	6.8	ABCHI	65	普通	にぶい橙	外面黒斑	
64	土師器	甕	—	3.0	(7.9)	BCEHIL	20	普通	にぶい橙		
65	土師器	甕	—	11.0	3.0	ACHIL	40	普通	橙		
66	土師器	甕	—	4.3	5.4	CEHI	60	普通	褐灰		
67	土師器	甕	—	4.0	(8.6)	ABCEHI	20	普通	橙		
68	土製品	支脚	長さ12.0cm 幅7.1cm 厚さ7.0cm			AHI	100	不良	橙	No.1 柱状支脚AI型1類	46-6
69	土師器	ミニチュア	(7.2)	3.6	3.7	ABEHI	50	普通	明赤褐	底部木葉痕 片岩多い	46-7
70	土師器	ミニチュア	—	6.3	(5.7)	CEHI	60	普通	明赤褐	高環形	
71	土師器	手捏ね	(6.2)	5.5	(5.2)	ABEHI	30	普通	橙	底部木葉痕	
72	土師器	手捏ね	2.7	3.2	—	AEGHI	95	普通	にぶい橙	袋状	46-8
73	土製品	土錘	長さ5.2cm 最大径1.4cm 孔径0.5cm 重さ8.45g			GHI	95	普通	にぶい黄橙		

間は2.55m、P4～P1間は2.65mである。

壁溝はカマドを設置した北東壁には認められないが、北西壁から南西壁にかけてL字形に巡る。規模は幅10～22cm、深さ10cmほどである。

出土遺物は土師器坏・高坏・鉢・台付壺・壺・小型甕・甕・ミニチュア・手捏ね、須恵器短頸壺・壺、土製支脚、土錘等があり(第86～88図)、豊富な器種組成を示す。カマドからは燃焼部床面に68の支脚が設置されていたほか、5・23の坏と55の甕が出土した。カマド左袖脇からは口縁部を上にした1の坏と円礫が出土し、貯蔵穴からは48の甕が出土した。

坏は坏蓋模倣坏を主体とし、坏身模倣坏が定量で伴う。坏蓋模倣坏は単純口縁のものと同有段口縁のものか拮抗する。単純口縁坏は口径12～13cm台で、口縁部が外反し体部に丸味を残す。一方、有段口縁坏は黒色処理を施したものが大半で、口縁部が外傾し、体部は扁平で浅いものが多い。口縁

部には2段の段が作出され、口径13～14cm台にまとまる。坏身模倣坏は黒色処理を施したものが大半で、立ち上がりは長く延びる。この他に29～31のような大型の模倣坏が伴う。31は口縁部が大きく外反するタイプで、32は同一形態の坏を乗せた低脚高坏である。35は台付壺、46は口縁部の直立する小型甕である。鉢・小型甕も定量で出土している。甕は長胴甕と胴張甕が見られる。長胴甕は胴の張りは弱い。須恵器は38・41の短頸壺、39の壺口縁部片がある。41の短頸壺は口縁部と肩部に櫛描波状文を施している。68は土製柱状支脚である。上下の太さがあまり変わらない。69～72はミニチュア・手捏ねである。壺形・高環形・袋状等の多様な形態がある。73は管状土錘である。59は頸部に突帯を巡らし、肩部に横線文、櫛歯刺突文を施した東海西部系の壺である。混入であろう。

住居跡の時期は、土師器坏や甕の様相から6世紀後葉に位置づけられる。

第44号住居跡 (第89図)

第44号住居跡は調査区中央部のJ・K-7グリッドに位置する。第67号住居跡の北側に近接し、南壁から南東隅部にかけてを検出したが、住居跡の大半は調査区域外に延びる。

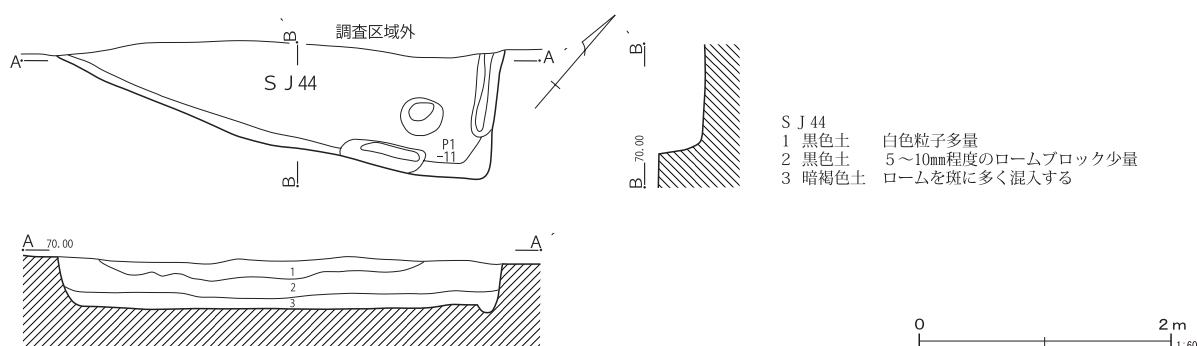
平面形は方形系と推定される。残存規模は、長軸長3.50m、短軸長1.00m、深さ0.18mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は3層に分層され、自然堆積を示す。

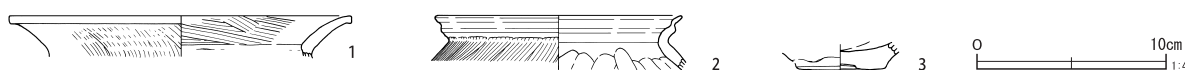
ピットは南東隅部に1本検出された。P1は長径0.32m、短径0.29m、深さ0.11mである。壁溝は南東隅部付近を部分的に巡り、幅18~20cm、深さ11cmほどである。

出土遺物は少なく、古墳時代前期の土師器甕・台付甕等があるにすぎない(第90図)。1は口唇部を面取りした単口縁の甕。2は小型のS字甕。3は甕の底部で、輪台状に中央が窪む。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半古相に位置づけられる。



第89図 第44号住居跡



第90図 第44号住居跡出土遺物

第34表 第44号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(18.2)	2.2	—	B C G H I	10	普通	橙		
2	土師器	台付甕	(13.0)	2.8	—	B E G H	25	良好	浅黄橙	S字甕	
3	土師器	甕	—	1.3	4.7	B C E H I	70	普通	明赤褐		

第45号住居跡 (第91図)

第45号住居跡は調査区中央部南寄りのL・M-6グリッドに位置する。第42・43・54号住居跡に挟まれ、住居跡の西壁の一部を残すのみで、大半は調査区域外へ延びている。重複関係は明確で

ないが、第42・54号住居跡を切り、第43号住居跡に切られている。また、西壁部の南端には第11号土壌が重複する。

平面形は他遺構の重複が著しく、不明である。残存規模は、長軸長1.80m、短軸長1.40m、深さ

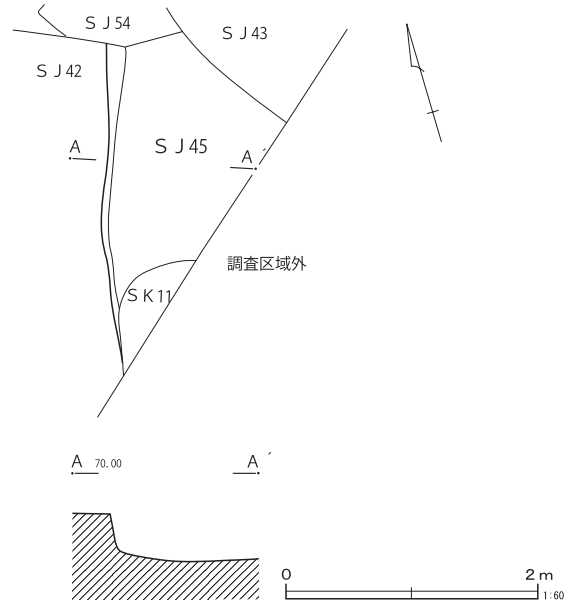
0.35mで、主軸方位はN-14°-Eを指す。

床面はやや凹凸が見られる。壁溝、ピット等の付属施設は検出されなかった。

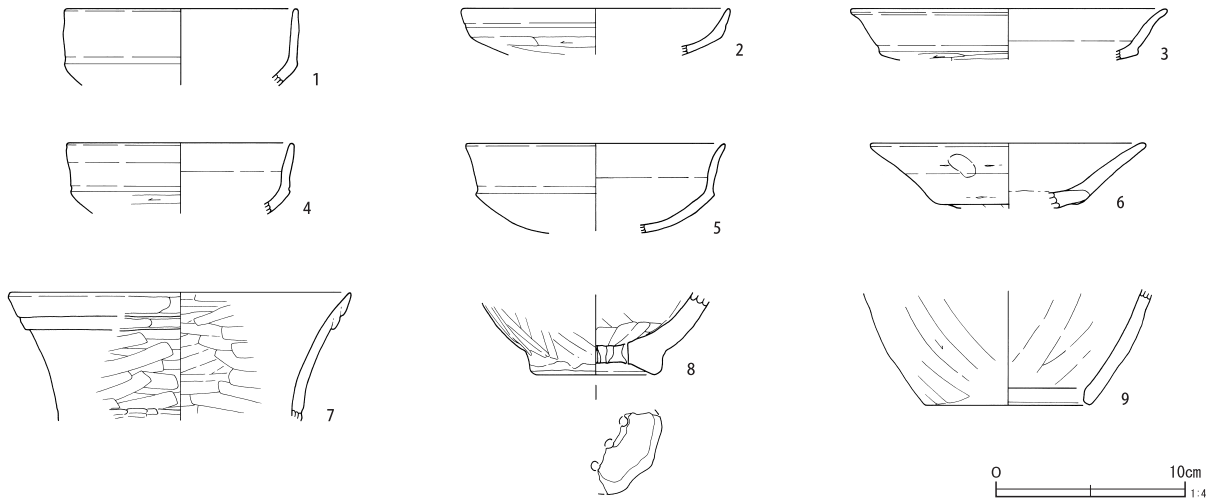
出土遺物は土師器坏・高坏・壺・甑等があり、各時代の遺物が混入していた(第92図)。いずれも埋土中からの出土である。

坏蓋模倣坏は、1・4・5の深身のもの、3の口縁が大きく外反する大振りのもの、2の口縁が短く直立するものなど、時期差をもつものが混在する。また、7の樽式系の壺の口縁部や8の多孔式の甑など古墳時代前期の遺物が混入しており、時期を特定することは難しい。

住居跡の時期は遺構の重複関係を考慮すれば、6世紀中葉から後葉を中心とする時期に位置づけるのが妥当であろう。



第91図 第45号住居跡



第92図 第45号住居跡出土遺物

第35表 第45号住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.2)	4.0	—	ACHIL	10	普通	橙	SJ83	
2	土師器	坏	(14.2)	2.5	—	CHI	15	普通	橙		
3	土師器	坏	(16.5)	2.7	—	ACEHI	10	普通	橙		
4	土師器	坏	(11.9)	3.7	—	ACHI	10	普通	明赤褐		
5	土師器	坏	(13.7)	4.7	—	AHI	15	不良	橙		
6	土師器	高坏	(14.5)	3.4	—	ACHI	10	普通	明赤褐		
7	土師器	壺	(18.0)	6.7	—	CEHI	5	普通	暗褐	樽式系	底部外面黒斑 多孔式
8	土師器	甑	—	4.3	(7.0)	BEHI	25	普通	明赤褐		
9	土師器	甑	—	6.0	(8.8)	ABCHI	20	普通	橙		

第46号住居跡 (第93図)

第46号住居跡は調査区中央部のK-7グリッドに位置する。第70・71号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。北カマドの小型の住居跡で、住居跡の南側大半が調査区域外に延びている。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.74m、短軸長1.28m、深さ0.28mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は4層に分層され、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

カマドは北西壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部と煙道部の境のないタイプで、断面形は燃焼部から緩やかに傾斜しながら煙道部に移行する。全長1.45m、カマド袖幅1.25m、深さ0.35m、燃焼部長0.95m、燃焼部底面幅0.30m、煙道部長0.50mである。カマド埋土は第2・3層が天井崩落土、第5・7層が火床面に相当する。カマド袖部は明褐色土によって構築されていた。

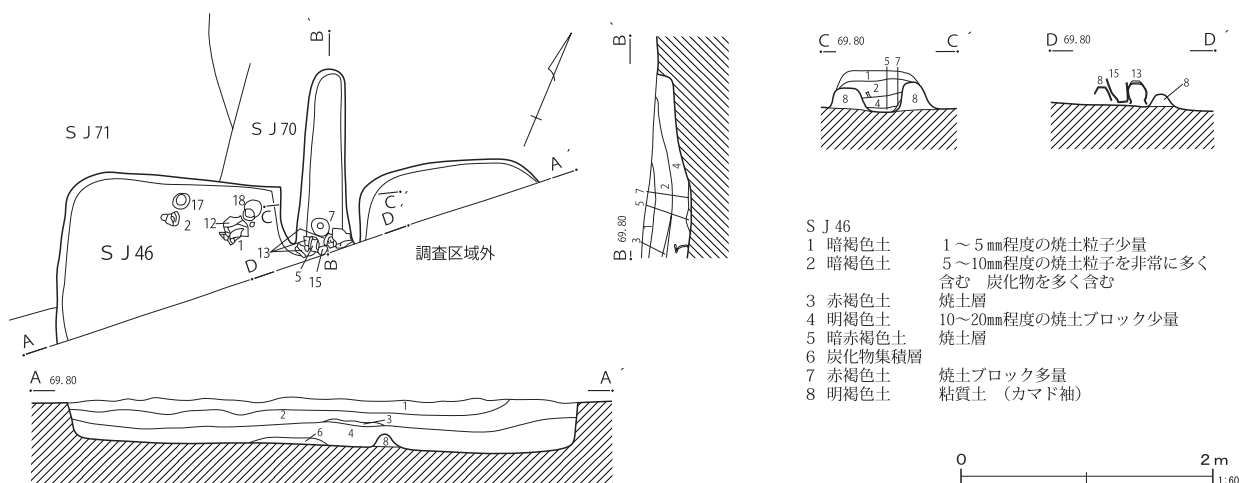
貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器杯・高杯・鉢・小型甕・甕・壺・甑、須恵器坏蓋がある (第94・95図)。カマド内とカマド左脇に集中していた。カマド燃焼部中央には7の鉢が伏せた状態で置かれ、その脇から5の須恵器坏蓋が出土した。鉢は転用支脚の可能

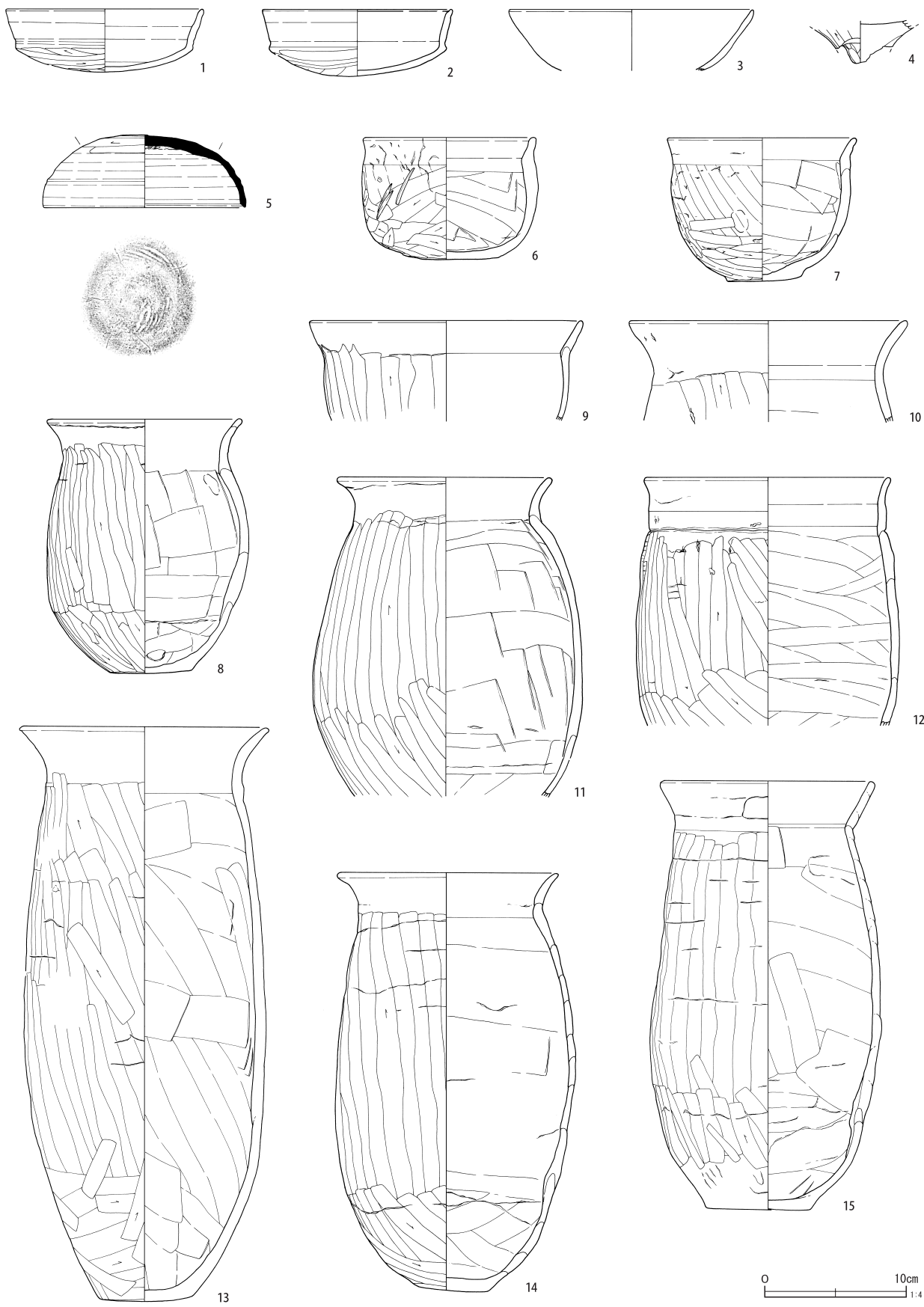
性が考えられる。焚口部付近には8の小型甕、15・13の甕が並んでいた。このうち8・13は逆位に、15は正位に置かれていた。カマド左脇には18の小型甑、12の甕、1の坏がまとまり、やや離れて2の坏、17の壺底部が出土した。

1・2の坏蓋模倣坏は、口径13cm台で口縁部が開いて立ち上がり、2は口唇部内面に段を残す。坏身模倣坏は出土していない。3・4は和泉型高杯である。4はホゾ接合痕を残す。5の須恵器坏蓋は口縁部と天井部の境に僅かな段を作り出している。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部内面に段をもつ。天井部内面には同心円文当具痕を残す。TK10型式併行期に位置づけられ、胎土の特徴から末野産と考えられる。6・7・9は鉢である。6は平底の底部から腰に丸味をもって立ち上がり、頸部の収縮はほとんどない。7は底部が突出し、口縁部が短く外反する。9は甑の可能性もある。長胴甕は13のように胴部が長く発達するタイプと14・15のように胴部中位あるいは下位に最大径をもつものが見られる。16は短頸壺、18は小型甑である。19は頸部に突帯を巡らした壺の破片で突帯の上下面に刻目をもつ。五領期の所産である。

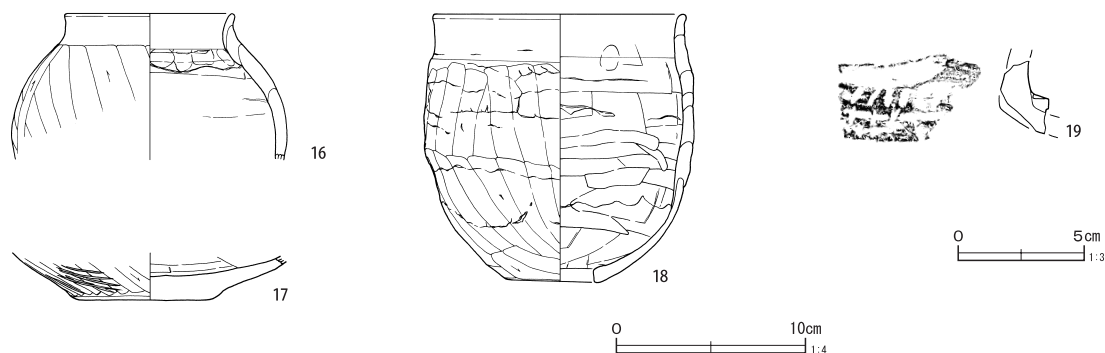
住居跡の時期は、坏身模倣坏を含まない点や須恵器坏蓋の型式の特徴から6世紀中葉に位置づけられる。



第93図 第46号住居跡



第94図 第46号住居跡出土遺物（1）



第95図 第46号住居跡出土遺物（2）

第36表 第46号住居跡出土遺物観察表（第94・95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.9)	4.3	—	ACEHI	50	普通	橙	No.5	47-1
2	土師器	坏	(13.2)	4.7	—	CEHI	70	普通	にぶい黄橙	No.2	47-2
3	土師器	高坏	(17.2)	4.2	—	A E H I	15	普通	明赤褐		
4	土師器	高坏	—	3.0	—	ABCEHI	80	普通	にぶい黄橙	カマド	
5	須恵器	坏蓋	14.3	5.1	—	I K L	100	良好	灰	末野産 No.8	47-3・4
6	土師器	鉢	12.1	8.5	—	CEHI	95	良好	灰褐		47-5
7	土師器	鉢	13.3	10.0	5.3	CEHIK	95	普通	にぶい赤褐	No.6	47-6
8	土師器	小型甕	13.6	17.8	5.7	BCEHI	100	普通	にぶい赤褐	No.13	47-7
9	土師器	鉢	(19.2)	7.0	—	ABEHIL	30	普通	橙	K 7 G-35	
10	土師器	甕	(19.5)	7.1	—	ABCEHI	20	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	甕	14.9	22.5	—	CEHI	90	普通	赤褐		47-8
12	土師器	甕	(17.2)	17.4	—	A H I	40	普通	明赤褐	No.4	
13	土師器	甕	(17.4)	40.5	6.6	BCEL	70	普通	にぶい黄橙	外面胴部下半煤附着 No.7・9・14 カマド	48-1
14	土師器	甕	15.5	29.6	5.0	ACEHI	90	不良	明赤褐	外面黒斑 K 7 G-68	48-2
15	土師器	甕	(14.9)	30.0	7.4	BCHL	90	普通	にぶい赤褐	No.12	
16	土師器	短頸壺	(9.0)	7.6	—	CEHI	25	普通	にぶい橙		
17	土師器	壺	—	2.4	7.2	A E H I	80	普通	橙	外面黒斑 No.1	
18	土師器	甕	13.3	14.1	5.0	ACEHI	100	普通	明赤褐	外面黒斑 No.3	48-3
19	土師器	壺	—	2.6	—	ACDI	5	普通	明赤褐	頸部突帯	

第47号住居跡（第96図）

第47号住居跡は調査区中央部のJ-7・8グリッドに位置する。五領期の第51号住居跡を切り、第69号住居跡に切られていた。住居跡の北西側の大半は調査区域外に延びる。東壁にカマドをもつ一辺6m前後の比較的大型の住居跡である。

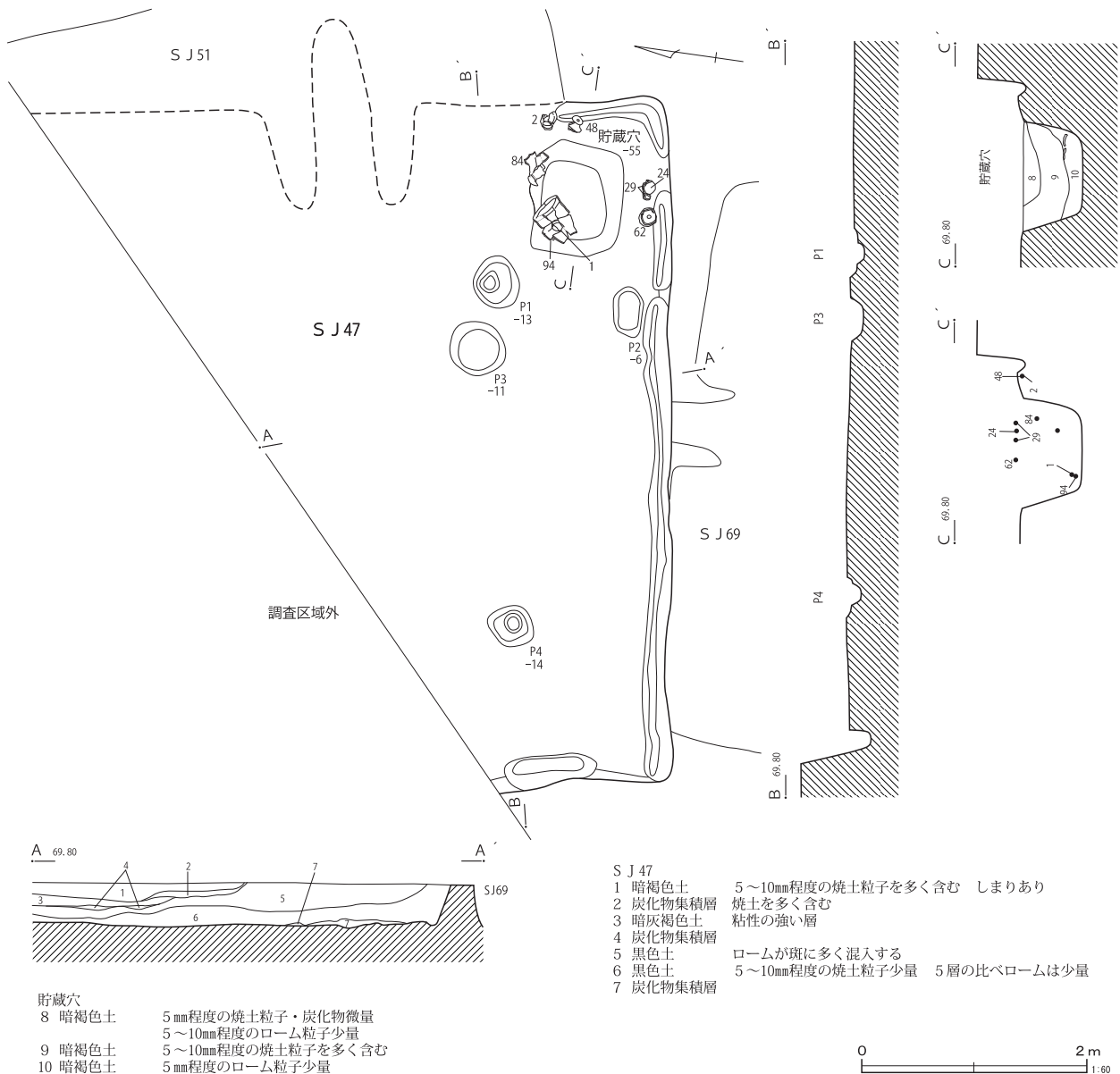
平面形は方形と推定される。残存規模は長軸長6.03m、短軸長1.94m、深さ0.42mである。主軸方位はN-79°Eを指す。

カマドは、第51号住居跡の埋土中に掘り込まれていたため確認が容易ではなく、その存在を見落

としてしまった。そのためカマドを削平してしまい、詳細な記録・図化が果たせなかった。ただし、カマドの火床面が明瞭に残っていたことから、おおよその位置が確定できた。

床面は概ね平坦である。埋土は7層に分層され、黒色土を主体とする。中層の第2・4層と最下層の第7層に炭化物集積層が認められた。

貯蔵穴は南東隅部に検出された。平面方形を呈し、長径0.97m、短径0.82m、深さ0.55mである。貯蔵穴埋土は3層に分層され、暗褐色土を主体とする。ピットは4本検出された。位置的に見て、



第96図 第47号住居跡

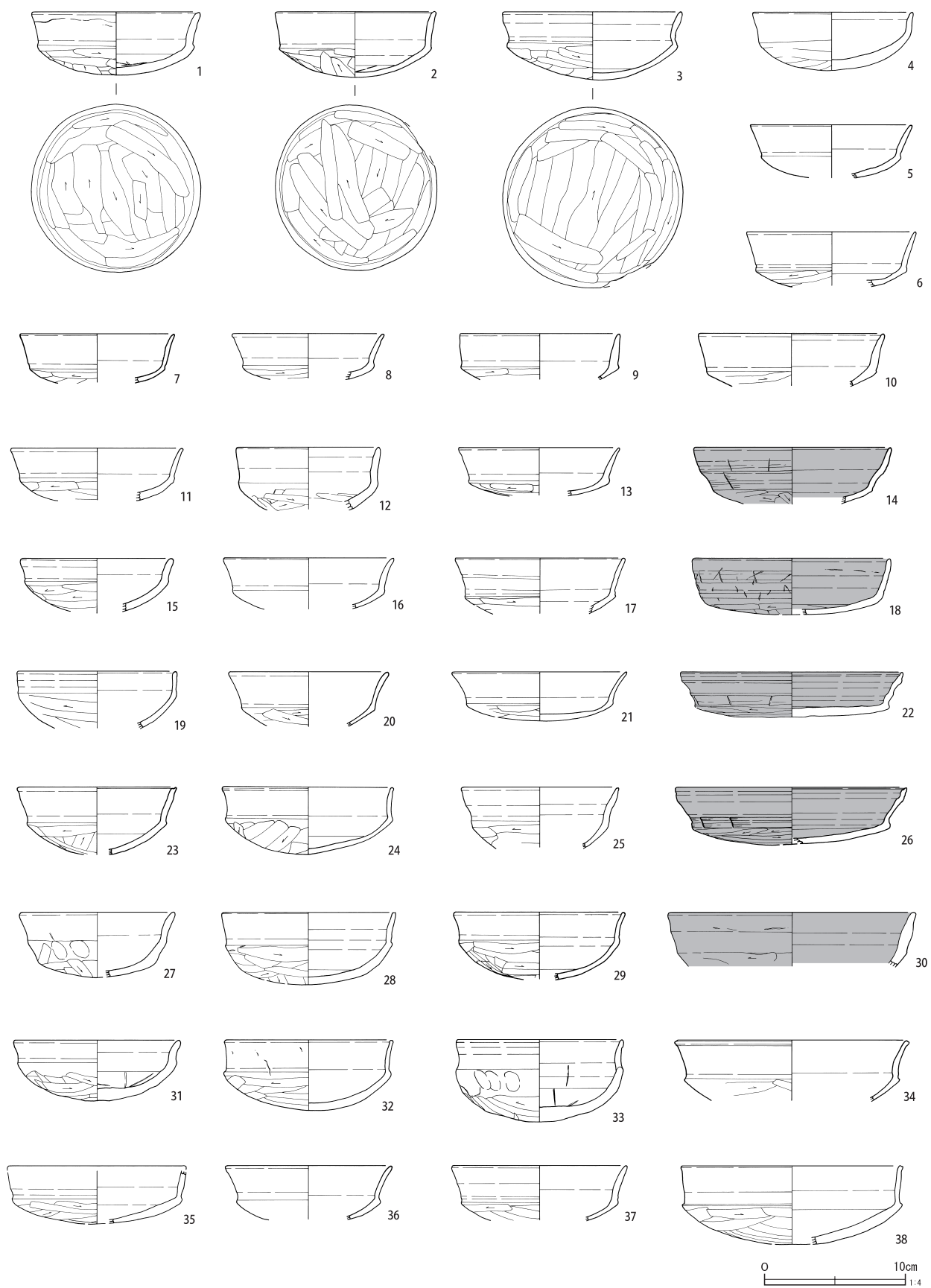
P 1 と P 4 の 2 本が支柱穴であろう。P 2 ・ P 3 については住居跡に伴うかどうかは明確でない。

壁溝は断続的であるがほぼ全周する。規模は幅 13～22cm、深さ 9～22cmである。

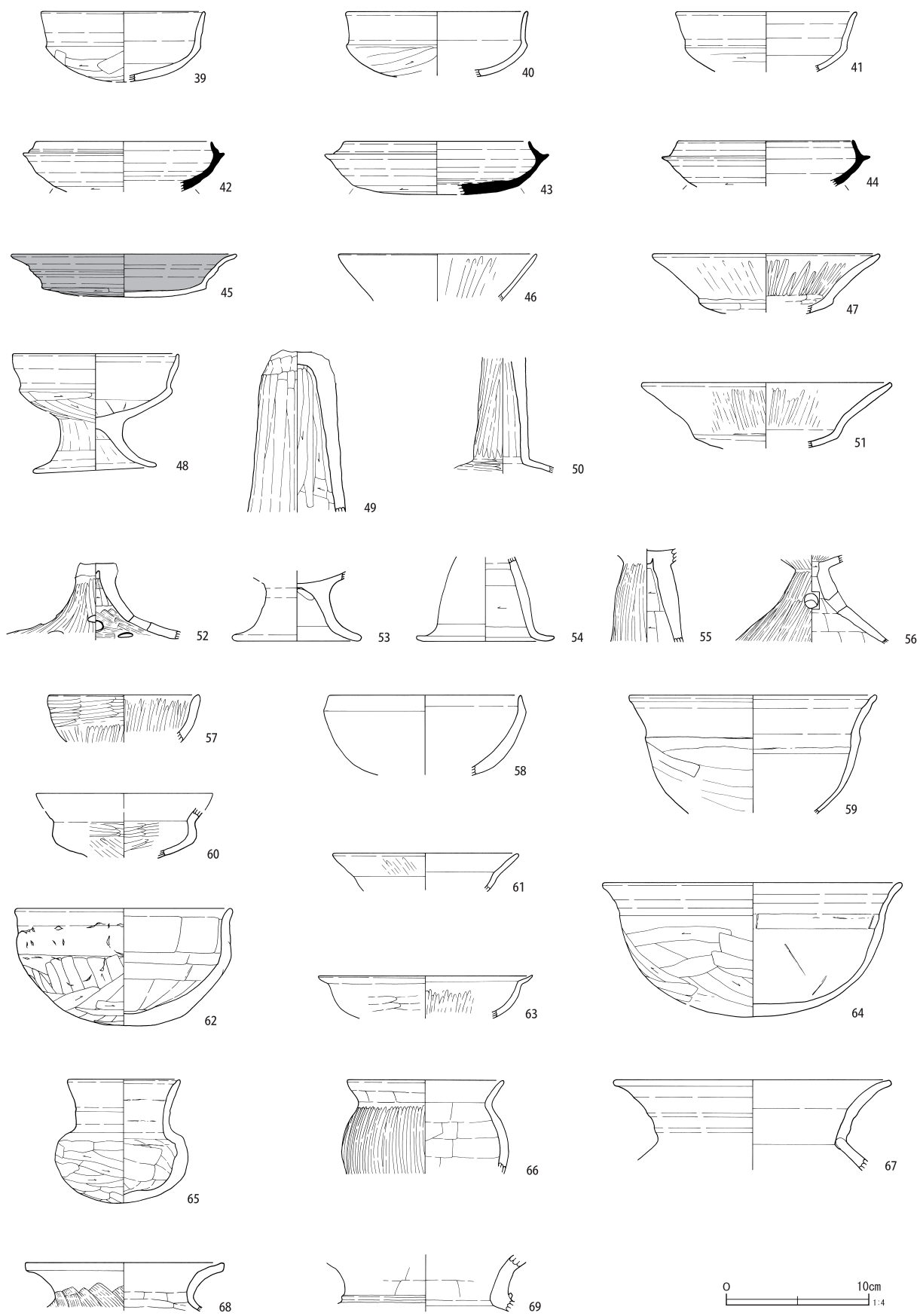
出土遺物は多く、土師器坏・皿・埴・高坏・器台・鉢・罎・小型壺・壺・小型甕・甕・甗・台付甕・手捏ね、須恵器坏身・提瓶・壺・甕、紡錘車、砥石、土錘等がある（第97～101図）。重複する第51号住居跡から混入した五領期の遺物も数多く含

まれている。遺物は、貯蔵穴とその周辺からまとまって出土した。貯蔵穴の底面から少し浮いた状態で 1 の坏と 94 の甗が出土したほか、84 の甕は貯蔵穴の中に落ち込んだ状態で出土した。南東隅部の壁際からは 2 ・ 24 ・ 29 の坏、48 の高坏、62 の鉢が床直で出土した。

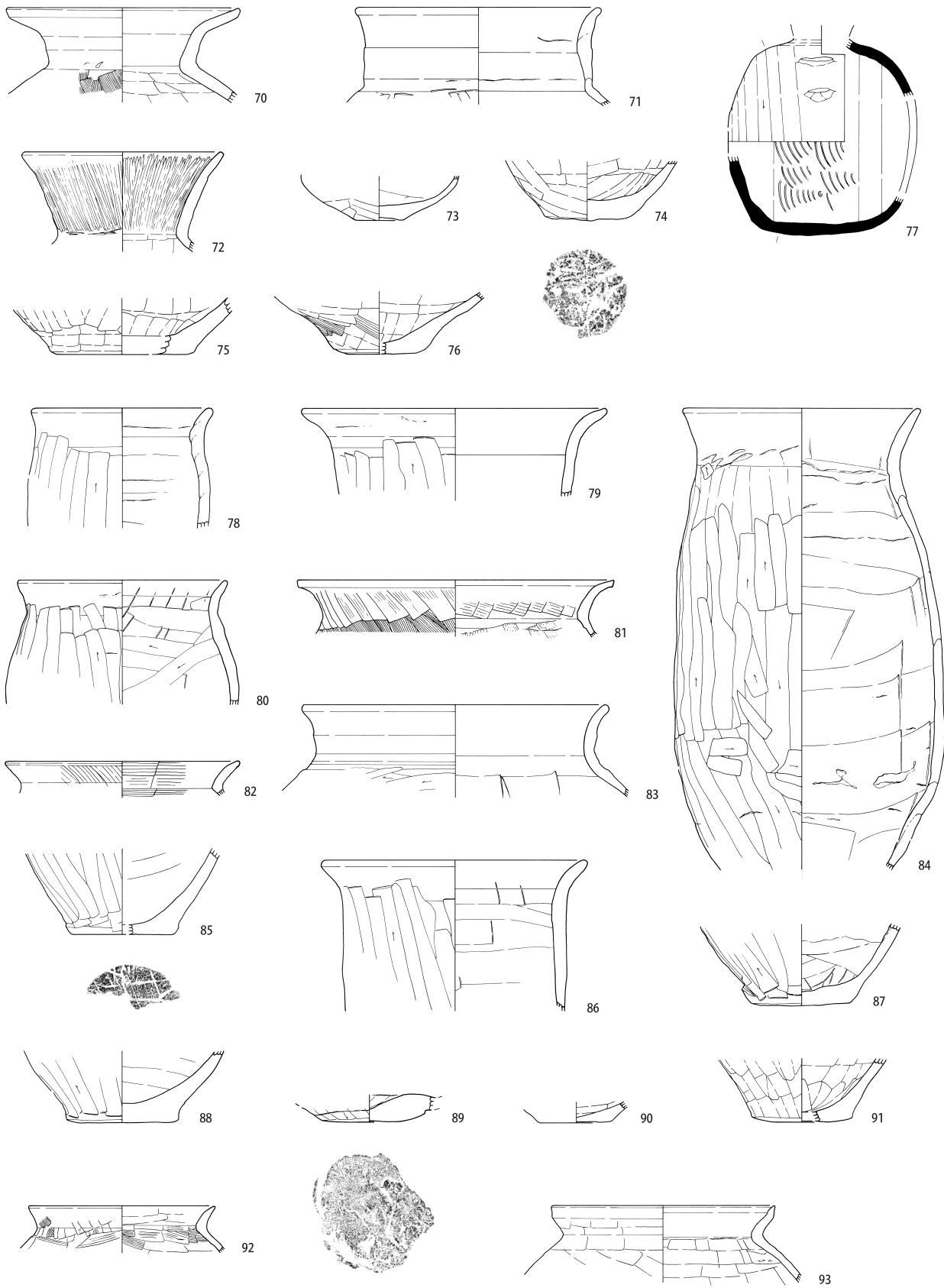
1～41は土師器の坏である。口径12～13cm台の口縁部が直立する坏蓋模倣坏を主体に、口径14～17cm台の黒色処理を施した有段口縁坏、45の



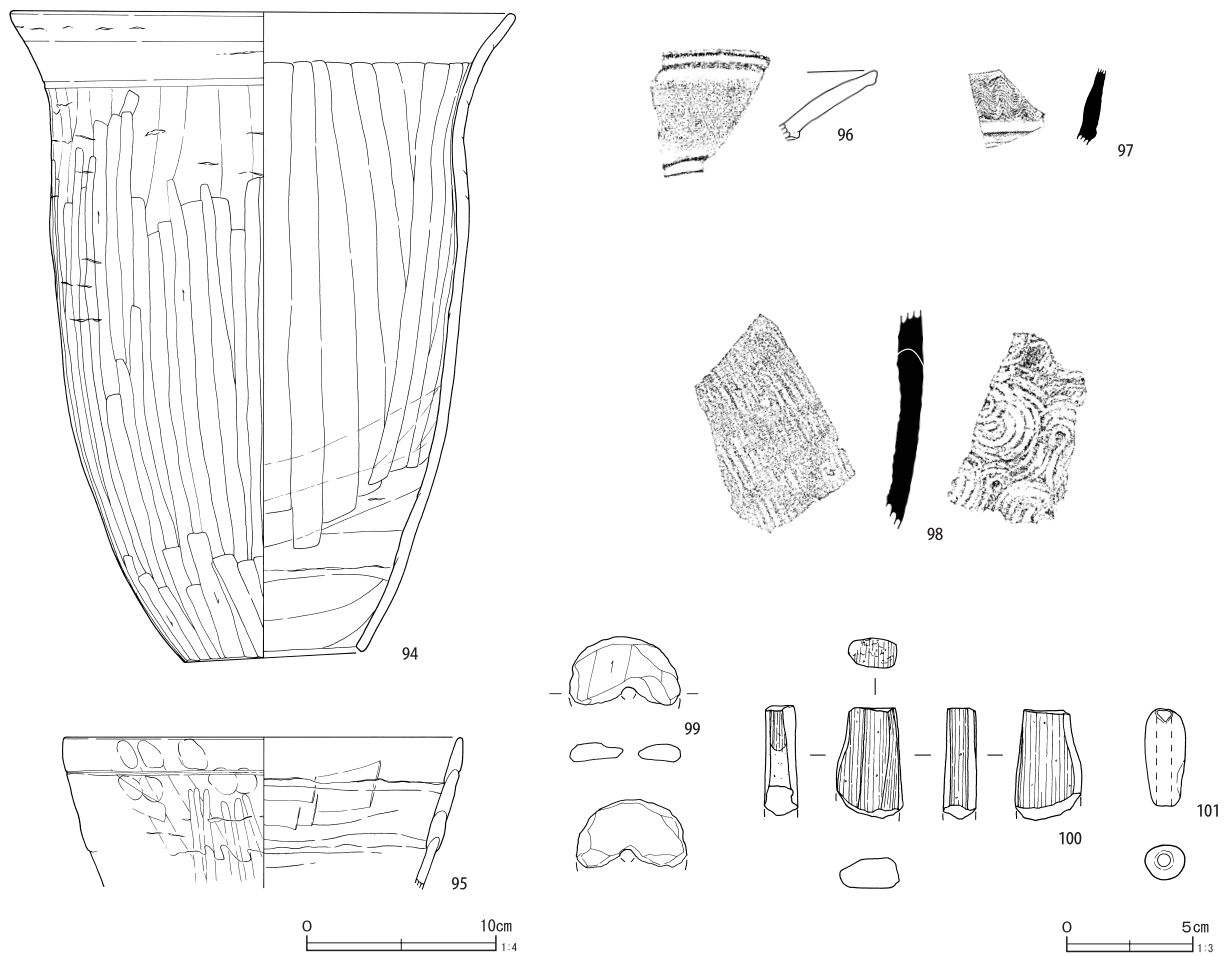
第97図 第47号住居跡出土遺物（1）



第98图 第47号住居跡出土遺物（2）



第99図 第47号住居跡出土遺物（3）



第100図 第47号住居跡出土遺物（4）

口縁部が大きく外反し、体部の扁平な皿等が見られ、やや時期幅のある資料が混在した様相を示す。

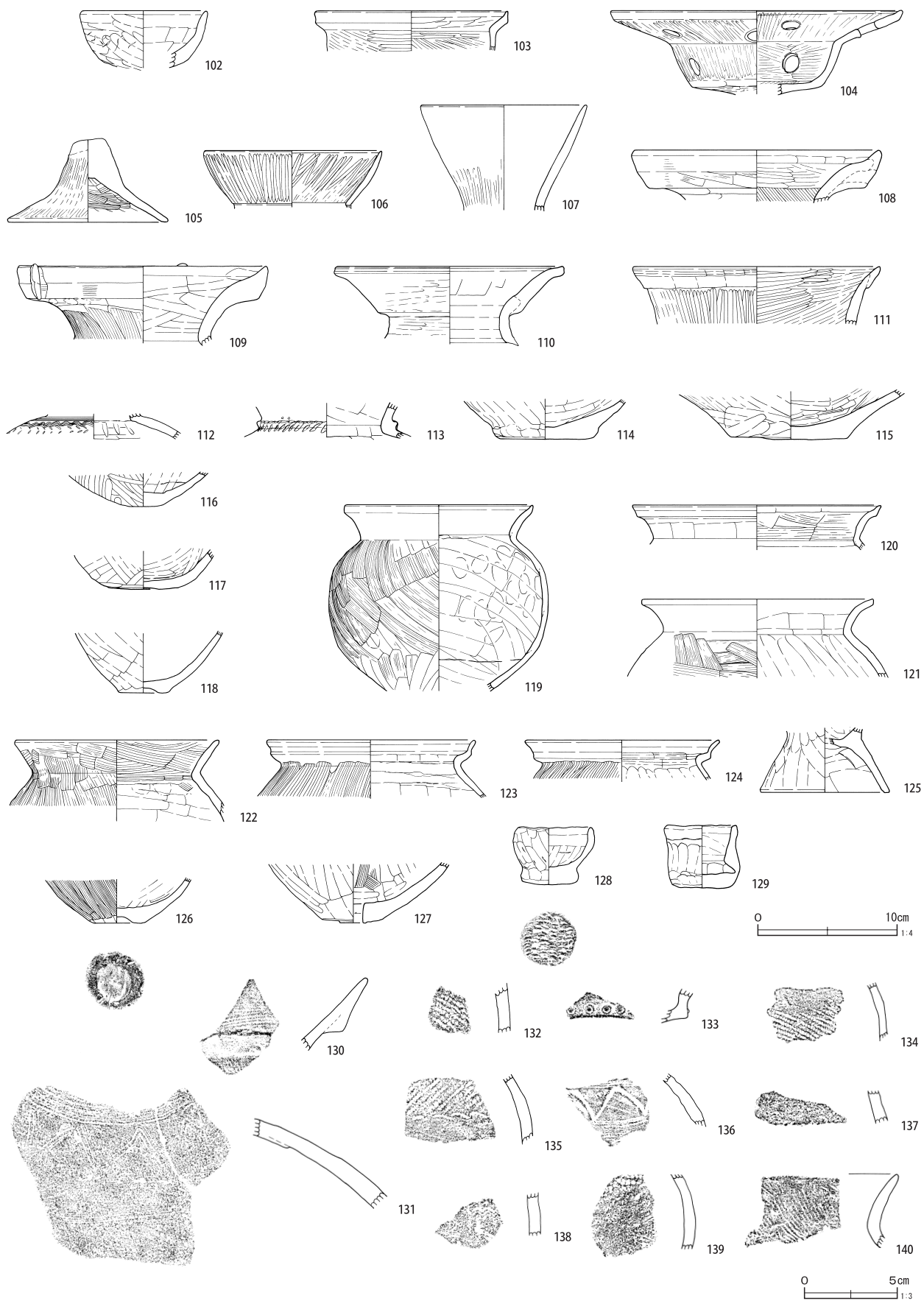
42～44は須恵器坏身である。蓋受部が短く水平に延びる特徴を示す。胎土から在地産と推定され、TK43型式併行期に位置づけられる。

高坏は五領期のものが多く混入しているが、48の坏蓋模倣坏を乗せた鬼高型高坏が本来のもので、53・54の短脚が伴う。59・62・64の鉢は本住居跡に伴うもので、64の大型鉢はこの段階から定量で出土する。65の小型壺、67の壺は本住居跡に伴うものと考えられる。67は口縁部の中位に弱い段を作り出しており、二重口縁壺の退化したものであろう。77は須恵器提瓶である。環状把手が剥落している。内面には同心円文当具痕が残る。甕は、78・80の小型甕、79・86・84の長胴甕、83の

胴張甕等が基本的な組み合わせを示す。84の甕は最大径を胴部の下位にもち、口縁部の外反は弱い。94は大型甕、95は鉢形の甕であろう。97・98は須恵器甕の破片で、97は櫛描波状文を施す。128・129の手捏ねは本住居跡に伴うものかどうかは明確でない。128は底部に爪様の刺突痕が残る。土器以外では、99の土師器片を転用した紡錘車、100の砂岩製の砥石、101の管状土錘がある。

五領期の遺物は、49・50の柱状脚高坏、52の高坏、56の器台、63の鉢、103のS字鉢、104の北陸系の大型器台等数多く含まれ、重複する第51号住居跡の遺物組成を補完する内容を示す。

住居跡の時期については、貯蔵穴周辺から出土した遺物を参考に6世紀中葉を中心とする時期に位置づけておきたい。



第101图 第47号住居跡出土遺物（5）

第37表 第47号住居跡出土遺物観察表（第97～101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.9	4.4	—	ACEHIL	100	普通	橙	貯藏穴No.8	48-4
2	土師器	坏	11.4	4.6	—	ACEHI	95	良好	橙	No.4	48-5
3	土師器	坏	12.7	4.8	—	ACEHI	95	良好	橙		48-6
4	土師器	坏	11.2	4.1	—	ACDHI	80	普通	橙		49-1
5	土師器	坏	(11.5)	3.7	—	HI	25	普通	にぶい橙		
6	土師器	坏	(11.9)	3.8	—	ACEHI	45	普通	橙		
7	土師器	坏	(11.0)	3.4	—	ABEHI	20	普通	橙		
8	土師器	坏	(10.8)	3.2	—	ACHI	20	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	坏	(11.3)	3.2	—	ABCHI	30	普通	橙		
10	土師器	坏	(13.0)	3.6	—	ACHI	30	普通	橙		
11	土師器	坏	(12.2)	3.7	—	HI	20	不良	橙		
12	土師器	坏	(10.0)	4.4	—	CEHI	30	普通	明赤褐		
13	土師器	坏	(11.4)	3.3	—	CHI	25	普通	橙		
14	土師器	坏	(14.0)	3.9	—	ACHI	15	良好	灰褐	内外面黒色処理	
15	土師器	坏	(10.8)	3.7	—	AHL	20	普通	浅黄橙		
16	土師器	坏	(12.0)	3.5	—	ACHI	20	不良	橙		
17	土師器	坏	12.0	3.9	—	ACH	50	普通	にぶい橙		49-2
18	土師器	坏	(14.0)	3.9	—	BCHI	30	普通	にぶい褐	内外面黒色処理	
19	土師器	坏	(11.1)	4.0	—	ACHI	25	普通	橙		
20	土師器	坏	(11.2)	3.8	—	AEHIL	20	普通	橙		
21	土師器	坏	(12.4)	3.4	—	AHI	40	普通	橙	外面黒斑	
22	土師器	坏	(15.8)	3.1	—	ACEGHI	60	良好	にぶい黄橙	内面灰黄 内外面黒色処理	49-3
23	土師器	坏	(11.1)	4.7	—	HI	20	普通	橙		
24	土師器	坏	12.0	4.7	—	ACEHI	95	普通	にぶい橙	No.6	49-4
25	土師器	坏	(11.1)	4.3	—	AH	25	普通	にぶい黄橙		
26	土師器	坏	16.4	4.5	—	BCHI	50	良好	灰黄褐	内外面黒色処理	49-5
27	土師器	坏	(10.8)	4.5	—	AEHI	15	普通	灰黄褐		
28	土師器	坏	12.3	5.0	—	AEHI	50	普通	赤褐		49-6
29	土師器	坏	(12.0)	4.7	—	ACHI	30	普通	にぶい橙	外面黒斑 貯藏穴 No.7	
30	土師器	坏	(17.4)	3.8	—	ACHI	10	普通	にぶい黄		
31	土師器	坏	(11.8)	4.2	—	ACEHI	30	普通	灰黄褐		
32	土師器	坏	11.9	4.9	—	AHI	90	普通	橙		49-7
33	土師器	坏	(11.7)	5.7	—	ACHI	40	良好	橙		49-8
34	土師器	坏	(16.4)	4.2	—	ACHI	10	普通	にぶい橙	貯藏穴	
35	土師器	坏	—	3.7	—	ACEHI	25	普通	にぶい橙		
36	土師器	坏	(11.8)	3.7	—	AHI	20	普通	橙		
37	土師器	坏	(12.4)	3.8	—	HI	30	普通	橙		
38	土師器	坏	(15.6)	5.5	—	CEI	40	普通	にぶい黄橙		49-9
39	土師器	坏	11.5	4.9	—	ABHI	60	普通	橙	外面黒斑	49-10
40	土師器	坏	(12.7)	4.5	—	AHI	15	普通	橙		
41	土師器	坏	(12.7)	4.1	—	ACHI	25	普通	橙	内面黄灰	
42	須恵器	坏身	(12.3)	3.5	—	GI	30	不良	灰白	SJ76 H10G-96 I 8 G-89	
43	須恵器	坏身	(12.9)	3.6	—	IK	25	良好	灰	SJ83	
44	須恵器	坏身	(12.3)	3.1	—	BCEHIJ	25	普通	灰	内面にぶい橙 カマド SJ83	
45	土師器	皿	(15.6)	3.0	—	ABEHI	40	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	50-1
46	土師器	高坏	(13.8)	3.2	—	CEHI	10	普通	橙		
47	土師器	高坏	(15.7)	4.1	—	ABCEHI	30	普通	橙		
48	土師器	高坏	11.7	8.1	8.8	ACHI	70	普通	橙	貯藏穴 No.5	50-2
49	土師器	高坏	—	11.2	—	ACEHIK	70	良好	にぶい橙		
50	土師器	高坏	—	8.0	—	ACEHIK	70	良好	橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
51	土師器	高坏	(17.4)	4.4	—	A E H I K	10	良好	橙		
52	土師器	高坏	—	5.4	—	A C E H I K	30	普通	にぶい橙		
53	土師器	高坏	—	4.9	8.5	A C H I	90	普通	橙		
54	土師器	高坏	—	5.9	(9.7)	A H I	20	普通	橙		
55	土師器	高坏	—	6.4	—	A C E H I	90	普通	明赤褐		
56	土師器	器台	—	6.1	—	A C E H I K	30	良好	にぶい橙		
57	土師器	埴	(10.6)	3.3	—	A C E H I	30	普通	橙	外面煤付着	
58	土師器	埴	(13.4)	5.5	—	A C H I	15	普通	橙		
59	土師器	鉢	(17.3)	8.2	—	A H I	30	良好	褐灰		
60	土師器	鉢	—	3.5	—	A B E H I K	15	普通	橙		
61	土師器	鉢	(12.7)	2.6	—	A E H	10	普通	にぶい黄橙		
62	土師器	鉢	15.0	8.1	—	A C E H I L	100	普通	にぶい赤褐	内外面黒斑 No.2 貯蔵穴No.8	50-3
63	土師器	鉢	(15.0)	2.9	—	A H I K	10	良好	にぶい橙		
64	土師器	鉢	(20.8)	9.3	—	H L	50	普通	橙	外面黒斑	50-4
65	土師器	小型壺	7.7	8.6	—	C E G H I	100	普通	橙	外面黒斑	50-5
66	土師器	小型壺	(11.0)	6.5	—	A C E H I K	25	良好	にぶい赤褐		
67	土師器	壺	(19.2)	6.3	—	A C H I	10	普通	明赤褐		
68	土師器	壺	(13.8)	3.3	—	A C E H I K	10	良好	にぶい赤褐		
69	土師器	壺	—	3.9	—	A C H I	15	普通	にぶい橙		
70	土師器	壺	(16.1)	6.6	—	A C E H I K	30	良好	にぶい橙		
71	土師器	壺	(16.7)	6.7	—	A C E H I	30	普通	橙		
72	土師器	壺	(13.6)	6.8	—	A E H I J K	10	良好	橙		
73	土師器	小型壺	—	3.0	(3.0)	A C E H I	30	普通	橙	焼きムラ	
74	土師器	壺	—	4.0	6.0	A C E H I K	60	良好	にぶい赤褐		
75	土師器	壺	—	3.9	(9.8)	B C E H I K	25	普通	にぶい黄橙		
76	土師器	壺	—	4.3	(5.0)	A C E H I K	25	普通	灰黄褐	内外面黒斑	
77	須恵器	提瓶	—	13.4	—	G I K	30	良好	灰	環状把手剥落 I 9 G-72 J 8 G-71 K 7 G-42	
78	土師器	小型甕	12.2	8.3	—	C E H I	50	普通	にぶい橙	J 8 G-73	
79	土師器	甕	(20.8)	6.2	—	B C E H I	10	普通	橙		
80	土師器	小型甕	(14.4)	8.5	—	C E H I	15	普通	暗赤褐		
81	土師器	甕	(22.8)	3.8	—	A C E H I K	10	良好	にぶい赤褐		
82	土師器	甕	16.2	2.3	—	A C E H I K	5	良好	橙	P4	
83	土師器	甕	(21.2)	6.4	—	C E G H I	10	良好	にぶい黄橙		
84	土師器	甕	16.3	32.0	—	C E H I	75	良好	にぶい橙	貯蔵穴No.2・3	50-6
85	土師器	甕	—	5.9	7.0	A C E H I K	40	良好	にぶい赤褐	底部木葉痕	
86	土師器	甕	(18.0)	10.4	—	B C E H I L	15	普通	橙		
87	土師器	甕	—	5.5	6.7	C E H I	90	普通	赤褐		
88	土師器	甕	—	4.8	7.8	A C H I L	50	普通	にぶい赤橙		
89	土師器	甕	—	1.9	7.2	A C E H I	90	普通	明赤褐	底部木葉痕	
90	土師器	甕	—	1.3	(5.0)	A E H I	30	普通	橙		
91	土師器	甕	—	4.4	(7.0)	A C E H I K	45	良好	にぶい赤褐		
92	土師器	甕	(12.8)	3.2	—	A C H I K	25	良好	橙		
93	土師器	甕	(15.4)	5.2	—	A C E H I K	25	良好	橙		
94	土師器	甗?	26.4	34.4	9.4	C E H I	95	普通	橙	貯蔵穴No.1 外面黒斑	50-7
95	土師器	甗	(20.8)	7.9	—	C E H I	10	良好	橙	外面黒斑	
96	土師器	壺	—	2.6	—	A C E H I K	5	普通	橙		
97	須恵器	壺	—	2.9	—	I	5	良好	灰		
98	須恵器	甕	—	8.6	—	E I K	5	良好	灰		
99	土製品	紡錘車	上径3.9cm 底径4.4cm 孔径0.6cm 厚さ0.8cm 重さ8.92g			C E H I	50	普通	にぶい赤褐	土器片転用	89-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
100	石製品	砥石	長さ3.9cm 幅2.7cm 厚さ1.3cm 重さ22.27g 砂岩									91-3
101	土製品	土錘	長さ3.8cm 最大径1.6cm 孔径0.6cm 重さ6.56g			ABEHI	100	普通	にぶい黄橙			
102	土師器	碗	(8.8)	4.0	—	AEIK	15	普通	褐灰	雲母多量混入	51-1	
103	土師器	鉢	(13.8)	2.8	—	ACEHIK	20	普通	橙	S字鉢		
104	土師器	器台	(20.8)	6.0	—	ACEHIK	30	普通	橙	北陸系		
105	土師器	高坏	—	5.9	11.4	ACEHI	95	良好	橙			
106	土師器	埴	(12.8)	4.0	—	ACEHIK	25	良好	橙			
107	土師器	直口壺	(11.8)	7.5	—	ACEIK	30	不良	橙			
108	土師器	壺	(17.4)	3.7	—	ACEHIK	10	普通	にぶい橙			
109	土師器	壺	(17.7)	5.8	—	BEIKL	20	良好	橙	東海西部系の模倣		
110	土師器	壺	(16.2)	5.6	—	ACEHIK	30	普通	橙			
111	土師器	壺	(17.6)	4.1	—	AEHK	10	良好	にぶい黄橙			
112	土師器	壺	—	1.7	—	AEHK	50	普通	橙			
113	土師器	壺	—	2.4	—	ACEHI	20	普通	橙			
114	土師器	壺	—	2.8	(7.0)	ACEIK	25	良好	にぶい赤褐	内面褐灰		
115	土師器	壺	—	3.4	8.4	ACEHIK	70	良好	にぶい黄橙			
116	土師器	小型壺	—	2.5	3.0	ACEHIK	80	良好	にぶい橙			
117	土師器	小型壺	—	2.8	2.2	ACEHI	40	良好	橙			
118	土師器	小型甕	—	4.3	3.7	ACEHIK	50	普通	にぶい橙			
119	土師器	台付甕	(13.4)	13.3	—	AEIK	40	普通	橙	受口状口縁模倣か		
120	土師器	甕	(17.8)	3.2	—	ACEHIK	10	良好	褐	千種甕模倣か		
121	土師器	甕	(16.6)	5.5	—	ACEHIK	20	普通	橙			
122	土師器	台付甕	(14.6)	5.8	—	AEIK	15	良好	にぶい黄橙			
123	土師器	台付甕	(14.8)	4.1	—	ACEHIK	25	良好	にぶい黄橙	S字甕		
124	土師器	台付甕	(13.8)	3.9	—	ACEIK	10	良好	黄灰	S字甕		
125	土師器	台付甕	—	4.6	(9.0)	ACEHIK	50	普通	橙			
126	土師器	小型甕	—	3.1	3.8	ACEHIK	50	良好	灰黄褐			
127	土師器	甗	—	4.3	4.0	AEHK	80	良好	明赤褐			
128	土師器	手捏ね	(5.2)	4.0	4.0	ACEHIK	70	良好	にぶい黄橙	P4 底部爪圧痕		
129	土師器	手捏ね	5.0	4.4	4.0	AEHIK	95	普通	暗赤灰			
130	土師器	壺	—	3.7	—	AEHK	5	普通	橙	パレス壺		
131	弥生	壺	—	3.7	—	ABEHIJKL	5	良好	橙			
132	土師器	壺	—	2.3	—	AHIK	5	良好	にぶい橙			
133	土師器	壺	—	1.8	—	CEHIK	5	普通	橙			
134	土師器	壺	—	3.1	—	AEI	5	良好	灰褐			
135	土師器	壺	—	3.7	—	ACEHIK	5	良好	にぶい黄橙			
136	土師器	壺	—	2.7	—	ACEHIJ	5	良好	にぶい黄橙			
137	土師器	壺	—	1.9	—	ACEHIK	5	良好	にぶい橙			
138	土師器	甕	—	2.5	—	ACEHIK	5	良好	にぶい黄橙			
139	土師器	甕	—	4.0	—	BCHIJK	5	普通	暗赤褐			
140	土師器	甕	—	3.9	—	AEHK	5	良好	にぶい橙	P2		

第48号住居跡 (第102図)

第48号住居跡は調査区中央部のJ・K-8グリッドに位置する。住居跡の北西隅部のみを検出した。重複する遺構は存在しない。

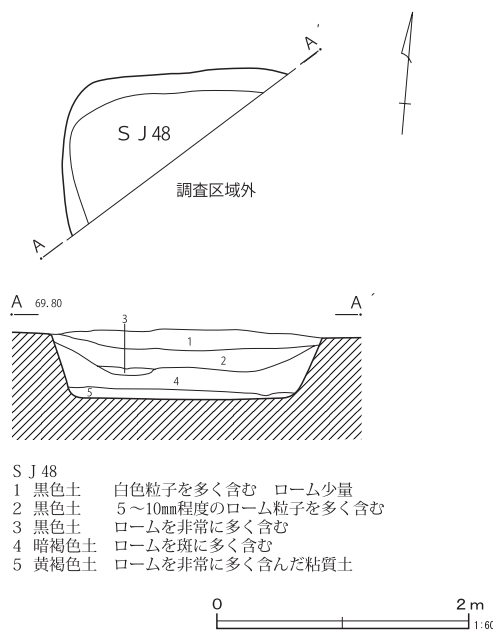
平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長1.60m、短軸長1.10m、深さ0.50mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は大きく5層に分層され、下層にローム粒子の混入が顕著である。床面直上の第5層はローム粒子を非常に多く含んだ粘質の黄褐色土で、ほぼ水平に堆積していることから、貼床の可能性も考えられる。

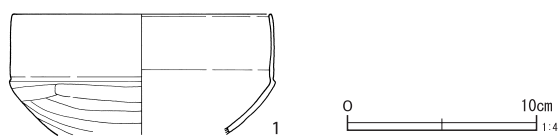
貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は極めて少なく、実測図示できたのは土師器坏のみである(第103図)。口縁部の長く直立する須恵器坏蓋模倣坏で、埋土から出土した。

住居跡の時期は、典型的な模倣坏の出土から、5世紀末葉から6世紀初頭に位置づけられる。



第102図 第48号住居跡



第103図 第48号住居跡出土遺物

第38表 第48号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	6.3	—	CHI	40	普通	橙		

第49号住居跡 (第104図)

第49号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6グリッドに位置し、第43・50・55・58号住居跡と重複する。第50号住居跡が埋没した後に構築された北カマドの住居跡で、住居跡南側は第43号住居跡によって大きく削平されていた。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長3.44m、短軸長1.58m、深さ0.40mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

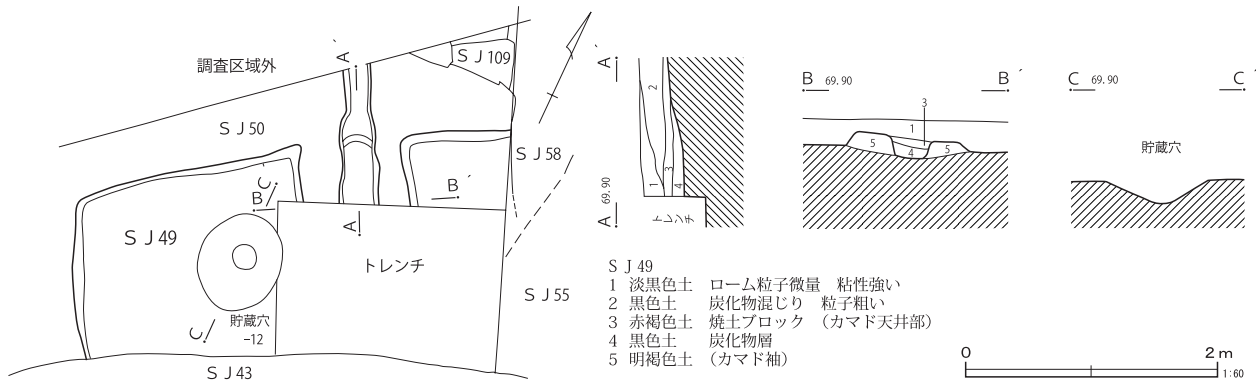
カマドは北西壁に設けられていた。トレンチによって焚口部分は削平されていたが、燃焼部を壁内に収め、煙道部が壁外に長く延びるタイプである。カマド残存長1.10m、カマド袖幅0.95m、深さ0.45mである。燃焼部は、残存長0.55m、底面

幅0.25m、煙道部の残存長は0.55mである。カマド埋土は第3層が天井部被熱面、第4層が炭化物層で、火床面は明瞭でなかった。

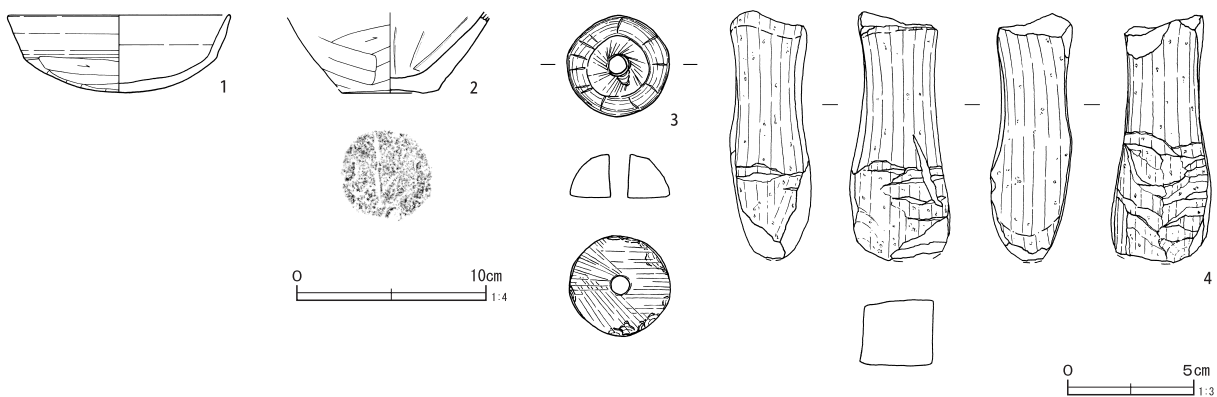
床面は概ね平坦である。貯蔵穴は、カマド左手前に検出された。平面楕円形で、長径0.78m、短径0.63m、深さ0.12mである。壁溝、ピット等は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・甕のほかに、紡錘車、砥石等がある(第105図)。いずれも埋土から出土した。1は口径11.7cmの坏蓋模倣坏である。2の甕は底部に木葉痕を残す。3は滑石製紡錘車である。断面笠形で、側面に放射状の線刻を施す。

住居跡の時期は、重複関係や小振りの坏蓋模倣坏の特徴から6世紀末葉に位置づけられる。



第104図 第49号住居跡



第105図 第49号住居跡出土遺物

第39表 第49号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.7	4.0	—	CH	100	普通	にぶい橙	内面黒褐	51-5
2	土師器	甕	—	4.2	5.1	ACEHIL	30	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕	
3	石製品	紡錘車	上径2.3cm 底径3.9cm 孔径0.7~0.8cm 厚さ1.7cm 重さ37.64g 滑石								89-6
4	石製品	砥石	長さ9.7cm 幅4.0cm 厚さ3.3cm 重さ168.00g 凝灰岩								91-4

第50号住居跡 (第106図)

第50号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6グリッドに位置する。第43・49・55号住居跡と重複し、本住居跡の埋土を切り込んで第49号住居跡が構築され、さらに南壁側は第43号住居跡によって大きく削平されていた。出土遺物を比較すると極めて短期間のうちに、建て替えが行われたようである。

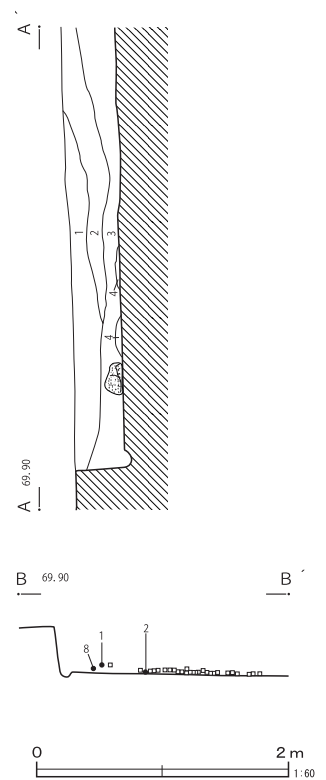
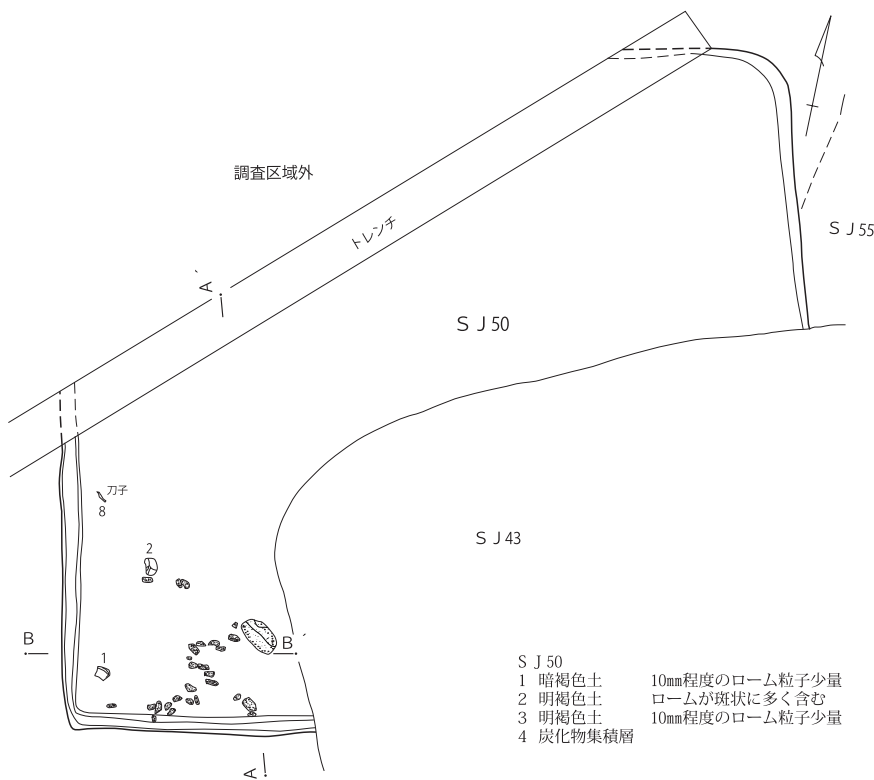
平面形は比較的形の整った方形に復元される。残存規模は、長軸長5.95m、短軸長3.35m、深さ0.30mを測り、本来は一辺6m前後の大型住居跡

であった。主軸方位はN-15°-Wを指す。

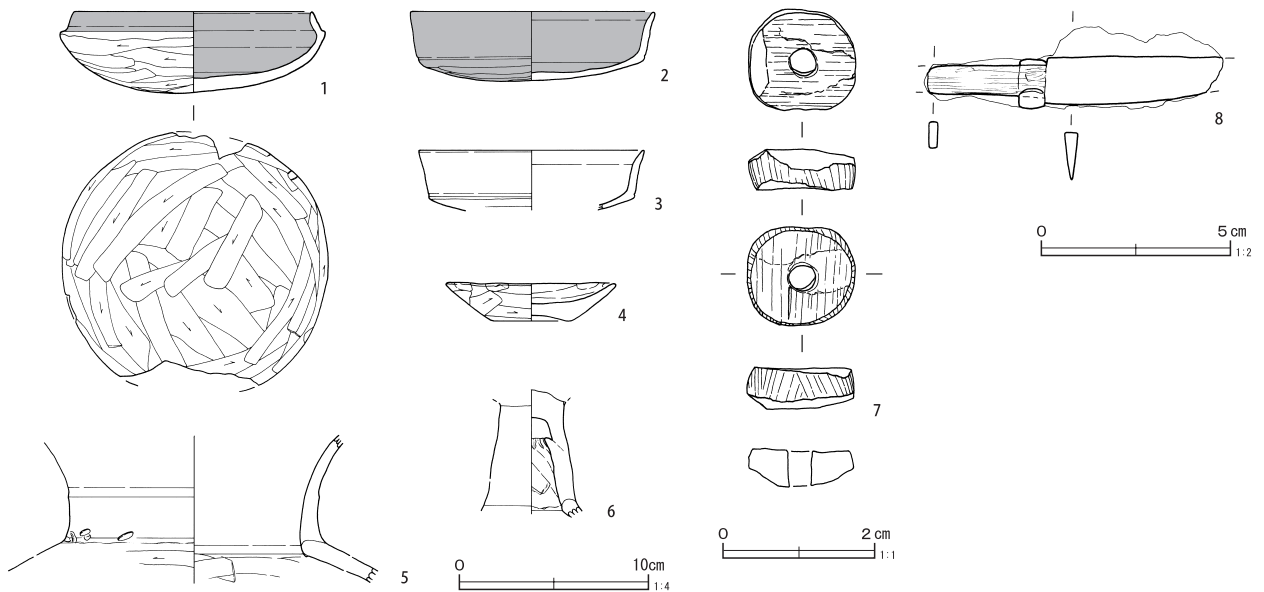
床面は概ね平坦である。埋土は3層に分層され、明褐色土を主体とする。床面上に炭化物集積層が部分的に見られることから、有機質の敷物等の可能性も考えられる。

壁溝は西壁から南壁にかけて巡っていた。規模は幅9~17cm、深さ8cmほどである。カマド、貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・高坏・壺等のほかに白玉、刀子がある(第107図)。南西隅部から1・2の坏が床面から少し浮いた状態で出土した。ま



第106図 第50号住居跡



第107図 第50号住居跡出土遺物

た、その周囲には小礫がまとまっていた。この他に西壁際からは8の刀子が出土した。

1の坏は口径12.5cmの坏身模倣坏で、内外面黒色処理を施す。2は体部が扁平な坏蓋模倣坏で、内外面黒色処理を施す。4は上げ底の皿である。

甕の底部と形態が類似する。8の刀子は刀身部および茎尻を折損する。関には鍔が残る。

住居跡の時期は、体部の浅い扁平な坏蓋模倣坏と坏身模倣坏が共伴していることから6世紀後葉に位置づけられる。

第40表 第50号住居跡出土遺物観察表 (第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	坏	12.5	4.3	—	CEHI	90	普通	にぶい褐	内外面黒色処理 内外面 黒斑 No.31	51-6	
2	土師器	坏	12.9	3.6	—	CEHI	60	普通	橙	内外面黒色処理 No.16	51-7	
3	土師器	坏	(11.9)	3.1	—	AHI	20	普通	橙			
4	土師器	皿	(8.8)	1.9	(4.0)	ACHI	30	普通	明赤褐			
5	土師器	壺	—	7.7	—	ACEHI	20	普通	橙			
6	土師器	高坏	—	6.5	—	ACEHI	70	普通	橙			
7	石製品	白玉	長さ1.3cm 幅1.4cm 厚さ0.6cm 重さ1.56g 滑石								No.1	88-1
8	鉄製品	刀子	長さ7.8cm 刀長4.4cm 刀幅1.2cm 背幅0.4cm								No.17	89-7

第51号住居跡 (第108～111図)

第51号住居跡は調査区中央部のJ-7・8グリッドに位置する。第47号住居跡と重複し、切られる。住居跡の北側大半が調査区域外に延びる。

平面形は方形と推定される。残存規模は、長軸長5.47m、短軸長4.78m、深さ0.22mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は6層に分層され、焼土ブロック・炭化物・ロームブロック等を多量に混入する層が見られた。

炉跡、貯蔵穴、壁溝等は検出できなかったが、ピット16本を検出した。このうちP7とP13が配置や深度から主柱穴となる可能性が高い。この他に南壁際のP9・P10は入口施設に関わる柱穴であろうか。

出土遺物は埋土中に大量廃棄された五領期の遺物と、重複する第47号住居跡に関わる鬼高期の遺物がある (第112～123図)。

1は埴で、平面形は楕円形である。片口鉢等である可能性もある。底部を囲むように横方向の刷毛目が施されている。

2～13は鉢である。形態は多様で、3は埴、6・9は壺の口縁部、12は甗の可能性もある。それ以外のものはいずれも短い口縁部がつくものである。器高のあるもの(2・4・11)と、低平なもの(7～10)に分けられる。底部があるものは4・5・11のみで、4・5は底部が突出し、11は丸みを帯びている。8は口縁端部が積み上げられてい

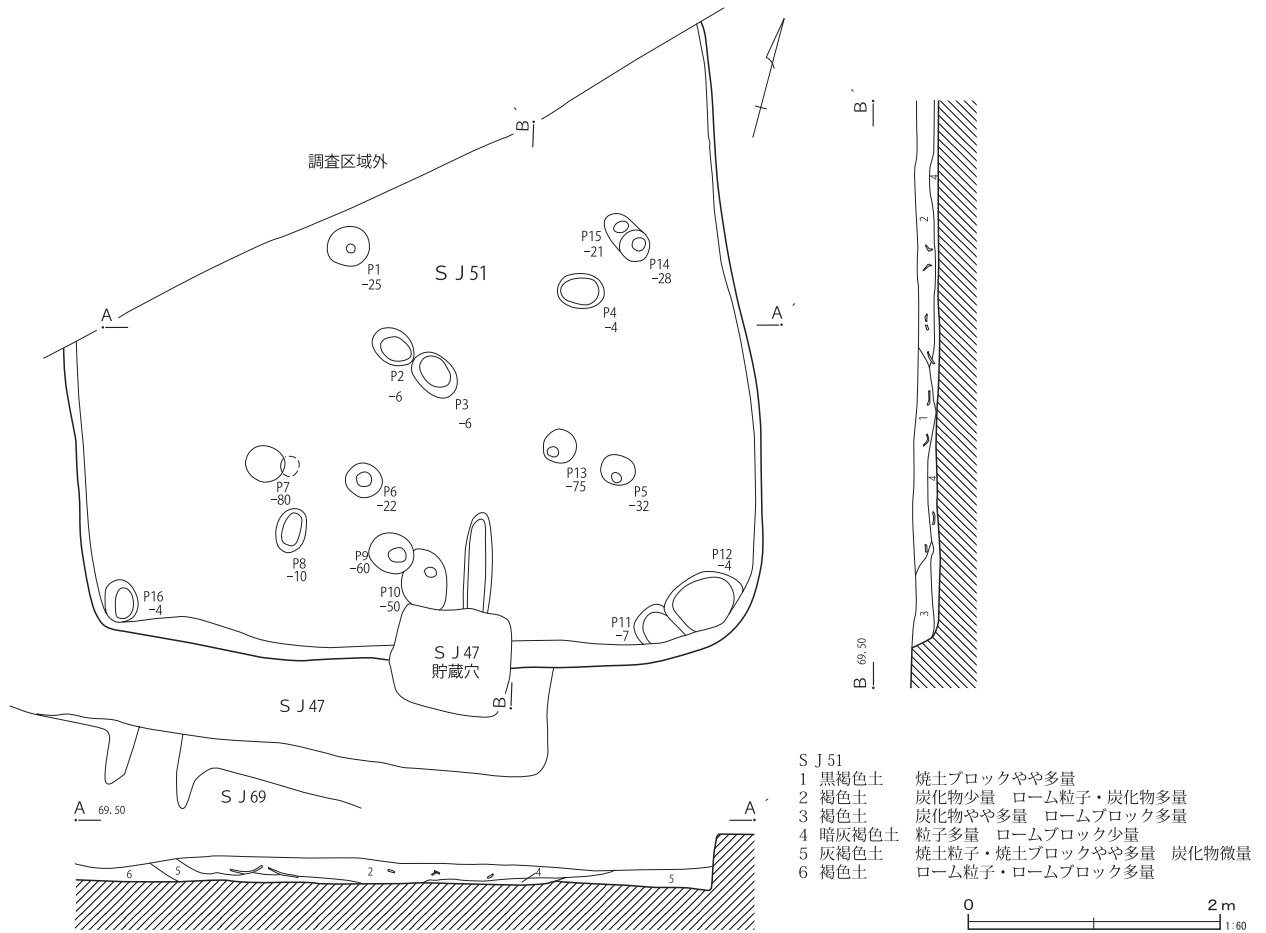
る。13は片口鉢で在来の形態ではなく、外来系のものと考えられるが、その系譜は不明である。調整は風化により不明である。内外面ともヘラミガキが施されるものは10のみである。外面の調整は3・5がヘラミガキ、それ以外は刷毛目もしくはヘラナデである。内面は2・6・7・8がヘラミガキである。12は大型で、歪みが著しい。口縁部は短く外反し、端部は垂直な面をもつ。口縁部は内外面とも横ナデ、体部は木口ナデが施される。

14～22は埴である。口縁部が長く、体部が小さいもの(18～20)と、体部が大きなもの(21)がある。ヘラナデをベースに、口縁部内外面、体部外面にはヘラミガキが加えられている。底部は、丸底ではなく、小さな平底になっている。

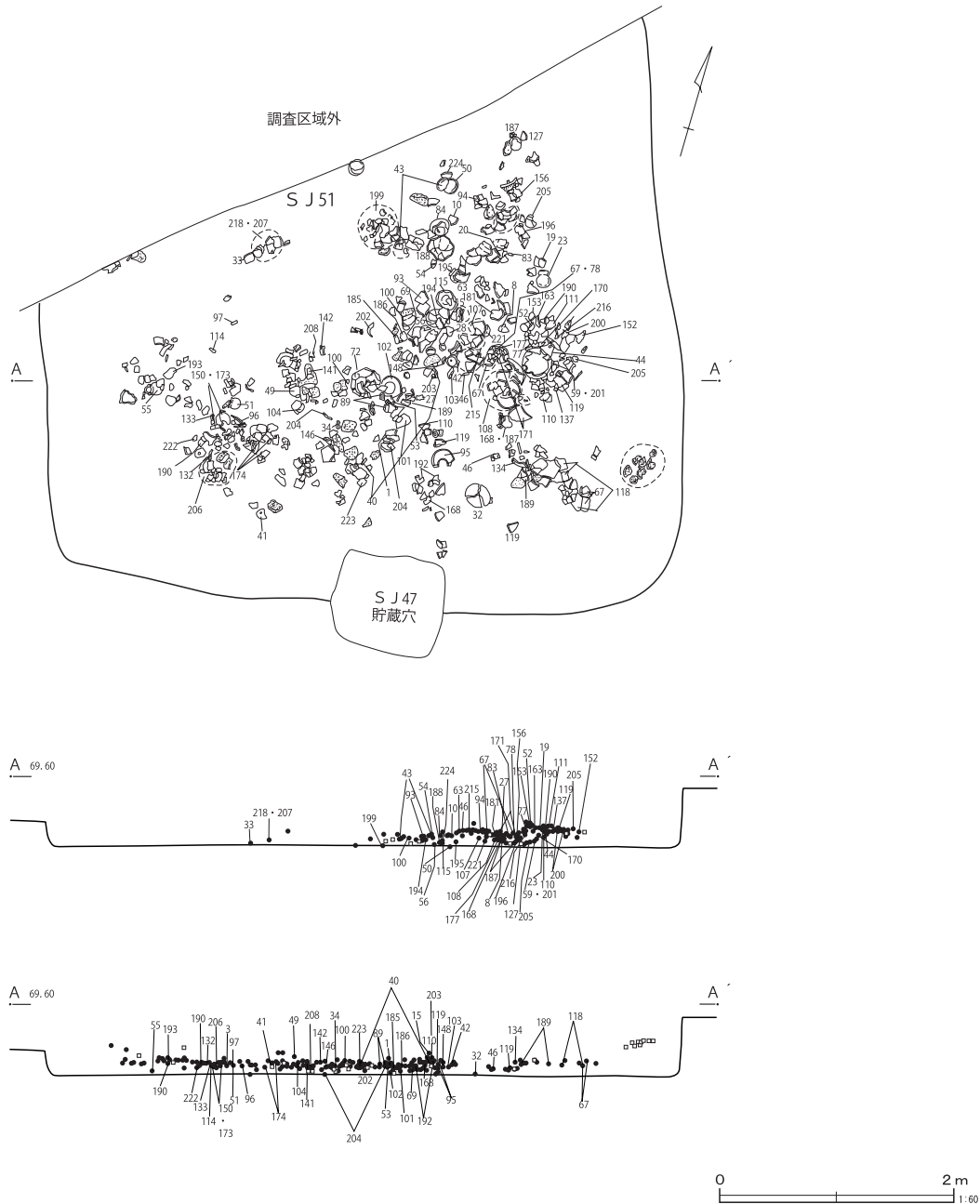
23・24は小型壺である。大型の埴とも言い得るもので、両者とも太目のヘラミガキが施される。

25～40は高坏である。全形の知れるものがなく、確実にないが、坏部が大きく「八」の字状に開く脚部がつくものと(25・26・28・30～32・37・38)、坏部が小さい同様の脚部のもの(33～35)、坏部が大きく脚部が中位まで中実の柱状のもの(39)、脚部が中空の柱状のもの(36・40)がある。29は柱状の脚部の坏部と考えられる。坏部と脚部の接合は、いずれもホゾ接合である。

41～48は器台である。42は北陸系の大型器台で、口縁部は外側に大きく開くものと考えられる。器受部下位には円形の径1.1cm程度の透穴が3箇所、千鳥状に外側から開けられている。外面と器



第108図 第51号住居跡・遺物出土状況 (1)



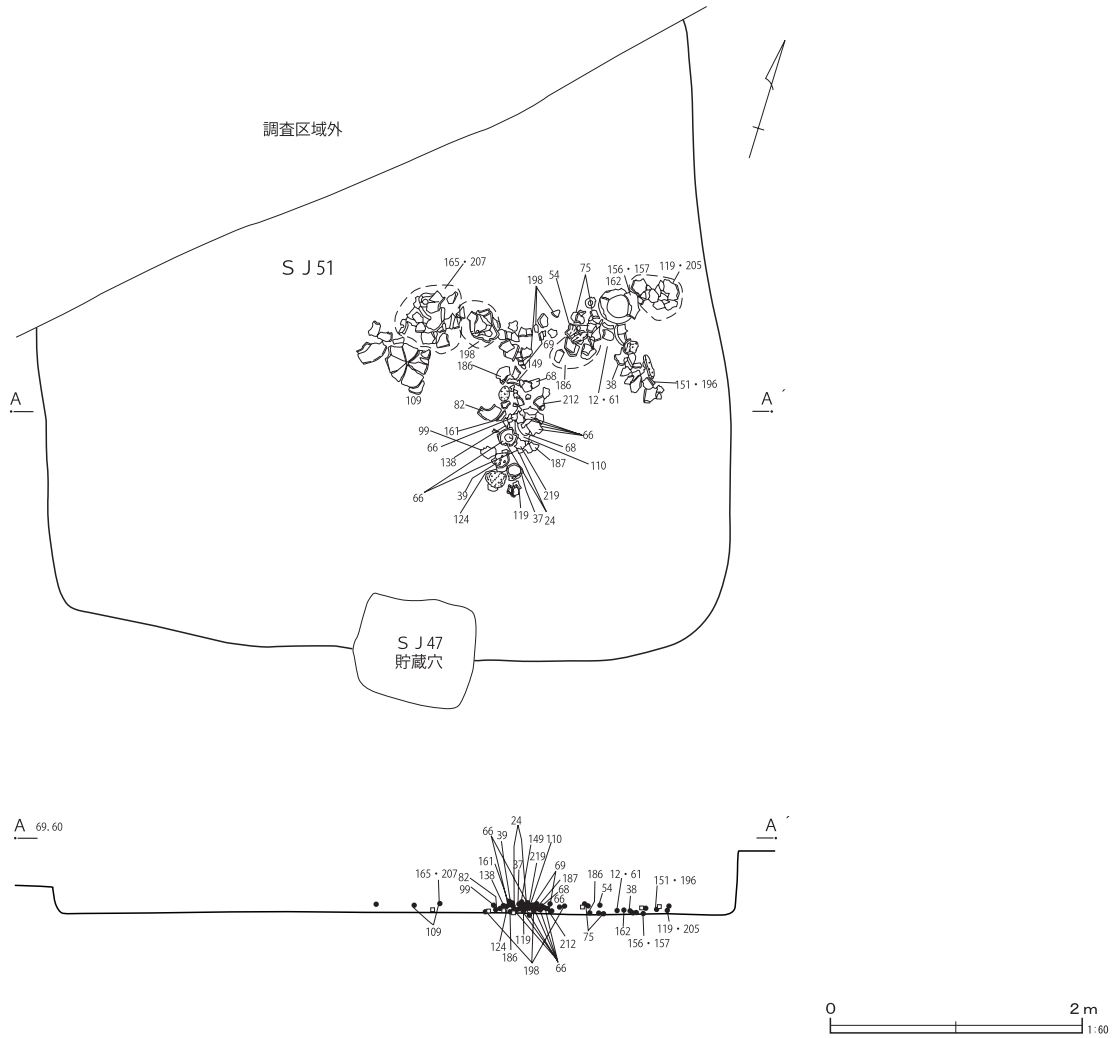
第109図 第51号住居跡遺物出土状況（2）

受部の内面は太目のヘラミガキ、脚部の内面は上位がヘラケズリ、下位が刷毛目である。

それ以外は小型器台である。高坏同様に多様で、器受部が大きなもの（46）や、脚部が中空で柱状のもの（43）がある。器受部は、端部のみを積み上げ、外周に面をもたせる浅い直線的な器受部をもつもの（41・46）と浅い塊状のそれ以外に分けられる。43は口縁部が外側に開くものである。端部外面は前者が横ナデ、後者がヘラミガキであ

る。脚端部はいずれも丸く収められている。器受部と脚部の接合はいずれもホゾ接合である。接合部の穿孔はヘラによって開けられている。脚部の透孔は3箇所、外側から開けられている。46は器受部が大きく、色調も白色で、胎土にも雲母を多く含み、異質である。

49～52・55・56は小型壺である。法量によりおよそ3つに分けられる。55・56がやや大型で縦長の球形胴、50・51が中型で球形胴、49が小型で胴



第111図 第51号住居跡遺物出土状況（4）

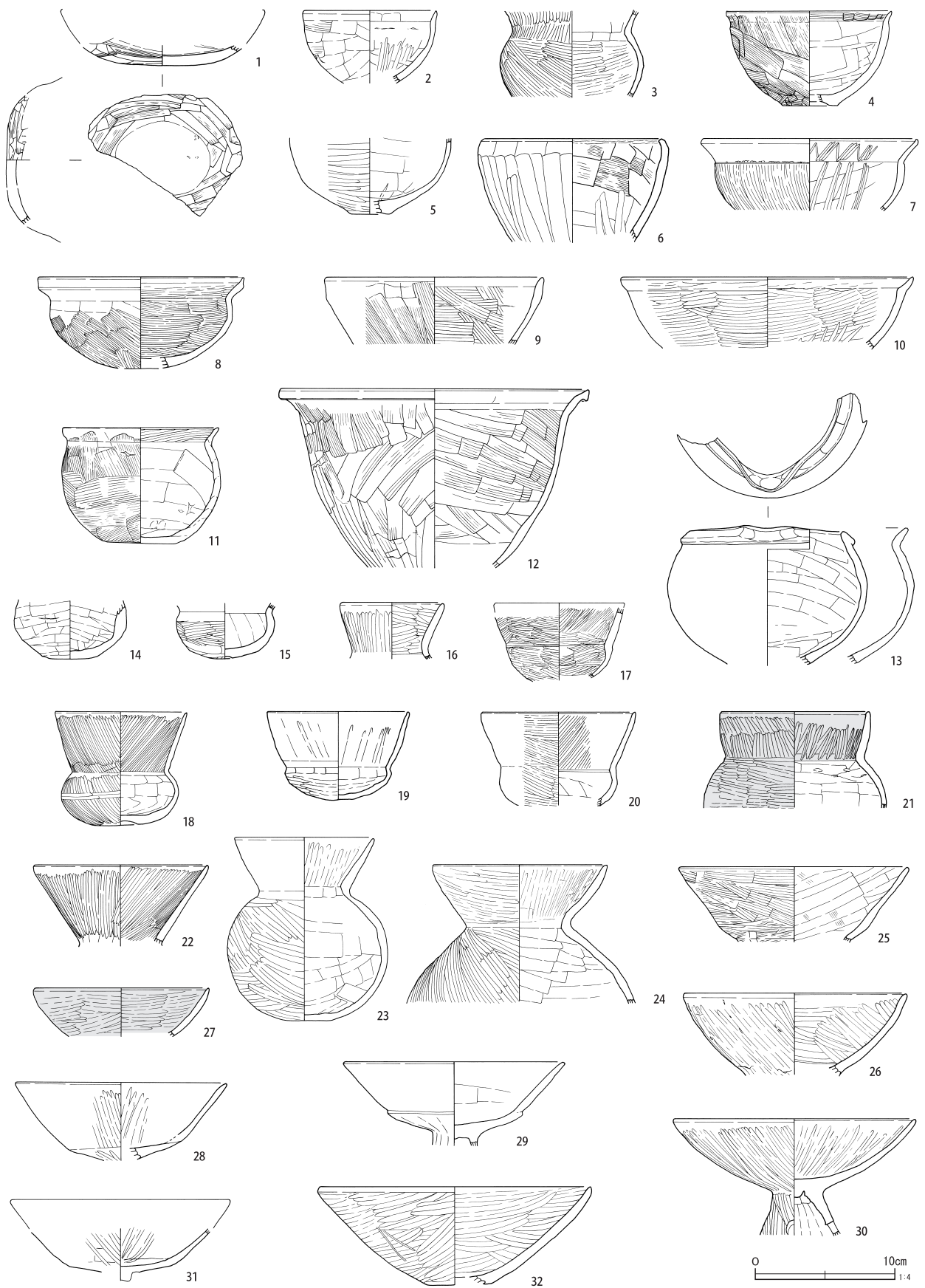
粘土帯を貼付することにより複合部を作り出す複合口縁のものである。65は所謂パレス壺で、複合部は面を広くもち、4本1単位の棒状浮文が貼付されている。内面は段をもち、ヘラによって綾杉文が施されている。86は内面に段があり、二重口縁と複合口縁の中間の口縁部をもつものである。95は複合部に3本1単位の棒状浮文が3単位貼付されている。79・80・90・97・98・100～103は二重口縁のものである。いずれも頸部から直立して立ち上がり、上部で水平に短く開き、その端部に口縁部を接合するものである。80・102は開いた段の外側に粘土を貼付し、複合口縁状になっている。97・98は端部にヘラによる押捺が施されている。103は、外面の段の下端に浅い押捺が施されてい

る。

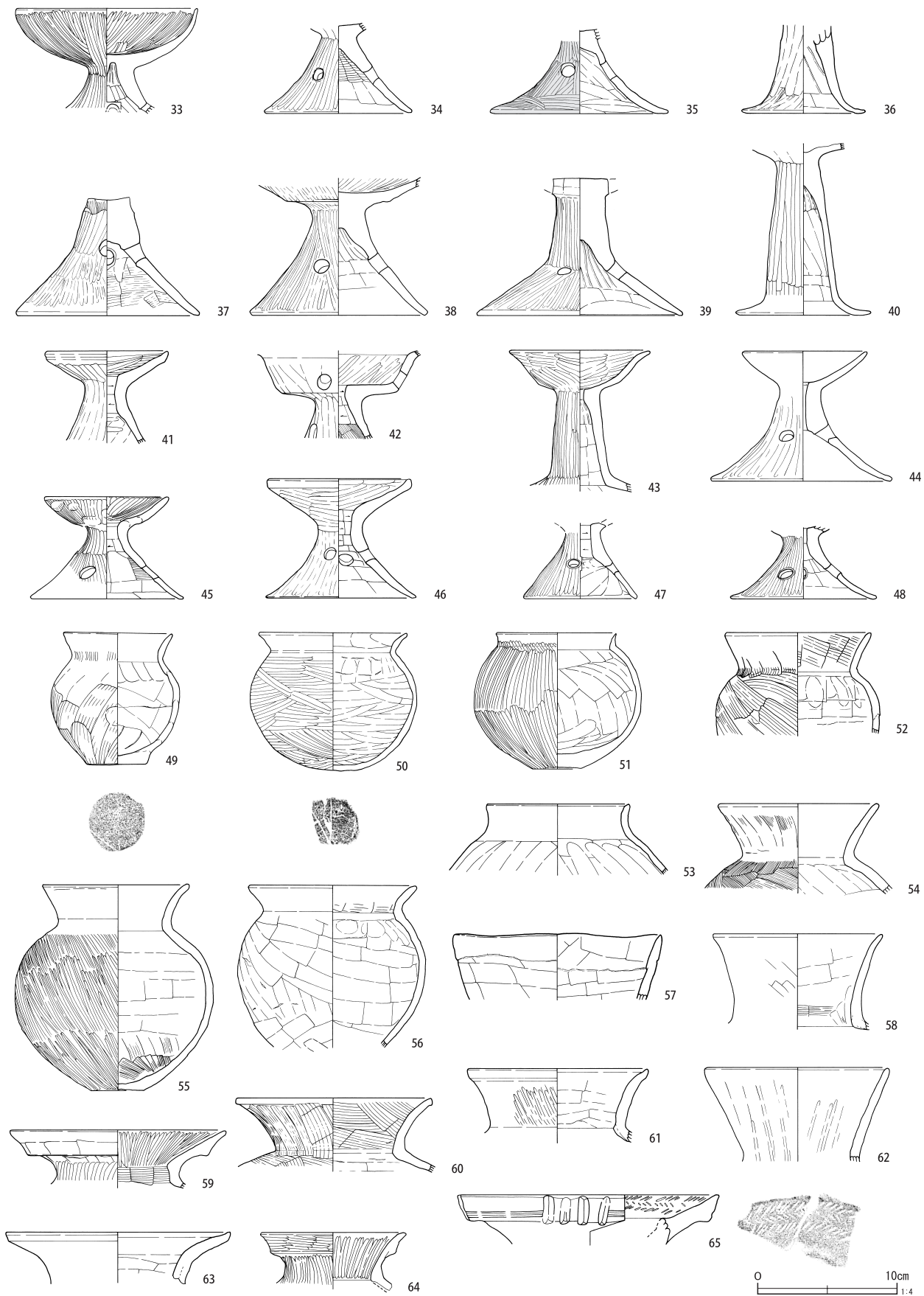
106は短く厚い口縁部が直線的に開くものである。頸部に断面三角形の突帯が貼付されている。

66・69は甕である。やや長めの外反する口縁部に球形胴のつくものである。69はヘラミガキが施され、広口壺的なものである可能性もある。

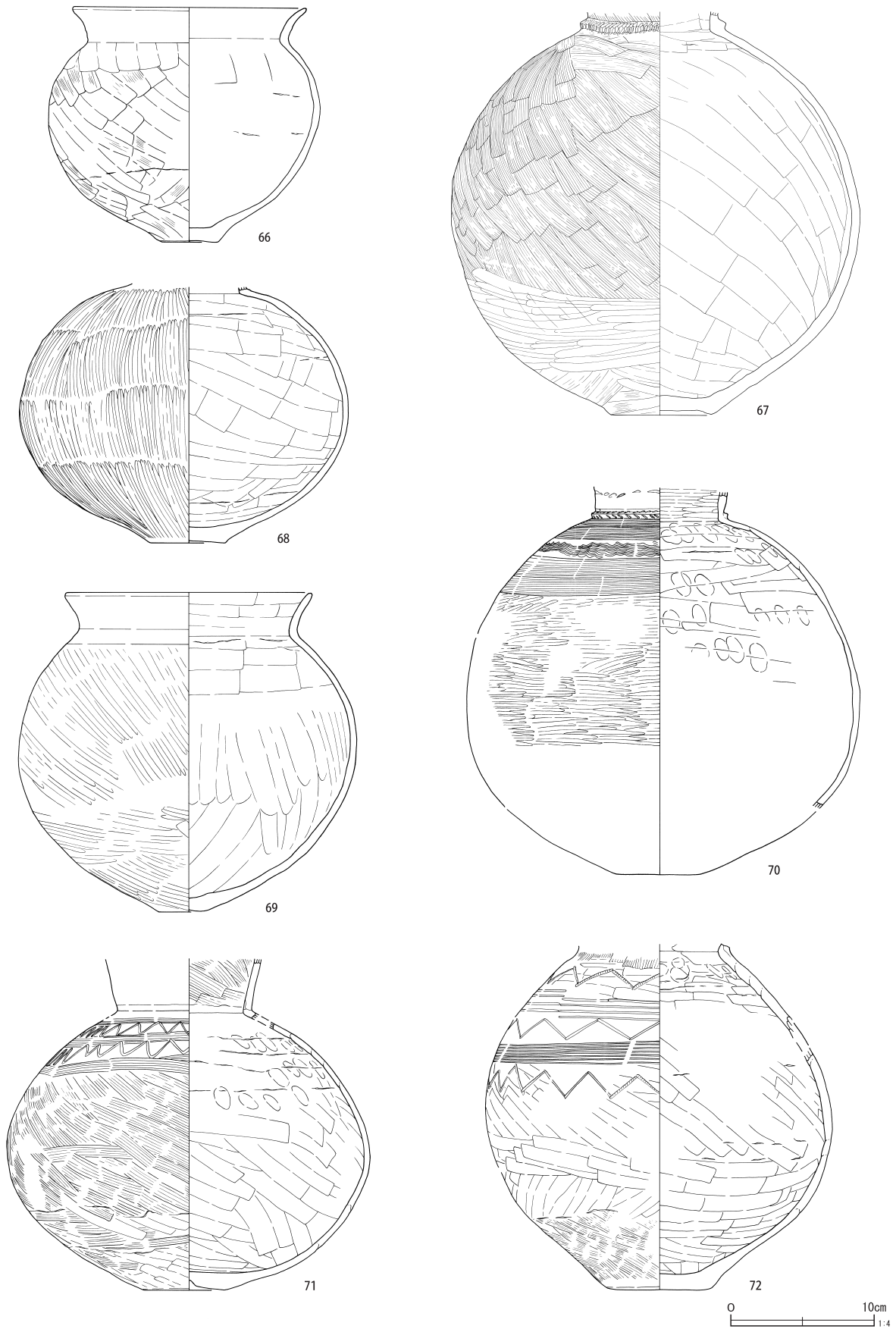
67・68・70～72・108～110・128は壺の胴部である。いずれも球形胴で、頸部の括れが強い。胴部外面の調整はヘラナデ、木口ナデ、もしくは刷毛目がベースで、その上にヘラミガキが施されている。ヘラミガキは密である。67は刷毛目工具による押捺が施された断面三角形の突帯が貼付されている。70～72は肩部もしくは胴部上半に文様が施されるものである。70は木口による刺突が施さ



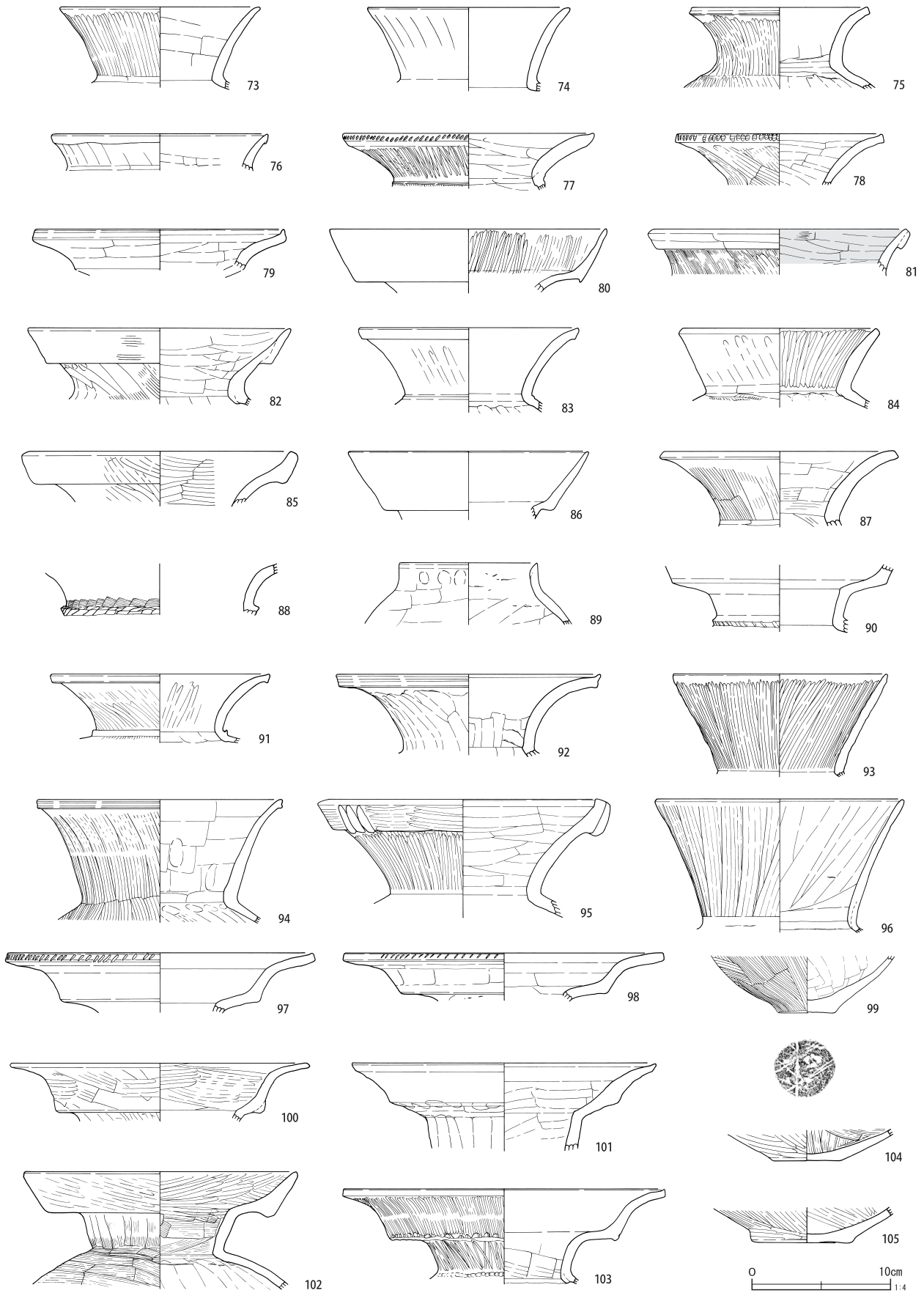
第112図 第51号住居跡出土遺物（1）



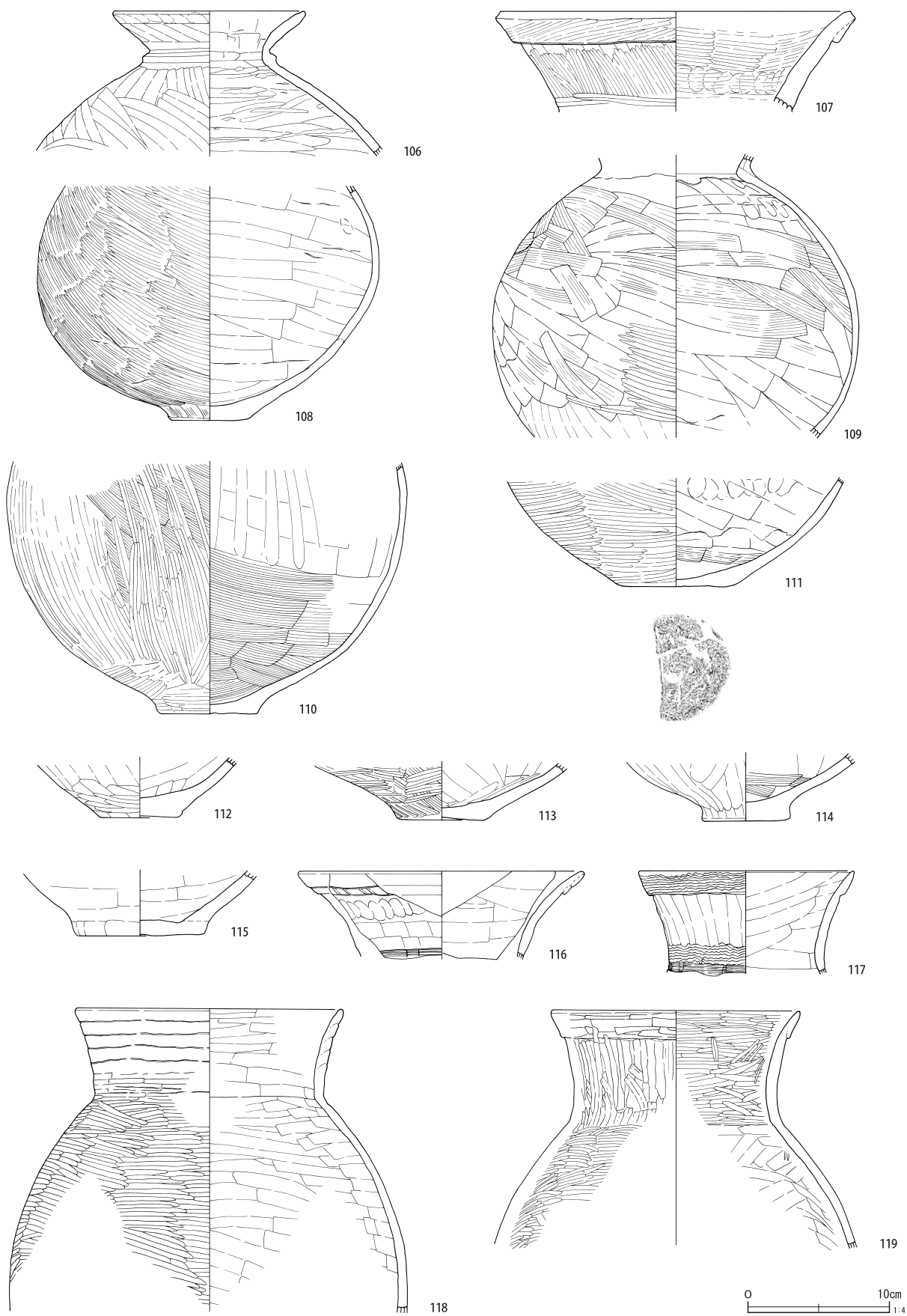
第113图 第51号住居跡出土遺物(2)



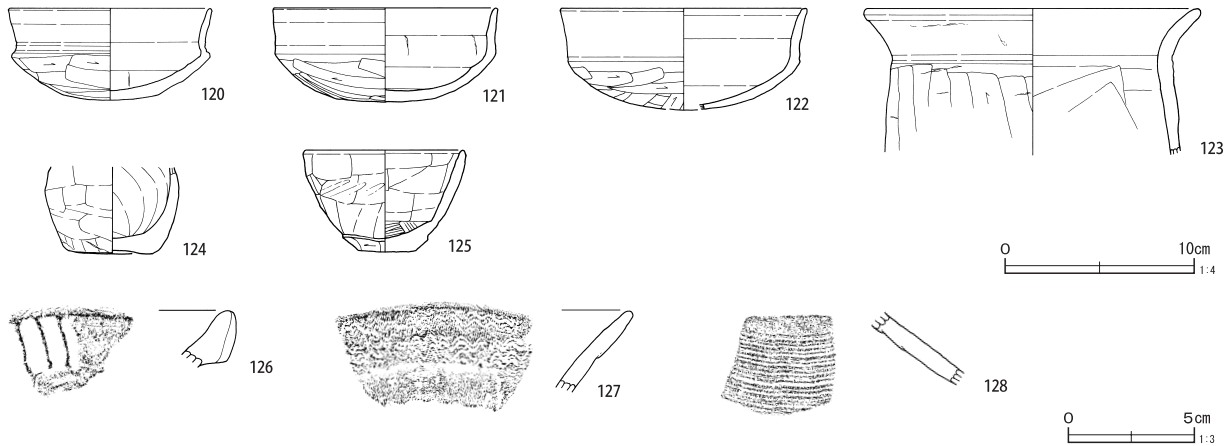
第114図 第51号住居跡出土遺物（3）



第115图 第51号住居跡出土遺物（4）



第116図 第51号住居跡出土遺物（5）



第117図 第51号住居跡出土遺物（6）

れた突帯、横走る12条2段の櫛描平行線文、7条1単位右回転の波状文、櫛描平行線文の3段の文様が施されている。71は横方向の刷毛目、太いヘラ描きによる右回転の波状文を交互に施文している。72は木口の押捺による山形文、4条1単位の平行櫛描線文、山形文、7条1単位の櫛描平行線文による崩れたパレス文様が施文されている。128は肩部の破片で、10条1単位の櫛描平行線文が施文されている。

99・104・105・111～115は底部で、いずれも突出するものである。底面は輪台状になっており、無調整に近い。99は木葉痕が残る。外周部分に104・105・112・113はヘラミガキ、114・115はヘラナデが施されている。

116～119・127は樽式系のものである。116は複合口縁だが、複合部に粘土帯の接合痕を装飾的に残している。頸部に3条1単位以上、右回転の簾状文が施されている。117～119は口縁部が長く立ち上がり、なだらかに細長い胴部を呈するものである。117・119は、端部に粘土を貼付することにより複合口縁とするものである。117は複合部外面、頸部に7条1単位、右回転の櫛描波状文、肩部に3条以上1単位、右回転、2連止めの簾状文が施されている。127も同様のもと考えられる。複合部外面に3条1単位、右回転の櫛描波状文が2段施文されている。118は口縁部に粘土帯の積

み上げ痕を装飾的に残している。

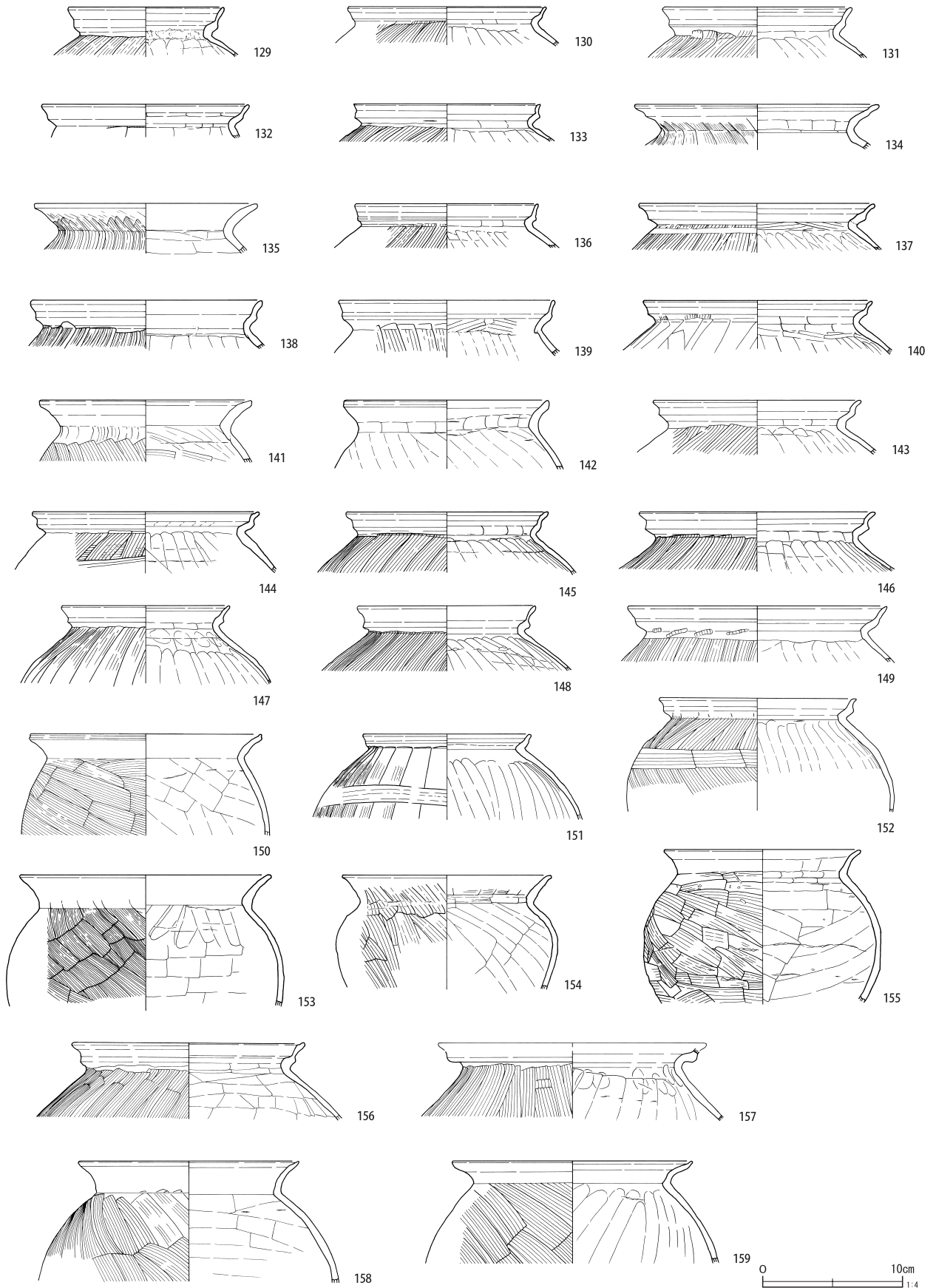
124・125はミニチュアである。調整はヘラナデである。

129～134・136～140・143～149・151・152・156・157・159・191・192・195～200はS字状口縁台付甕である。形態は様々だが、本来のものとは大分異なっている。特に134・159は全体に外側に大きく開き崩れが大きい。胴部外面は羽状の刷毛目が施されている。195・197は刷毛目が太い。内面はヘラナデ、もしくはナデが施されている。198・200の脚台部の天井には砂を多く混ぜた粘土が使われている。脚台部を別に作り、胴部に圧着したものと思われる。

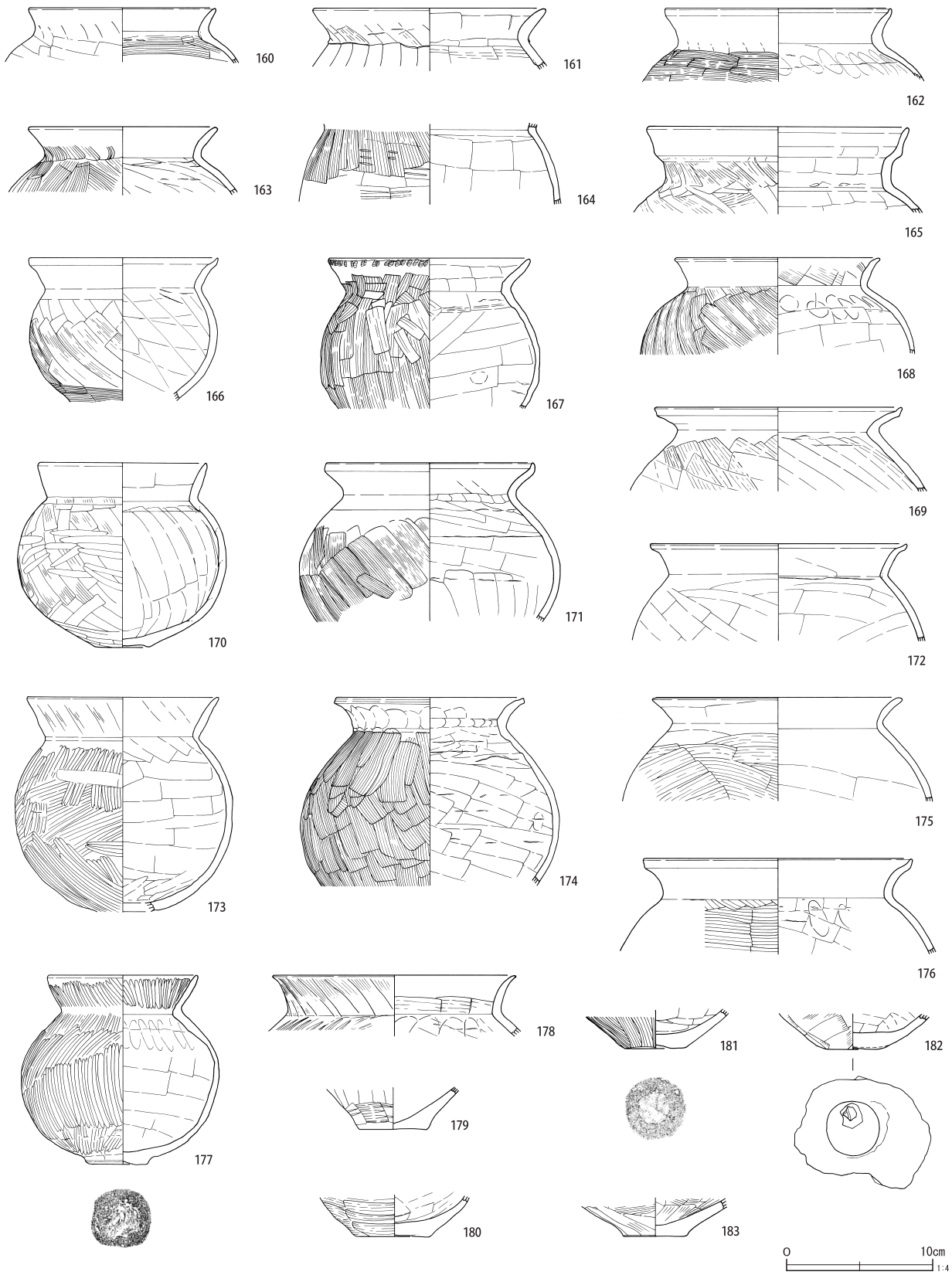
135・141・142・150・153～155・158・160～163・168・175・178・184・193・194は単口縁の甕の口縁部から胴部上半である。口縁部は短く、直線的に外反する。端部は面をもつ141・142と丸く収められているそれ以外に分けられる。頸部は基本的に「く」の字に屈曲し、内面に稜をもつ。

165は所謂5の字状口縁を呈するもので、模倣品である。169・171・172・176・184は口縁端部が摘み上げられ、所謂千種甕を意識しているものと思われる。

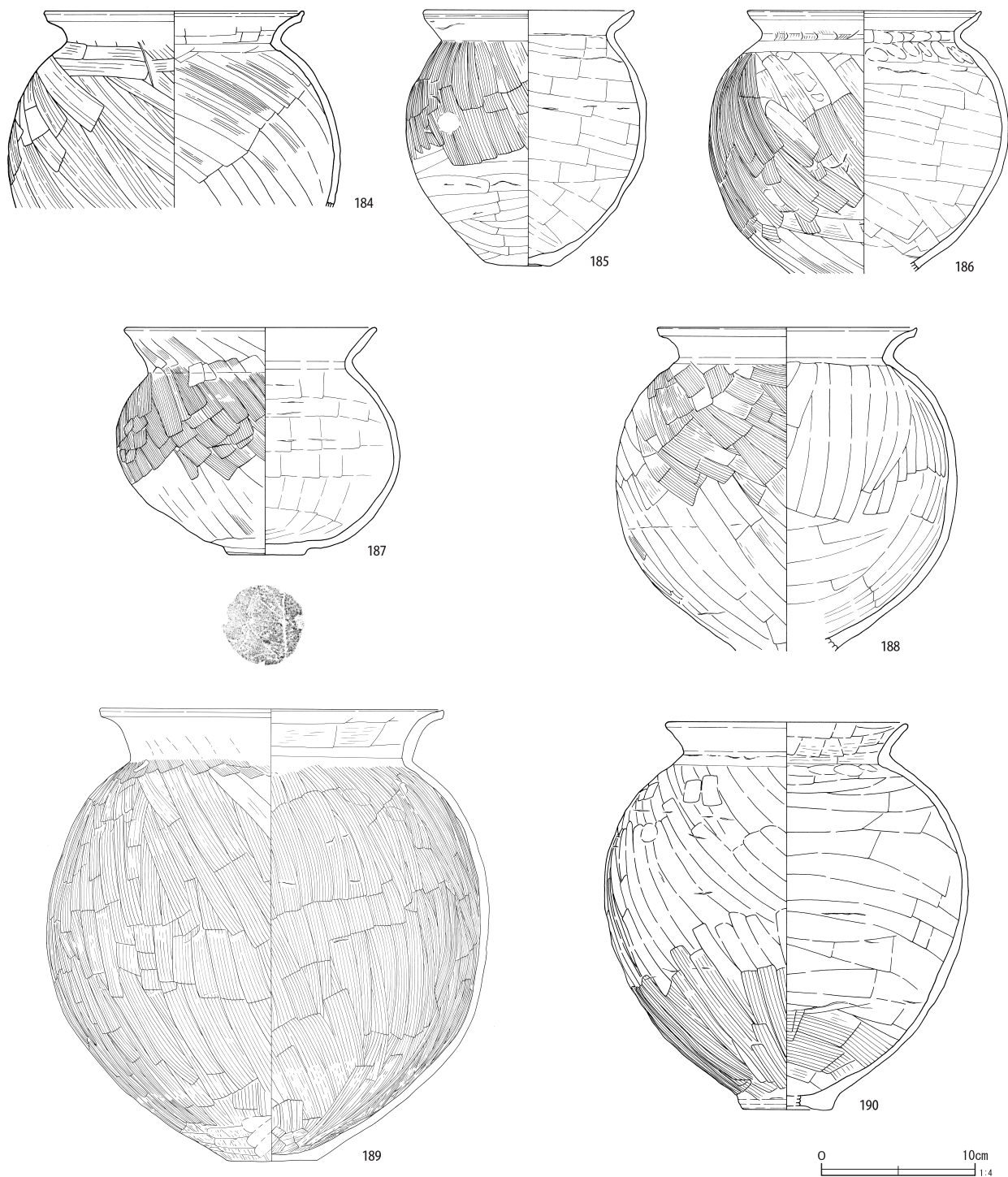
166・170・173・177は全形の知れる小型甕である。口縁部は直線的で短く、胴部は球形胴である。166は端部が摘み上げられている。177は小型壺の



第118图 第51号住居跡出土遺物（7）



第119図 第51号住居跡出土遺物（8）

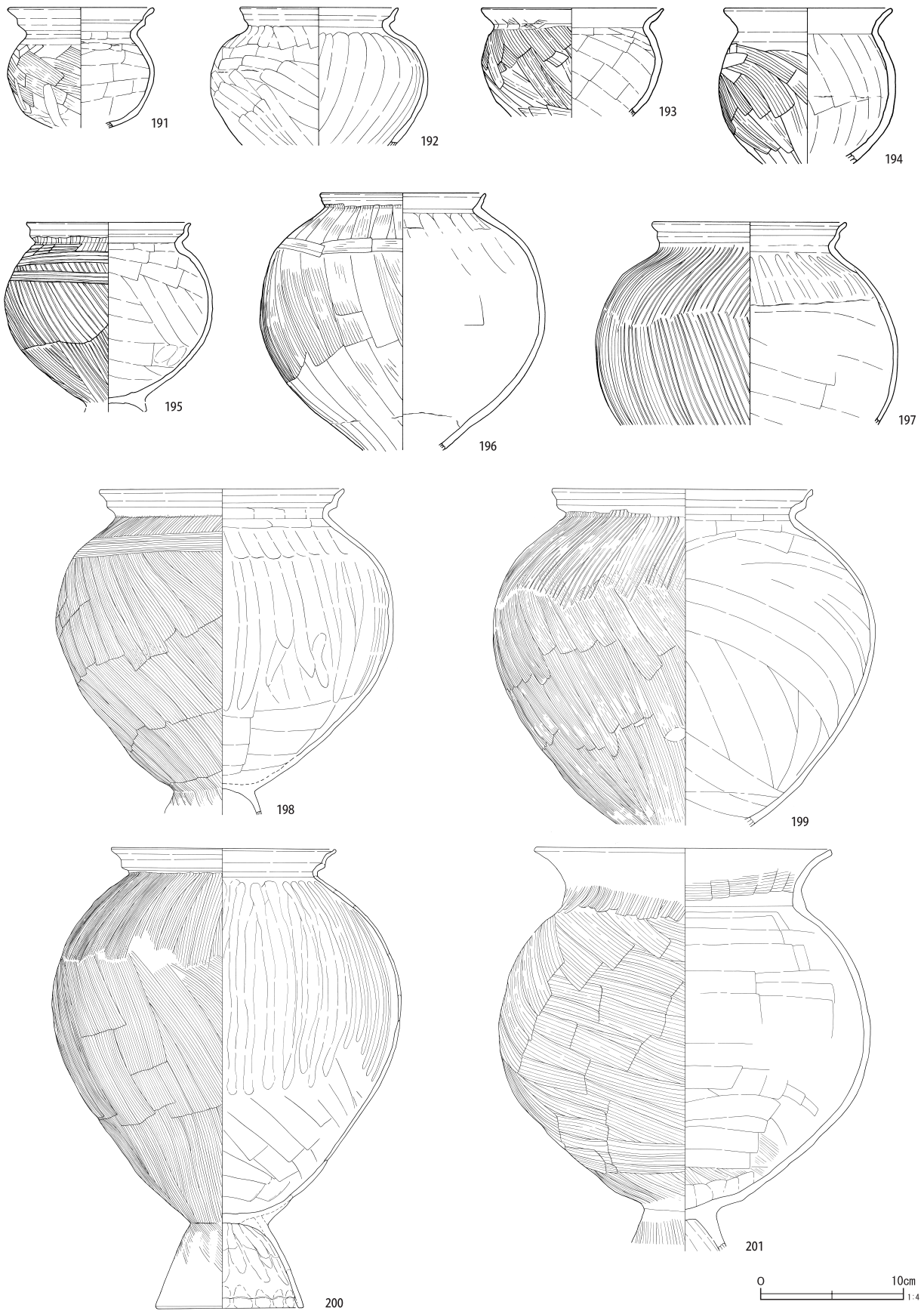


第120図 第51号住居跡出土遺物（9）

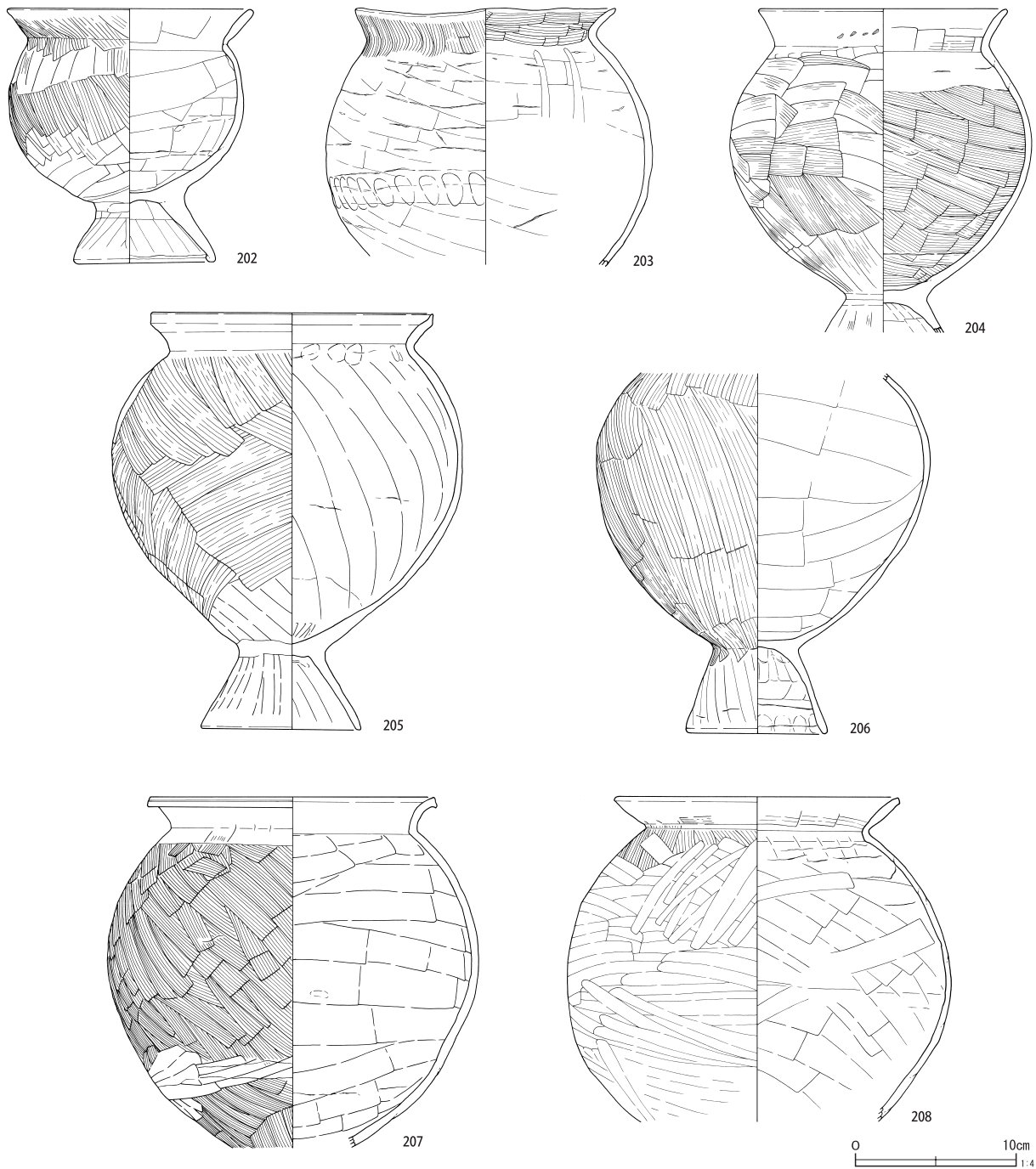
可能性もある。173・177はヘラミガキである。

185～190は全形の知れる甕である。底部は突出する。187は扁平だが、それ以外はやや縦長の球形胴を呈する。188・189の口縁部は端部が外反し、直立する面をもつ。

201～208は台付甕である。203・208は甕の可能性もある。202は小型でやや扁平だが、それ以外はやや縦長の球形胴を呈する。205の口縁部は端部が摘み上げられている。207の口縁部は端部が外反し、直立する面をもつ。胴部と脚台部の接合は



第121图 第51号住居跡出土遺物 (10)



第122図 第51号住居跡出土遺物 (11)

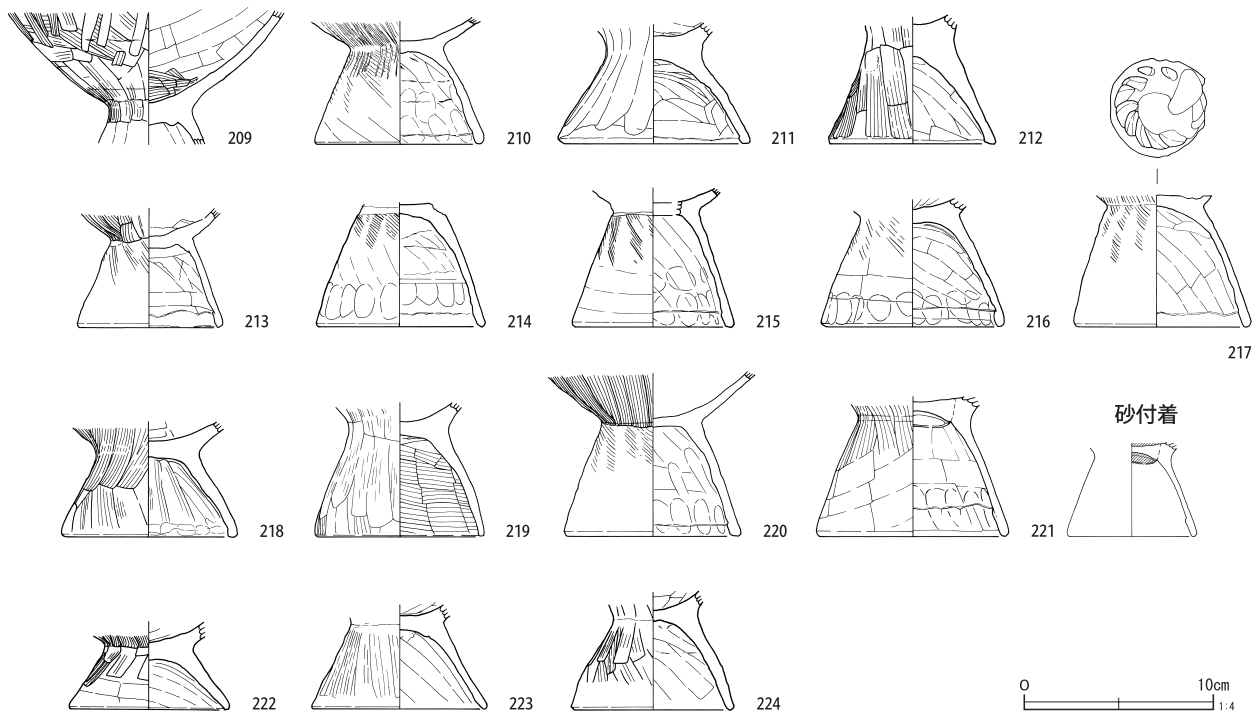
ホゾ接合である。脚台部は低平である。

209～224は台付甕の脚台部である。いずれも小型で低平である。210・213～217・220は箱形を呈し、外面の刷毛目が等間隔にナデ消され、端部の内面は折り返し状になっており、S字状口縁台付甕の脚台部と考えられる。217は剥離した面に接着するためのナデの痕跡が良く残っている。221

の天井部には砂を混入した粘土が使われている。

この他に古墳時代後期の土器が混入していた。120～122は口縁部の長く直立する模倣坏である。123は長胴甕の口縁部である。重複する第47号住居跡の遺物が混入したものであろう。

住居跡の時期は、古墳時代前期の五領期後半に位置づけられる。



第123図 第51号住居跡出土遺物 (12)

第41表 第51号住居跡出土遺物観察表 (第112~123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	—	1.4	7.0	ACEHIK	70	良好	にぶい橙	No250	
2	土師器	鉢	(9.4)	5.1	—	ACEHIK	40	良好	にぶい赤褐	No450	51-8
3	土師器	鉢	—	6.1	—	AEH IK	25	普通	明赤褐	No203	
4	土師器	鉢	11.6	6.6	4.0	ABCEHI	70	良好	にぶい橙	SJ47	52-1
5	土師器	鉢	—	5.4	(3.0)	ACEHI	30	普通	赤褐	No435	
6	土師器	鉢	(12.7)	7.3	—	ACEHIK	10	普通	にぶい褐	P 9	
7	土師器	鉢	(15.5)	5.0	—	AEH IK	10	普通	橙	No436	
8	土師器	鉢	(14.6)	6.4	—	ACEHI	40	良好	橙	S字鉢 No46	52-2
9	土師器	鉢	(15.4)	4.7	—	ACEHIK	20	普通	黄橙		
10	土師器	鉢	(21.0)	5.1	—	ACEHIK	20	良好	にぶい赤褐	No110・111	
11	土師器	鉢	11.1	8.2	4.7	ACGHL	90	普通	橙		52-3
12	土師器	鉢	22.1	12.7	—	ACEHIK	60	良好	橙	下層 No574・575 SJ47	52-4
13	土師器	片口鉢	(11.0)	9.7	—	CEHIK	40	普通	橙	SJ47	
14	土師器	埴	—	4.1	(2.8)	AEH IK	50	普通	にぶい橙		
15	土師器	埴	—	4.1	0.9	AEIK	100	良好	黒褐	No346	52-5
16	土師器	埴	7.2	3.9	—	ACEHIK	90	良好	にぶい橙		
17	土師器	埴	—	5.2	—	ACHIK	50	普通	にぶい赤褐		52-6
18	土師器	埴	9.5	8.0	2.3	ACEHIK	100	良好	橙	No540	52-7
19	土師器	埴	(10.2)	6.2	—	AEH IK	40	普通	橙	No43	52-8
20	土師器	埴	(10.8)	6.6	—	CEHIK	30	普通	明赤褐	No66	
21	土師器	埴	(10.6)	6.4	—	CEHIK	40	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩	
22	土師器	埴	(12.4)	5.7	—	EHIK	30	普通	橙	No552	
23	土師器	小型壺	10.0	13.0	3.5	ACDEHIK	95	良好	明赤褐	No41	53-1
24	土師器	小型壺	12.4	9.8	—	ACEHIK	90	良好	明赤褐	No609・611	
25	土師器	高坏	(16.0)	5.3	—	AEH IK	20	良好	灰黄褐	下層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
26	土師器	高坏	15.8	5.8	—	A E H I K	90	良好	にぶい黄橙		
27	土師器	高坏	(12.4)	3.5	—	A E H I K	25	良好	赤褐	内外面赤彩 No388	
28	土師器	高坏	15.2	5.3	—	A B C H I	90	不良	橙	覆土 下層 No132・480	
29	土師器	高坏	(15.6)	5.9	—	G H I K	30	普通	橙	下層	
30	土師器	高坏	(17.3)	8.2	—	A C E H I K	45	良好	にぶい赤褐	No455	
31	土師器	高坏	—	3.8	—	A E H I K	40	普通	橙		
32	土師器	高坏	19.4	6.8	—	A B E H I K	95	良好	にぶい黄橙	No324	
33	土師器	高坏	(12.9)	7.5	—	A E H I K	50	良好	橙	No129	
34	土師器	高坏	—	6.1	(10.2)	A E H I K	40	良好	にぶい橙	No231	
35	土師器	高坏	—	6.0	12.6	A E H I K	70	良好	にぶい橙	外面赤彩 SJ47	
36	土師器	高坏	—	6.2	8.8	A H I J K	80	良好	橙	SJ47	
37	土師器	高坏	—	8.2	13.0	A E G H I K	80	良好	にぶい橙	No615	
38	土師器	高坏	—	9.7	(12.4)	A C E H I J K	50	普通	橙	No582	
39	土師器	高坏	—	9.7	(14.6)	A H I K	50	普通	橙	粉っぽい No613	
40	土師器	高坏	—	11.8	9.6	A E H I K	90	良好	にぶい橙	No244・351	
41	土師器	器台	8.6	6.5	—	A B C E H I K	60	良好	にぶい橙	No218	
42	土師器	器台	—	6.3	—	A C E H I K	50	良好	にぶい赤褐	No344 北陸系	
43	土師器	器台	10.0	10.0	—	A E H I K	50	良好	赤褐	No117・123	
44	土師器	器台	8.8	9.2	(12.8)	A C E H I K	70	普通	橙	No 1	53-2
45	土師器	器台	8.5	7.2	(10.8)	A C G H I	70	普通	橙	No485	53-3
46	土師器	器台	10.2	8.4	10.3	A E G H I K	60	良好	にぶい橙	No107・358	53-4
47	土師器	器台	—	5.3	7.8	A E H I	100	普通	赤褐		
48	土師器	器台	—	5.2	10.4	A C E H I K	95	普通	にぶい赤褐	No534	
49	土師器	小型壺	7.7	9.3	4.1	A C G H I K	100	普通	橙	底部木葉痕 No254	53-5
50	土師器	小型壺	(10.5)	9.7	3.1	A E H I J K	60	良好	にぶい橙	底部木葉痕 No110・126	53-6
51	土師器	小型壺	8.5	9.2	3.5	A C E H I K	90	良好	にぶい赤褐	No184	54-1
52	土師器	小型壺	(10.3)	7.3	—	A C E H I	20	普通	橙	No30	
53	土師器	壺	(10.0)	5.1	—	A C E H I K	40	良好	にぶい赤褐	外面煤付着 覆土下層 No291	
54	土師器	壺	(11.4)	6.3	—	A E H I K	50	良好	にぶい赤褐	No109・572	
55	土師器	小型壺	10.4	14.6	—	A C E H I J	100	良好	橙	No165	54-2
56	土師器	小型壺	11.8	11.6	—	A C E H I K	90	良好	橙	No136	54-3
57	土師器	壺	(15.0)	4.6	—	A B C E H I K	25	普通	橙		
58	土師器	壺	(12.0)	6.7	—	A C E H I	20	普通	にぶい橙		
59	土師器	壺	(15.4)	4.1	—	A C E H I	30	良好	にぶい赤褐	No 2	
60	土師器	壺	(14.0)	5.2	—	A C E H I K	70	良好	橙	下層 No10・411	
61	土師器	壺	(12.9)	5.2	—	A B E H I K	25	良好	橙	No574	
62	土師器	壺	(12.8)	6.7	—	A C E H I K	70	普通	にぶい橙	覆土下層	
63	土師器	壺	(16.0)	3.7	—	A C E H I	40	良好	明赤褐	No57	
64	土師器	壺	(10.0)	4.1	—	A C E K	20	普通	赤褐		
65	土師器	壺	(18.4)	3.5	—	E H I	15	普通	橙	パレス壺模倣 SJ47	
66	土師器	甕	(16.2)	16.2	4.0	A E H I K	80	普通	橙	No600~602・606・609~611	54-4
67	土師器	壺	—	28.0	7.0	A B E H I K	100	良好	にぶい橙	下層 No96・97・99・102・396・610	54-5
68	土師器	壺	—	17.9	5.2	A E H I K	80	普通	にぶい赤褐	下層 No410・417・459・473・508・592・604	
69	土師器	甕	17.0	22.1	(3.3)	A C E H I K	80	普通	にぶい橙	下層 No337・436・464・564・565	54-6
70	土師器	壺	—	22.4	—	B C E H I	60	普通	明赤褐	二重口縁加飾壺 下層 No431・433・468	55-1・2
71	土師器	壺	—	23.0	5.8	B C D E H	75	不良	明赤褐	No454	55-3・4
72	土師器	壺	—	24.0	7.4	C E H I K	70	普通	赤褐	パレス壺 No282	
73	土師器	壺	(14.3)	5.8	—	A C E H I K	25	普通	橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
74	土師器	壺	(14.4)	5.9	—	ACDEHK	20	普通	橙		
75	土師器	壺	(12.6)	5.8	—	ACEHIK	40	良好	橙	No570・576	
76	土師器	壺	(15.4)	2.6	—	ABCEHI	20	普通	にぶい黄褐		
77	土師器	壺	(18.0)	4.0	—	AEH I K	20	良好	赤褐	No22	
78	土師器	壺	(14.8)	3.7	—	AEH I K	20	良好	にぶい橙	No99	
79	土師器	壺	(17.8)	3.8	—	AEH I K	20	普通	橙		
80	土師器	壺	(19.8)	4.5	—	ABCEHI	20	普通	明赤褐		
81	土師器	広口壺	(18.2)	3.3	—	ACEHIK	25	良好	にぶい橙	内面赤彩	
82	土師器	壺	(18.8)	5.5	—	ACDEH	40	普通	橙	No597	
83	土師器	壺	(15.8)	5.9	—	ACEHIK	60	良好	明赤褐	No4・16・68	
84	土師器	壺	13.9	5.7	—	ACEHI	80	普通	明赤褐	No110	
85	土師器	壺	(18.8)	3.9	—	AEH I K	10	良好	橙		
86	土師器	壺	(17.3)	4.9	—	CEHIKL	10	普通	にぶい黄橙		
87	土師器	壺	(16.5)	5.4	—	ACEHI	25	普通	橙		
88	土師器	壺	—	3.3	—	ACEHIK	10	良好	にぶい赤褐	下層	
89	土師器	壺	(9.8)	4.3	—	ACEHI	30	普通	にぶい赤褐	No284・293	
90	土師器	壺	—	4.8	—	ABCDEH	15	普通	橙		
91	土師器	壺	(15.8)	4.9	—	ACEHIK	10	普通	橙		
92	土師器	壺	19.0	5.9	—	ACHI	100	普通	橙	No444	
93	土師器	壺	(15.5)	7.3	—	AEH I K	50	良好	にぶい橙	No137・482 SJ47	
94	土師器	壺	(17.5)	8.9	—	ACEHIK	25	普通	にぶい褐	No81	
95	土師器	壺	19.3	8.9	—	ACEHI	70	普通	橙	下層 No311・318	55-5
96	土師器	壺	(17.8)	9.6	—	CEHIK	30	普通	明赤褐	No193・208	
97	土師器	壺	(22.0)	4.3	—	BCDEHI	20	普通	橙	No177・553	
98	土師器	壺	(22.8)	3.4	—	ACEHI	20	普通	橙		
99	土師器	壺	—	4.0	4.2	AEH I K	50	良好	にぶい橙	底部木葉痕 外面煤付着 No612	
100	土師器	壺	(21.2)	4.2	—	ACEGHI	20	普通	橙	No140・280	
101	土師器	壺	(21.8)	6.2	—	ACEHIK	25	良好	橙	No303	
102	土師器	壺	19.6	8.4	—	AEH I K	85	良好	明赤褐	No286	55-6
103	土師器	壺	(23.0)	6.8	—	ACEHI	20	普通	橙	No352	
104	土師器	壺	—	2.2	4.8	ACEHIK	80	普通	橙	No252	
105	土師器	壺	—	2.6	7.0	ABCEHI	60	良好	橙	No443	
106	土師器	壺	13.2	10.3	—	ABCEHK	50	良好	橙	下層 No487・516・520	
107	土師器	壺	(24.7)	7.0	—	AEH I K	10	普通	にぶい黄橙	No147	
108	土師器	壺	—	16.5	5.5	ACEHIK	70	普通	橙	No98	
109	土師器	壺	—	19.9	—	ABCEH	30	普通	橙	No556	
110	土師器	壺	—	17.7	6.9	ACEHIK	30	良好	橙	No17・307・401・420・500・608 SJ47	
111	土師器	壺	—	7.6	(8.2)	ACEHIJK	40	普通	にぶい黄橙	底部木葉痕 下層 No23・426	
112	土師器	壺	—	4.2	5.5	ACEH	70	良好	橙		
113	土師器	壺	—	4.0	6.2	ACEIK	70	良好	橙	下層 SJ50 No472	
114	土師器	壺	—	4.7	6.2	ACEHIK	50	良好	赤褐	外面煤付着 No175	
115	土師器	壺	—	4.6	9.0	A E I K L	90	普通	にぶい黄橙	No144	
116	土師器	壺	20.4	6.6	—	AEH I K	5	普通	にぶい橙	樽式系 No533	
117	土師器	壺	(15.0)	7.2	—	AEH I K	25	良好	にぶい橙	樽式系 覆土 下層	
118	土師器	壺	(18.6)	21.4	—	CEGHI	40	不良	にぶい褐	口縁部輪積痕を残す 樽式系 No372・376 SJ47	
119	土師器	壺	(17.4)	16.8	—	BCEHI	30	良好	にぶい黄橙	No309・326・377	
120	土師器	坏	(10.6)	4.8	—	ACEHI	50	良好	明赤褐	外面黒斑	
121	土師器	坏	(11.7)	4.8	—	ACEHI	45	良好	橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
122	土師器	坏	(13.0)	5.3	—	ACEHI	25	良好	橙		
123	土師器	甕	(17.5)	7.7	—	ABCEHIL	30	普通	橙		
124	土師器	ミニチュア	—	4.5	3.7	ACEHI	95	良好	赤褐	No614	55-7
125	土師器	ミニチュア	(8.2)	5.2	2.8	AHEHIK	50	良好	にぶい橙		55-8
126	土師器	壺	—	2.1	—	ACEHIK	5	普通	橙		
127	土師器	壺	—	3.1	—	ACEHIK	5	普通	にぶい橙	No92 樽式系	
128	土師器	壺	—	1.3	—	AHEHIK	5	普通	にぶい黄橙	No433	
129	土師器	台付甕	(11.0)	3.4	—	ACEHIK	20	普通	にぶい橙	S字甕 No461	
130	土師器	台付甕	(14.0)	2.7	—	ACEHIK	10	普通	灰黄	S字甕	
131	土師器	台付甕	(13.5)	3.6	—	CHI	20	良好	橙		
132	土師器	台付甕	(14.6)	2.3	—	ACEHI	30	良好	灰白	S字甕 No199	
133	土師器	台付甕	(13.2)	2.6	—	ACEHI	20	普通	にぶい黄橙	S字甕 No190	
134	土師器	台付甕	(17.4)	3.2	—	ACEHIK	20	良好	橙	No365	
135	土師器	台付甕	(15.8)	3.4	—	AHEHIK	20	良好	にぶい橙	No506	
136	土師器	台付甕	(13.0)	3.1	—	ACEHI	10	普通	橙	S字甕	
137	土師器	台付甕	(16.8)	3.3	—	ACEHI	30	良好	明黄褐	S字甕 No14	
138	土師器	台付甕	(16.4)	3.4	—	ACEHI	15	良好	灰白	S字甕 No605 SJ47	
139	土師器	台付甕	(15.2)	4.0	—	ACDEH	15	良好	明赤褐	S字甕 下層	
140	土師器	台付甕	(16.2)	3.9	—	ACEHK	25	普通	にぶい黄橙	S字甕	
141	土師器	台付甕	(15.0)	4.3	—	ADEHIK	30	普通	橙	内外面煤付着 下層 No265	
142	土師器	台付甕	(14.6)	—	—	ACEHIK	40	良好	にぶい赤褐	下層 覆土 No267	
143	土師器	台付甕	(14.6)	3.6	—	CDEH	15	普通	にぶい橙	S字甕	
144	土師器	台付甕	(16.0)	4.3	—	ACEHIK	10	普通	にぶい黄橙	S字甕 No488	
145	土師器	台付甕	(14.2)	4.3	—	ACEHIK	25	良好	にぶい黄橙	S字甕	
146	土師器	台付甕	(16.6)	4.2	—	AHEHIK	25	普通	にぶい黄橙	S字甕 No227	
147	土師器	台付甕	(11.8)	5.5	—	CEHIK	40	普通	淡黄灰	S字甕 SJ47	
148	土師器	台付甕	(12.6)	4.6	—	ACEHIK	30	普通	にぶい橙	S字甕 口縁部赤変・煤付着 No345	
149	土師器	台付甕	(18.6)	3.9	—	ABEHI	20	普通	橙	No588	
150	土師器	台付甕	(16.4)	7.1	—	AHEHIK	25	良好	にぶい橙	煤付着 No94・195	
151	土師器	台付甕	(11.8)	6.0	—	ACEHI	20	普通	浅黄橙	No586	
152	土師器	台付甕	14.0	8.0	—	ACEHIK	50	良好	にぶい橙	S字甕 No3	56-1
153	土師器	台付甕	(18.0)	9.3	—	AHEHIK	10	良好	橙	No28	
154	土師器	台付甕	(15.0)	8.1	—	ABEHIK	20	良好	にぶい橙		
155	土師器	台付甕	(13.8)	9.9	—	ACEHI	40	良好	にぶい橙	白色微粒子多い	
156	土師器	台付甕	16.6	5.4	—	AHEHIK	60	良好	灰白	S字甕 No85・577	
157	土師器	台付甕	—	5.1	—	ACEHIK	20	良好	灰黄褐	No577	
158	土師器	台付甕	(15.7)	8.6	—	ABCEHIK	30	良好	橙	下層	
159	土師器	台付甕	(17.0)	7.2	—	ABCEHIK	20	普通	にぶい橙	S字甕 外面煤付着 No499	
160	土師器	甕	(12.6)	3.7	—	ACEHIK	30	普通	橙		
161	土師器	甕	(15.8)	4.0	—	ACEHI	25	普通	橙	内外面煤付着 No598	
162	土師器	甕	15.4	5.0	—	AHEHIK	90	普通	橙	No578	
163	土師器	甕	(12.7)	4.6	—	ACDEHI	20	普通	明赤褐	No27	
164	土師器	甕	—	5.4	—	BCEHI	20	良好	橙	下層	
165	土師器	甕	(17.7)	5.8	—	ACEGHIK	30	良好	橙	5の字甕模倣 No557	
166	土師器	小型甕	(12.8)	9.7	—	ACEHIK	25	良好	にぶい褐		
167	土師器	甕	13.8	10.1	—	AHEHIK	50	良好	にぶい赤褐		
168	土師器	甕	(13.8)	6.6	—	ACEHIK	40	普通	橙	No95・391	
169	土師器	甕	(16.8)	5.7	—	AHEHIK	20	良好	橙	No484	
170	土師器	小型甕	(11.4)	12.5	—	ACEHI	80	良好	赤褐	内面煤付着 下層 No35	56-2
171	土師器	甕	(14.2)	10.8	—	ACHIK	25	良好	明赤褐	外面煤・粘土玉付着 No96・100	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
172	土師器	甕	(17.6)	6.5	—	ABCEHI	15	良好	橙		
173	土師器	小型甕	12.8	14.5	—	ACEHIK	80	良好	にぶい黄橙	覆土 下層 No194	56-3
174	土師器	甕	12.8	12.8	—	AEIK	50	良好	にぶい赤褐	覆土 下層 No212・214・219	56-4
175	土師器	甕	(16.6)	7.0	—	ACEHIJK	15	普通	橙	No423	
176	土師器	甕	(18.2)	6.5	—	ACEHIK	20	良好	橙	No418	
177	土師器	小型甕	10.1	12.9	4.3	CEHI	90	良好	にぶい赤褐	下層 No101	56-5
178	土師器	甕	(16.4)	4.1	—	ACEHIK	15	普通	にぶい赤褐	叩き甕 No451	
179	土師器	甕	—	2.9	(4.6)	ACHI	25	普通	褐	叩き甕	
180	土師器	甕	—	2.8	5.0	ABEK	80	普通	浅黄橙		
181	土師器	甕	—	2.6	4.1	CEHI	60	普通	橙	No45	
182	土師器	甕	—	2.5	3.5	ACEHI	80	普通	赤褐	No484	
183	土師器	甕	—	2.6	4.4	ABCEHIK	80	普通	橙	No529	
184	土師器	甕	(16.9)	12.7	—	ACEHI	30	良好	橙	SJ47	56-6
185	土師器	甕	13.6	16.5	4.0	ACEHIK	70	良好	にぶい赤褐	内外面煤付着 覆土下層 No330	57-1
186	土師器	甕	15.1	16.9	—	ACEHIK	70	良好	にぶい赤褐	下層 No334・466・573・590	57-2
187	土師器	甕	(16.4)	14.6	5.0	ACEHIK	70	良好	にぶい赤褐	底部 木葉痕 No93・95・391・603	57-3
188	土師器	甕	16.8	20.9	—	ABCEHIK	50	良好	橙	No108	
189	土師器	甕	(22.3)	29.3	5.9	ACEHIK	50	良好	橙	下層 No323・368・371・389・468	57-4
190	土師器	甕	(15.4)	26.0	5.5	AEGHIK	35	良好	にぶい赤褐	覆土 下層 No25・169・189・517・520・536	57-5
191	土師器	小型台付甕	(10.0)	8.2	—	ACEHIK	60	良好	橙	S字甕 No515	57-6
192	土師器	台付甕	(11.0)	9.6	—	AHEIK	20	良好	にぶい橙	S字甕 No312・314	
193	土師器	台付甕	(12.6)	7.6	—	ABCEHIK	30	普通	橙	No156	
194	土師器	台付甕	(11.5)	10.8	—	CEHIK	30	良好	橙	No139	
195	土師器	台付甕	11.3	13.1	—	ACEGHIL	90	良好	にぶい黄褐	S字甕 外面煤付着 一部赤変 No112	58-1
196	土師器	台付甕	(11.6)	17.9	—	ACEHIK	50	普通	黄橙	S字甕 下層 覆土 No70・586	58-2
197	土師器	台付甕	13.4	14.1	—	CEHIK	40	普通	橙	S字甕 No517	
198	土師器	台付甕	17.1	22.6	—	ACGHI	70	良好	灰黄褐	S字甕 覆土 下層 No560・563・568	58-3
199	土師器	台付甕	18.3	23.5	—	AHIJK	70	良好	灰白	S字甕 下層 No119	58-4
200	土師器	台付甕	15.6	32.2	10.2	ACGHI	70	普通	浅黄橙	S字甕 No 5	58-5
201	土師器	台付甕	20.8	28.1	—	ACEHI	70	良好	にぶい橙	No 2	58-6
202	土師器	台付甕	15.0	15.7	8.5	ACEHIJK	90	良好	橙	下層 No329	59-1
203	土師器	台付甕	16.2	15.9	—	AHEIK	60	普通	灰褐	煤付着 No350・394・395・407・415・501・503・611	59-2
204	土師器	台付甕	15.3	20.0	—	ABCDHIK	70	良好	橙	覆土 下層 No248・273	59-3
205	土師器	台付甕	17.4	25.9	9.7	ACEHIK	80	普通	橙	外面煤付着 下層 No 8・76・333・338・442・524・533・579	59-4
206	土師器	台付甕	—	22.3	(8.6)	ACEHIK	60	普通	褐灰	S字甕 覆土 下層 No201	
207	土師器	台付甕	17.6	22.6	—	ACEHIK	80	普通	橙	No128・557	59-5
208	土師器	台付甕	17.5	20.1	—	ACEHIJK	70	普通	にぶい橙	下層 No268・479・484・517・518	59-6
209	土師器	台付甕	—	6.8	—	AEGHIK	60	良好	にぶい橙	No549	
210	土師器	台付甕	—	6.4	8.7	ABEIK	80	良好	にぶい赤褐	S字甕 模倣品 No405~407	
211	土師器	台付甕	—	6.3	9.4	CEHIK	95	良好	橙		
212	土師器	台付甕	—	6.7	8.8	ABEHIK	90	良好	橙	No593	
213	土師器	台付甕	—	6.2	7.2	CEHI	90	良好	橙	S字甕 No460	
214	土師器	台付甕	—	6.5	(8.6)	AHEIK	70	良好	にぶい赤褐	S字甕 脚台部天井離れ砂あり	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
215	土師器	台付甕	—	7.2	8.4	A E H I K	85	良好	にぶい橙	No104	
216	土師器	台付甕	—	6.7	9.1	A C E H I K	95	良好	橙	S字甕 No32	
217	土師器	台付甕	—	7.0	(9.0)	A E H I K	60	普通	にぶい黄橙	S字甕	
218	土師器	台付甕	—	6.0	(8.9)	A C E H I K	70	良好	にぶい赤褐	No128	
219	土師器	台付甕	—	7.0	8.6	A C E H I K	95	普通	浅黄橙	No607	
220	土師器	台付甕	—	8.5	9.2	A B E H I K	85	普通	にぶい橙	内外面煤付着 No521	
221	土師器	台付甕	—	7.3	9.8	A C E H I K	95	良好	にぶい橙	No103	
222	土師器	台付甕	—	4.6	8.1	A C E H I K	95	普通	明赤褐	外面煤付着 No187	
223	土師器	台付甕	—	5.5	9.2	A B E H I K	80	普通	橙	No242	
224	土師器	台付甕	—	6.2	8.4	A E H I K	90	良好	にぶい赤褐	煤付着 赤変あり No125	

第52号住居跡 (第124図)

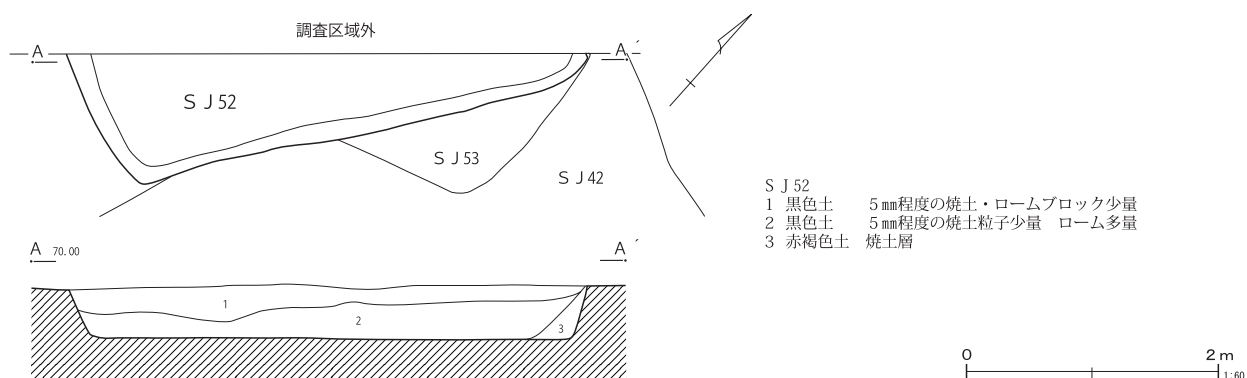
第52号住居跡は調査区南側のL-5グリッドに位置する。住居跡の北西側の大半が調査区域外に延びており、南壁から西壁にかけて検出した。第42号住居跡によって南壁部分が壊され、床面下からは第53号住居跡が検出された。

平面形は方形系と推定される。残存規模は、長軸長3.77m、短軸長1.05m、深さ0.38mである。主軸方位はN-55°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は大きく3層に分層され、黒色土を主体とする。壁際の第3層に焼土層の三角堆積が見られた。ピット、壁溝等は検出されなかった。

出土遺物は、重複する第53号住居跡と一括して取り上げられた土師器台付甕・甑の破片が少量ある(第126図)。

住居跡の時期は出土遺物や重複関係から五領期後半の古相に位置づけられる。



第124図 第52号住居跡

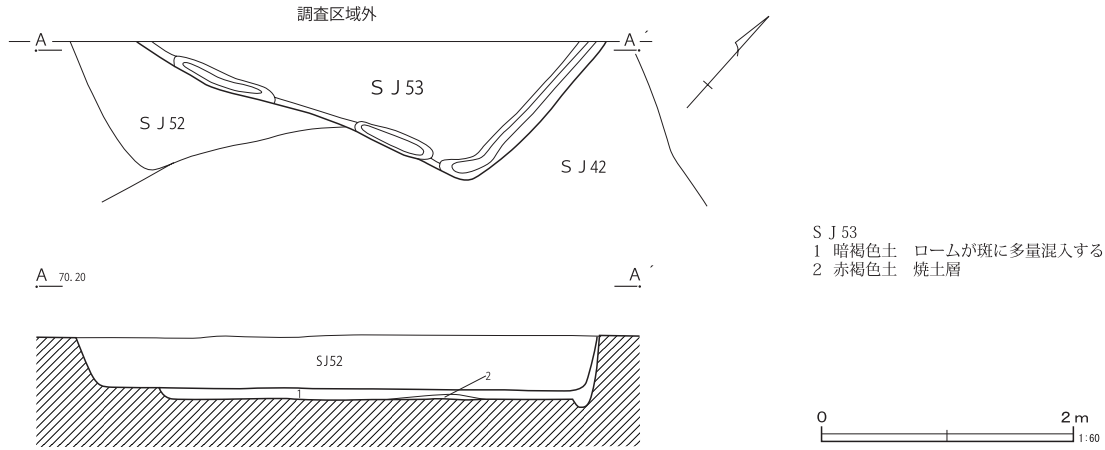
第53号住居跡 (第125図)

第53号住居跡は調査区南側のL-5グリッドに位置する。第42・52号住居跡と重複し、3軒のうち最も古い。第52号住居跡の床下に大部分が重なるように検出され、住居跡の北西側の大半が調査区域外に延びていた。

平面方形系と推定される。南東隅部から南壁にかけてを検出した。残存規模は長軸長2.80m、短軸長1.17m、深さ0.48mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は平坦である。埋土はロームブロックを斑に含み、貼床に近い。調査区際の床面上に焼土の堆積が見られ、炉跡の可能性が考えられる。壁溝は部分的に巡っており、幅12~20cm、深さ14cmほどである。ピット等は検出されなかった。

出土遺物は埋土一括の土師器台付甕・甑の破片がある(第126図)。住居跡の時期は出土遺物や重複関係から五領期後半の古相と考えられる。



第125図 第53号住居跡



第126図 第52・53号住居跡出土遺物

第42表 第52・53号住居跡出土遺物観察表 (第126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(16.4)	5.2	—	B C E H I	15	普通	赤褐	S字甕	
2	土師器	甕	—	2.0	(4.4)	B C E H I	35	普通	褐	単孔式	

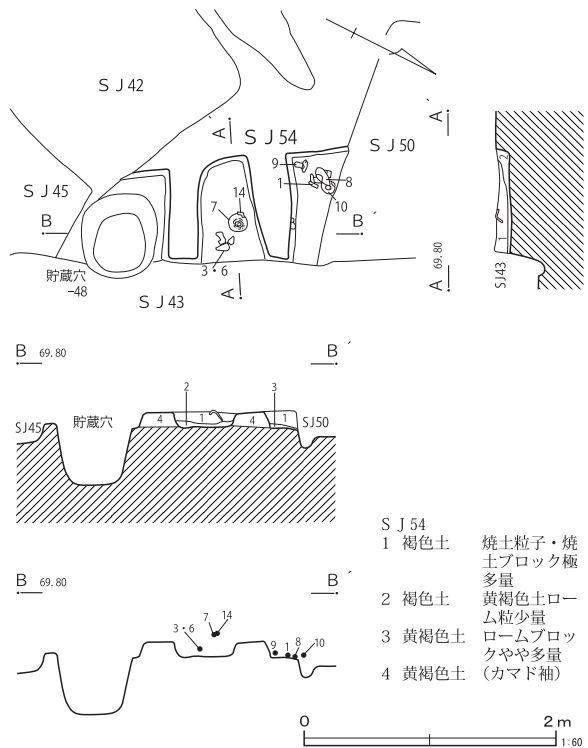
第54号住居跡 (第127図)

第54号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6グリッドに位置する。第42・43・45・50号住居跡と重複し、すべてに切られていた。

カマド周辺部のみが残存である。残存規模は長軸長1.95m、短軸長0.84m、深さ0.08mである。主軸方位はN-120°-Wを指す。

カマドは南西壁に設けられ、カマド袖部の先端が第43号住居跡によって削平されていた。燃焼部を壁内に収め、煙道部が長く伸びないタイプと推定される。残存部長さ0.85m、カマド袖幅1.05m、深さ0.10m、燃焼部底面幅0.50mである。燃焼部底面の中央部やや右寄りに7の高坏を逆位に据えて支脚に転用していた。袖部は黄褐色土によって構築されており、袖部内壁面は被熱により赤変していた。

貯蔵穴はカマド左脇に検出された。平面略円形



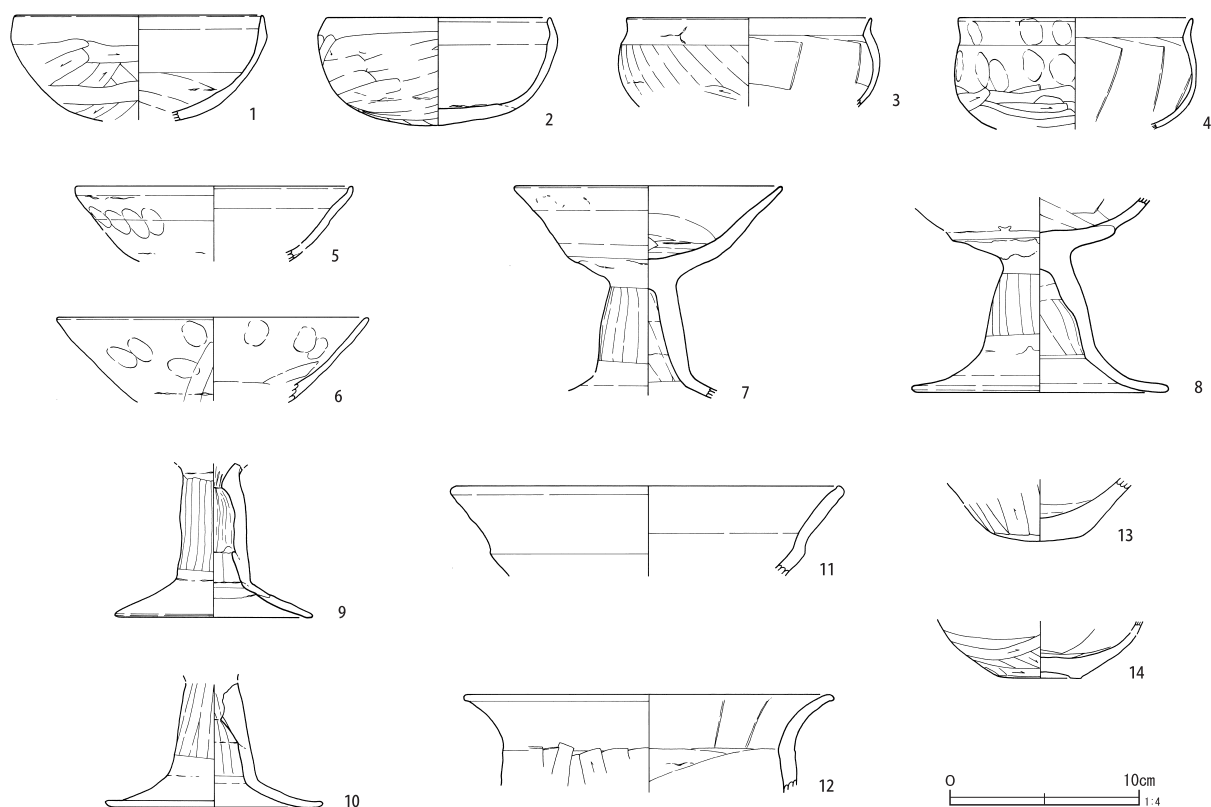
第127図 第54号住居跡

を呈する。規模は長径0.66m、短径0.60m、深さ0.48mである。

出土遺物は、カマド内部とその右脇に土師器
 坏・埴・高坏・鉢・甕・小型壺等がまとまっていた（第128図）。カマド内部からは支脚に転用された7の高坏と3の埴、6の高坏の坏部、14の小型

壺の底部片が出土した。カマド右脇には1の坏と
 8～10の高坏脚部がまとめて置かれていた。

住居跡の時期は、半球形坏や口縁部が短く外反する和泉型の埴、小型壺、和泉型高坏等が共伴していることから、鬼高期初頭の5世紀後葉に位置づけておきたい。



第128図 第54号住居跡出土遺物

第43表 第54号住居跡出土遺物観察表（第128図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.9)	5.5	—	ACHIL	20	普通	明赤褐	外面黒斑 No.6	60-1
2	土師器	坏	11.6	5.7	—	CEHI	95	普通	橙	SK52	
3	土師器	埴	(12.9)	4.6	—	ACHI	20	普通	橙	No.4	
4	土師器	埴	12.4	5.8	—	CHI	40	良好	橙	外面黒斑	
5	土師器	高坏	14.5	4.0	—	CEHI	50	良好	橙	カマド	
6	土師器	高坏	(16.4)	4.4	—	CEHI	25	普通	橙	No.4 カマド	
7	土師器	高坏	14.0	11.1	—	ACEHI	90	普通	明赤褐	No.1	
8	土師器	高坏	—	10.2	13.5	CEHI	90	普通	橙	No.2	
9	土師器	高坏	—	8.1	10.6	ACEHI	75	普通	明赤褐	No.3	
10	土師器	高坏	—	6.5	11.5	ACHI	80	良好	明赤褐	No.5	
11	土師器	鉢	(20.4)	4.7	—	BCEHI	10	普通	明赤褐		
12	土師器	甕	(19.4)	5.3	—	ACEHIL	20	普通	橙	①	
13	土師器	甕	—	3.2	5.0	ACEHI	80	普通	にぶい橙		
14	土師器	小型壺	—	2.9	4.4	CEHI	70	普通	橙	No.7	

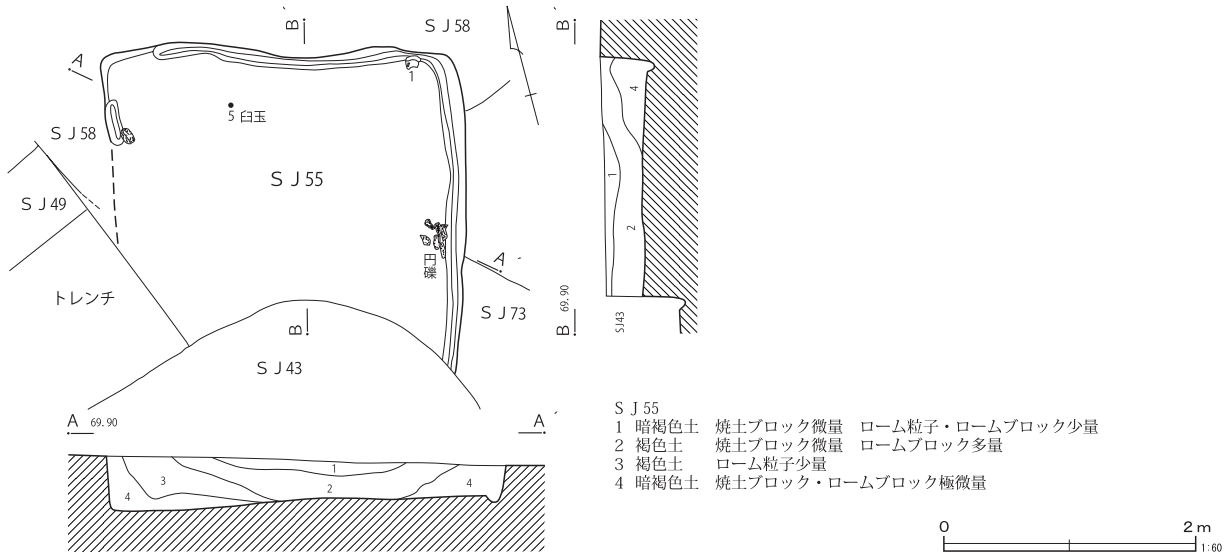
第55号住居跡 (第129図)

第55号住居跡は調査区中央部南寄りのL-6グリッドに位置する。第43・49・58・73号住居跡と重複し、第58・73号住居跡を切り、第43・49号住居跡に切られる。住居跡の南側は重複のため削

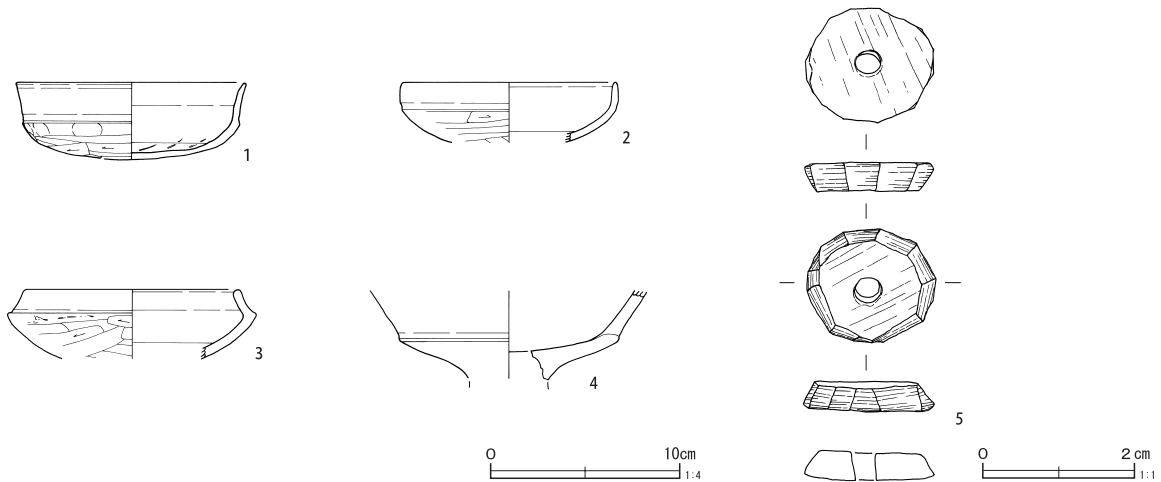
平され、北半部のみを残す。

平面形は北壁が若干歪んだ方形と推定される。残存規模は、長軸長2.81m、短軸長2.20m、深さ0.42mである。主軸方位はN-15°-Eを指す。

床面には凹凸が認められる。埋土は4層に分層



第129図 第55号住居跡



第130図 第55号住居跡出土遺物

第44表 第55号住居跡出土遺物観察表 (第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.1)	4.0	—	CEHI	30	普通	橙	No. 9	
2	土師器	坏	(11.2)	3.1	—	CEHI	20	普通	橙		
3	土師器	坏	(11.7)	3.6	—	CEHI	30	普通	灰褐		
4	土師器	高坏	—	4.6	—	ACEHI	20	普通	橙	No. 1	88-2
5	石製品	白玉	長さ1.5cm 幅1.7cm 厚さ0.4cm 重さ1.69g				滑石				

され、暗褐色土、褐色土を主体とする。

壁溝は東壁から北壁にかけてL字形に巡り、西壁は断続的に巡らしていた。規模は幅9～18cm、深さ6cmである。カマド、貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

出土遺物は、土師器坏・高坏、白玉がある（第130図）。1の模倣坏は北東隅部の床直から出土した。3は坏身模倣坏である。4の高坏は流れ込みと考えられる。5は滑石製白玉で、側面の調整が粗く多角形に近い。この他に東壁中央部の床面に拳大の円礫がまとまって出土した。

住居跡の時期は、体部の浅い坏蓋模倣坏と坏身模倣坏が伴出することから6世紀中葉に位置づけられる。

第56号住居跡（第131図）

第56号住居跡は調査区中央部のJ-8・9グリッドに位置する。第57号住居跡が埋没した後に構築された小型の住居跡である。

平面形はやや歪んだ方形で、規模は長軸長2.45m、短軸長2.39m、深さ0.17mである。主軸方位

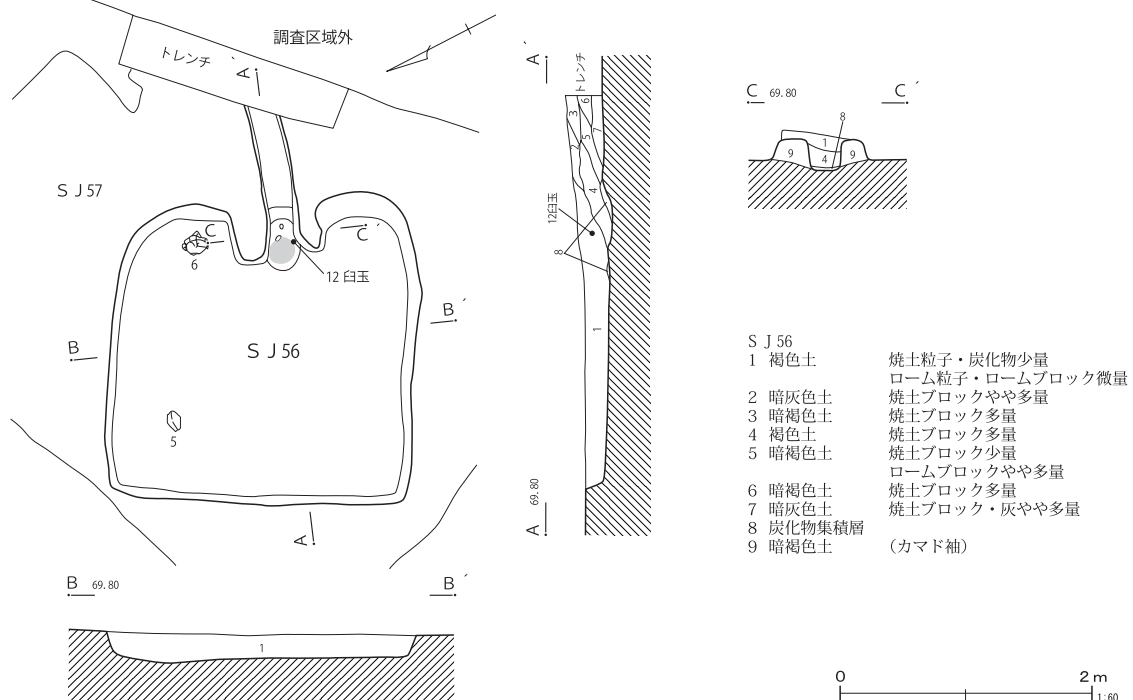
はN-121°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は褐色土の単一層で、自然堆積を示す。

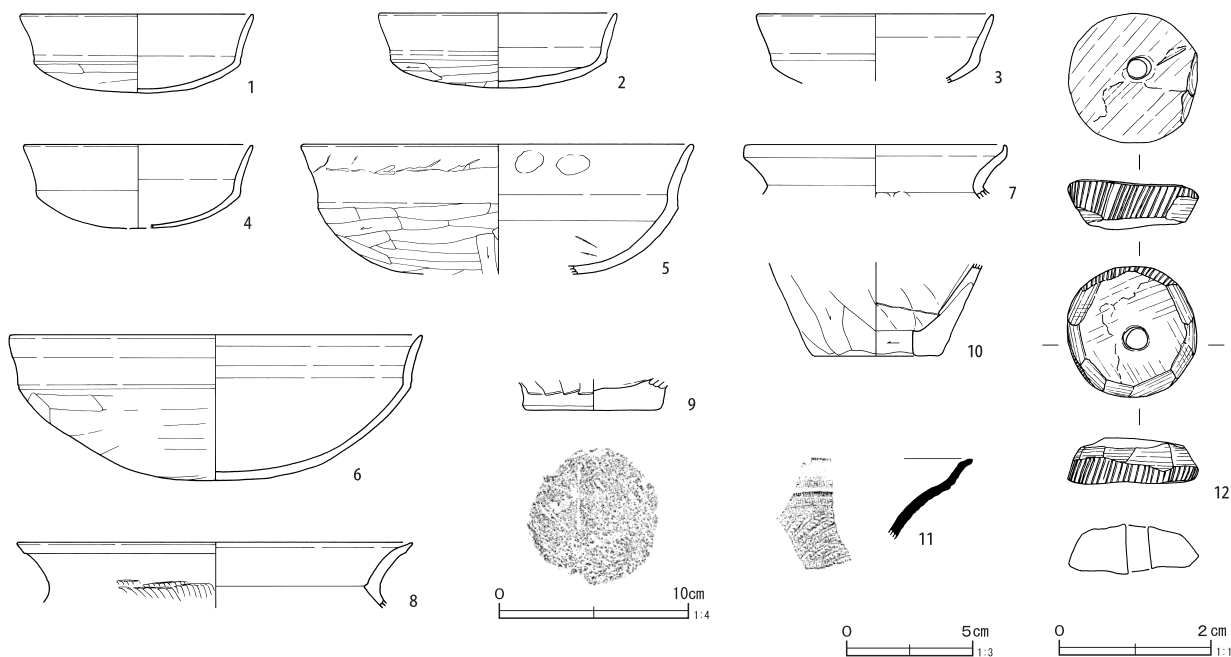
カマドは南東壁のほぼ中央に設けられていた。煙道部先端はトレンチによって削平されてしまったが、トレンチ内で収束することを確認している。平面形は燃烧部から煙道部にかけてほぼ同じ幅で延びている。断面形は浅く掘り窪めた燃烧部から緩やかに立ち上がって煙道部に移行し、煙道部は水平に延びる。全長1.35m、カマド袖幅0.75m、深さ0.25m、燃烧部長0.52m、燃烧部底面幅0.22m、煙道部長残0.83mである。カマド埋土は第8層が使用面である。火床面は被熱により赤色に良く焼けて硬化していた。カマド袖部は暗褐色土によって構築されていた。

貯蔵穴、ピット、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・壺・壺・甕・甔、須恵器甕、白玉等がある（第132図）。カマド袖部左脇から6の壺、北西隅部付近で5の壺が出土した。坏



第131図 第56号住居跡



第132図 第56号住居跡出土遺物

第45表 第56号住居跡出土遺物観察表 (第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.2	4.1	—	AH I K	100	不良	橙	カマド	60-3
2	土師器	坏	(12.6)	3.9	—	AH I	50	普通	橙		60-4
3	土師器	坏	(12.5)	3.6	—	AH I	20	不良	橙		
4	土師器	坏	(12.2)	4.3	—	H I	20	不良	橙		
5	土師器	壺	(20.6)	6.8	—	CE H I	25	普通	橙	No. 3	
6	土師器	壺	21.8	7.6	—	CH I	70	不良	橙	No. 2	60-5
7	土師器	壺	(13.8)	2.8	—	ACE H I	15	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	甕	(21.0)	3.4	—	ABCE H I	5	普通	灰黄褐		
9	土師器	甕	—	1.6	7.0	CE H I	80	普通	明赤褐	底部木葉痕	
10	土師器	甗	—	4.9	(6.6)	CE H I J	15	良好	明褐		
11	須恵器	甗	—	3.1	—	I K	5	良好	灰	内外面自然釉付着	
12	石製品	白玉	長さ1.7cm 幅1.7cm 厚さ0.6cm 重さ2.75g				滑石			No. 1	88-3

は口径12cm台の口縁部の外反する坏蓋模倣坏で、器壁が薄い。5・6の壺は坏と同一の器形であるが、口径20cmを超える。7の壺、8の甕は五領期の所産で、混入である。10は単孔の鉢形甗と考えられる。11は須恵器甗である。口頸部外面に櫛歯刺突文を施す。内外面に自然釉が付着している。群馬産であろう。12は滑石製白玉で、カマド付近の埋土中から出土した。上面に面取りを施す。

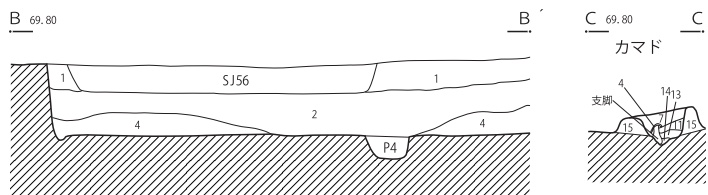
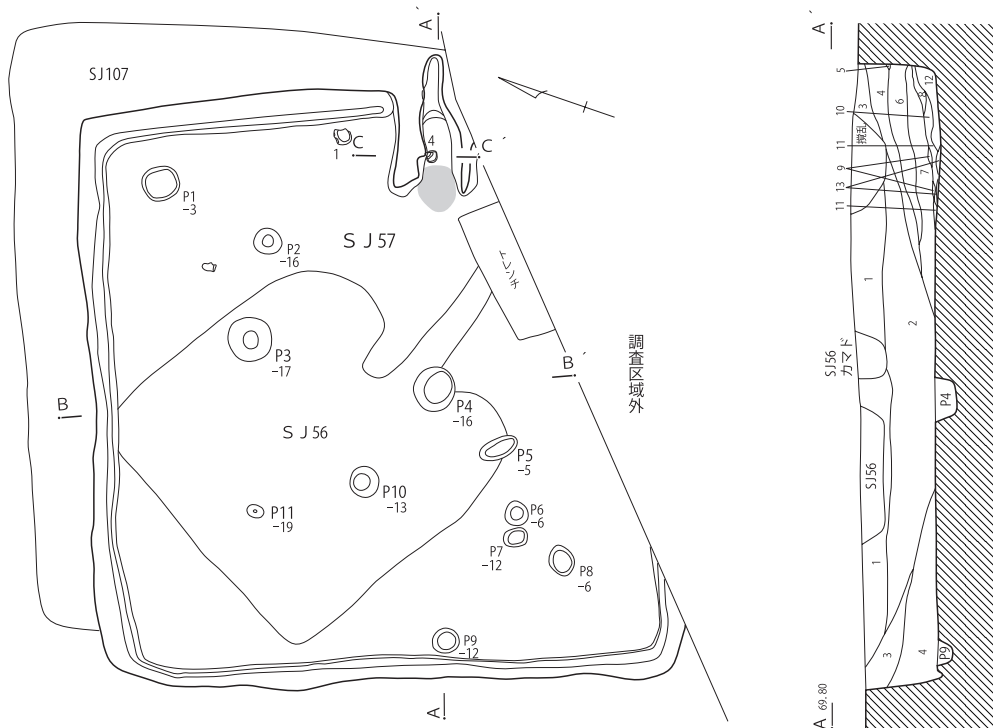
住居跡の時期は、無彩で口径12cm台の坏蓋模倣坏が主存在であることから、6世紀末葉から7世

紀初頭に位置づけられる。

第57号住居跡 (第133図)

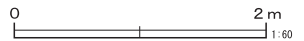
第57号住居跡は調査区中央部のJ-8・9グリッドに位置する。第56・107号住居跡と重複し、第107号住居跡を切り、本住居跡廃絶後の埋土中に第56号住居跡が構築されていた。住居跡の南壁から南東隅部は調査区域外に延びる。

平面形は比較的形の整った方形と推定される。残存規模は、長軸長4.67m、短軸長4.60m、深さ0.55mである。主軸方位はN-71°-Eを指す。

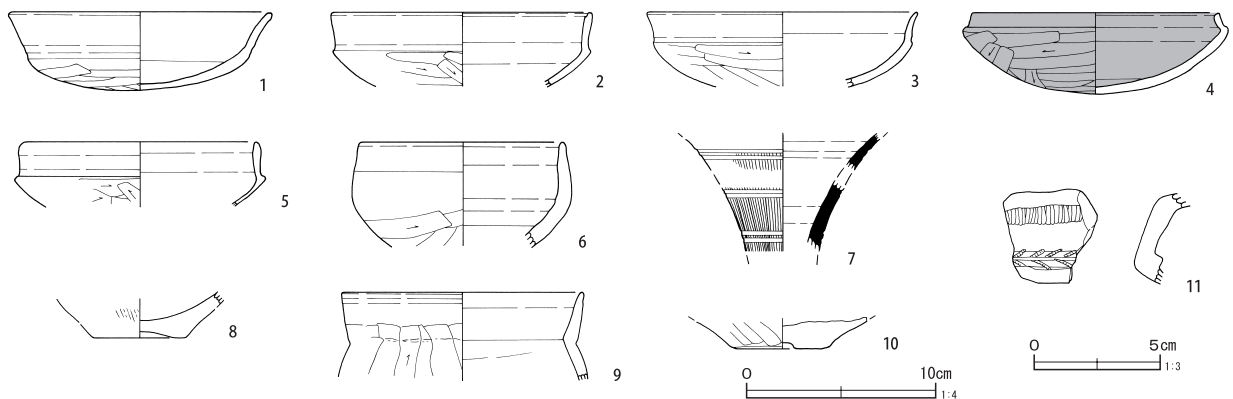


- カマド
- 8 褐色土 ロームブロック多量
 - 9 赤色土 焼土ブロック集積層
 - 10 暗褐色土 ローム粒子含む
 - 11 灰色土 砂質土 焼土ブロック少量
 - 12 灰集積層
 - 13 赤色土 (火床面)
 - 14 灰集積層
 - 15 黄褐色土 (カマド袖)

- SJ57
- | | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|------------------|-----------|
| 1 褐色土 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化物多量 焼土粒子・ロームブロック少量 | 4 褐色土 | 焼土ブロック微量 ローム粒子少量 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色土 | ブロック主体 褐色土ブロック・ロームブロック少量 | 5 灰褐色土 | 焼土ブロック多量 | |
| 3 褐色土 | ロームブロック少量 | 6 黄褐色土 | ローム粒子主体 焼土ブロック少量 | |
| | | 7 褐色土 | ロームブロック多量 | |



第133図 第57号住居跡



第134図 第57号住居跡出土遺物

第46表 第57号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	13.7	4.0	—	ACHI	90	普通	橙	No.1	60-6
2	土師器	坏	(13.6)	3.9	—	ACEHK	10	普通	明赤褐	貯蔵穴	
3	土師器	坏	(14.3)	3.9	—	ACHI	20	普通	明黄褐		
4	土師器	坏	(12.9)	4.3	—	ABCEHIJ	25	普通	にぶい橙	内外面黒色処理 No.2	
5	土師器	坏	(12.4)	3.4	—	ACHI	10	普通	明褐		
6	土師器	壘	(10.7)	5.5	—	CEHI	20	普通	赤褐	外面黒斑	
7	須恵器	甗	—	6.1	—	IK	10	良好	灰		
8	土師器	壺	—	2.4	4.9	BEHI	75	普通	橙	外面黒斑	
9	土師器	小型甕	(12.8)	4.6	—	CEHIJ	10	普通	にぶい橙		
10	土師器	甕	—	1.6	5.3	CEHI	80	普通	橙		
11	土師器	壺	—	3.6	—	ABCEH	5	普通	橙		

床面は概ね平坦である。埋土は大きく4層に分層され、自然堆積を示す。

カマドは北東壁やや南寄りに設けられていた。平面形は燃焼部から僅かに幅を狭め煙道部に移行する。断面形は、燃焼部を浅く掘り込んで僅かな段差をもって煙道部に至り、煙道部奥壁ではほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部底面中央やや左寄りには棒状礫を用いた支脚が設置され、その上端部に土師器坏(4)を被せてあった。

カマドの規模は、全長1.10m、カマド袖幅0.80m、深さ0.70m、燃焼部長0.67m、燃焼部底面幅0.20m、煙道部長0.43mである。カマド埋土は第12層が使用面、第13層が火床面に相当する。カマド袖部は黄褐色土によって構築され、内壁面は良く焼けていた。また、燃焼部底面の焚口部寄りに火床面が検出された。

ピットは11本検出された。配置的に見るとP2・P6・P11が支柱穴になりそうであるが、規模・深度ともに小規模なため、断定することは難しい。壁溝は幅14~29cm、深さ8cmほどである。

出土遺物は少なく、土師器坏・壘・壺・小型甕・甕、須恵器甗がある(第134図)。1の坏蓋模倣坏はカマド左脇の壁際から出土した。4の黒色処理を施した坏身模倣坏は、カマドに設置された棒状礫使用の支脚に被せてあった。7は須恵器甗の口頸部片で、刷毛目を施した後に区画線を施す。8・11の壺は五領期のもので、混入である。11は頸部

に突帯を巡らし、綾杉状の刺突を施している。

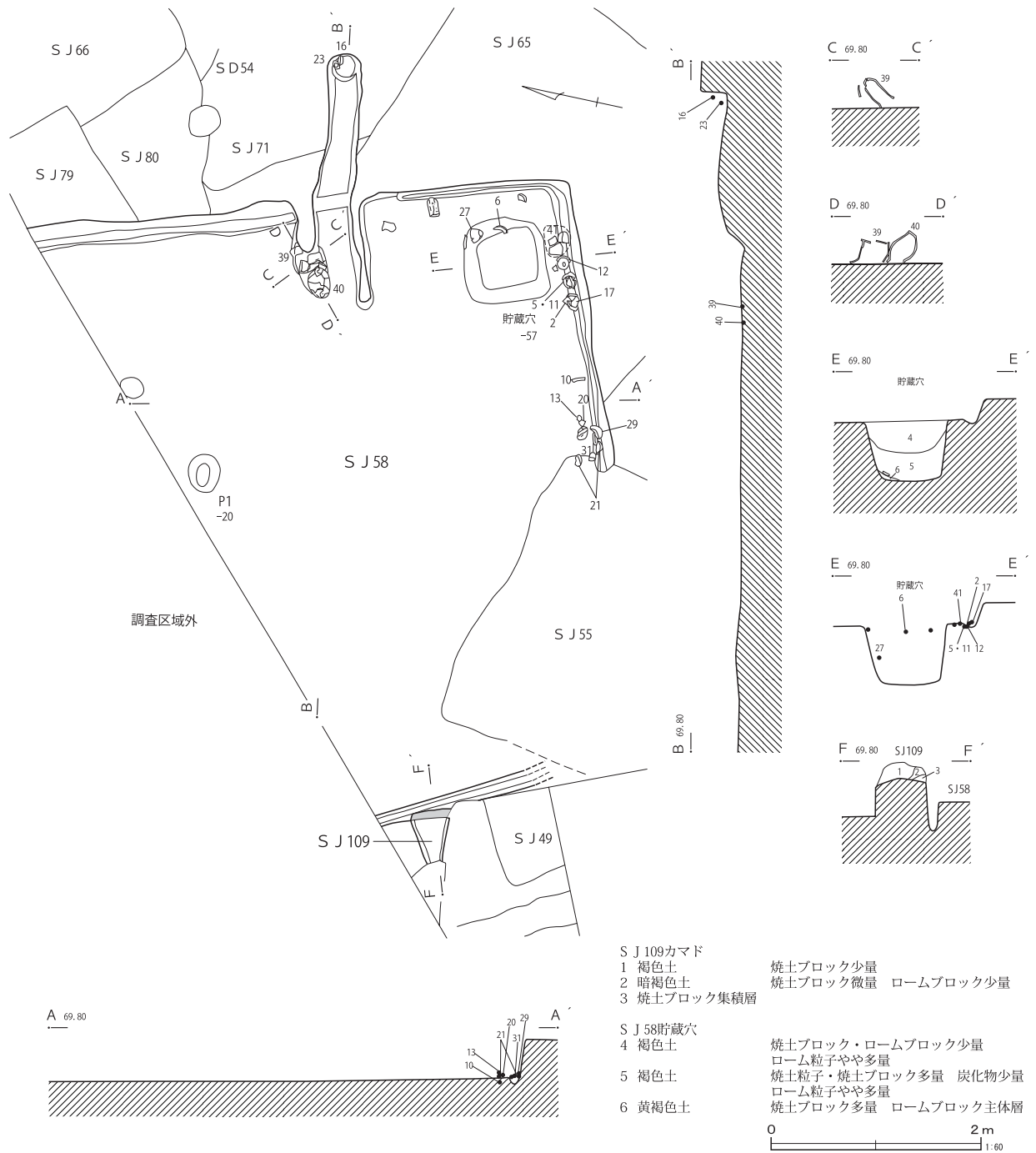
住居跡の時期は、口縁部が大きく外反する坏蓋模倣坏と坏身模倣坏の特徴から6世紀後葉に位置づけられる。

第58号住居跡 (第135図)

第58号住居跡は調査区中央部南寄りのK・L-6・7グリッドに位置する。調査区の中では最も重複の著しい地点で、第49・55・65・71・79・80・109号住居跡、第54号溝跡と重複している。このうち五領期の第71・80号住居跡とカマドだけを残す第109号住居跡を切っている以外は、すべてに切られていた。ただし、住居跡の掘り込みが他の住居跡よりも深かったため残りは良好であった。

平面形は、住居跡の北西側が調査区域外に延びているため不明な点を残すが、方形と推定される。規模は長軸長5.82m、短軸長5.06m、深さ0.37mで、一辺6m前後の大型住居跡に復元される。主軸方位はN-69°-Eを指す。

カマドは東壁中央やや南寄りに設けられていた。燃焼部は壁内に収まり、燃焼部奥壁に段を設けて煙道部に移行する。煙道部は壁外に水平に延び、先端部はピット状に丸く掘り込まれ、垂直に立ち上がる。全長2.40m、カマド袖幅1.20m、深さ0.40m、燃焼部長1.05m、燃焼部底面幅0.30m、煙道部長1.35mである。カマド袖部は灰褐色土によって構築され、左袖部は39・40の長胴甕を逆位の状態で縦に並べ補強材に用いていた。

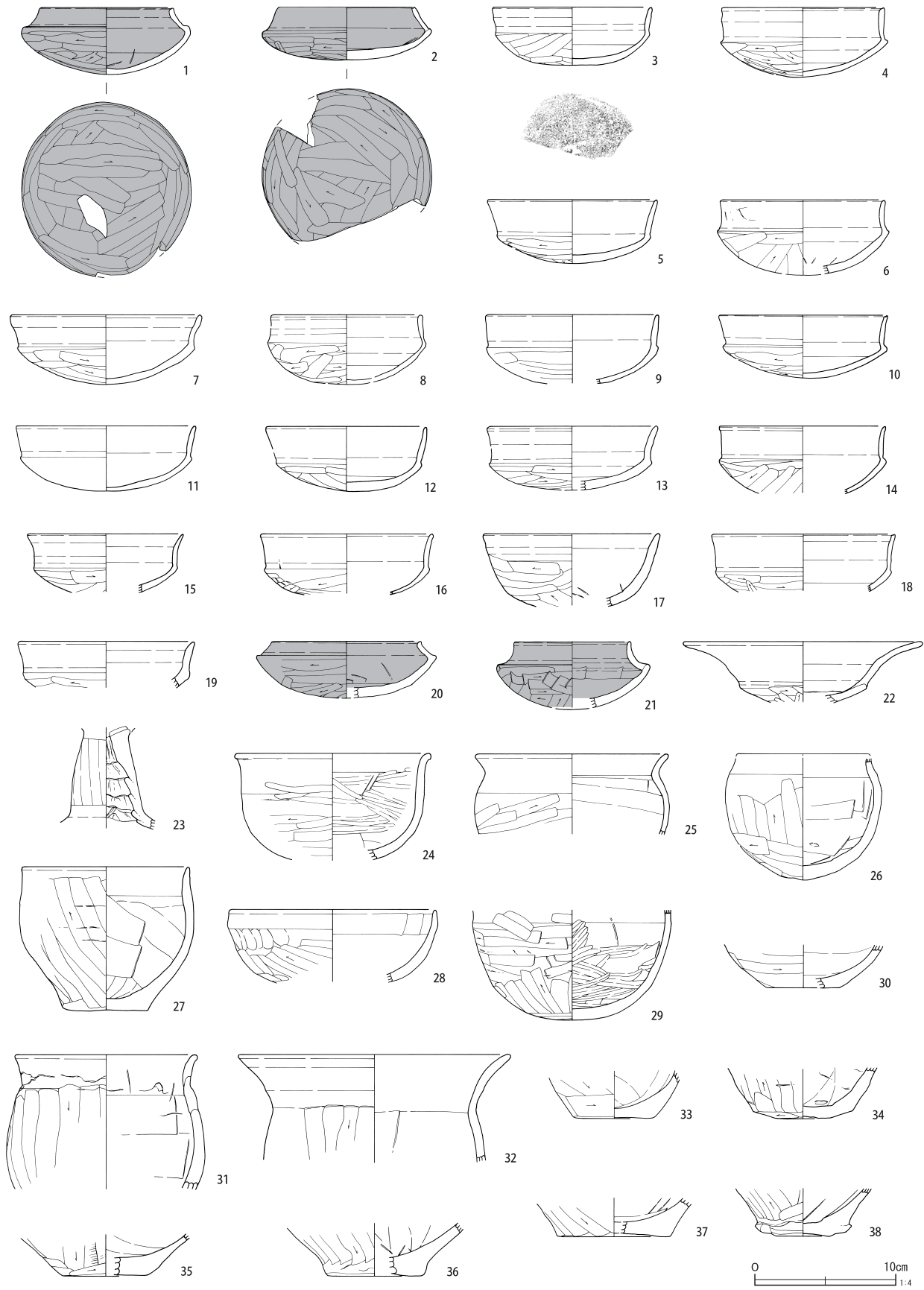


第135図 第58・109号住居跡

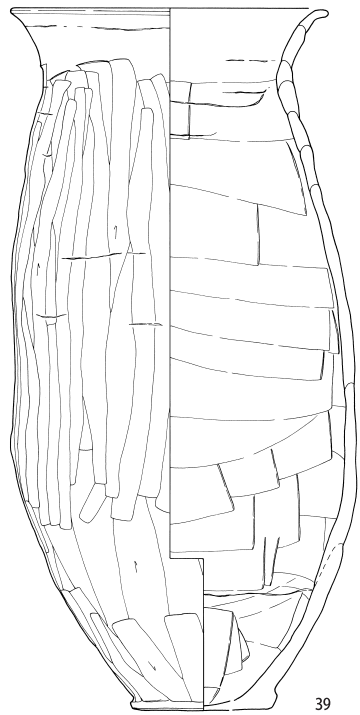
貯蔵穴はカマド右脇の南東隅部に検出された。平面隅丸方形で、長径0.78m、短径0.77m、深さ0.57mである。埋土は3層に分層され、褐色土を主体とする。

ピットは1本検出されているが、住居跡に伴うかどうかは明確でない。壁溝はほぼ全周し、幅7～27cm、深さ8cmほどである。

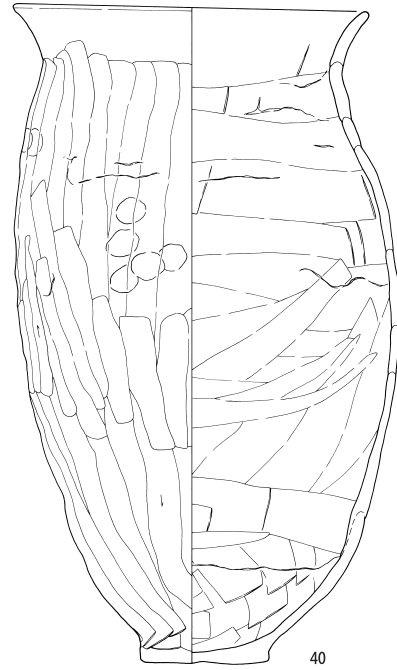
出土遺物は土師器杯・高杯・埴・鉢・壺・小型甕・甕、不明土製品等がある（第136・137図）。カマドからは左袖部の芯材として用いられた39・40の長胴甕のほか、煙道部先端から16の杯、23の高杯が出土した。遺物は南壁際からまとまって出土しており、特に貯蔵穴周辺と中央部に集中していた。杯は口縁部が直立する杯蓋模倣杯と口縁部が



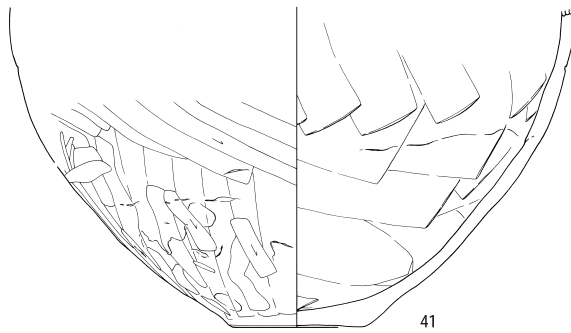
第136図 第58号住居跡出土遺物（1）



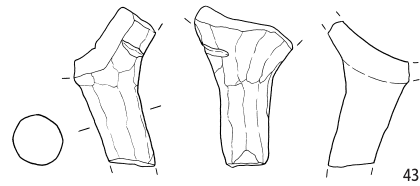
39



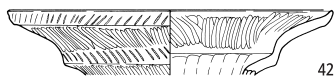
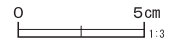
40



41



43



42



第137図 第58号住居跡出土遺物（2）

第47表 第58号住居跡出土遺物観察表（第136・137図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	9.5	4.7	—	CEHIL	95	普通	にぶい褐	内外面黒色処理 カマド	60-7
2	土師器	坏	9.6	3.7	—	BCEHI	70	普通	にぶい赤褐	内外面黒色処理 No.13	60-8
3	土師器	坏	(11.2)	4.0	—	ACEHI	30	普通	橙	底部木葉痕	
4	土師器	坏	(11.4)	4.9	—	CEHIJK	50	良好	橙	外面黒斑 貯蔵穴	60-9
5	土師器	坏	(12.0)	4.4	—	ACHI	50	普通	橙	No.11	61-1
6	土師器	坏	(11.6)	5.2	—	ACEHI	40	普通	橙	No.4	61-2
7	土師器	坏	(13.4)	4.9	—	ACHI	45	普通	橙	外面黒斑	
8	土師器	坏	(10.6)	4.9	—	CEHI	50	良好	にぶい赤褐	外面黒斑	61-3
9	土師器	坏	(12.2)	4.8	—	ACEHI	20	普通	橙		
10	土師器	坏	(12.0)	4.4	—	CEHIL	50	普通	橙	No.14	61-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
11	土師器	坏	(12.6)	4.5	—	ACH I	30	普通	橙	No.11	
12	土師器	坏	(11.3)	4.5	—	CEH I	60	普通	橙	No.7	61-5
13	土師器	坏	(12.0)	4.5	—	CEH I	50	普通	明赤褐	No.15	61-6
14	土師器	坏	(11.7)	4.7	—	AH I	30	普通	橙	外面黒斑 カマド	
15	土師器	坏	(11.0)	4.1	—	AH I	20	普通	橙		
16	土師器	坏	(12.0)	4.2	—	ACH I K	20	良好	橙	カマドNo.4	
17	土師器	坏	(12.5)	5.1	—	ACEH I	30	普通	橙	No.12	
18	土師器	坏	(13.0)	4.0	—	CEGH I	30	普通	橙		
19	土師器	坏	(12.4)	3.2	—	CEH I	30	普通	橙		
20	土師器	坏	(10.6)	3.9	—	CEH I	20	普通	暗赤褐	内外面黒色処理 No.16	
21	土師器	坏	8.2	4.6	—	ACEH I	50	普通	灰褐	内外面黒色処理 No.20・22	61-7
22	土師器	高坏	(16.8)	4.3	—	CEH I	25	良好	橙		
23	土師器	高坏	—	7.1	—	CEH I	80	普通	橙	カマドNo.3	
24	土師器	鉢	(13.6)	7.5	—	AH I	20	普通	橙	貯蔵穴	
25	土師器	鉢	(13.7)	5.7	—	ACH I	30	普通	暗赤褐		
26	土師器	鉢	—	8.6	—	CEH I	60	普通	橙	No.8	
27	土師器	鉢	(11.8)	10.1	6.1	ACEH I	50	普通	明赤褐	貯蔵穴 貯蔵穴No.1	61-8
28	土師器	鉢	(14.6)	5.1	—	AH I	20	良好	明赤褐		
29	土師器	鉢	—	7.7	—	ACH I	40	普通	橙	内外面黒斑 No.18	
30	土師器	壺	—	3.0	(5.0)	ACEH I J	30	普通	橙		
31	土師器	小型甕	(12.8)	9.5	—	CEH I K	30	普通	明褐	No.1	
32	土師器	甕	(19.3)	7.6	—	CEH I	20	普通	橙	内面にぶい褐	
33	土師器	甕	—	3.4	(5.8)	ACEH I	30	普通	にぶい赤褐		
34	土師器	甕	—	3.5	(7.5)	CEH I	25	良好	にぶい赤褐		
35	土師器	甕	—	2.9	(5.9)	CEH I	40	普通	にぶい黄橙	カマド	
36	土師器	甕	—	3.7	(6.6)	CEH I K	30	普通	橙		
37	土師器	甕	—	2.7	(8.0)	CEH I	40	良好	黒褐	貯蔵穴	
38	土師器	甕	—	3.4	(3.7)	CEH I	50	良好	にぶい黄橙	カマド	
39	土師器	甕	16.7	37.1	7.8	CEH I	95	普通	にぶい橙	外面黒斑 カマドNo.2	61-9
40	土師器	甕	18.5	34.5	6.8	CEH I	95	普通	橙	外面黒斑 カマドNo.1	62-1
41	土師器	甕	—	16.7	7.3	ACH I	60	普通	橙	外面黒斑 No.6・9	
42	土師器	壺	(17.0)	3.3	—	ACEH I	20	良好	明赤褐	柳ヶ坪模倣	
43	土製品	不明	—	—	—	CEH I	—	普通	明赤褐	三足土器か	93-6

大きく外反気味に内傾する小型坏身模倣坏が伴出する。22・23は和泉型高坏で、23は内面に粘土紐痕を残す。鉢は多様な器形が認められる。甕は胴部が長く発達しているが、まだ中位に最大径をもつものが主体を占める。41の甕は胴部の大きく張った、胴張甕である。42の二重口縁壺は五領期の所産で混入である。口唇部を摘み出し、口唇部端面と段部に刺突を施す。43の不明土製品は、三足土器の脚部になる可能性もあるが明確でない。

住居跡の時期は、坏蓋模倣坏と小振りの坏身模倣坏が伴出していることから6世紀前葉に位置づけられる。

第59号住居跡（第138図）

第59号住居跡は調査区中央部のI-8・9、J-8グリッドに位置する。埋土中を第7～10号土壌が切り込む。住居跡の北西側大半が調査区域外に延びており、全容は不明である。

平面形は方形系と推定される。残存規模は長軸長6.05m、短軸長2.10m、深さ0.40mで、一辺6m前後の大型住居に復元される。主軸方位はN-38°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。埋土は6層に分層される。最上層に砂利層が確認されており、旧女堀川の浸食に曝されたようである。その他の堆積層に

も焼土ブロックや炭化物の混入が顕著であることから人為的に埋め戻された可能性も高い。

ピットは、南東壁に併行して一列に並ぶP1～P5と南隅部のP6の計6本が検出された。調査の制約もあるが、一列に並んだ5本は規模・深度が近似し、規則的な配置を示すことから住居跡に伴うものであろう。P6も位置的に見て貯蔵穴の可能性が考えられる。

壁溝は部分的に巡り、規模は幅8～15cm、深さ5cmほどである。

出土遺物は多く、土師器坏・皿・高坏・鉢・小型甕・甕・台付甕、須恵器坏身・短頸壺・甕、土錘、砥石、白玉等がある（第139～141図）。

2の坏はP3脇の床直、43の甕はP4の底面から少し浮いた状態で、4の坏は南東壁寄りの床直から出土した。なお、52の白玉は埋土上層からの出土である。

土師器坏は口径14～15cm台の坏蓋模倣坏や坏身模倣坏が若干残存しているが、口径12cm台の小型化した単純口縁の坏蓋模倣坏と有段口縁坏が数量的に主体を占める。また28の口縁部が長く内屈する有段口縁内屈坏や25の口縁部が水平に大き

く開く皿等も確実に伴うものと思われる。

29・30は大型鉢で、該期には定量で存在し、29は底部が平底である。

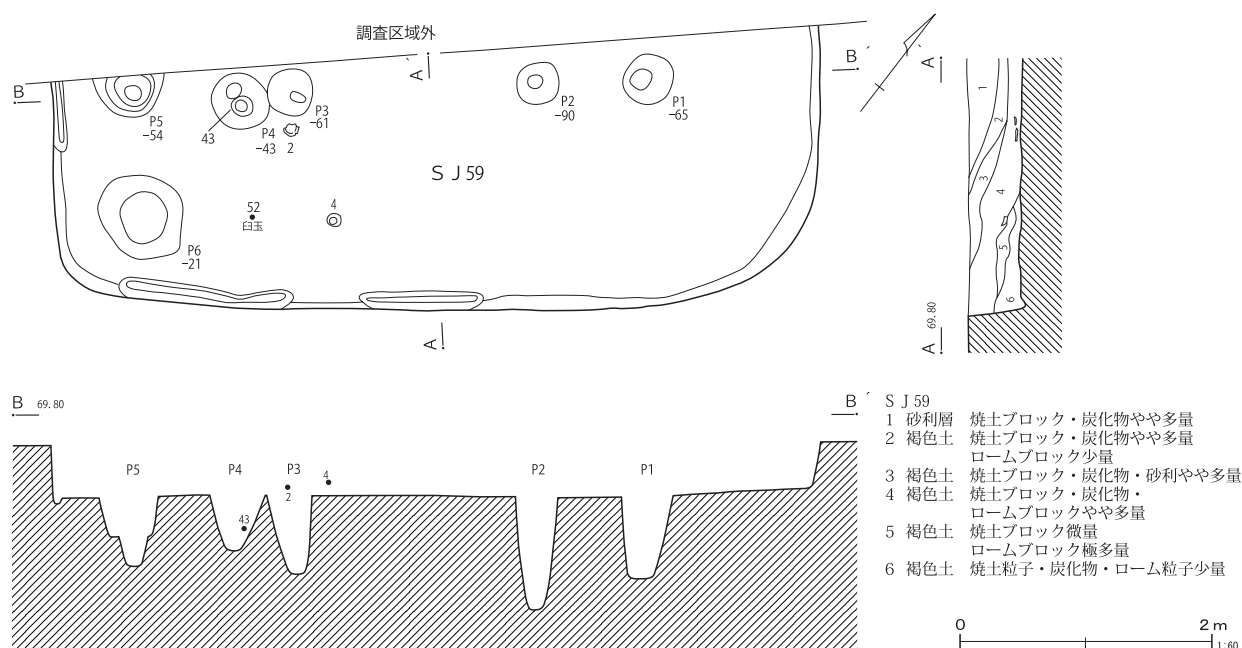
31・33は小型甕で、頸部の収縮は弱く、胴部もあまり長くないものと考えられる。小型甕は、該期以降減少傾向にある。

32・34～47の長胴甕は、口縁部に最大径をもち、水平に折れるものが主体を占める。外面調整も縦方向のヘラケズリから、斜め方向のヘラケズリの移行期の様相を示す。42・43は底部に木葉痕を残す。48は台付甕と考えられる破片である。全体の器形が明瞭でなく、類例の少ないものである。

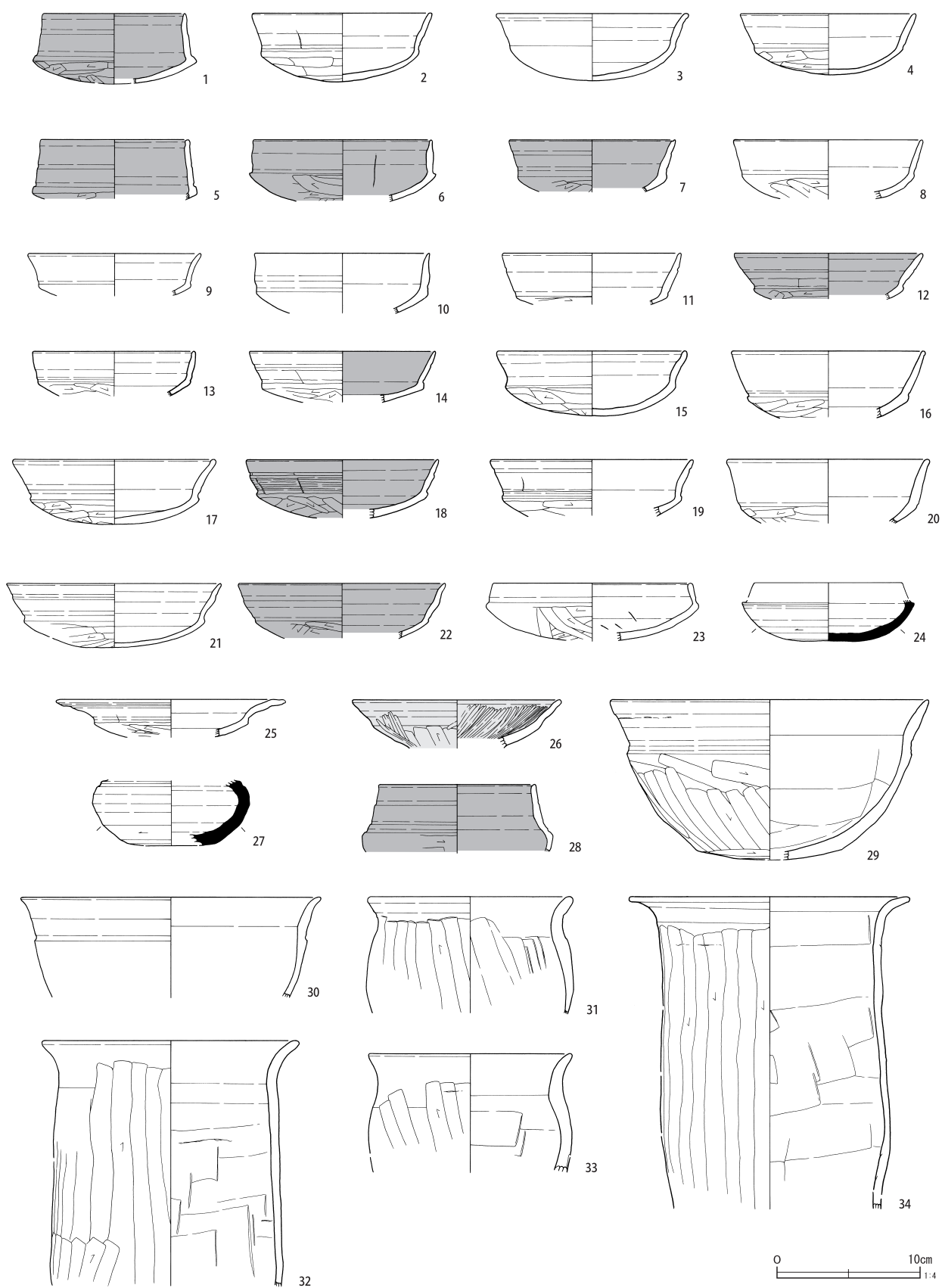
須恵器は24の小型化した蓋坏の坏身、27の扁平な体部の短頸壺、49の波状文を施した甕口縁部片とまとまっている。

土器以外では、50の管状土錘、51の安山岩製砥石、52の滑石製白玉がある。51の砥石は、刃砥ぎ状の擦痕が残る。52の白玉は断面太鼓形で、整形がやや粗雑である。

住居跡の時期は、土師器坏の小型化や長胴甕の器形の特徴から、6世紀末葉から7世紀初頭に位置づけられる。



第138図 第59号住居跡



第139図 第59号住居跡出土遺物（1）